(財)岐阜市教育文化振興事業団報告書第17集

鷺山市場遺跡

—岐阜市都市計画事業鷺山・下土居土地区画整理事業における
都市計画道路鷺山下土居線建設に伴う緊急発掘調査—

2008

岐阜市鷺山・下土居土地区画整理組合

財団法人岐阜市教育文化振興事業団

例　言

1．本書は、鷺山市場遺跡に所在する埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2．調査は、岐阜市都市計画事業鷺山・下土居土地区画整理事業における都市計画道路鷺山下土居線建設に伴う緊急発掘調査として、業務委託契約に基づき、委託者・岐阜市鷺山・下土居土地区画整理組合の調査経費負担により、受託者・(財) 岐阜市教育文化振興事業団が実施した。

3．調査期間は次のとおりである。

現地調査　平成18年６月６日～平成19年３月９日
　　平成19年９月10日～10月12日
整理・報告　平成19年５月21日～平成20年３月11日
印刷・製本　平成20年７月１日～平成21年１月16日

4．調査組織は次のとおりである。

調査主体者　(財)岐阜市教育文化振興事業団理事長　河合　浩（平成18・19年度）
　　飯沼隆司（平成20年度）
　　埋蔵文化財調査事務所所長　西村覺良（平成18年度）
　　薮下　浩（平成19・20年度）
調査担当　松尾　聡（平成18年度南区）（埋蔵文化財調査事務所）
　　大嵩崎泰明（平成18年度北区）（　　同　　）
　　森島一貴（平成19年度）（　　同　　）
調査補助員　川橋靖子・沢田伊一郎・高木優子・棚橋英子・辻　啓子・村瀬清則・森　和子・和田啓子・横井聡子
作業員　秋澤　昇・安藤久子・岩田敏一・江崎隆己・太田美代治・大野祐子・大洞勝巳・大山幸子・大山敏郎・小川静夫・小椋　登・加藤久淳・河合弘公・川島省一・川嶋隆文・木村久美雄・桐山裕美子・坂井田米子・鷲見米子・竹村　進・田中義彦・長井和美・那須勝哉・廣瀬孝一・伏見信孝・牧野利治・松久康子・三島　彰・向井康子・山口友治・山田　孝・山田秀雅・山本禮三・吉田松枝・若山祐三・渡辺健一・渡邉重子

5．調査の進行・本書の作成は、内堀信雄（岐阜市教育委員会社会教育課）・恩田裕之（埋蔵文化財調査事務所）の指導の下、調査担当が行った。また調査に関する折衝・事務処理及び調査経費の執行は高木晃・吉田陽子（埋蔵文化財調査事務所）が行った。

6．本書の執筆は内堀・森島・恩田が行い、分担は目次もしくは文章の冒頭に記した。また全体の編集は森島・恩田が行った。

7．木製品の保存処理は(株)吉田生物研究所に委託した。

8．土壌・遺物の自然科学分析は(株)パレオ・ラボに委託した。

9．調査区の写真測量は(株)イビソクに委託した。

10．遺物の写真撮影は佐藤右文氏に依頼した。

11. 出土遺物については各氏にご教示を頂いた（敬称略）。記して感謝の意を表するものである。

須恵器　　渡辺博人（各務原市木曽川学研究所）
灰釉陶器　　尾野善裕（京都国立博物館）
山茶碗・古瀬戸・大窯・近世陶器　　藤澤良祐（愛知学院大学）

12. 調査、現地公開及び報告書作成過程で、下記の各氏及び各機関にご指導、ご協力を賜った。深く御礼申し上げる次第である。

恩田知美・草野潤平・笹栗　拓・宮元香織・山田邦和・横幕大祐
鷺山小学校（敬称略）

13. 写真などの調査記録及び出土遺物は(財)岐阜市教育文化振興事業団が管理している。

凡　例

遺構

1．図中の方位は真北を示し、座標は従前の調査成果と整合させるため、日本測地系国家座標第Ⅶ座標系に準拠した。
2．遺構実測図の縮尺は1/50、1/60、1/100、1/350である。
3．遺構の略号は下記のとおり用いた。
住居―ＳＢ　井戸―ＳＥ　溝―ＳＤ　土坑―ＳＫ　土塁状遺構・柵列―ＳＡ
柱穴・小穴・ピット―Ｐ　その他―ＳＸ
4．遺構番号は、平成18年度の調査分は遺構の性格にかかわらず通し番号を付けたため、整理作業時に上記３の様に遺構番号を付け替えた。調査時に使用した通し番号は、第３～14表の遺構表に「整理番号」として記した。
5．南区ではグリットを設定し、調査を行った。グリットの設定図は別添図１にある。

遺物

1．遺物実測図の縮尺は1/3を基本とし、木製品は1/8、一部石製品は1/2である。
2．土師器皿の実測図中、外面の横ナデ調整の範囲は実線で記し、断面図のみのものは引き出し線で範囲を示した。
3．遺物実測図中の一点鎖線は施釉範囲を示す。アミは赤色顔料が付着している部分である。土師器皿の黒く塗った部分はタール痕である。
4．第３～14表中（）内の数値は、現状での値である。
5．第３～16表の集計値は接合後の破片数である。
6．第17～30表中法量欄の（）内の数値は、復元値である。また土師器皿の口径、器高は最大値と最小値の平均で求めた。

目　　次

第１章　遺跡の立地と環境
　第１節　遺跡の立地（森島）……1
　第２節　周辺の遺跡（森島）……1
第２章　調査の経過
　第１節　発掘調査に至る経緯（内堀）……5
　第２節　発掘調査の経過（恩田・森島）……5
第３章　遺跡の概要
　第１節　層位と遺構（恩田・森島）……7
　第２節　時期区分（恩田・森島）……9
　第３節　遺物の分類（森島）……11
第４章　遺構と遺物
　第１節　１期の遺構と遺物（森島）……15
　第２節　２期の遺構と遺物（森島）……23
　第３節　３期の遺構と遺物（森島・恩田）……42
　第４節　４期の遺構と遺物（恩田・森島）……45
　第５節　５期の遺構と遺物（森島）……53
　第６節　６期の遺構と遺物（恩田・森島）……60
　第７節　時期不明の遺構と遺物（森島）……64
　第８節　各層の出土遺物（森島）……66
第５章　自然科学分析
　第１節　花粉化石群集……109
　第２節　プラント・オパール分析……116
　第３節　内容物分析……119
　第４節　土器付着赤色物分析……123
　第５節　刀付着物分析……125
第６章　総括
　第１節　遺構の変遷（恩田）……127
　第２節　出土遺物について（森島）……132

挿図目次

第１図　周辺の遺跡分布図
第２図　調査区位置図
第３図　土層模式図
第４図　主要遺物分類図
第５図　ＳＢ１実測図
第６図　ＳＢ16・17実測図
第７図　ＳＢ18実測図
第８図　ＳＤ８・11・12実測図
第９図　ＳＫ22・92・100・101
　　Ｐ27・66実測図
第10図　ＳＸ21実測図
第11図　ＳＫ138と周辺の遺構実測図
第12図　ＳＢ２・７、ＳＫ８・13・14・17・70、
　　Ｐ18実測図
第13図　ＳＢ５・10～12・14、ＳＫ40
　　と周辺の遺構実測図
第14図　ＳＢ13と周辺の遺構実測図
第15図　ＳＤ９実測図
第16図　ＳＢ４、Ｐ20と周辺の遺構実測図
第17図　ＳＢ６実測図
第18図　ＳＢ８・９と周辺の遺構実測図
第19図　ＳＫ４・６・23・45・72・91
　　実測図
第20図　土坑群１実測図
第21図　土坑群２・３、ＳＤ４実測図
第22図　北区ⅳ面検出遺構実測図
第23図　ＳＸ12実測図
第24図　ＳＢ15実測図
第25図　ＳＫ130・152実測図
第26図　ＳＫ127・ＳＡ２実測図
第27図　ＳＤ６実測図
第28図　６期の遺構分布図
第29図　ＳＤ５実測図
第30図　ＮＲ実測図
第31～44図　遺物実測図（１）～（14）
第45図　Ｂ６地点のプラント・オパール分布図
第46図　Ａ２地点のプラント・オパール分布図
第47図　資料表面の拡大写真
第48図　断面の写真
第49図　ＦＴ－ＩＲ分析
第50図　時期別遺構分布図（２期）
第51図　時期別遺構分布図
第52図　須山古窯出土須恵器
第53図　岐阜県出土の特殊提瓶

別　添　図

別添図１　南区全体図
別添図２　北区全体図
別添図３　北区vi面（１期）遺構全体図
別添図４　北区iv（４期）・v（２期）面遺構全体図　Ｐ区iii（２期？）・iv（１期）面遺構全体図
別添図５　北区ii・iii面（５期）遺構全体図
別添図６　南区土層図
別添図７　北区土層図

表　目　次

第１表　作業工程表
第２表　時期区分表
第３～14表　遺構・出土遺物集計表（１）～（12）
第15～16表　出土遺物集計表（１）～（２）
第17～30表　遺物観察表（１）～（14）
第31表　南区花粉化石産出一覧
第32表　Ｐ区花粉化石産出一覧
第33表　試料１ｇ当たりのプラント・オパール個数
第34表　分析試料とその特徴
第35表　分析結果（ＦＰ法による）
第36表　提瓶内土壌中の珪藻化石
第37表　調査資料一覧
第38表　岐阜県出土の特殊提瓶

写真図版目次

図版１
　鷺山市場遺跡Ａ区全景（合成写真）
図版２
　Ａ区南完掘状況／ＳＢ１遺物出土状況／ＳＢ２完掘状況／ＳＢ４遺物出土状況／ＳＢ４完掘状況
図版３
　ＳＢ６完掘状況／作業風景／ＳＢ８カマド完掘状況／ＳＢ８完掘状況／ＳＢ15全景／ＳＢ15−１完掘状況／ＳＢ15−２完掘状況／ＳＢ15−４完掘状況
図版４
　Ａ区北完掘状況／ＳＢ17完掘状況／ＳＢ18完掘状況／ＳＫ４完掘状況／ＳＫ22完掘状況
図版５
　ＳＫ23完掘状況／ＳＫ25完掘状況／ＳＫ40完掘状況／ＳＫ129完掘状況／ＳＫ130完掘状況／ＳＫ134完掘状況／ＳＫ139完掘状況／ＳＫ152完掘状況
図版６
　ＳＤ５完掘状況／ＳＤ６完掘状況／ＳＤ８完掘状況／ＳＤ11・12完掘状況／北区北側溝全景／南区土坑群
図版７
　ＮＲ全景／ＳＸ21遺物出土状況／Ｐ20完掘状況／Ｐ160完掘状況／ＳＸ12完掘状況／作業風景
図版８～14　遺物図版
図版15　花粉分析
図版16　プラント・オパール分析
図版17　珪藻化石分析
図版18　土器付着顔料分析 No. 1
図版19　土器付着顔料分析 No. 2
図版20　土器付着顔料分析 No. 3
図版21　プレス試料の元素マッピング図

第１章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の立地

濃尾平野は東側、西側及び北側を尾張丘陵地帯、養老山地及び美濃山地に囲まれ、南側は伊勢湾に面し、愛知県西部から岐阜県南西部に広がる。岐阜市はこの濃尾平野の北端に位置する。岐阜市の地勢を概観した場合、北部は美濃山地、中南部は濃尾平野となる。木曽三川の１つである長良川が、市内を北東から南西へと流れ、岐阜市中河原付近を扇頂とする半径約６㎞、高低差約15mの緩扇状地を形成している。この扇状地の北限は、独立丘陵「鷺山」のほぼ北麓を通る東西線付近で、これより北は鳥羽川まで後背湿地状低地となる。今回報告する鷺山市場遺跡は、長良川右岸の扇状地に広がる鷺山地区の遺跡群の最西端にあり、扇状地の北端に位置する。調査区は鷺山市場遺跡の北西端に位置し、湿地状の低地の方へ低くなっていく部分にあたる。

第２節　周辺の遺跡（第１図）

鷺山市場遺跡が位置する岐阜市の中北部域では、平成２～７年度にかけて行われた、岐阜市遺跡詳細分布調査により、縄文時代から近世までの遺物が散布する遺跡が多く確認された[1]。

縄文時代の遺跡には、長良川右岸の自然堤防上に立地する西野々遺跡が挙げられる[2]。縄文中期から晩期に属する土器片が採取されており、平成５年度には区画整理事業に伴う発掘調査が行われた。鷺山蝉遺跡においても縄文時代晩期の土器集積の遺構が確認されている[3]が、集落は確認されていない。

弥生時代から古墳時代にかけての遺跡として城之内遺跡が代表される。平成12年度までに10回の発掘調査が行われ、竪穴住居など数多くの遺構が検出された[4]。鷺山仙道遺跡でも古墳時代後期から古代にかけての竪穴住居が確認されている[5]。

古墳については５世紀後半から６世紀前半頃と考えられる全長60mの富塚古墳がかつては鳥羽川左岸に位置した[6]。鷺山遺跡群の北側に広がる下城田寺丘陵上には、前期から中期の古墳が多く分布し、隣接する上城田寺の山麓には後期古墳が密集する。平成３～４年に上城田寺古墳群が調査され、横穴式石室を伴う古墳が発掘された[7]。鷺山にも後期古墳の存在があり、須恵器が採集されている。

古代には、城之内遺跡の範囲内に長良廃寺が造営されており、昭和61年の岐阜市教育委員会の調査で多くの瓦が出土している[8]。また、城之内遺跡付近に方県駅があったとされ、ここから鷺山地区に至る微高地上には、東山道ルートが想定されている。このルート付近には福光花ノ木町遺跡、鷺山蝉遺跡、鷺山仙道遺跡、鷺山市場遺跡がある。平成10年度の鷺山蝉遺跡の試掘調査では９世紀前葉の竪穴住居が見つかり、二彩陶器が出土した[9]。平成17年度の鷺山蝉遺跡の発掘調査では巡方が出土し[10]、古代の鷺山地区には方県郡衙が存在したと推定されている。

中世前期では鷺山蝉遺跡で幅６ｍ、深さ1.4ｍの堀を確認し、戦国時代の蝉土手城館に先行する館の存在が想定されている[11]。下城田寺丘陵から西へ延びる尾根上に下城田寺中世墓があり、分布調査の際、古瀬戸四耳壺、美濃須衛産四耳壺が採取されている[12]。

戦国時代には、岐阜市内を守護所が移動していく様相が、先行研究から明らかにされている[13]。鷺山遺跡群には「福光御構」が、城之内遺跡には「枝広館」があったことが知られており、鷺山遺跡群にはいくつかの城館推定地がある。鷺山蝉遺跡では地籍図の検討により、１辺120ｍの城館（「蝉土手」）が想定され[14]、発掘調査でその一部である堀や土塁などが検出された[15]。この他に、屋敷地を区画した溝・土橋や内部の掘立柱建物などが確認されている。城之内遺跡では、枝広館と推定される、堀北西コーナーが発掘調査によって確認されている。今回、報告する鷺山市場遺跡においても、鷺山東麓での試掘調査の際、鷺山館と推定される土塁と堀を確認している[16]。

城之内遺跡から鷺山地区の範囲（東西約３km、南北約１km）には戦国時代の土師器皿が大量に採取できる。この範囲は江戸時代の『中島両以記文』にある鷺山から堀田（城之内遺跡の周辺）までの間に侍屋敷と百姓屋敷が入り交じって散々にあったという部分に合う、という意見もある[17]。

また、長良川を挟んだ対岸にも戦国時代の遺跡が確認されている。岐阜城千畳敷遺跡がその代表である。３次調査では15世紀に比定される梵鐘鋳造遺構が見つかっている。16世紀中葉以降、斎藤氏・織田信長らが城館を構えたと見られ、１次調査では巨石列、礎石建物、２次調査では竈、石組み施設、３次調査で階段、通路、井戸が確認されている[18]。

近世以降には平成９年度の岐阜奉行所の調査がある。近世（17～19世紀中頃）、近代（19世紀中頃以降）の２時期の遺構と遺物があり、近代については濃尾大震災直後の廃棄土坑が見つかっている[19]。

註

1　岐阜市教育委員会　1996　『岐阜市遺跡詳細分布調査報告書』

2　岐阜市　1979　『岐阜市史　史料編　考古・文化財』

真福寺南土地区画整理組合・岐阜市遺跡調査会　1994　『西野々遺跡発掘調査報告書』

3　岐阜市鷺山第二土地区画整理組合・(財)岐阜市教育文化振興事業団　2007　『鷺山蝉・鷺山仙道遺跡　岐阜市鷺山第二土地区画整理事業に伴う緊急調査』

4　岐阜県教育委員会　1990　『城之内遺跡　長良高等学校体育館建設に伴う岐阜大学跡地の緊急発掘調査報告書』

岐阜県教育委員会・(財)岐阜県文化財保護センター　1991　『城之内遺跡Ⅱ』

岐阜市遺跡調査会　1996　『堀田・城之内』

岐阜市教育委員会　1990　『城之内遺跡―東長良中学校建設に伴う岐阜大学跡地の緊急発掘調査―』

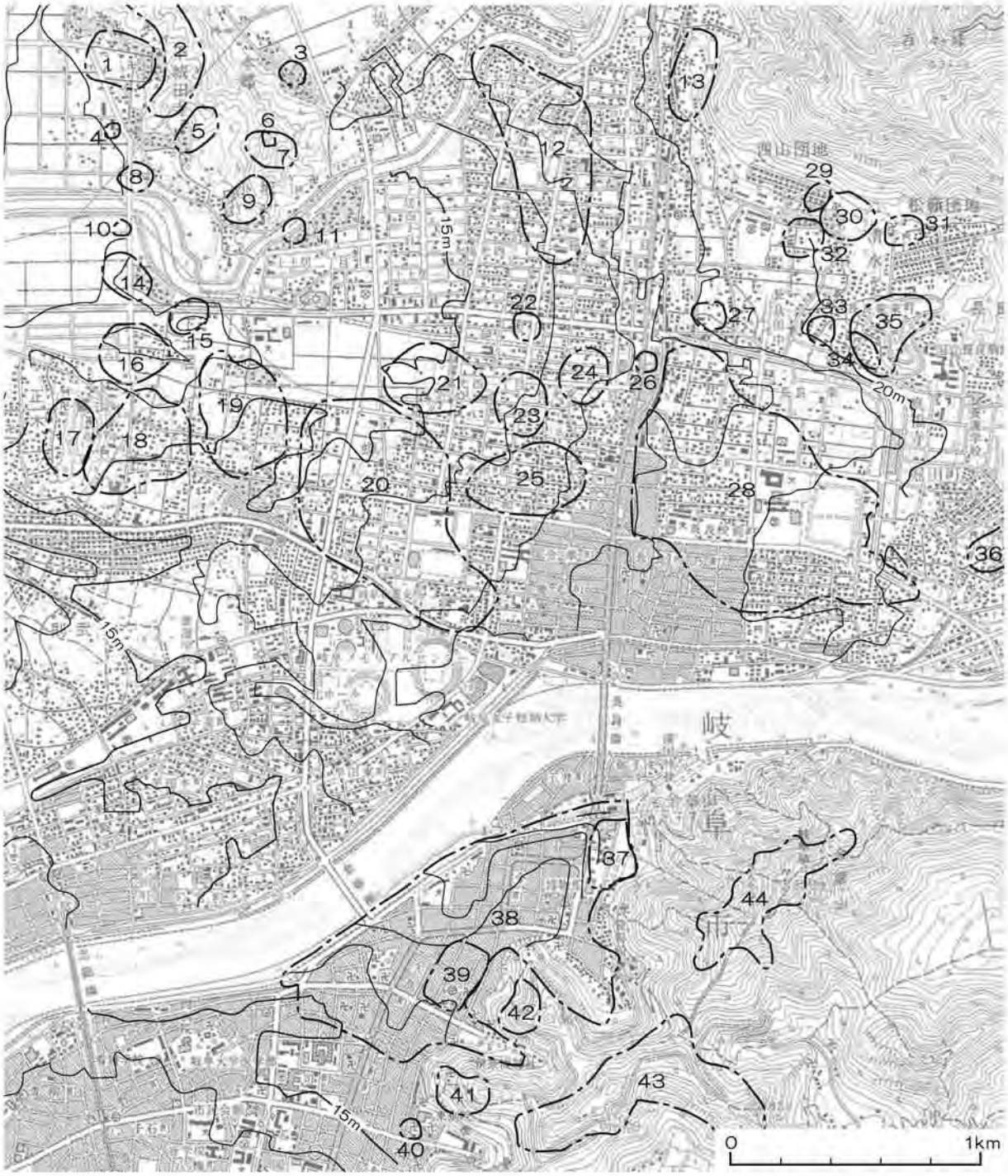
岐阜市教育委員会　1999　『城之内遺跡―長良公園整備事業に伴う緊急発掘調査―（第１分冊）』

岐阜市教育委員会　2000　『城之内遺跡―長良公園整備事業に伴う緊急発掘調査―（第２分冊）』

岐阜市教育委員会　1999　『平成９・10年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』

(財)岐阜県文化財保護センター　1997　『堀田城之内遺跡　岐阜県環状線建設工事に伴う緊急発掘調査報告書』

(財)岐阜市教育文化振興事業団　1997　『堀田・城之内Ⅱ』
(財)岐阜市教育文化振興事業団　1999　『城之内遺跡　北町堀田線・宮口町高見線街路事業に伴う緊急発掘調査報告書』
岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団　2001　『平成11・12年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』
5　岐阜市鷺山・下土居土地区画整理組合　(財)岐阜市教育文化振興事業団　2002　『鷺山仙道遺跡　岐阜市鷺山・下土居土地区画整理事業における太平町下西郷線建設に伴う緊急発掘調査』
岐阜市鷺山・下土居土地区画整理組合　(財)岐阜市教育文化振興事業団　2005　『鷺山仙道遺跡Ⅱ　岐阜市鷺山・下土居土地区画整理事業における太平町下西郷線建設に伴う緊急発掘調査』
6　岐阜市　1979　『岐阜市史　史料編　考古・文化財』
7　岐阜市教育委員会　1993　『上城田寺古墳群』
8　岐阜県教育委員会　1990　『城之内遺跡　長良高等学校体育館建設に伴う岐阜大学跡地の緊急発掘調査報告書』
9　岐阜市教育委員会　1999　『平成９・10年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』
10　前掲５と同
11　前掲５と同
12　前掲１と同
13　内堀信雄・高田徹　1994　「美濃における一五・一六世紀代の守護所の変遷」『守護所から戦国城下へ―地方政治都市論の試み―』名著出版
内堀信雄・三宅唯美　2004　「土岐氏と道三・信長の城下町　―東海の首都“革手”から天下布武の本拠地“岐阜”へ―」『守護所・戦国城下町を考える』第12回東海考古学フォーラム岐阜大会シンポジウム資料集第１分冊
内堀信雄・鈴木正貴・仁木宏・三宅唯美編　2006　『守護所と戦国城下町』高志書院
14　岐阜県教育委員会　2004　『岐阜県中世城館総合調査報告書第２集（岐阜地区・美濃地区）』
15　前掲５と同
16　岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団　2006　『平成16・17年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』
17　内堀信雄・高田徹　1994　「美濃における一五・一六世紀代の守護所の変遷」『守護所から戦国城下へ―地方政治都市論の試み―』
18　岐阜市教育委員会　1990　『千畳敷―織田信長居館跡伝承地の発掘調査と史跡整備―』
岐阜市教育委員会　1991　『千畳敷Ⅱ―財団法人加藤栄三・東一記念館建設に係る緊急発掘調査の記録―』
(財)岐阜市教育文化振興事業団　2000　『千畳敷Ⅲ―岐阜公園再整備事業に伴う岐阜城千畳敷遺跡の緊急発掘調査―』
19　岐阜市教育委員会　1998　『平成９年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』



1．城田寺葭原遺跡	2．坂尻古墳群	3．打越遺跡	4．下城田寺中世墓
5．鎌磨古墳群	6．下城田寺遺跡	7．中野古墳群	8．鎌磨遺跡
9．西屋敷古墳群	10．下土居遺跡	11．富塚古墳	12．八代遺跡
13．岩崎第２古墳群	14．下土居若宮遺跡	15．下土居北門遺跡	16．正明寺城之前遺跡
17．鷺山古墳群	18．鷺山市場遺跡	19．鷺山仙道遺跡	20．鷺山蝉遺跡
21．鷺山治郎丸遺跡	22．福光東Ｂ遺跡	23．太田遺跡	24．福光東Ａ遺跡
25．福光花ノ木町遺跡	26．長良天神遺跡	27．西野々遺跡	28．城之内遺跡
29．西山第２古墳群	30．西山第１古墳群	31．西山洞古墳群	32．長良福泉遺跡
33．龍門寺遺跡	34．長良窯跡群	35．龍門寺古墳群	36．雄総第１古墳群
37．岐阜城千畳敷遺跡	38．岐阜城下町遺跡	39．岐阜奉行所跡	40．鶯谷遺跡
41．権現山古墳群	42．北洞古墳群	43．上加納山古墳群	44．岐阜城跡

第１図　周辺の遺跡分布図（国土地理院発行２万５千分の１地形図を使用している）

第２章　調査の経過

第１節　発掘調査に至る経緯

平成７年度、岐阜市都市計画部区画整理課（当時）から岐阜市教育委員会文化課（当時）に、都市計画道路鷺山下土居線に関連する埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。市教育委員会は、当事業予定地が鷺山市場遺跡の範囲に及ぶことから、文化財保護法上の手続きと本調査前の試掘調査等について説明を行った。

平成11年10月22日付けで岐阜市鷺山・下土居土地区画整理組合理事長から文化庁長官あてに文化財保護法第57条の２第１項の規定による届出がなされた。これに対し、平成11年11月４日付けで岐阜県教育委員会教育長から区画整理組合理事長あてに工事着手前の発掘調査実施の指示があった。

平成11年３月３日～11日に行った試掘調査で中世後期？のピット及びその下層で焼土を確認した。平成16年６月７日～11日に行った試掘調査で古代の竪穴住居跡や古墳時代の遺構を確認した。試掘調査の結果を受けて、平成18年度から発掘調査（調査主体は(財)岐阜市教育文化振興事業団）を実施することとした。

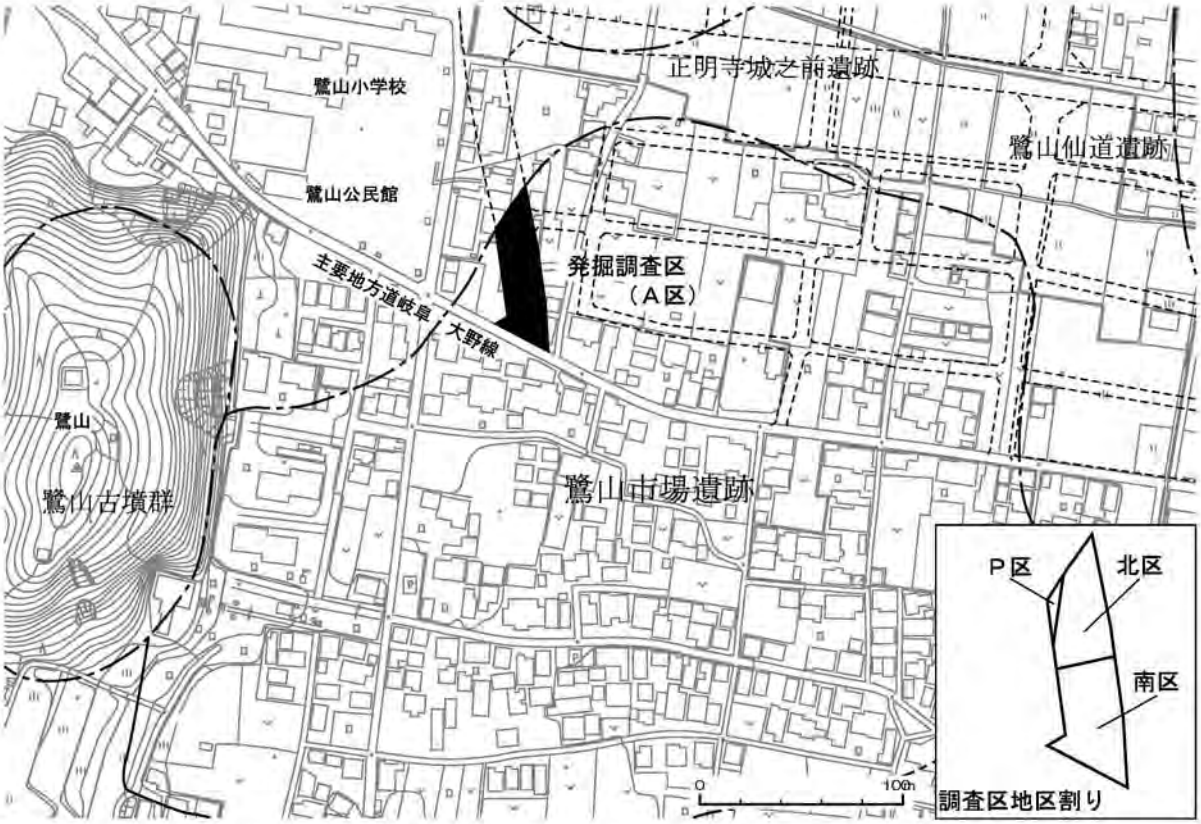
平成18年５月８日付けで(財)岐阜市教育文化振興事業団理事長から県教育委員会教育長あてに文化財保護法第57条の規定による発掘調査の届出がなされ、平成18年５月15日付けで県教育委員会教育長から(財)岐阜市教育文化振興事業団理事長あてに発掘調査を慎重に実施する旨の指示があった。平成18年５月18日付けで岐阜市鷺山・下土居土地区画整理組合、岐阜市教育委員会、(財)岐阜市教育文化振興事業団の３者間で鷺山・下土居土地区画整理事業に関係する埋蔵文化財の取り扱いについて協定を締結した。

第２節　発掘調査の経過

平成18年度の調査は５月18日に着手し、準備作業を行った。まず南区から調査を行い、６月６日に西壁・北壁に沿って先行トレンチを掘削し、土層観察を行い、調査方針を検討した。６月７日から表土掘削を行い、以後人力での掘削を開始した。南区の遺構掘削がほぼ完了した10月17日、組合の既履行検査を受け、10月18日に空中写真撮影を行った。北区は10月31日に先行トレンチ、11月１日から表土掘削を行った。１月27日には現地公開を実施した。遺構掘削がほぼ完了した２月15日、組合の既履行検査を受け、２月17日空中写真撮影を行った。全ての業務は３月９日に終了し、３月13日組合の完了検査を受けた。

平成19年度の調査は５月21日に着手し、準備作業を行った。前半は前年度の整理作業を行い、９月10日から発掘作業を行った。10月12日現地での作業は終了し、以後前年度及び当年度の整理作業を行い、報告書原稿の作成を完成した。全ての業務は３月11日に終了し、３月19日組合の完了検査を受けた。

平成20年度は７月１日に着手し、報告書の印刷を行い、平成21年１月16日に終了した。



第２図　調査区位置図（平成20年７月１日　承認番号８号）

平成18年度	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
準備作業		18										
南区調査			6				31					
北区調査							31					9

平成19年度	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
Ｐ区調査						10	12					
整理作業		21										11

平成20年度	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
刊行作業				1						16		

第１表　作業工程表

第３章　遺跡の概要

第１節　層位と遺構

（１）南区の基本層位

調査は最初、調査区西壁及び北壁に沿って地山まで先行トレンチを掘削し、土層観察を行い、検出面の確認をした。その結果、基本層位は現代の耕作土・盛土・撹乱などのⅠ層、暗茶色土・暗褐灰色土などを主とし遺物を包含するⅡ層、地山である砂層のⅢ層に大別でき、Ⅱ層上面及びⅢ層上面で遺構が検出できると判断した。また非常に多くの遺構が重複して存在することも予想された。

そこでⅠ層を重機で掘り下げ、Ⅱ層上面で遺構検出を行い、明確に検出できた遺構は残し、不明瞭な部分を人力によって掘り下げ、連続して遺構の検出を行いつつ、Ⅲ層上面まで掘削することとした。

今回の調査のみならず、包含層（Ⅱ層）掘り下げ中にも連続的に遺構が検出されることが実態であるが、層の境目による広い範囲の検出面を認識することはできない。本書ではこの考えに基づき、基本層位を作成した（第３図）。前述したようにⅡ層上面からⅢ層上面まで遺構は連続しており、傾向として、新しい遺構はⅡ層上面から、古い遺構はⅢ層上面に近いところで検出される。なお、調査区壁面のセクション図では、恐らく実態と異なる状況が図化されていると思われるが、十分な確認は取れていない。

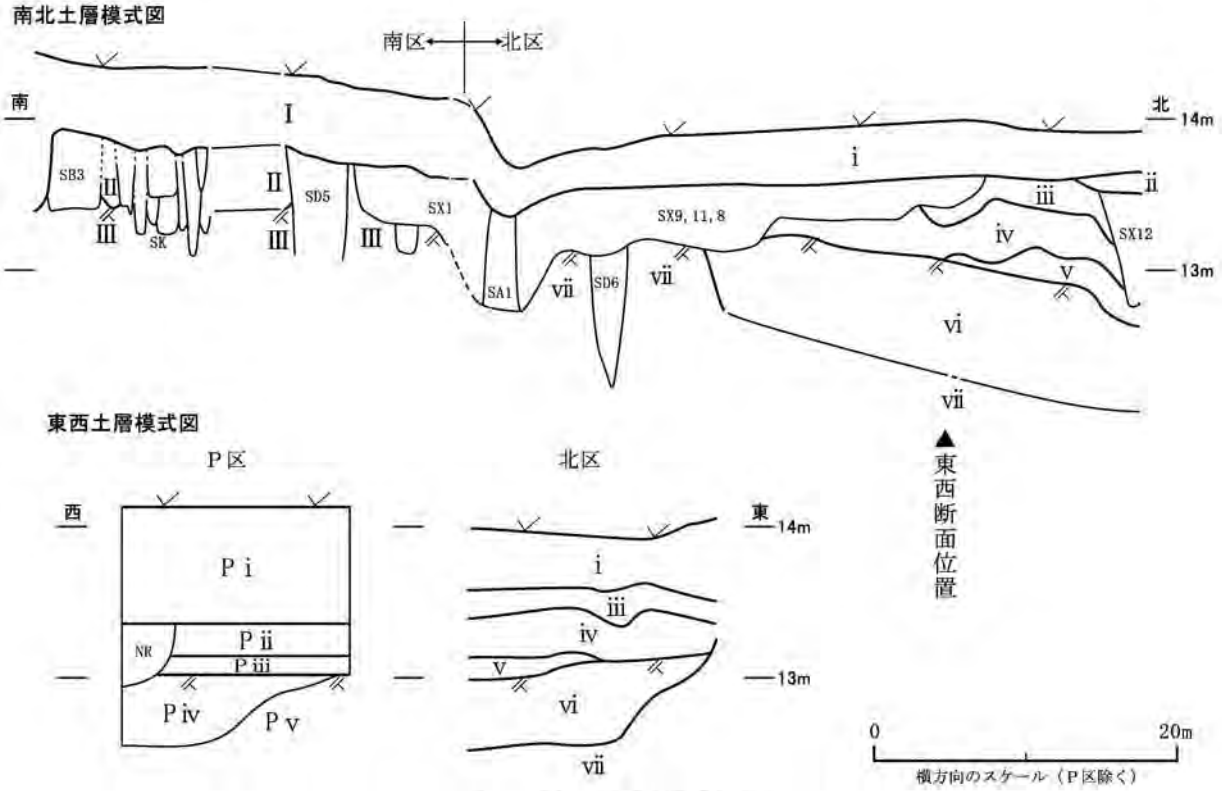
Ⅱ層中には古墳時代から近世までの時期幅の広い遺物が包含されており、いわゆる包含層の形成過程と深い関連があると思われる。包含層（Ⅱ層）中の遺物は元来遺構内に埋まっていたものと考えており、Ⅱ層中の遺物の大半は、検出することができなかったものも含め、いずれかの遺構から出土したものと捉えることができる。

（２）北区の基本層位と堆積時期

北区の南半は、近世の遺構及び現代の撹乱によって、地山である砂層（南区Ⅲ層・北区vii層）まで深く掘削されている状況であった。よって本来の基本層位は不明で、また南区との対応も困難である。一方北半の状況は、本来（地山）の地形は北区中央部から北へ緩やかに下り、また東から西へも同様に低くなることから、調査区の北西方向に低地部が広がっていた可能性が高い。この低地部に自然あるいは人工的に土が堆積し、戦国期にはほぼ水平な地形を呈していたと考えられる。遺構検出可能な面が５面あり、それを境にｉ～vi層に大別できる。vi層は遺物を包含しない地山で、vii層は南区でも確認された砂層（地山）である。

ｉ層　表土・現代の耕作土・撹乱などで、南区Ⅰ層に対応する。上面（ｉ面）は現地表である。

ii層　土師器皿が出土することから戦国期に形成されたと考えられる。層中には焼土・炭が多量に包含され、掘立柱建物周辺に範囲が限定されることから、火災後の堆積層と推定する。上面（ii面）で検出される遺構の時期は戦国期以降である。



第３図　土層模式図

ⅲ層　古瀬戸～大窯製品が出土することから戦国期に形成されたと考えられる。直上のⅱ層と出土遺物による時期差は認められず、限定された範囲の堆積であることから、整地層と推定されるが、堆積状況に盛土の様子は見られない。確認範囲はⅳ層より北寄りで狭い。上面（ⅲ面）検出遺構は戦国期である。

ⅳ層　古瀬戸製品が出土することから室町時代後半期までに形成されたと考えられる。確認範囲は北区北半で、上面（ⅳ面）検出遺構は室町時代後半期である。

ⅴ層　出土遺物はほぼ土師器が占めることから、古墳時代前期に形成されたと考えられる。上面（ⅴ面）検出遺構は古墳時代前期～古代である。

ⅵ層　粘質土層の地山である。確認範囲は北区北半で、上面（ⅵ面）検出遺構は古墳時代前期である。南区では見られない。

ⅶ層　砂層の地山である。南区Ⅲ層と同一と考えられる。南半は近世以降の遺構による削平面で露出し、北半では断割トレンチで確認した。南半の砂層上面検出遺構は、本来の掘削された面が不明であることから、面不明の遺構として扱う。

（３）鷺山小学校プール跡地（Ｐ区）の基本層位と堆積時期

鷺山小学校プール跡地（以下、Ｐ区とする）は北区と同様に北端の一部分を除き近世の遺構及び現代の撹乱によって削られていた。北端の一部分は残りが良く、北区北半の様に自然あるいは人工的に土が堆積し、戦国期にはほぼ水平な地形を呈していたと考えられる。検出可能な遺構面は３面あり、それを境に５層に大別できる。Ｐⅳ層・Ｐⅴ層は遺物を包含しない地山である。

Ｐｉ層　表土・現代の耕作土・撹乱などで、南区Ｉ層、北ｉ層に対応する。上面（Ｐｉ面）は現地表である。

Ｐⅱ層　出土遺物は無いが、北区北半で見られる北ⅲ層と検出レベル、土色・土質が似ることから北ⅲ層に対応するものと考えられる。形成時期は戦国期となる。

Ｐⅲ層　出土遺物はほぼ土師器が占めることから、古墳時代前期に形成されたと考えられる。出土遺物から北ｖ層に対応すると見られるが、確証は得られなかった。また北ⅳ層に対応する土層はＰ区では確認できなかった。

Ｐⅳ層　粘質土層の地山である。上面（Ｐⅳ面）検出遺構は古墳時代前期である。北区ⅵ層と同一と考えられる。

Ｐｖ層　砂層の地山である。南区Ⅲ層、北区ⅶ層と同一と考えられる。

（４）北区と南区及びＰ区の対応

前述したように北区は堆積が進んだことによって複数の検出面が確認された。一方南区は堆積が確認することができず、撹乱等により明瞭な検出面が認められない状況であった。元々の自然地形が北下がりであったためであり、両区で確認できた地山の砂層（南区Ⅲ層・北区ⅶ層・Ｐｖ層）では傾斜が顕著である。中央部の近世遺構・撹乱による削平もあって、北区と南区の層位の対応は非常に困難である。

本来複数の検出面が確認できる場合、各面毎に報告を行うのがセオリーだと考えるが、南北両区の対応が困難であることと、南区で検出した全体の約半数の時期幅の広い遺構群を、一箇所で報告すると煩雑になってしまうため、本書では時期毎に遺構の報告を行うこととする。ただし北区ⅱ～ⅳ層、Ｐ区Ｐⅱ～ⅳ層のように同時期で検出面が異なるものは、面毎に報告し所属層位を明らかにすることとする。

第２節　時期区分

（１）時期区分

１期：弥生時代末期～古墳時代初頭（Ｓ字甕Ａ・ＢＣ類）

調査範囲での活動が開始された時期で、住居跡４基、土坑７基などが見られる。当時の地形は北西方向に下る傾斜面と推測され、微高地上に集落域などが形成されていたと考えられる。

２期：古墳時代後期～奈良時代（６世紀後半？～８世紀中葉）

この時期の遺構が最も多く、時期が判明する遺構のうち37％を占め、さらにその80％が南区に分布する。出土遺物と切り合い関係から、～７世紀前半・７世紀後半・～８世紀中葉の３時期に細分（２－１期・２－２期・２－３期）したが、特に２－２期の遺構が激増する。

３期：平安時代～鎌倉時代（10～13世紀初頭）

この時期の遺構は少なく、土坑７基が検出されたのみである。大部分が10世紀頃に集中しており、11世紀以降に比定されるものは少ない。

４期：室町時代（古瀬戸後Ⅳ期古段階／東濃型山茶碗脇之島３号窯式）

この時期の遺構は比較的多く、溝・土坑・ピットなど91基が検出されている。直後に展開する５期の遺構群とは方位軸を異にしている。また北区北半では、層位的にも５期のものと区別することができる。

５期：戦国期（古瀬戸後Ⅳ期新～大窯第１段階）

この時期、鷺山地区一帯では、新たな地割りによるまちづくりが進行する。その一部分と考えられる区画溝・掘立柱建物・整地層等が検出されたが、北区に集中しており、南区で明確なものは確認されていない。

６期：近世以降

水田と畦畔、水路がセットとなって検出され、水田域が形成されている。また近世のある時期からは土塁状盛土の上に道が造られ、近代まで存続する。

以上の１～６期で時期を区分したが、確認できた遺構の時期が断続的である。１期と２期の間の時期において、通常岐阜市内の遺跡では松河戸併行～宇田併行（須恵器H-11段階）のものが検出される。今回の調査では表土・包含層出土の遺物を見ても、当期と明らかなものは無く、空白期間があったと考えられる。また３期と４期の間の時期の遺物である山茶碗の出土量も、鷺山地区の他の遺跡や鷺山市場遺跡の他の部分に比べて少ない。

遺跡全体の動向が本書執筆時点では不明なため、今回の調査区における時期区分として捉えたものであることをお断りしておく。

時期区分	時代	検出面		
		南区	北区	Ｐ区
１期	弥生時代末～古墳時代初頭	Ⅲ面	北ｖ面	Ｐvi・Ｐiv面
２期	古墳時代後期～奈良時代		北ｖ面	
３期	平安時代～鎌倉時代			
４期	室町時代		北iv面	
５期	戦国時代		北ii・iii面	Ｐii面
６期	近世以降	Ⅱ面		

第２表　時期区分表

（２）層の形成時期

前項で記述した各層の所属時期は次のとおりである。

北区においては北ii～北iii層が５期、北iv層が４期、北ｖ層は１期の形成と考えられ、１期の遺構はｖ・vi層上面、２期の遺構はｖ層上面、４期の遺構はiv層上面、５期の遺構はii・iii層上面で確認される。

Ｐ区では、Ｐii層が５期、Ｐiii層は１期の形成と考えられ、１期の遺構はＰiii・iv層上面、５期の遺構はＰii層上面で確認される。

第３節　遺物の分類（第４図）

今回の調査では縄文時代から近代までの遺物が出土した。今回はすでに分類・編年研究が進んでいる遺物に関してはその成果に従った[1]。

（１）弥生時代末期～古代の土器（主要なもの）

Ｓ字状口縁台付甕[2]　いわゆる「Ｓ字甕」のこと。口縁が受口状に屈折し、上外方に伸びる台付甕。器壁が薄い。口縁の形状から４つに分類できるが、今回はＡ類とＢＣ類が確認できている。

Ａ類：口縁外面２段目に押引き刺突文があり、口縁第２段が垂直に立ち上がるもの

ＢＣ類：Ａ類と口縁部端部が肥厚するか、もしくは肥厚して先端部に面をもつＤ類以外のもの。Ｂ類とＣ類の区別が困難なため、ＢＣ類として両者を一括して扱う

伊勢型甕Ａ１類[3]　丸底甕で、口縁端部を上方に引き延ばし、口頸部が肥厚するもの。体部の外面は縦ハケ、内面の上半部は横ハケ調整、内面下半部はケズリ調整が施される。

伊勢型甕Ａ２類[4]　丸底甕ではあるが、Ａ１類と口頸部の形状、調整などが異なる。内面全面をヘラケズリや横ナデによって調整する。

平底甕Ｂ２類[5]　器壁が薄い。外面は細かいハケ目調整が施される。底部については、今回の調査では確認していないため不明である。

平底甕Ｂ３類[6]　器壁が著しく薄い。口縁部は外折し、外面は粗いハケ目調整が施される。底部については、今回の調査では確認していないため不明である。

焼塩土器　ほとんどが破片資料で全体の様相はつかめないが、器壁が２㎜前後と薄く、美濃式１類[7]に分類できる。

須恵器　美濃須衛産のものが主であるが、猿投産、須山窯産、丸山窯産、畿内系のものが見られる。

ロクロ土師器　ロクロ成形で高台または糸切り痕が顕著に見られる底をもつ土師器質の土器。碗、皿が見られる。一般には灰釉陶器と共伴する。

（２）鎌倉時代～室町時代の土器

土師器皿[8]（かわらけ）

今回の調査においてはＭ１類とＭ２類の出土は確認できなかった。

Ｍ３類　内部底部一方向ナデを施した後、体部内面～口縁部外面に横ナデを施す。外面のナデ調整は１段で、体部は丸く立ち上がる。口縁部は丸みを持つものと尖るものがある。器壁は薄く、器形も深いものが主となる。

Ｍ４類　内部底部一方向ナデを施した後、体部内面～口縁部外面に横ナデを施す。外面のナデ調整は１段で、体部は丸く立ち上がる。体部は丸く立ち上がる。器壁はＭ３類よりも薄くなる。

（３）戦国期の土器

土師器皿[9]（かわらけ）

今回の調査においてはＡ１類の出土は確認できなかった。

Ａ２類　京都及び美濃以外から搬入、もしくは美濃で忠実に模倣したもので、口縁端部が外反するもの。今回の調査では確実にＡ２類といえるものはなく、可能性があるものが１点だけ出土している。

Ｂ１類　京都系の土師器皿（かわらけ）を模倣した在地産製品とされるもののうち、体部が外反するもの。器壁は厚め。口縁部外面の横ナデ調整を行うものと行わないものの両者がある。

Ｂ２－ａ類　京都系の土師器皿（かわらけ）を模倣した在地産製品とされるもののうち、体部が直線的なもの。内部底部に一方向ナデを施した後に内面体部～口縁部外面の横ナデ調整を施す。口縁部外面の横ナデ調整の範囲が狭いものや部分的にしか施されないものもある。

Ｂ２－ｂ類　京都系の土師器皿（かわらけ）を模倣した在地産製品とされるもののうち、体部が直線的なもの。内部底部に一方向ナデを施した後、内面体部に横ナデ調整を施し、体部外面は無調整である。

Ｃ１類　京都系の土師器皿（かわらけ）に原型を求めることができない在地産製品とされるもので、調整が内面に一方向ナデのみに施されるものである。体部外面は無調整で、外面には凹凸が顕著に見られる。

Ｃ２類　京都系の土師器皿（かわらけ）に原型を求めることができない在地産製品とされるもので、調整が内面に一方向ナデのみに施されるものである。体部外面は無調整で凹凸がない。

Ｄ１類　径５cmの小形品。内面底部に一方向ナデを施した後、内面体部～口縁部外面に横ナデ調整を施す。外面のナデは１段。口縁端部の形状は丸みをもつものと、尖るものの両者がある。

註

1　内堀信雄　1999　「第２章第３節　遺物の分類」『城之内遺跡―長良公園整備事業に伴う緊急発掘調査―（第１分冊）』岐阜市教育委員会

高木晃　2002　「第３章第３節　遺物の分類」『鷺山仙道遺跡　岐阜市鷺山・下土居土地区画整理事業における太平町下西郷線建設に伴う緊急発掘調査』岐阜市鷺山・下土居土地区画整理組合　(財)岐阜市教育文化振興事業団

朝田公年　2007　「第３章第３節　遺物の分類」『鷺山蝉・鷺山仙道遺跡』(財)岐阜市教育文化振興事業団

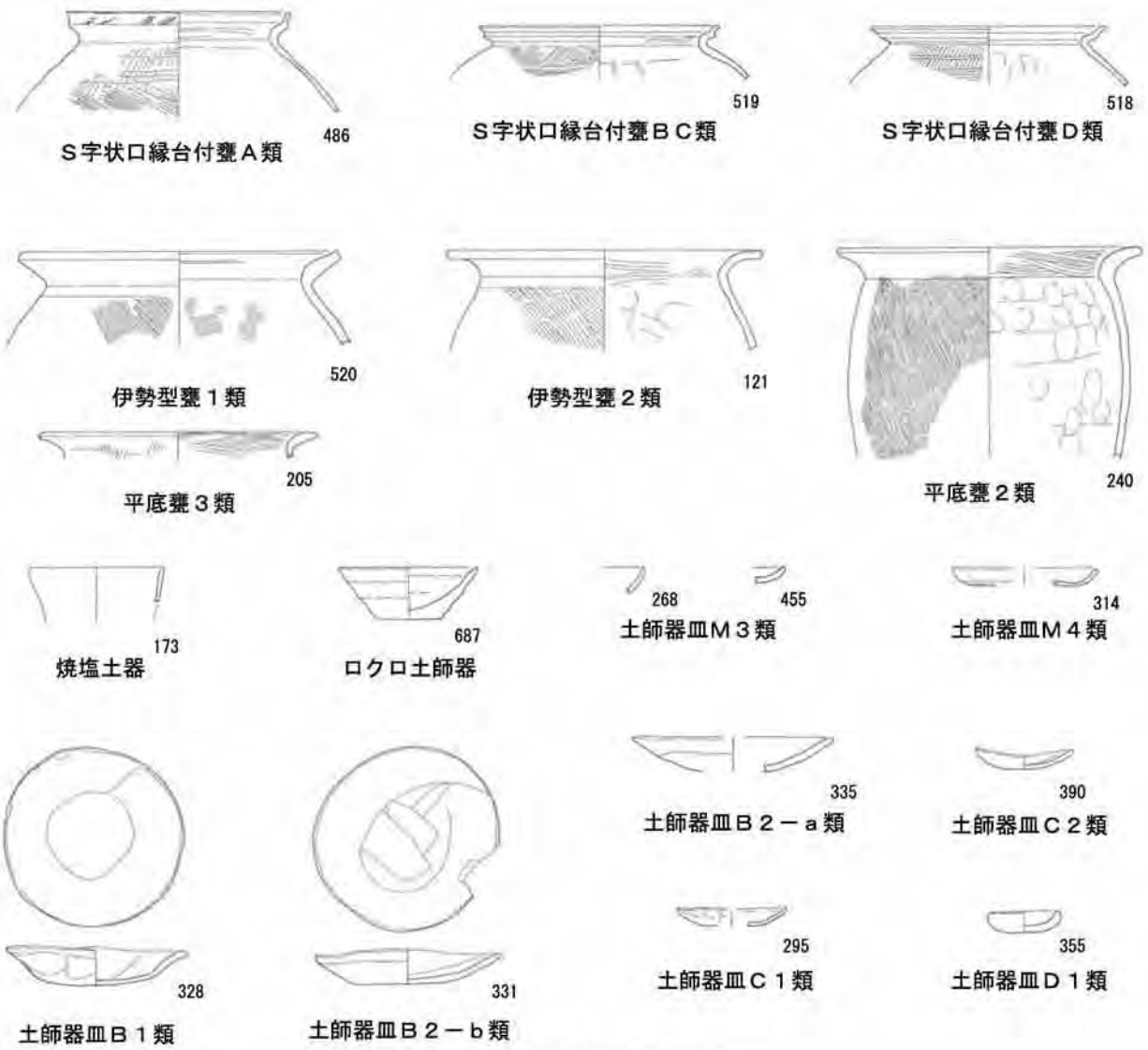
岩瀬彰利　1996　「縄文時代後期～晩期の煮炊具―美濃・尾張・三河・遠江における変遷―」『鍋と釜そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

藤田英博・高木宏和　2002　「美濃（飛騨）地域」『弥生土器の様式と編年～東海編』木耳社

渡辺博人　1984　「美濃須衛古窯跡群における須恵器編年」『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』各務原市教育委員会

尾野善裕　2003　「古代の尾張・美濃における緑釉陶器生産」『古代の土器研究　平安時代の緑釉陶器―

生産地の様相を中心に―』古代の土器研究会編
尾野善裕　2006　「古代土器の編年と暦年代観―10～11世紀を中心に―」『第14回京都府埋蔵文化財研究会資料集』京都府埋蔵文化財研究会
横田賢次郎・森田　勉　1978　「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集４』
小野正敏　1982　「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No. 2
上田秀夫　1982　「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2
上田秀夫　1982　「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2
中野晴久　1994　「赤羽・中野「生産地における編年について」」『全国シンポジウム「中世常滑をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所
藤澤良祐　2007　『中世古瀬戸窯の研究』　高志書院
鈴木正貴　1996　「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と釜そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
中世土器研究会編　1995　『概説　中世の土器・陶磁器』
2　赤塚次郎　1990「Ⅴ考察」『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
内堀信雄・横幕大祐　1998　「山中～宇田式併行期の美濃西部地域土器編年」『土器・墓が語る美濃の独自性～弥生から古墳へ～』東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会
3　内堀信雄・井川祥子　1996　「美濃における古代土師器煮炊具の様相」『鍋と釜そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
4　前掲３と同じ
5　前掲３と同じ
6　前掲３と同じ
7　森泰通　1997　「東海地方における消費地出土の製塩土器―特に固形塩の問題をめぐって―」『シンポジウム製塩土器の諸問題―古代における塩の生産と流通―資料集』塩の会シンポジウム実行委員会
8　恩田裕之　2000　「第２節　遺物の分類」『千畳敷Ⅲ―岐阜公園再整備事業に伴う岐阜城千畳敷遺跡の緊急調査―』
9　井川祥子　1997　「15世紀後半から16世紀前葉の土師器皿―中濃地域を中心にして―」『美濃の考古学』第２号
井川祥子　2000　「第８章第３節　岐阜市域の15世紀から17世紀の土師器皿」『城之内遺跡―長良公園整備事業に伴う緊急発掘調査―(第２分冊)』　岐阜市教育委員会
井川祥子　2006　「美濃中世後期土師器皿の分類と編年」『守護所と戦国城下町』高志書院


486
Ｓ字状口縁台付甕Ａ類
519
Ｓ字状口縁台付甕ＢＣ類
518
Ｓ字状口縁台付甕Ｄ類
520
伊勢型甕１類
121
伊勢型甕２類
205
平底甕３類
240
平底甕２類
173
焼塩土器
687
ロクロ土師器
268
455
土師器皿Ｍ３類
314
土師器皿Ｍ４類
335
土師器皿Ｂ２－ａ類
390
土師器皿Ｃ２類
295
土師器皿Ｃ１類
355
土師器皿Ｄ１類
328
土師器皿Ｂ１類
331
土師器皿Ｂ２－ｂ類

第４図　主要遺物分類図

第４章　遺構と遺物

第１節　１期の遺構と遺物

ＳＢ１（第５図・第31図１～17）

南区の南側に位置し、ＳＫ15、ＳＫ11、ＳＫ24、ＳＫ29に切られる。一部が調査区外になるため、全体の平面形は不明であるが、正方形を呈するものと考えられる。住居の規模は現状で長辺5.04m、短辺4.41mを測る。床は平坦であるが、硬化面、柱穴、カマドなどの施設は確認することはできなかった。

遺物は822点出土し、土師器が主体を占める。この中から土師器13点、須恵器２点、土製品１点、石製品１点を実測した。１～12は土師器である。１は加飾壺の胴部で櫛描直線文、斜め方向の刺突文を施文する。２～６はＳ字状口縁台付甕の口縁部で、２・３は口縁外面２段目に押引き刺突文があるＡ類、４～６はＢＣ類である。７～９はＳ字状口縁台付甕の脚台である。10・12は高杯の脚部である。13・14は須恵器の坏身である。15は伊勢型甕Ａ１類である。17は砂岩の砥石で、被熱しており、転用の可能性がある。

出土遺物は２時期のものが出土している。しかし、大半は弥生時代末期から古墳時代初頭の土器であり、ＳＢ１を切っている遺構の遺物が、調査過程で一部混入した状況と見られる。よって本遺構は１期に造られたものと判断した。

ＳＢ16（第６図）

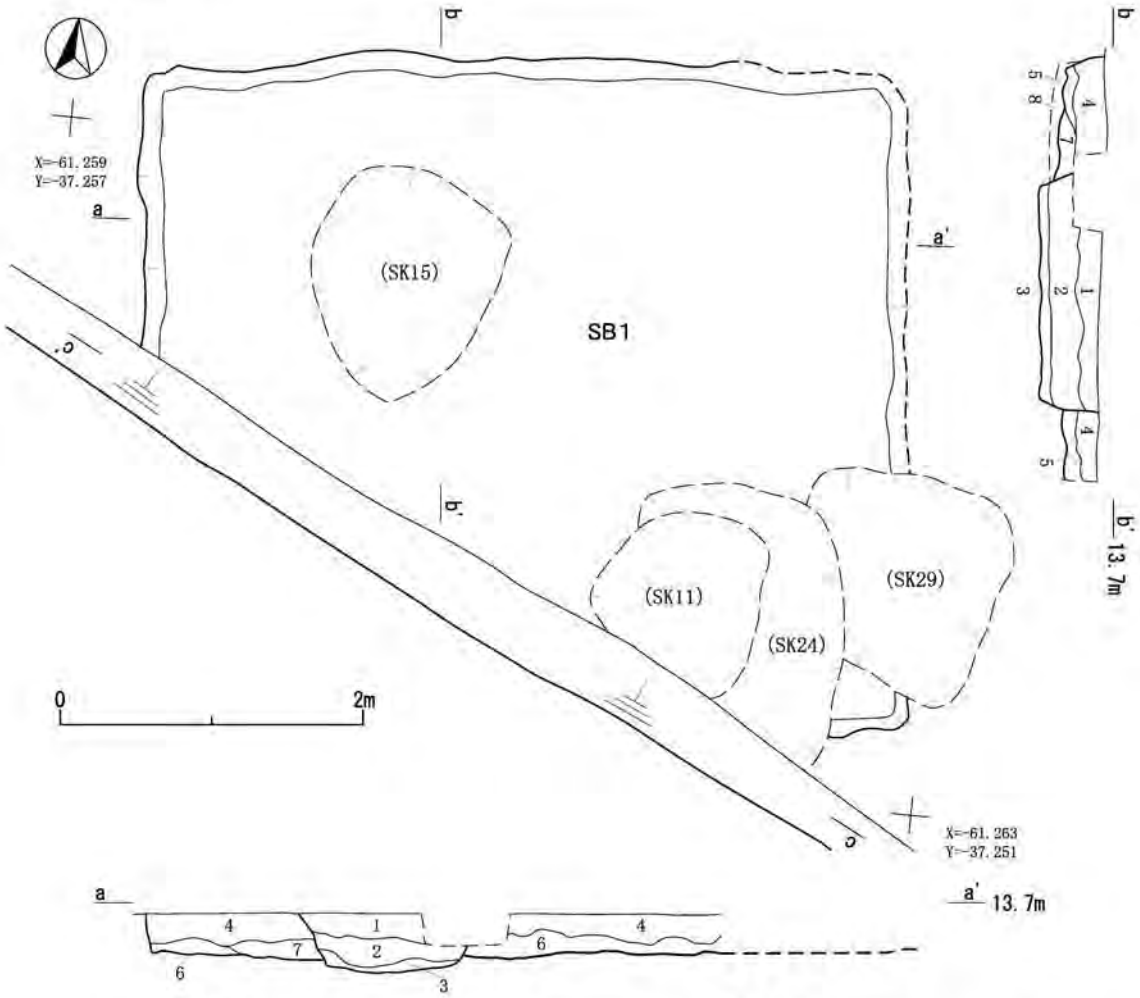
北区の南側に位置する。遺構の大半が調査区外になるため、全体の平面形は不明である。住居の規模は、現状で長辺0.82m、短辺0.59mを測る。床面は平坦であったが、硬化面を確認することはできなかった。また、柱穴、カマドなどの施設も確認することはできなかった。住居ではない可能性もある。

出土遺物は土師器の小片のみで、実測できる遺物は確認できなかった。土師器しか出土していないことから本遺構の築造時期は１期と考えられる。

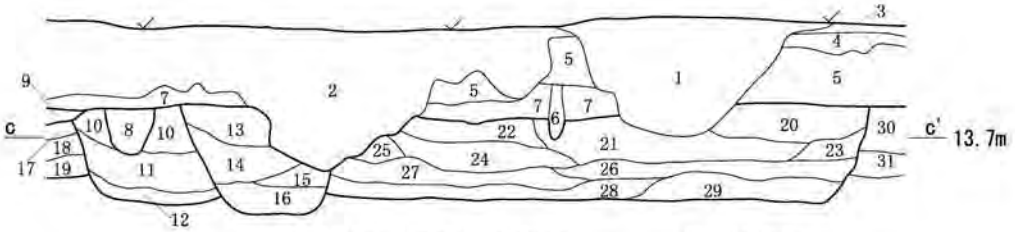
ＳＢ17（第６図・第31図18、19）

北区の南側に位置する。遺構の大半が調査区外になるため、全体の平面形は不明であるが、正方形を呈するものと考えられる。住居の規模は現状で長辺3.02m、短辺2.62mを測る。床面は平坦であったが、硬化面を確認することはできなかった。また、床面に２つの小さなピットを確認したが、柱穴ではなかった。カマドなどの施設も確認することはできなかった。

遺物は119点出土したが、全て土師器である。この中から２点を実測した。18・19はＳ字状口縁台付甕の口縁部で、共に口縁第２段が垂直に立ち上がり、押引き刺突文が見られるＡ類である。

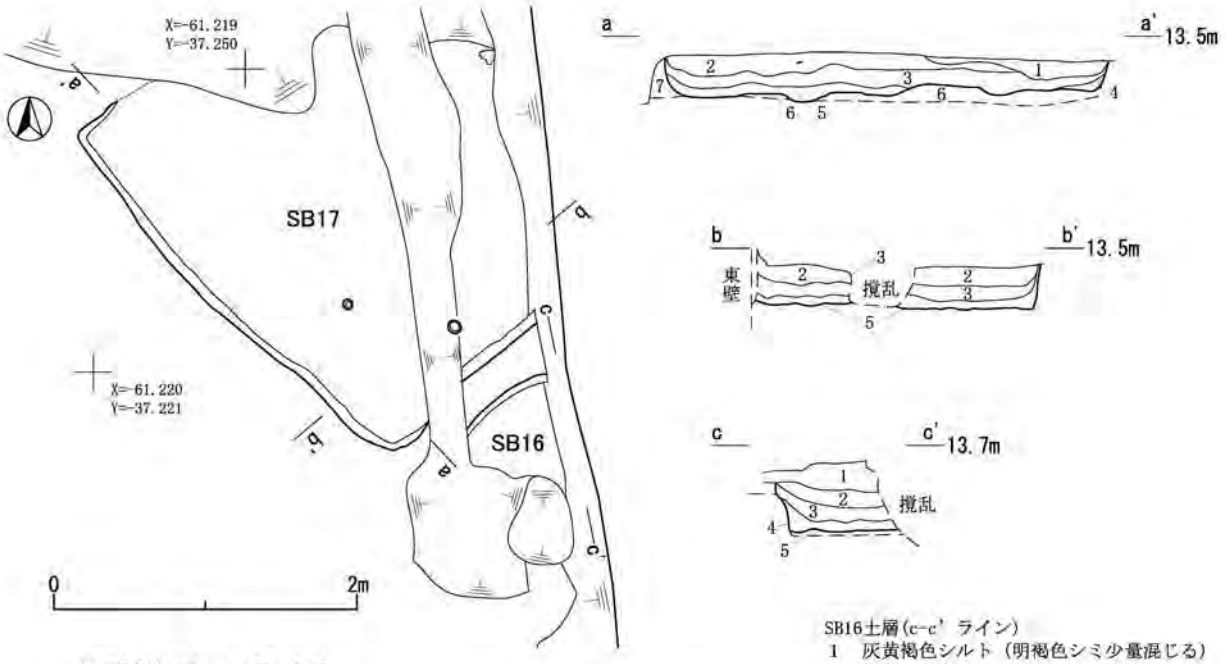


a-a'・b-b'ライン
1　淡茶灰色土（締まる、粘性弱い、炭・橙色粒子若干含む）
2　茶灰色土（橙色粒子若干含む）
3　茶灰色土（やや砂質、黄灰ブロック土若干含む）
4　灰茶褐色土（締まる、粘性弱い）
5　茶褐色土
6　暗灰茶色土（やや砂質、やや締まる、粘性弱い）
7　黄茶色土（やや砂質、やや締まり弱い、炭少し含む）
8　黄灰色砂
1～3:SK15埋土　4～7:SB1埋土　8:地山



c-c'ライン
1　撹乱
2　客土
3　砂利
4　客土
5　客土
6　灰色土
7　灰色土
8　暗褐色土（橙色粒子若干含む）
9　灰褐色土
10　茶灰色土
11　暗褐灰色土（やや砂質、炭化物・橙色粒子若干含む）
12　暗灰茶色土（黄灰色砂質土をブロック状に含む）
13　茶褐色土（炭化物を微量含む）
14　茶褐色土（13層に比べやや明るい）
15　暗褐色土
16　暗灰褐色土（上部層に比べ締りが弱く、粘性が強い、炭化物・橙色粒子を若干含む）
17　黄灰色土
18　暗茶色土
19　暗褐色土（やや粘性あり、橙色粒子・白色粒子を若干含む）
20　灰茶色土（締まる）
21　灰茶色土（締まる、炭化物・橙色粒子・白色粒子を若干含む、砂質土を若干含む）
22　淡茶灰色土（やや砂質、締まる）
23　暗茶色土
24　灰黄色土
25　茶褐色土
26　灰褐黄色土
27　暗茶灰色土（炭化物・橙色粒子若干含む）
28　暗褐色土（黄灰色ブロック土を下部に多く含む）
29　灰褐色土
30　暗茶色土
31　暗褐灰色土
1～7：Ⅰ層　8：ピット埋土
9：ピット埋土　10～12：SK24埋土
13～16：SK11埋土　17～19：SK70埋土
20～29：SB１埋土　30・31：包含層

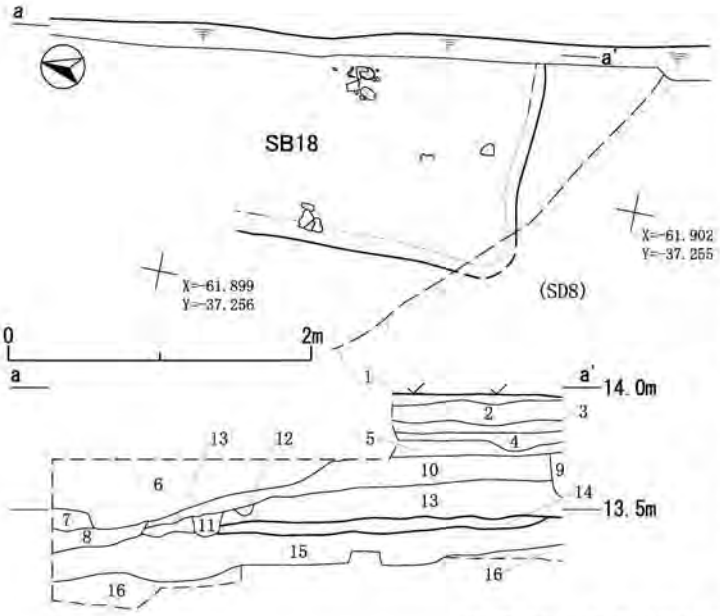
第５図　ＳＢ１実測図



SB17土層(a-a'・b-b'ライン)
1　にぶい黄褐色シルト
2　褐色シルト
3　褐色シルト（炭微量混じる）
4　にぶい黄褐色シルト（炭微量混じる）
5　にぶい黄褐色シルト
6　褐色細砂
7　にぶい黄褐色シルト
1～5SB17埋土　　6・7:地山

SB16土層(c-c'ライン)
1　灰黄褐色シルト（明褐色シミ少量混じる）
2　褐色シルト
3　褐色シルト（炭微量混じる）
4　褐色粘質土（炭微量混じる）
5　にぶい黄褐色シルト
1～4:SB16埋土　　5:地山

第６図　ＳＢ16・17実測図



a-a'ライン
1　暗褐色シルト
2　暗褐色極細砂（炭微量混じる）
3　にぶい黄褐色シルト（炭・焼土微量混じる）
4　暗褐色シルト（炭・焼土混じる）
5　褐色シルト（締まり強い、炭・焼土微量混じる）
6　にぶい黄褐色粘質土（マグネシウム粒・炭・焼土微量混じる）
7　褐色シルト（灰黄褐色シルトブロック微量混じる）
8　暗褐色粘質土（マグネシウム粒微量混じる、灰黄褐色粘質土まだらに混じる）
9　褐色粘質土（マグネシウム粒・炭・焼土微量混じる）
10　褐色粘質土（締まる、炭・焼土微量混じる）
11　にぶい黄褐色粘質土（炭・焼土微量混じる）
12　褐色粘質土（灰黄褐色シルトブロック微量混じる）
13　褐色シルト（マグネシウム粒・灰黄褐色シルトブロック微量混じる、褐色極細砂まだらに混じる）
14　暗褐色粘質土（炭微量混じる）
15　にぶい黄褐色粘質土（灰黄褐色粘質土まだらに混じる）
16　にぶい黄褐色粘質土

1～3：1層　　4：Ⅳ層　　5：Ⅴ層
6～8：SX12　　9：遺構？　　10：Ⅵ層
11・12：遺構？　　13：Ⅶ層　　14：SB18
15：Ⅷ層　　16：地山

第７図　ＳＢ18実測図

ＳＢ18（第７図・第31図20～24）

北区の北側に位置し、北vi面で確認した。ＳＤ８に切られる。遺構の一部が調査区外となるため、全体の平面形は不明であるが、正方形を呈するものと考えられる。住居の規模は長辺1.56m、短辺1.43mを測る。床面は平坦であったが、硬化面を確認することはできず、柱穴、カマドなどの施設も確認することはできなかった。

遺物は44点出土し、全て土師器である。この中から５点を実測した。20・24は有稜高杯の口縁部である。20には外面に櫛描直線文、櫛刺突文が施文される。21はパレス壺の胴部で、櫛による山形刺突文が施文され、赤色が施される。

ＳＤ11（第８図）

北区の北側に位置し、北vi面で確認した。ＳＤ12を切り、ＳＤ９に切られる。流路を東西方向にとり、両端は調査区外に延びる。このため全長は不明であるが、現状で長さ約3.48m、幅0.61mを測る。断面形はＵ字形を呈し、深さ約0.19mである。

遺物は９点出土し、その内訳は土師器８点、須恵器１点である。北vi面で検出されていることから、須恵器は混入したものと考えられる。また、小片だけであり、実測できる遺物は確認できなかった。出土遺物からは判断し難いが、北vi面の上面で確認できたことから、本遺構は１期に造られたと見られる。

ＳＤ12（第８図）

北区の北側に位置し、北vi面で確認した。ＳＤ８、Ｐ168に切られる。流路を東西に方向をとり、北区の北側で大きく東に湾曲する。溝の北側はＳＤ８に切られ、南側は調査区外に延びる。このため全長は不明であるが、現状で長さ約11.10m、幅0.20mを測る。断面形はＵ字形を呈し、深さ約0.21mである。

遺物は土師器が80点出土しているが、小片だけであり、実測できる遺物は確認できなかった。出土遺物からは判断し難いが、北vi面の上面で確認できたことから、本遺構は１期に造られたと見られる。

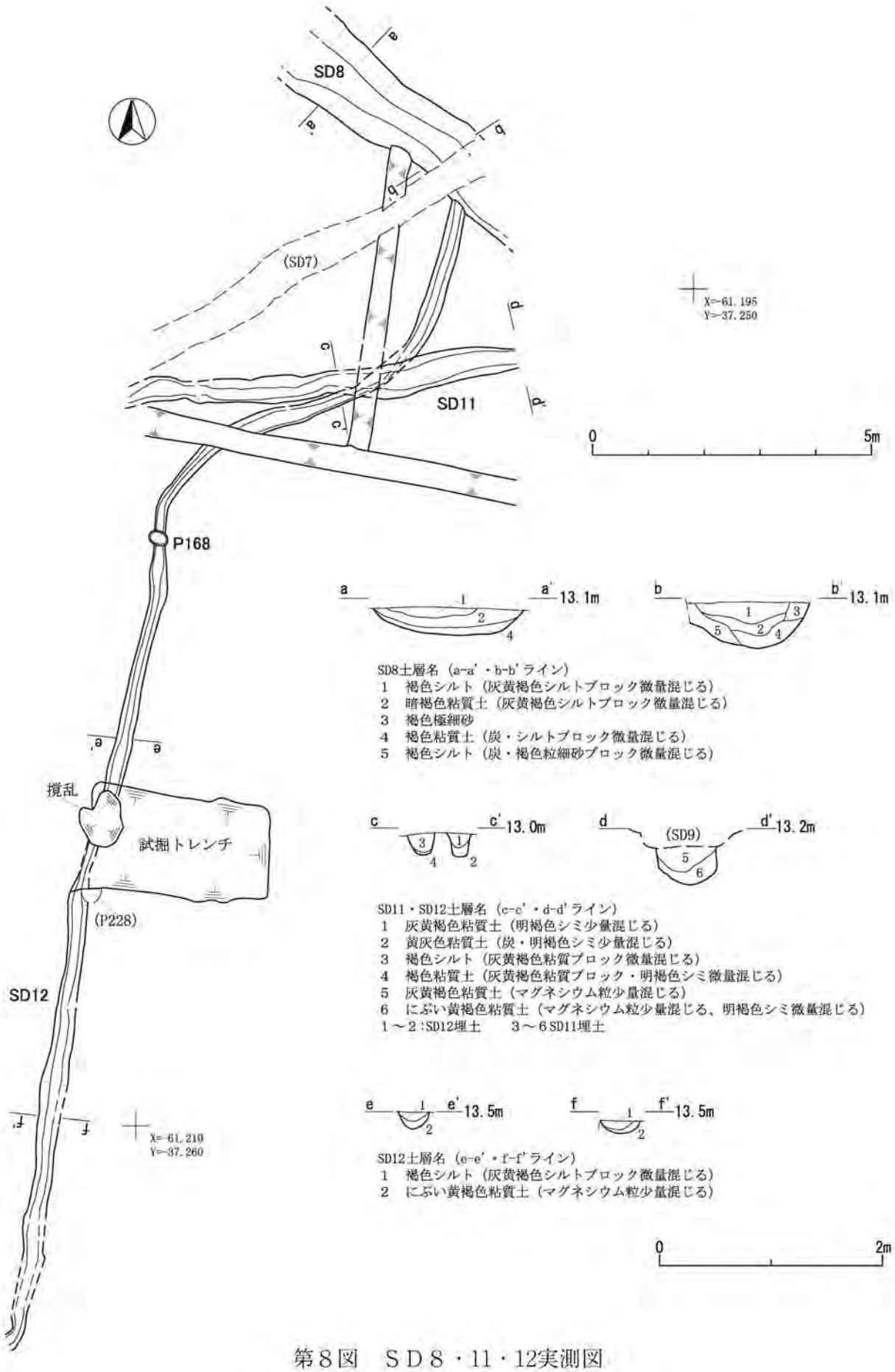
ＳＫ22（第９図・第31図25～29）

南区の南端に位置する。ＳＢ２に切られる。南側が調査区外になり、全体の平面形は不明であるが、やや歪な台形を呈するものと考えられる。

遺物は122点出土し、全て土師器である。この中から５点を実測した。25・26はＳ字状口縁台付甕の口縁部で、共にＢＣ類である。27・28は手づくねの土器である。28は口縁部と考えられるが、全体の形態は不明である。29がパレス壺で口縁部内面に羽状刺突文を施文する。

ＳＫ92（第９図・第31図30）

南区の北側の中央部分に位置し、ＳＢ６、ＳＫ91に切られる。平面形は他の遺構に壊されているため正確な形は把握できないが、楕円形を呈すると考えられる。遺構の規模は現



第８図　ＳＤ８・11・12実測図

状で長径1.43m、短径0.59mを測る。

遺物は48点出土し、土師器のみである。この中から１点を実測した。30は長頸壺である。外面体部に斜め方向のミガキ調整をし、櫛描直線文、櫛刺突文、首部に綾杉文を施文する。

ＳＫ100（第９図・第31図31～33）

南区の北側に位置し、ＳＤ１、ＳＤ２に切られる。他の遺構に壊されているため正確な平面形は把握できないが、不整形を呈するものと考えられる。遺構の規模は現状で長辺1.6m、短辺1.2mを測る。

遺物は81点出土し、土師器のみである。この中から３点を実測した。31は壺で、外面に丁寧なミガキ調整が見られ、全体に赤褐色を呈する。32は壺の体部に櫛描直線文、羽状文が施文される。33はＳ字状口縁台付甕の口縁部で、口縁第２段が垂直に立ち上がり、押引き刺突文が見られるＡ類である。

ＳＫ101（第９図・第31図34～40）

南区の北側に位置し、ＳＤ５に切られる。他の遺構に壊され、また一部は調査区外となるため全体の平面形は不明であるが、隅丸方形を呈するものと考えられる。遺構の規模は現状で長辺2.46m、短辺2.27mを測る。遺構の底にピットを検出したが、この遺構に伴うものかどうかは確認できなかった。

遺物は142点出土し、全て土師器である。この中から７点を実測した。34は直口壺の口縁部でミガキ調整を施す。35はＡ類のＳ字状口縁台付甕の口縁部、36・38は有稜高杯、37は有段高杯の口縁部で、36は外面に、37は内面に櫛描直線文を施す。38は口縁端部が残っていないが、外面に櫛描直線文、櫛による山形刺突文が施文される。39は広口壺の口縁部で、羽状刺突文が施文されている。40は台付甕の脚部である。

Ｐ27（第９図・第31図41）

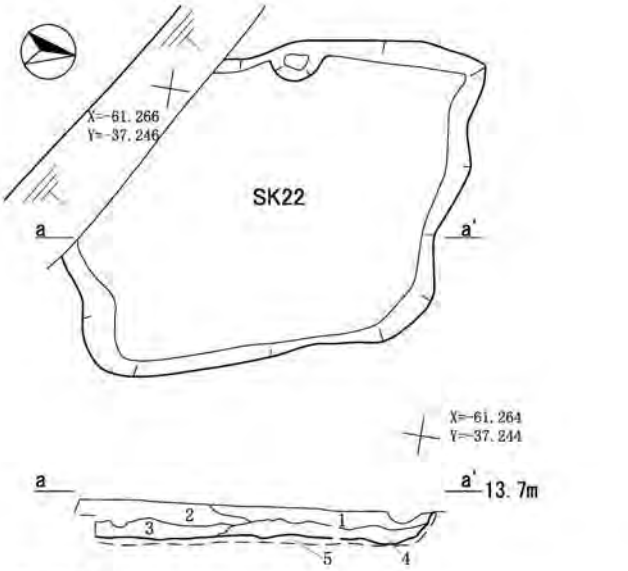
南区のほぼ中央に位置する。撹乱によって壊されているため正確な平面形は把握できないが、不整円形を呈すると考えられる。規模は長辺0.89m、短辺0.64mを測る。

遺物は５点出土し、土師器のみである。この中から１点を実測した。41は有段高杯の口縁部で、内面に櫛描直線文を施す。

Ｐ66（第９図・第32図45～47）

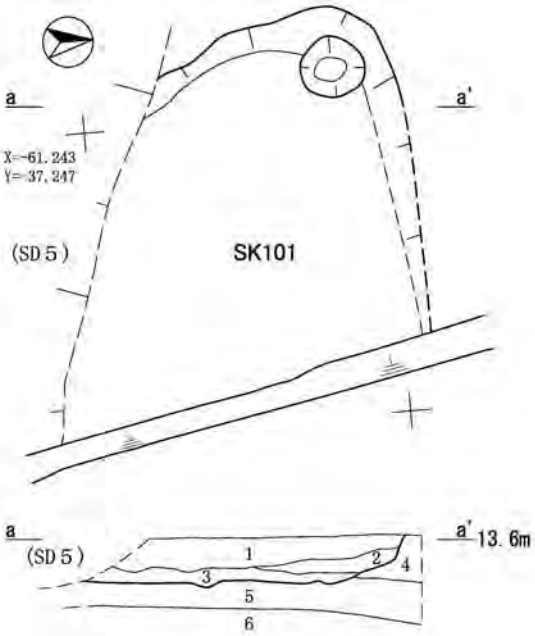
南区の北側に位置し、ＳＤ２に切られる。他の遺構に壊されているため正確な形は把握できないが、平面形は楕円形を呈すると考えられる。断面形は東側にテラス状のものが付く。規模は現状で長辺1.0m、短辺0.9mを測る。

遺物は23点出土し、土師器のみである。この中から土師器３点を実測した。45は加飾壺の肩部で外面に櫛描直線文、羽状文を施す。全体に赤褐色を呈する。46はパレス壺の口縁部で、外面に擬凹線文を施す。47は甕の口縁部である。

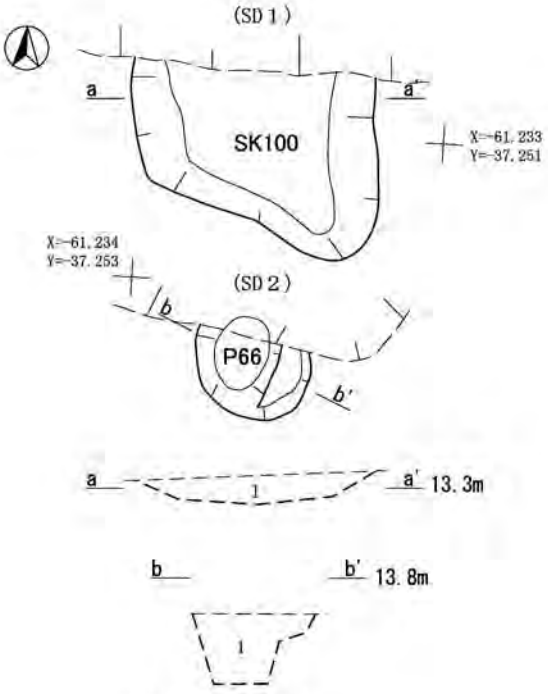


SK22土層
1　茶灰色土（締まる、粘性弱い、橙色粒子若干含む）
2　茶灰色土（１層に比べ粘性強い、橙色粒子若干含む）
3　淡茶灰色土（やや砂質、締まる、粘性弱い）
4　淡茶褐色土（やや砂質、締まる、粘性弱い、黄褐色土ブロック含む）
5　黄灰色砂
１～４:SK22埋土　　５:地山

SK92土層
1　灰茶色土

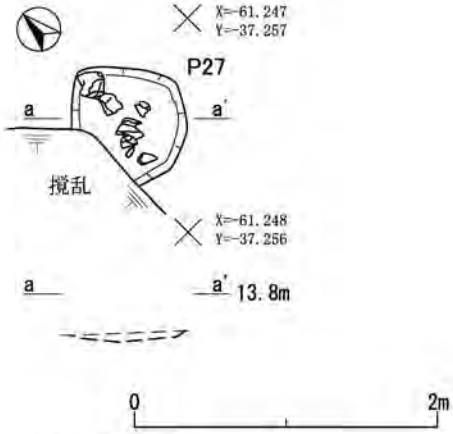


SK101土層
1　灰褐黄色土（締まる、粘性弱い、炭・橙色粒子若干含む）
2　黄褐色砂質土
3　灰茶色砂質土
4　淡黄茶灰色砂質土
5　茶灰色土
6　灰色砂質土
１～３:SK101埋土　　４～６:地山



SK100土層（a-a'ライン）
1　暗灰茶色土

P66土層（b-b'ライン）
1　暗褐灰色土（やや締まる、炭若干含む）

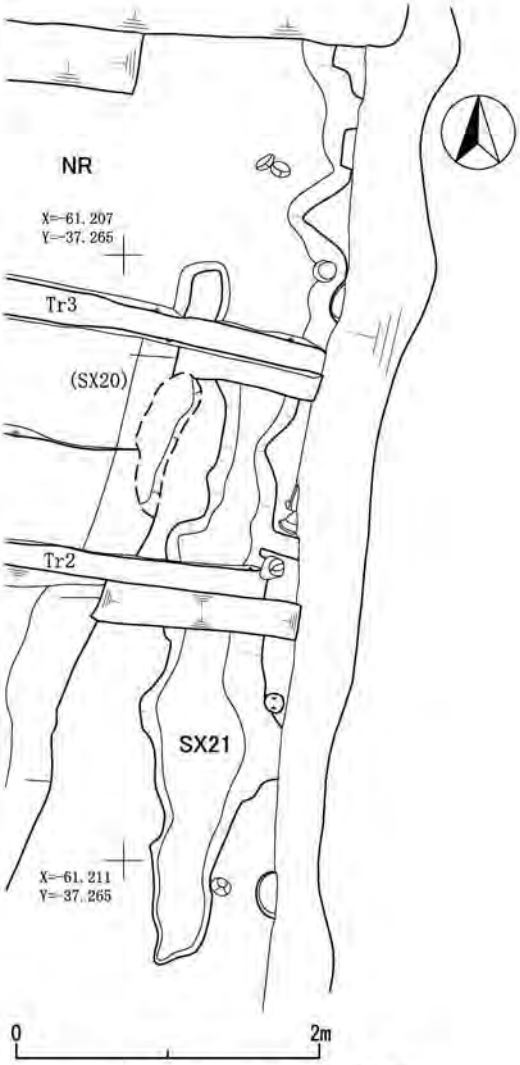


第９図　ＳＫ22・92・100・101、Ｐ27・66実測図

ＳＸ21（第10図・第30図・第32図49～52）

Ｐ区の南側に位置する。平面形は不整形で、規模は現状で長さ4.58m、幅1.01mを測る。後で述べる自然流路ＮＲと繋がる入江状の部分である。自然流路ＮＲ本流に比べて、遺物が多く出土している。このことから自然地形を利用したかは不明ではあるが、自然流路ＮＲから水を引き込んで、水汲み場として利用した可能性がある。

遺物は56点出土し、全て土師器である。この中から４点を実測した。49・50はＳ字状口縁台付甕の口縁部で、共に口縁第２段が垂直に立ち上がり、押引き刺突文が見られるＡ類である。51は有段高杯で、内面に櫛による櫛描直線文が施文される。



第10図　ＳＸ21実測図

ＳＥ２（別添図６）

北区の北東側に位置する。東壁の断面を精査している時にＳＥ２があることに気づき、北ｖ層の上面から掘り込んで造られていることを確認した（別添図６－セクション１・26～27層）。北ｖ層の上面で検出した際には気づかなかったため、平面を図化することができなかった。上層（26層）は砂質土、下層（27層）は粘質土で、底に防水施設として、27層を貼っていたと見られる。26層は均質で、分層することができないため、一気に埋没していると考えられる。

出土遺物は土師器の破片が１点出土したのみで、時期は不明であるが、北ｖ面で検出されることから、１期あるいは２期の遺構と考えられる。

その他の出土遺物（第31図・第32図）

42はＰ57から出土したもので、土師器の壺の底である。内面は丁寧なハケ調整が見られる。43はＰ59出土の土師器の高杯の脚部で、外面に縦方向のミガキ調整が見られる。44はＰ62出土の高杯の口縁部で、内外面共に縦方向のミガキ調整が見られる。48はＰ169から出土の壺か甕の底部である。

第２節　２期の遺構と遺物

２期の遺構は、特に南区において、多くの遺構が重複して検出されている。それらからの出土遺物と切り合い関係に不整合な部分も多いため、矛盾の少ない時期細分を試みたところ、３期に分けて考えることができた（2−1期～2−3期）。それぞれの年代は、2−1期は７世紀前半まで、2−2期は７世紀後半、2−3期は８世紀初頭から中葉までである。この節では細分した時期ごとに報告を行う。

（1）2−1期

ＳＢ７（第12図・第32図53、54）

南区の南側に位置し、ＳＫ８、ＳＫ12、ＳＫ13、ＳＫ14に切られる。大半が他の遺構に切られており、平面形は不明であるが、残っている西側の形から方形を呈していたと考えられる。規模は現状で長辺2.79m、短辺0.62mを測る。床面の硬化面や柱穴、カマドなどの施設は確認することはできなかった。

遺物は35点出土しており、土師器が主体を占める。この中から須恵器２点を実測した。53は７世紀中葉の蓋で、54は畿内系の可能性がある高杯である。

出土遺物からは７世紀中葉の遺構と捉えることができるが、ＳＫ８との切り合い関係を考慮して、７世紀前半と考える。

ＳＫ８（第12図・第32図55）

南区の南端に位置し、ＳＢ７、ＳＫ13を切る。遺構の大半が調査区外となるため、全体の平面形は不明である、規模は現状で長辺0.99m、短辺0.82mを測る。

遺物は25点出土しており、土師器が主体を占める。この中から須恵器１点を実測した。55は７世紀前半の壺の口縁部である。

時期は出土遺物から、７世紀前半と考えられる。

ＳＢ９（第18図）

南区の北側やや東寄りに位置し、ＳＢ８、ＳＫ２に切られ、ＳＫ37を切る。大半をＳＢ８によって壊されているため、全体の平面形は不明であるが、残りの部分から正方形を呈するものと考えられる。規模は現状で長辺3.57m、短辺3.37mを測る。床面の硬化面や柱穴、カマドなどの施設は確認することはできなかった。

遺物は土師器が出土しているが、実測できるものはなかった。ＳＫ２が７世紀前半の遺構であるため、切り合い関係から７世紀前半以前の遺構と判断できる。

ＳＫ２（第18図・第32図56、57）

南区の北側に位置し、撹乱、ＳＤ２に切られる。他の遺構に切られているため全体は不明であるが、平面形は不整円形になるものと考えられる。規模は現状で長辺1.01m、短辺0.86mを測る。

遺物は47点出土しており、土師器が主体を占める。この中から須恵器２点を実測した。56・57は７世紀前半の美濃須衛産の蓋である。

時期は出土遺物から７世紀前半と考えられる。

ＳＫ37（第18図）

南区の北側の東に位置し、ＳＢ９に切られる。平面形は大半をＳＢ９により壊されているため全体は不明である。規模は現状で長辺1.83m、短辺1.2mを測る。

遺物は土師器の破片が27点、須恵器の破片１点が出土しているが、実測できるものはなかった。須恵器が出土していることから２期と推定した。

ＳＫ151（第18図）

南区の北側に位置し、撹乱、ＳＢ９に切られる。平面形は大半を撹乱、ＳＢ９によって壊されているため、全体は不明である。規模は現状で長辺0.62m、短辺0.5mを測る。

遺物は須恵器の破片７点で、実測できるものはなかった。須恵器が出土していることから２期と推定した。

ＳＫ18（第16図・第32図58～60）

南区の南側に位置し、ＳＫ107を切り、ＳＤ３、Ｐ16に切られる。平面形は他の遺構で壊され、全体は不明である。規模は現状で長辺1.23m、短辺0.84mを測る。

遺物は72点出土しており、土師器が主体を占める。この中から須恵器３点を実測した。58は蓋の端部、59は坏身、60は壺の胴部で底の部分には丁寧な回転ケズリ調整が見られる。

出土遺物は全てが７世紀前半までのもので、当時期の遺構と推測される。ところが、隣接するＳＢ５、ＳＫ107との切り合い関係では矛盾を生じており、判断に苦慮するところであるが、ここでは出土遺物を重視して、７世紀前半の遺構と考えておく。

ＳＫ34（第14図・第32図61～66）

南区のほぼ中央に位置し、東側を撹乱に切られ、ＳＫ49、ＳＫ57を切る。平面形は不整形である。規模は現状で長辺1.26m、短辺9.6mを測る。埋土には炭・焼土を多く含んでいた。

遺物は144点出土しており、土師器が主体を占める。この中から土師器２点、須恵器２点、土錘２点を実測した。61・62は須恵器である。61は７世紀中葉の美濃須衛産の平瓶で、外面に自然釉がかかり、底部は平行タタキを行った後に静止ケズリ調整によってタタキを消している。62は尾張産の蓋である。63・64は伊勢型甕で、63はＡ１類、64はＡ２類である。65・66は土錘である。

出土した遺物で時期が判明できるものは多く、その様相は７世紀中葉までの遺構であることを示している。ところが、ＳＢ14、ＳＫ69など、切り合い関係で下位に位置する遺構から、７世紀後半の遺物が出土している矛盾した状況が生じている。点数が多いことから

遺物の年代観を重視し、本遺構の時期は７世紀前半頃と考えておく。

ＳＫ43・ＳＫ83・Ｐ37（別添図１・第32図67～70）

南区中央西端に位置する。３基の遺構は重複しており、ＳＫ83→Ｐ37→ＳＫ43と変遷する。出土遺物はいずれも７世紀前半に比定でき、１つの大きな遺構であった可能性もある。

67・68はＳＫ43から出土したもので、67は土師器伊勢型甕Ａ１類、68は土錘である。69はＳＫ83から出土した須恵器の坏身で、美濃須衛産のものである。70はＰ37出土の須恵器で、美濃須衛産のもので７世紀前半の坏身である。

ＳＫ35・ＳＫ38・ＳＫ81・ＳＫ104（別添図１・第32図71～77）

南区中央東端に位置する。４基中３基の遺構は重複しており、ＳＫ104→Ｐ81→ＳＫ35と変遷する。ＳＫ38のみＳＤ５（近代）によって、切り合いが不明である。出土遺物はいずれも７世紀前半までに比定でき、１つの大きな遺構であった可能性もある。

71はＳＫ35から出土した６世紀後半～７世紀前半頃の須恵器の蓋である。72はＳＫ38から出土した須恵器で、７世紀前半の長頸瓶の脚部である。ＳＫ81からは73～76が出土している。74・76は共に土師器甕で、76は伊勢型甕Ａ１類である。73・75は須恵器で、73は美濃須衛産の瓶の口縁部、75は甕の口縁部である。ＳＫ104からは77の伊勢型甕Ａ１類が出土している。

ＳＫ138（第11図・第32図78）

北区の南東側に位置し、ＳＫ137、Ｐ132に切られる。平面形は不整形で、軸を北東―南西方向にもち、規模は現状で長辺1.2m、短辺0.19mを測る。遺構の検出は北vi面（１期）であるが、出土遺物からみて２期の遺構であることは間違いなく、北ｖ面での検出ミスと思われる。

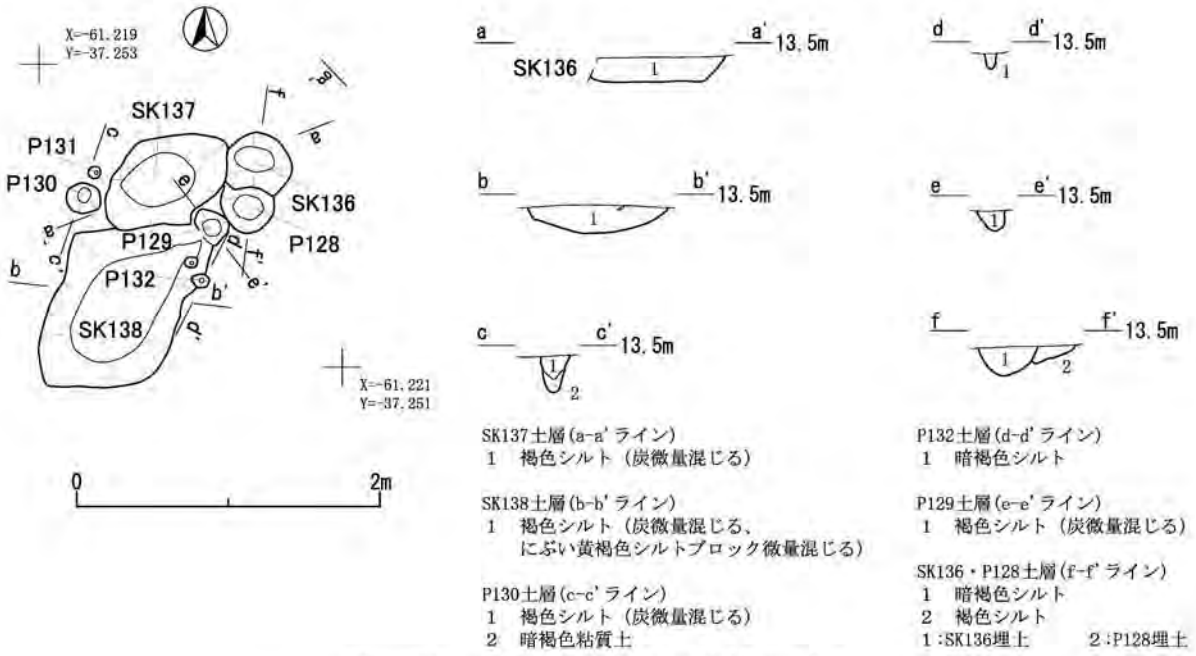
遺物は28点出土しており、土師器が主体を占める。この中から須恵器１点を実測した。78は畿内系の須恵器の坏身で７世紀初頭のものである。出土遺物から本遺構の築造時期は７世紀初頭となる。

また、ＳＫ138の周りにはＳＫ136、ＳＫ137、Ｐ128～Ｐ132があるが出土遺物ほとんど出土していないため、時期を限定することができなかった。

その他の出土遺物（第32～33図79～90）

79～82はＳＫ21から出土した遺物である。79は美濃須衛窯で焼かれた可能性のある蓋で７世紀中葉のもの、80は坏身で須山古窯産と推定される。81は鉢である。82は土師器甕であるが、ハケ目が細かい。83～85はＳＫ68から出土したもので、83は畿内系の蓋である。84は須恵器瓶で肩の部分に櫛描列点文が施され、自然釉がかかる。85は土師器の甕で、伊勢型甕Ａ２類である。86はＳＫ73から出土した須恵器で、提瓶か平瓶の頸部である。裏側の剥離部分には接合時の入れた刻み目が明瞭に見られる。87はＳＫ96から出土した７世紀

前半の須恵器の蓋、88はＳＫ99から出土した焼塩土器で、美濃式１類のものである。89はＰ31出土の須恵器の蓋、90はＰ67出土の美濃須衛産の須恵器の蓋である。



第11図　ＳＫ138と周辺の遺構実測図

（２）２−２期

ＳＢ２（第12図・第33図91～105）

南区の南端に位置し、ＳＤ３、ＳＫ32、ＳＫ70に切られる。西側が他の遺構により壊され、南側は調査区外となるため、全体の平面形は不明であるが、残りの部分から正方形を呈するものと考えられる。規模は現状で長辺2.70m、短辺3.71mを測る。床面はほぼ平坦で、東西2.30m、南北1.90mの範囲に、硬く締まる硬化面（ｅ−ｅ'、ｆ−ｆ' セクション１層）が確認された。ｇ−ｇ' セクションで硬化面に対応する層が記録されていないが、20層がその可能性がある。硬化面の下層（ｅ−ｅ'、ｆ−ｆ' ２・３層）は上層に比べて締まりはなく、底面を平坦にするための盛土の可能性が考えられる。床面で４つのピットを見つけたが、柱穴は確認できなかった。カマドは確認することができなかった。

遺物は491点出土しており、土師器が主体を占める。この中から土師器５点、須恵器９点、土製品１点を実測した。91～100は須恵器である。94は７世紀後半の蓋、95～99は７世紀後半から８世紀前半の無台杯で、96は美濃須衛窯の製品である。91～93は坏身である。100は皿か盤と考えられ、焼成が甘く生焼けである。101～104は土師器甕の口縁部で、101～103は伊勢型甕Ａ２類である。105は144と同じミニチュア土器と見られる。

出土遺物には、７世紀前半のもの、７世紀後半のもの、７世紀後半～８世紀前半のものがある。93、94、98、99、105は硬化面を形成する層中から出土したものであるが、硬化面を挟んだ上下で遺物は取り分けられていない。またｇセクションを見ると、遺構の切り

合いの可能性がある。このようなことから、遺物が混在しているようであるが、ＳＫ70との切り合い関係から、７世紀後半頃の遺構と考えられる。

ＳＫ70（第12図・第33図106）

南区の南側に位置し、ＳＤ３、ＳＫ58に切られ、ＳＢ２を切る。他の遺構で壊され、南側は調査区外となるため、全体は不明であるが、平面形は円形を呈すものと考えられる。規模は現状で長径1.93m、短径1.40mを測る。

遺物は４点の出土だけであり、土師器３点、須恵器１点である。106はＳＫ70から出土した須恵器の杯で、７世紀後半のものである。

出土遺物は少量であるが、７世紀後半の遺構と推測される。

ＳＢ５（第13図・第33図107～110）

南区の南側に位置する。現代の撹乱によって壊されており、ＳＫ18、ＳＫ87に切られ、ＳＢ10、ＳＢ11を切る。東半分が壊されているため、全体の平面形は不明である。規模は現状で長軸2.90m、短軸2.57mを測る。床面で１つのピットを検出したが、柱穴は確認できなかった。床の硬化面やカマドなどの施設は確認することができなかった。

遺物は127点出土しており、土師器が主体を占める。この中から土師器２点、須恵器２点を実測した。107・108は須恵器である。107はかえりを有する蓋で、108は畿内系の可能性がある無台杯である。109・110は土師器で、共に伊勢型甕Ａ１類である。

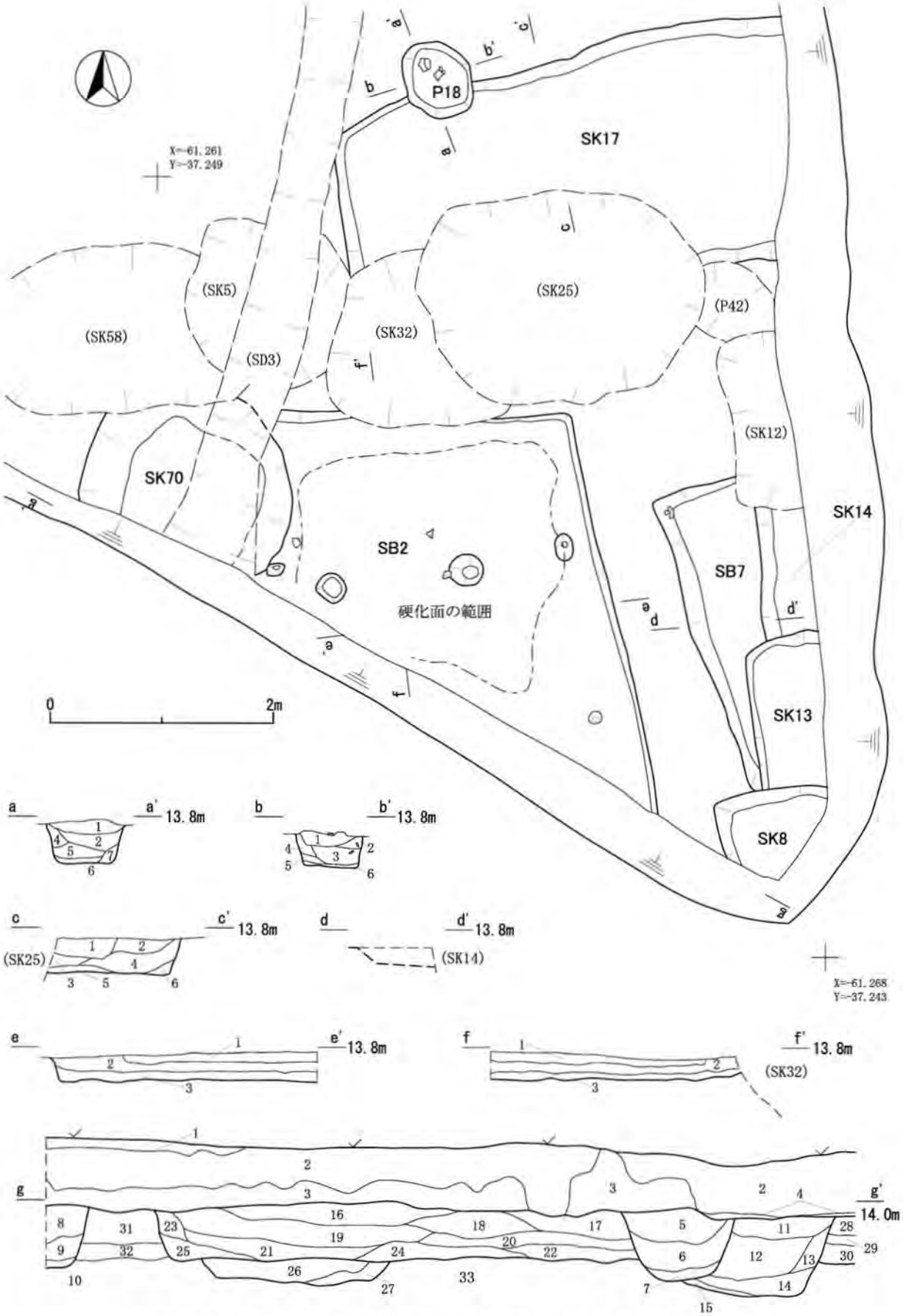
出土遺物には７世紀前半に比定されるものがあるが、先行するＳＢ10との切り合い関係から、本遺構の時期は７世紀後半以降と推測される。

ＳＢ10（第13図・第33図111～126）

南区の南側に位置し、東西側を大きな撹乱によって削られている。ＳＫ１、ＳＫ87、ＳＢ５に切られる。残存部分から判断すると、平面形はほぼ正方形を呈していたと考えられる。規模は現状で長辺4.07m、短辺3.62mを測る。床は平坦であったが、硬化面を確認することはできなかった。また、柱穴、カマドなどの施設も確認することはできなかった。

遺物は792点出土しており、土師器が主体を占める。この中から須恵器10点、土師器５点、土製品１点を実測した。111～120・124は須恵器で、111・112は高杯の脚部である。113はかえりがある蓋、114・115は坏身である。116は７世紀後葉の蓋で、裏面に「×」のヘラ記号が見られる。117～119は７世紀後半～８世紀前半の無台杯である。119は外面の一部と割れた断面が被熱している。120は７世紀後半～８世紀前半の美濃須衛産の盤である。124は４つの穴があり、特に図上の下側が大きい。中央に大きな穴をあけ、周りに小さい穴が巡る形になるものと推定でき、甑の底部と考えられる。121～123・125は土師器で、121～123は伊勢型甕Ａ２類、125は甑か鍋の把手である。126は土錘である。

出土遺物は多く、７世紀前葉から後葉まで時期幅が広い。この周辺は多くの遺構が切り合っており、以前の遺構の遺物が一緒に埋没している可能性が高いことが原因と見られる。本遺構の時期は７世紀後半頃と考えられる。



第12図　ＳＢ２・７、ＳＫ８・13・14・17・70、Ｐ18実測図

P18土層（a-a'・b-b'ライン）
1　暗茶褐色土（炭・焼土多く含む）
2　淡茶灰土（焼土若干含む）
3　暗茶灰色土（炭・焼土多く含む）
4　褐灰色土（黄色土ブロックを若干含む）
5　褐灰色土（焼土若干含む）
6　黒灰茶土（地山ブロック（黄灰砂質土）を微量含む）
7　暗褐色土（炭若干含む）

SB2土層（e-e'・f-f'ライン）
1　灰茶色土（硬化面、炭・焼土を微量に含む）
2　茶褐色土（やや締まり弱い、粘性弱い、炭若干含む）
3　茶灰黄色土（やや砂質、締まる、炭少し含む）

g-g'ライン
1　砂利
2　客土
3　客土
4　灰色土
5　灰褐色土（締まる、橙色粒子を若干含む）
6　茶褐色土
7　暗褐色土（砂質土、橙褐色粒子を微量含む）
8　淡茶灰色土
9　褐灰色土
10　黄褐色砂質土
11　暗灰褐色土
12　茶灰色土（炭化物・橙色粒子若干含む）
13　淡灰茶色土
14　灰茶色土（砂質土）
15　黄灰褐色砂質土
16　淡灰褐色土（締まる、炭化物若干含む）
17　灰茶色土（締まる、炭化物・橙色粒子を若干含む）
18　暗褐灰色土（締まる、炭化物・橙色粒子を若干含む）

SK17土層（c-c'ライン）
1　淡茶灰色土（締まる、やや粘性弱い）
2　茶灰色土（やや締まる、やや粘性弱い）
3　茶灰色土（やや締まり弱い、やや粘性弱い、マンガン粒子少し含む）
4　暗褐灰色土（やや砂質、炭若干含む）
5　灰褐色土（締まる、粘性弱い）
6　灰褐黄色土（砂質）

19　暗茶灰色土（締まる、やや粘性あり、橙褐色粒子微量含む）
20　茶灰色土（砂質土）
21　灰黄茶色土
22　黒灰褐色土（砂質土）
23　灰茶色土
24　灰褐黄色土（砂質土）
25　暗茶褐色土
26　暗茶灰色土（炭化物・橙色粒子・白色粒子を若干含む）
27　黒褐色土（黄褐色砂質土をブロック状に含む）
28　灰茶色土
29　灰茶色土（28層に比べやや暗い）
30　暗灰褐色土（炭化物・橙色粒子を微量含む、黄灰色ブロック土を下部に多く含む）
31　暗茶色土
32　暗褐色土
33　黄灰色砂質土

1～4：1層　5～7：SD3　8～10：SK8
11～15：SK70　16～25：SB2　26・27：SK22
28～32：包含層　33：地山

ＳＢ11（第13図・第33図127～132）

南区の南側に位置し、ＳＢ５、ＳＢ10、ＳＫ51、Ｐ39、Ｐ91に切られ、ＳＢ12を切る。平面形は他の遺構で壊されているが、残っている部分から、平面形は長方形を呈すると考えられる。規模は現状で長辺2.83m、短辺0.91mを測る。床面の硬化面や柱穴、カマドなどの施設は確認することはできなかった。

遺物は91点出土しており、土師器が主体を占める。この中から土師器１点、須恵器４点、土製品１点を実測した。127～130は須恵器である。127、129、130は蓋で、129、130は７世紀後半のかえりを有するものである。また、127は頂部に剥離痕があり、宝珠つまみが付いていたものと考えられる。128は坏身。131は焼塩土器で美濃式１類である。132は土錘である。

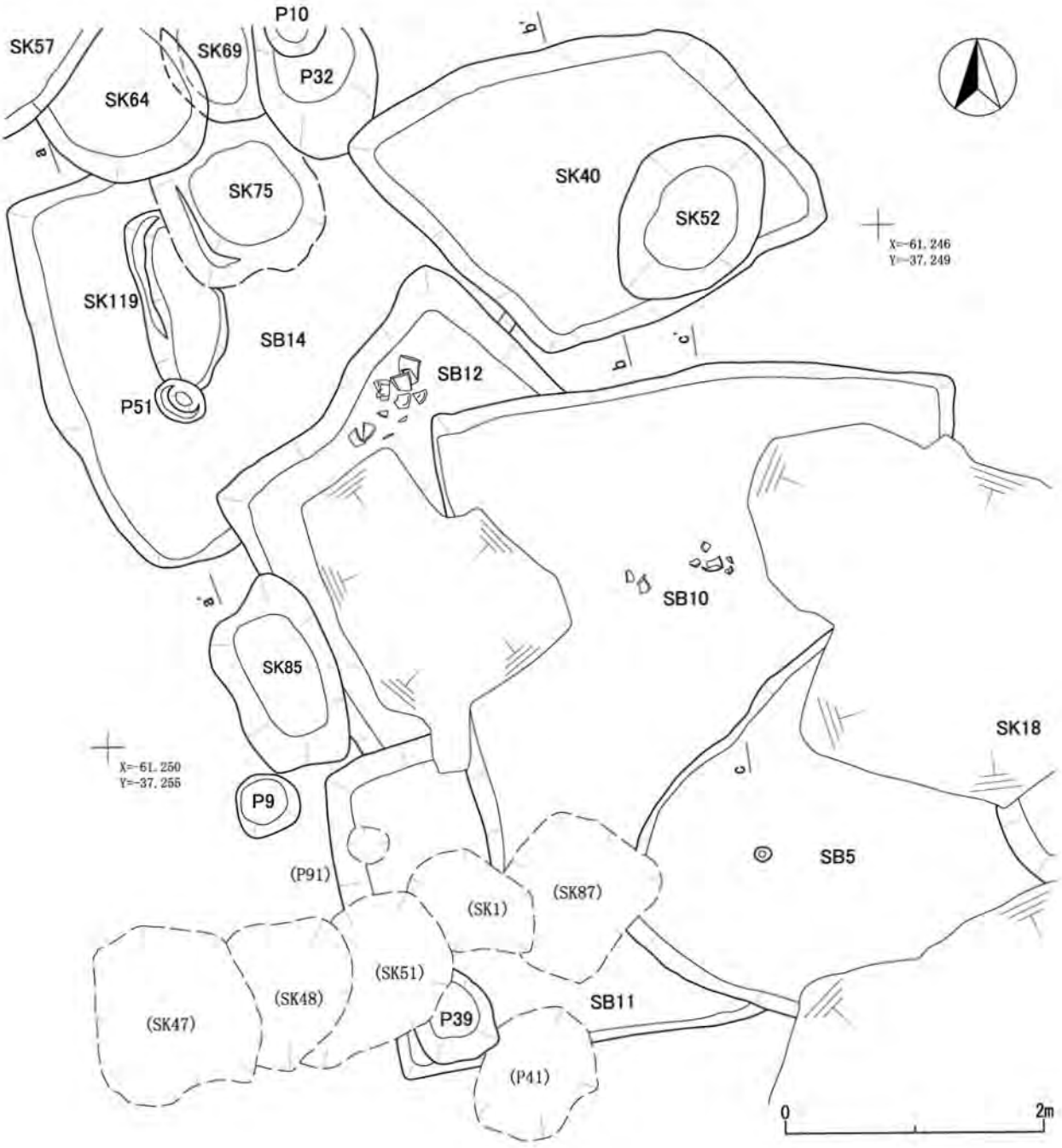
出土遺物では７世紀中葉から後半のものがあり、またＳＢ10、ＳＢ12との切り合い関係から、本遺構の時期は７世紀後半と考えられる。

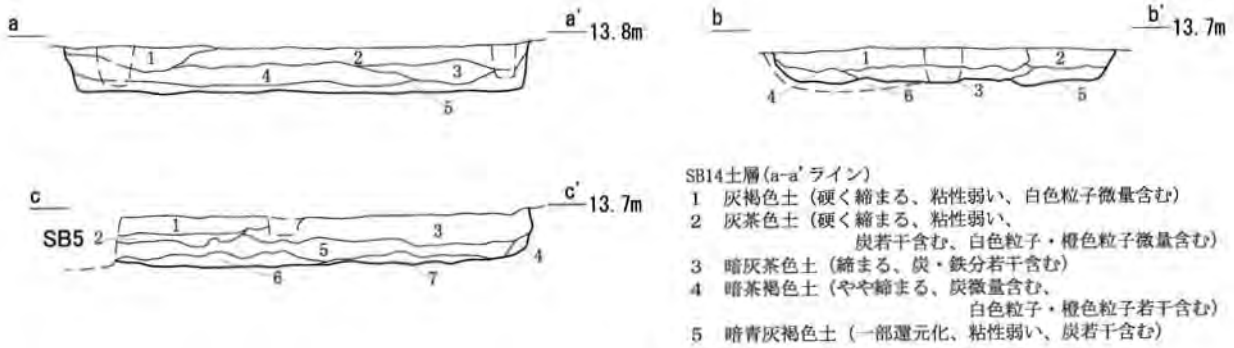
ＳＢ12（第13図・第33図133、134）

南区の南側中央部分に位置し、大きな撹乱によって削られ、ＳＢ10、ＳＢ11、ＳＫ85に切られる。撹乱・他の遺構で壊されているが、残っている部分から、平面形は長方形を呈していたと考えられる。規模は現状で長辺2.68m、短辺2.68mを測る。床面の硬化面や柱穴、カマドなどの施設は確認することはできなかった。

遺物は283点出土しており、土師器が主体を占める。この中から須恵器２点を実測した。133は７世紀後半の美濃須衛産の無台杯、134は焼成不良の口縁部である。

時期は出土遺物から７世紀後半と考えられる。





SB14土層(a-a'ライン)
1　灰褐色土（硬く締まる、粘性弱い、白色粒子微量含む）
2　灰茶色土（硬く締まる、粘性弱い、炭若干含む、白色粒子・橙色粒子微量含む）
3　暗灰茶色土（締まる、炭・鉄分若干含む）
4　暗茶褐色土（やや締まる、炭微量含む、白色粒子・橙色粒子若干含む）
5　暗青灰褐色土（一部還元化、粘性弱い、炭若干含む）

第13図　ＳＢ５・10～12・14、ＳＫ40と周辺の遺構実測図

SK40土層(b-b'ライン)
1　暗褐色土（締まる、粘性弱い、炭・橙色粒子微量含む）
2　茶褐色土（締まる、粘性弱い、炭微量含む）
3　暗褐灰色土（締まる、粘性弱い、炭・橙色粒子・白色粒子微量含む）
4　淡茶灰色土（やや砂質、やや締まり弱い、粘性弱い、炭微量含む）
5　茶灰色土（やや締まり弱い、やや粘性あり、橙色粒子若干含む）
6　黄灰砂質土
1～5：SK40埋土　　6：地山

SB10土層(c-c'ライン)
1　灰茶褐色土（締まる、粘性弱い、炭微量含む、橙色粒子若干含む）
2　灰褐色土（締まる、粘性弱い、橙色粒子・白色粒子微量含む）
3　暗灰褐色土（砂質、やや締まる、粘性弱い、橙褐色粒子微量含む）
4　暗灰色土（砂質、締まる、粘性弱い）
5　暗灰褐色土（締まる、やや粘性あり、炭微量含む）
6　茶褐色土（砂質、下層に地山をブロック状に含む）
7　灰黄色土（砂質）

ＳＢ13（第14図・第33図135～137）

南区のほぼ中央に位置する。ＳＫ36に切られ、ＳＫ44、ＳＫ76を切る。平面形はややいびつな形ではあるが、長方形を呈する。規模は長辺2.97m、短辺2.60mを測る。床は平坦であったが、硬化面を確認することはできなかった。また、柱穴、カマドなどの施設も確認することはできなかった。

遺物は73点出土しており、土師器が主体を占める。この中から須恵器３点を実測した。135は坏身で、畿内系のものである。136が蓋、137は薄手で内面に自然釉が掛かるもので、鉢と考えられる。

遺物は７世紀中葉から後半のものが出土しているが、ＳＫ44、ＳＫ69との切り合い関係から、７世紀後半以降のものと考えられる。

ＳＢ14（第13図・第34図138～145）

南区の南側の中央部分に位置し、ＳＢ12、ＳＫ40、ＳＫ64、ＳＫ69、ＳＫ75、ＳＫ119、Ｐ32、Ｐ51に切られる。他の遺構で壊されているが、残っている部分から、平面形は長方形を呈していたと考えられる。規模は現状で長辺3.42m、短辺3.05mを測る。床面でＳＫ119とＰ51を検出したが、ＳＢ14との関係は不明である。また、床面は平坦であるが、硬化面を確認することはできなかった。柱穴、カマドなどの施設は確認することはできなかった。

遺物は307点出土しており、土師器が主体を占める。この中から須恵器５点、土師器・土製品３点を実測した。138～142は須恵器である。138はつまみの付く畿内系の蓋である。139は７世紀後半の坏身、140・141は無台杯、142は高杯である。143、145は土製品である。143は土錘、145は丸玉で中心に孔があけられている。144は台付甕を模したと見られるミニチュア土器である。

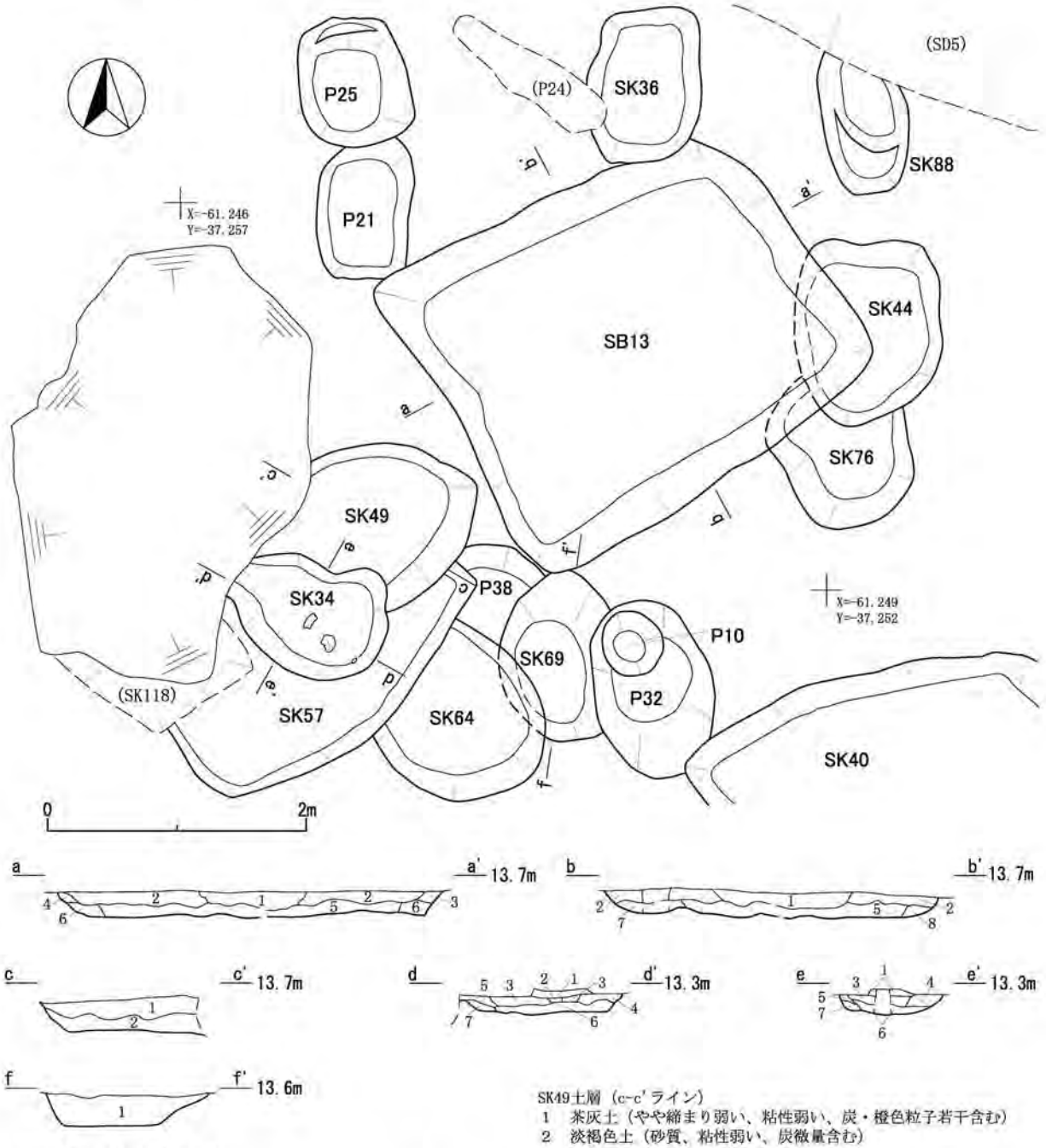
時期を判別できる遺物は少ないが、139の時期と、ＳＢ12、ＳＫ40との切り合い関係から、本遺構の時期は７世紀後半と考えられる。

ＳＫ40（第13図・第34図146～149）

南区のほぼ中央に位置し、ＳＢ14を切り、ＳＫ52に切られる。平面形は平行四辺形で、規模は長辺2.6m、短辺2.34mを測る。床はほぼ平坦である。

遺物は415点出土しており、土師器が主体を占める。この中から須恵器１点、土師器３点を実測した。146は須恵器、畿内系の坏身で７世紀中葉頃のものである。147～149は土師器である。147・149は伊勢型甕Ａ類で、148は古墳時代初頭の加飾壺である。

出土遺物から７世紀後半の遺構と推定する。



SB13土層(a-a'・b-b'ライン)
1　暗灰色土（やや締まり弱い、粘性弱い、橙色粒子若干含む）
2　灰褐色土（砂質土、やや締まり弱い、粘性弱い、橙色粒子若干含む）
3　茶褐色土（橙色粒子含む）
4　茶褐色土（３層に比べ砂が少ない）
5　灰茶色土（やや砂質、締まり弱い）
6　暗茶灰色土（やや締まる、粘性弱い、砂含む、炭若干含む）
7　暗青灰土（砂質、還元化）
8　灰黄色土（砂質）

SK49土層（c-c'ライン）
1　茶灰土（やや締まり弱い、粘性弱い、炭・橙色粒子若干含む）
2　淡褐色土（砂質、粘性弱い、炭微量含む）

SK34土層（d-d'・e-e'ライン）
1　褐灰土（焼土・炭多く含む）
2　焼土ブロック
3　暗褐灰色土（焼土・炭多く含む）
4　灰茶土
5　茶灰土
6　暗褐土（焼土・炭若干含む）
7　淡茶灰土（黄灰砂若干含む）

SK69土層（f-f'ライン）
1　暗褐灰色土（締まる、粘性弱い、炭・橙色粒子微量含む）

第14図　ＳＢ13と周辺の遺構実測図

ＳＫ44（第14図・第34図150～153）

南区のほぼ中央に位置し、ＳＫ76、Ｐ59を切り、ＳＢ13に切られる。平面形は一部をＳＢ13に切られているが、不整楕円形を呈す。規模は現状で長径1.34m、短径1.13mを測る。

遺物は137点出土しており、土師器が主体を占める。この中から須恵器３点、土師器１点を実測した。150～152は須恵器で、いずれも７世紀後半から８世紀前半のものである。150はかえりを有する蓋で７世紀後半に比定される。151は杯の口縁部。152は鉢の口縁部で、やや湾曲する。153はパレス壺の胴部で、羽状刺突文が施される。

出土遺物とＳＢ13との切り合い関係から７世紀後半の遺構と推測される。

ＳＫ52（第13図・第34図154～159）

南区のほぼ中央に位置し、ＳＫ40を切る。平面形はややいびつな楕円形を呈す。規模は長径1.45m、短径1.05mを測る。

遺物は141点出土しており、土師器が主体を占める。この中から須恵器２点、土師器４点を実測した。154・155は須恵器。154は畿内系の蓋で７世紀前半頃、155は７世紀代と考えられる壺か平瓶の口縁部である。156～159は土師器である。156・157は共に伊勢型甕Ａ２類、158はくの字状口縁甕の口縁部、159は受口状口縁甕の口縁部である。

出土遺物から７世紀後半の遺構と推定できる。

ＳＫ57（第14図・第34図160～162）

南区のほぼ中央に位置し、ＳＫ64、Ｐ38を切り、ＳＫ34、ＳＫ49、ＳＫ118、Ｐ84に切られる。残っている部分から、平面形は楕円形を呈すものと考えられる。規模は現状で長辺2.56m、短辺0.88mを測る。

遺物は32点出土しており、土師器が主体を占める。この中から須恵器３点を実測した。160は蓋、161は美濃須衛産の鉢の胴部、162は甕の口縁部である。

詳細な時期の特定は困難であるが、出土遺物の時期、切り合い関係から７世紀後半以降の可能性が高い。

ＳＫ64（第14図・第34図163）

南区のほぼ中央に位置し、ＳＢ14、ＳＫ69、Ｐ38を切り、ＳＫ57に切られる。東側を他の遺構により壊されているが、平面形は楕円形を呈す。規模は現状で長径1.24m、短径1.14mを測る。

遺物は土師器22点、土製品１点が出土している。この中から土製品１点を実測した。163は用途不明の土製品である。耳形を呈し、断面形はやや湾曲する。また、表裏共に赤色顔料が見られる（第５章第４節参照）。壺や甕に付く把手の可能性もあるが、確証はもてなかった。また、南区包含層Ｇ３区からも同じ形のものが出土している（遺物番号573）が、赤色顔料の付着は確認することができなかった。

本遺構の築造時期は後述するＳＫ69から７世紀後半の須恵器が出土しているため、切り

合い関係から７世紀後半以降のものと推定できる。

ＳＫ69（第14図・第34図164、165）

南区のほぼ中央に位置し、Ｐ38を切り、ＳＢ13、ＳＫ57、ＳＫ64、Ｐ32に切られる。平面形は楕円形を呈する。規模は現状で長径1.38m、短径0.73mを測る。床はほぼ平坦で、埋土には炭を微量に含んでいる。

遺物は62点出土しており、土師器が主体を占める。この中から須恵器２点を実測した。164は７世紀前半の高杯で、165は７世紀後半の無台杯である。

本遺構は出土遺物から７世紀後半である。

ＳＫ17（第12図・第34図166～168）

南区の南側の東に位置し、ＳＫ25、ＳＫ32、ＳＤ３、Ｐ18、Ｐ42に切られる。他の遺構に切られているが、残っている部分から、平面形は長方形を呈すものと考えられる。規模は現状で長辺4.12m、短辺2.17mを測る。底は平坦である。隣接するＰ18には多量の炭・焼土が混じっている。Ｐ18をカマドとする住居跡の可能性も考えられるが、ＳＫ17の平面形が狭小な長方形を呈するため、土坑と扱っておく。

遺物は230点出土しており、土師器が主体を占める。この中から須恵器３点を実測した。166は無台杯か有台杯の口縁部、167は壺の口縁部、168は盤の口縁部である。

時期は出土遺物から、７世紀後半と考えられる。

Ｐ18（第12図・第34図169、170）

南区の南側の東寄りに位置し、ＳＫ17を切る。平面形は不整円形で、規模は長径0.60m、短径0.77mを測る。埋土中には炭・焼土が多く混じり、ＳＫ17が住居跡であった場合、それに伴うカマドの可能性が考えられる。

遺物は21点出土しており、土師器が主体を占める。この中から須恵器１点、土師器１点を実測した。169は美濃須衛産の須恵器の坏身で７世紀中葉のものである。170は土師器で、受口状口縁甕である。

本遺構の時期は、ＳＫ17との切り合い関係から７世紀後半以降である。

ＳＫ103（第16図・第34図171～173）

南区の南東側に位置し、ＳＢ４、ＳＤ３、ＳＫ26、Ｐ20に切られる。平面形は大半を他の遺構により壊されているため全体は不明である。規模は現状で長辺1.7m、短辺0.81mを測る。

遺物は94点出土しており、土師器が主体を占める。この中から須恵器２点、土師器１点を実測した。171・172は須恵器で171は蓋、172は無台杯である。共に７世紀後半のものである。173は焼塩土器で美濃式１類である。

本遺構は出土遺物から７世紀後半である。

Ｐ20（第16図・第34図174、175）

南区の南側の東寄りに位置し、ＳＢ４に切られ、ＳＫ103を切る。平面形は楕円形で、規模は長径0.54m、短径0.41m、深さ0.30mを測る。遺物は２点のみで、ほぼ完形の提瓶（175）が腹面を上にして出土している。またその直下から鉢（174）が出土した。

174は焼成不良の須恵器の鉢で、７世紀後半～８世紀前半のものである。175は提瓶である。器形は球形で、３方向に半環状の把手が付き、腹面には櫛状工具による刺突文が弧状に施文される。調整は腹面には回転ヘラケズリ、背面には平行タタキが施され、内部には同心円文当具痕が残る。口縁端部は意図的に打ち欠いている。

ＳＢ４（８世紀前半）に切られ、ＳＫ103（７世紀後半）を切ることから、本遺構の築造時期は７世紀後半から８世紀前半の間となり、174の遺物の年代観と合致する。

提瓶の時期と遺構の性格については第６章第２節で詳しく検討しているが、本遺構の時期とは相違するため、伝世品を埋納した可能性が考えられる。

ＳＫ107（第16図・第34図176～178）

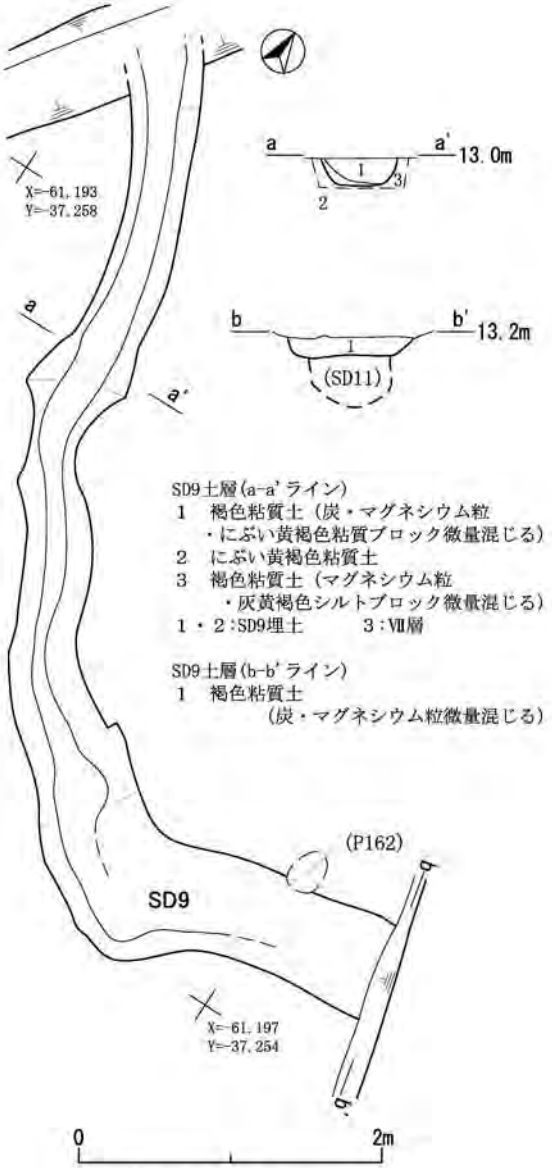
南区の南側の東に位置し、ＳＢ４、ＳＫ18、ＳＤ３、Ｐ16に切られる。平面形は大半を他の遺構により壊されているため全体は不明である。規模は現状で長径2.20m、短径0.56mを測る。

遺物は107点出土しており、土師器が主体を占める。この中から須恵器３点を実測した。176は７世紀後半の坏身である。177は７世紀後半の甑の口縁部から胴部にかけての部分で、底の形状は不明である。178は壺の口縁部で端部を上に摘み上げて形成している。

出土遺物から本遺構の時期は７世紀後半と推測される。

ＳＤ９（第15図）

北区の北側に位置する。iv面で検出した。ＳＤ11を切り、Ｐ162に切られる。流路を東西に方向にとり、溝の両端は調査区外に延びる。このため全長は不明であるが、現状で長さ約7.08m、幅0.90mを測る。断面形は扁平なＵ字形を呈し、深さ約0.19mである。



第15図　ＳＤ９実測図

遺物は土師器の小片が出土したのみで、実測できるものはなかった。本遺構は北区ⅳ面の上面で確認したことから２期の遺構であると判断した。

その他の出土遺物（第34～35図179～190）

179はＳＫ15から出土した須恵器坏身、美濃須衛窯で焼かれたもので７世紀後半のものである。ＳＫ28から出土したものは６点実測した。180～182は須恵器で180は無台杯、181は蓋の端部、182は坏身である。183～185は土師器である。183はくの字甕で、外面に横ハケ調整、内面には横ナデ調整を行う。また、外面にはススが付着する。184は台付甕の脚部である。185は高杯の脚部である。186・187はＳＫ93から出土したもので、186は７世紀後半の須恵器の蓋、187はくの字状口縁甕の口縁部で、口縁部内面に横ハケ調整を施している。188はＳＫ106から出土したもので、須恵器の坏身である。畿内系のもので７世紀後半のものとなる。189はＰ22から出土した須恵器の杯の口縁部である。190はＰ195出土の須恵器の蓋で、宝珠つまみを有するものである。

（３）２-３期

ＳＢ４（第16図・第35図191～207）

南区の南東側に位置し、ＳＫ26、ＳＫ103、Ｐ20を切り、ＳＫ10、ＳＤ３に切られる。一部他の遺構により壊され、西側は調査区外となるため、全体の平面形は不明であるが、残りの部分から正方形を呈するものと考えられる。規模は現状で長辺3.05m、短辺2.00mを測る。床面は平坦ではなく、やや凸凹している。床の硬化面やカマド、柱穴などの施設は確認することができなかった。

遺物は516点出土しており、土師器が主体を占める。この中から須恵器９点、土師器８点を実測した。191～199は須恵器、191・194は杯であるが、191は高杯口縁部の可能性がある。192・193・196・198・199は７世紀後半～８世紀前半の蓋で、198は扁平な宝珠形つまみをもち、頂部に沈線が入り、表面には自然釉が掛かる。老洞窯産のものと考えられる。195は高杯の脚部、197は７世紀後半～８世紀前半の生焼けの鉢である。200～207は土師器である。200～204は伊勢型甕Ａ２類、205は口縁部が弧状に外反し、外面は横ナデ調整、内面は横ハケ調整が施される。底部は確認してはいないが、206とともに平底甕と見られる。207は土師器の甑の把手である。192、199、205は埋土下層から出土したものであるが、時期差は見られない。

時期は出土遺物から８世紀前半頃と考えられる。

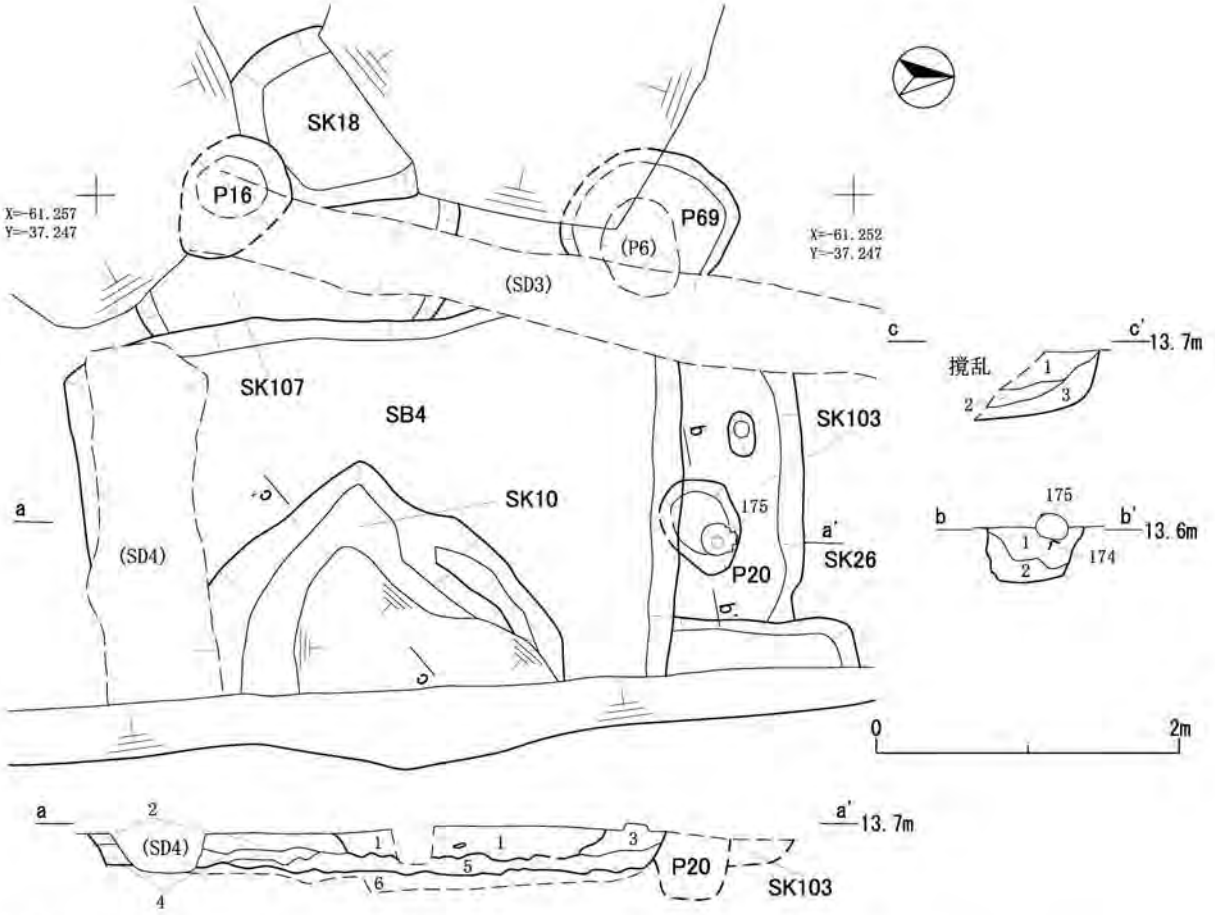
ＳＫ10（第16図・第35図208～210）

南区の南側の東端に位置し、ＳＢ４を切り、撹乱、ＳＤ４に切られる。他の遺構に切られているため全体は不明であるが、平面形は方形を呈するものと考えられる。規模は現状で長辺1.54m、短辺1.26mを測る。埋土に炭を微量に含んでいる。

遺物は37点出土しており、土師器が主体を占める。この中から須恵器２点、土師器１点を実測した。208・209は美濃須衛産の須恵器で、208は７世紀中頃の坏身、209は７世紀後

半から８世紀前半の杯である。210は土師器伊勢型甕Ａ２類である。

時期は出土遺物とＳＢ４との切り合い関係から、８世紀前半頃と考えられる。



a-a'ライン
1　茶灰色土（締まる、粘性弱い、炭・橙色粒子若干含む）
2　茶褐色土（締まる、粘性弱い、黄褐色砂質土をブロック状に含む）
3　暗茶灰色土（やや砂質、締まる、粘性弱い、炭・橙色粒子若干含む）
4　灰褐色土（砂質、やや締まり弱い、粘性弱い）
5　暗褐灰色土（やや砂質、やや締まり弱い、粘性弱い、炭若干含む）
6　黄灰色砂質土
1：SK10埋土　2～5：SB4埋土　6：地山

b-b'ライン
1　暗褐灰色土（やや締まり弱い、粘性弱い、炭・橙色粒子若干含む）
2　淡茶灰色土（やや締まり弱い、粘性弱い、炭・黄褐色砂質土をブロック状に含む）

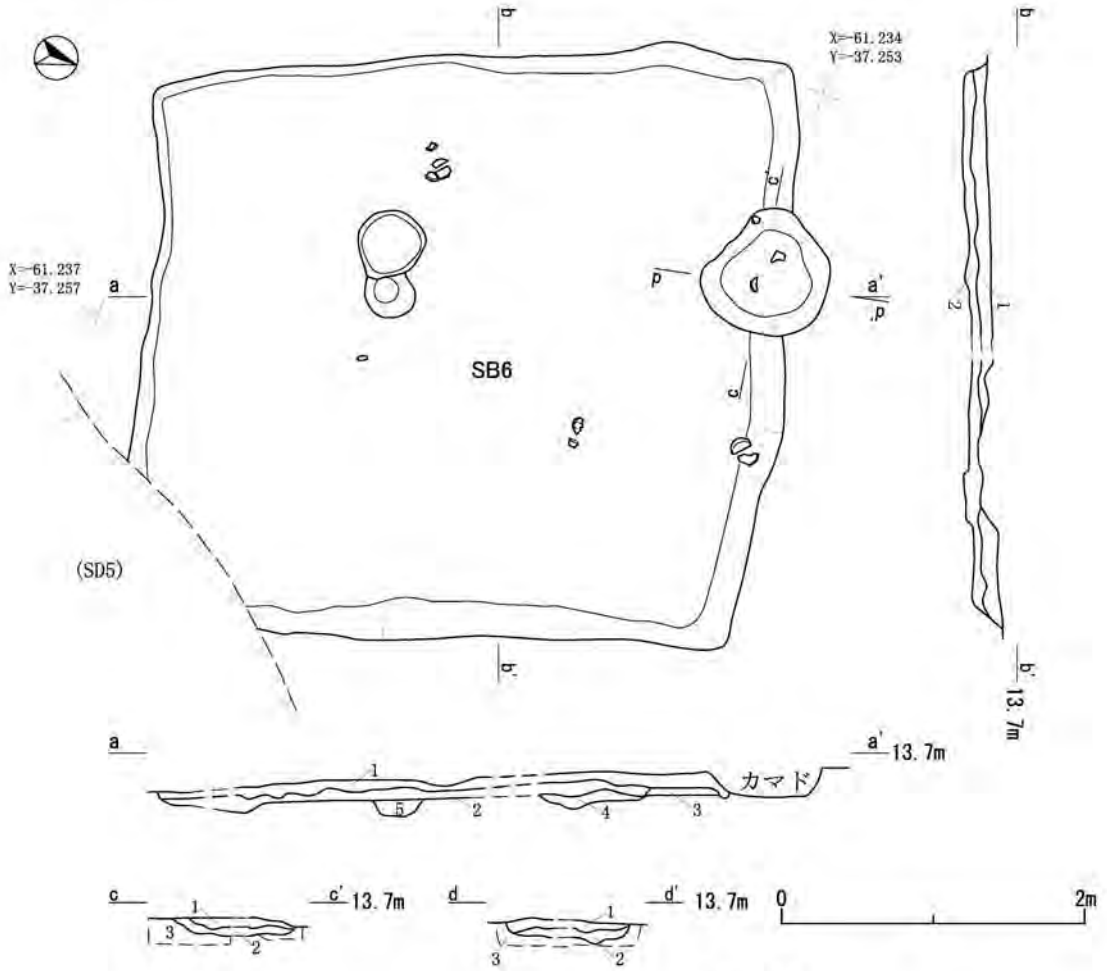
c-c'ライン
1　暗褐灰色土（締まる、粘性弱い、粘性弱い、炭・橙色粒子若干含む）
2　茶灰色土（やや砂質、締まる、粘性弱い）
3　褐灰色土（砂質、やや締まり弱い、粘性弱い、灰色ブロック土少し含む）

第16図　ＳＢ４、Ｐ20と周辺の遺構実測図

ＳＢ６（第17図・第35図211～222）

南区の北側に位置し、ＳＤ５に切られる。南東角をＳＤ５に切られているが、平面形は正方形を呈す。規模は長辺4.21m、短辺3.86mを測る。床面はほぼ平坦であるが、南方向にやや傾いている。北辺に壁面を切るようにカマドが築かれ、カマドの埋土には炭・焼土を含んでいる。また、床面でピットを２つ検出したが、柱穴は確認できなかった。硬化面も確認できなかった。

遺物は533点出土しており、土師器が主体を占める。この中から須恵器７点、土師器４点、土製品１点を実測した。211～217は須恵器で、211・212・215は蓋で、212は宝珠つまみを有する。214は猿投産の盤の脚部で、高台内のヒビに入り込むように赤い付着物が観



a-a'、b-b'ライン
1　暗茶土（締まる、粘性弱い、炭・橙色粒子若干含む）
2　暗褐灰灰土（やや締まる、粘性弱い、炭・橙色粒子若干含む）
3　灰褐色土（砂質）
4　黄茶色土（砂質、締まり弱い、粘性弱い）
5　灰茶黄砂質土
1～5：SB6埋土

c-c'、d-d'ライン
1　茶灰色土（炭・焼土含む）
2　暗茶灰土（やや砂質、炭若干含む）
3　黄灰色土
1～2：SD5カマド埋土　　3：地山

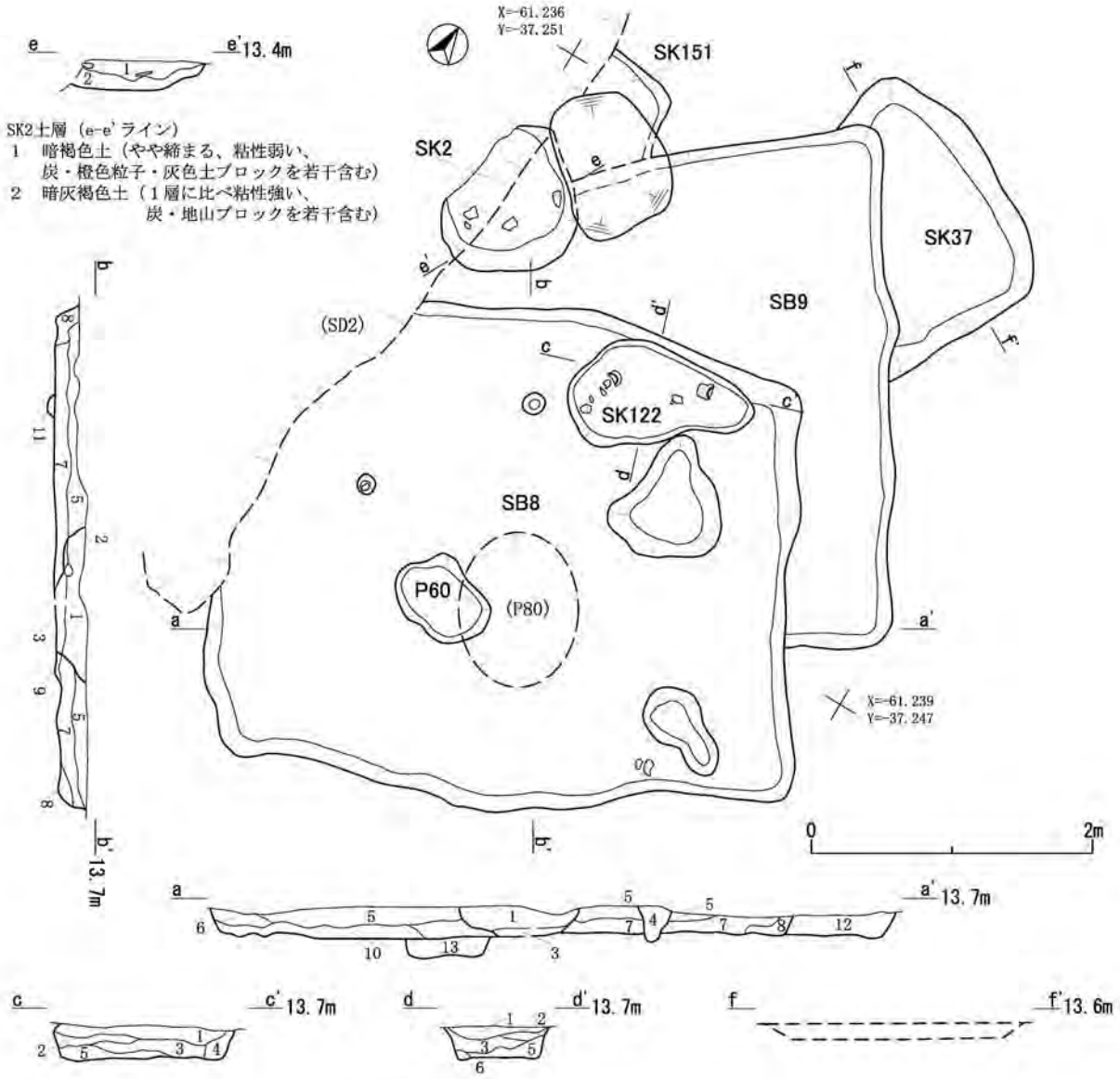
第17図　ＳＢ６実測図

察できる。朱墨を使用していた転用硯の可能性が考えられたため、成分分析を依頼したが、朱を確認することはできなかった（第６章第４節（１）参照）。216は高杯の脚部、213はカマドから出土した坏身である。213・216は共に美濃須衛産である。217は８世紀中葉頃の美濃須衛産の有台杯である。218は土錘である。219～222は土師器である。219・220は高杯の脚部、221は加飾壺の肩部で櫛による山形刺突文が施文される。222は平底の壺で、外面は丁寧にミガキ調整が見られる。また外面にはススが付着している。

実測遺物には７世紀前半のものが多く、７世紀後半、８世紀中葉がある。混入の可能性も否定できないが、本遺構の時期は８世紀中葉と考えられる。

ＳＢ８（第18図・第36図223～239）

南区の北側やや東寄りに位置し、ＳＤ２、Ｐ80に切られ、ＳＢ９を切る。北東角を他の遺構により削られているが、平面形はややいびつな正方形を呈す。規模は長辺4.02m、短辺3.57mを測る。ＳＢ６とは異なり、遺構内の北寄りにカマド（ＳＫ122）が築かれ、埋



SK2土層（e-e'ライン）
1　暗褐色土（やや締まる、粘性弱い、炭・橙色粒子・灰色土ブロックを若干含む）
2　暗灰褐色土（１層に比べ粘性強い、炭・地山ブロックを若干含む）

SB8・SB9・P80・P60土層（a-a'、b-b'ライン）
1　暗褐色土（締まる、粘性弱い、炭・焼土若干含む）
2　茶灰色土
3　黄灰褐色土（砂質土）
4　灰色土
5　茶褐色土（やや砂質、やや締まり弱い、やや粘性あり、炭若干含む）
6　淡灰茶土（締まり弱い、粘性弱い）
7　黄灰茶色土（砂質土、締まる、粘性弱い、褐色粘土ブロック若干含む）
8　淡茶灰色土（やや砂質、やや締まる、粘性弱い）
9　淡茶灰色土（砂質土）
10　淡茶灰色土（砂質土、やや締まり弱い、粘性弱い、橙色粒子若干含む）
11　灰褐色土
12　茶灰色土（砂質土、締まる）
13　暗灰褐色土（砂質土、締まる、炭・橙色粒子若干含む）
１～３：P80埋土　　４：ピット？埋土
５～11：SB8埋土　　12：SB9埋土
13：P60埋土

SK122土層（c-c'、d-d'ライン）
1　暗褐色土（締まる、粘性弱い、焼土多く含む、炭若干含む）
2　褐灰色土（締まる、粘性弱い、黄褐色砂少し含む）
3　暗褐色土（黄褐色砂多く含む）
4　褐色土（炭・焼土多く含む）
5　茶褐色土（炭・焼土・黄灰色ブロック若干含む）
6　黄灰色土
１～６：SK122埋土

第18図　ＳＢ８・９と周辺の遺構実測図

土中には炭・焼土を多く含んでいる。床面では３つのピットが検出された。Ｐ60は床面で検出した遺構であるが、住居に伴う遺構かは確認できなかった。他に２つの小ピットを確認したが、柱穴は確認できなかった。硬化面も確認できなかった。第18図中のＰ80は整理作業の段階で、セクション図で確認されたものであり、発掘作業中、平面的に検出されなかった遺構である。

遺物は779点出土しており、土師器が主体を占める。この中から須恵器10点、土師器７点を実測した。223～232は須恵器である。223、224、226は蓋で、223は美濃須衛産、224は尾張産である。225の無台杯は美濃須衛産で、内面にススが多く付着する。227～230は有台杯で、227は佐波理碗を模したものと考えられ、尾張で焼かれたものと見られる。228～230は８世紀中葉の美濃須衛産である。231は有台盤。232は甕の胴部で、外面にタタキが施される。233～239は土師器である。233は伊勢型甕、234は平底甕Ｂ２類かＢ３類である。235は焼塩土器で美濃式１類にあてはまる。236はＳ字状口縁台付甕のＢＣ類、237は受口状口縁甕の口縁部である。238は高杯、239は器台の脚部であると考えられる。

出土遺物は７世紀後葉と８世紀中葉の２時期のものが認められる。通常新しい時期を採用して時期決定を行うが、本遺構の場合、平面で検出されなかったＰ80の遺物が混入した可能性があるため、２つの時期の可能性を考えておく。

Ｐ16（第16図・第36図240）

南区の南側の東寄りに位置し、ＳＫ18、ＳＫ107を切り、ＳＤ３に切られる。平面形は円形で、規模は現状で長径1.79m、短径1.16mを測る。

遺物は28点出土しており、すべて土師器である。この中から土師器１点を実測した。240は平底甕の口縁部である。

切り合い関係で下位にあるＳＫ107が７世紀後半であるため、本遺構の時期は７世紀後半以降であり、さらに出土遺物から推定して８世紀前半と考える。

ＳＫ88（第14図・第36図241）

南区の中央に位置し、ＳＫ86を切り、ＳＤ５に切られる。平面形は一部をＳＤ５に壊されているが、楕円形を呈す。主軸を南北にとり、規模は現状で長径0.98m、短径0.67mを測る。遺構の南側にテラス状の段が見られる。

遺物は13点出土しており、土師器が主体を占める。この中から須恵器１点を実測した。241は美濃須衛産の甕で、７世紀後半～８世紀前半のものである。

本遺構は出土遺物から７世紀後半～８世紀前半である。

その他の出土遺物（第36図242～244）

242・243はＳＫ79から出土した須恵器で、242はかえりを有し、宝珠つまみが付く蓋で、７世紀中葉、美濃須衛産である。243は無台杯である。244はＰ７から出土した須恵器の無台杯の口縁部である。

（４）詳細な時期が不明の遺構と遺物

ＳＫ85（第13図・第36図245）

南区の南寄りに位置し、ＳＢ12、ＳＫ89を切る。平面形はややいびつな楕円形を呈す。主軸を南北にとり、規模は長径1.56m、短径0.84mを測る。

遺物は40点出土しており、土師器が主体を占める。この中から土製品１点を実測した。245は用途不明の土製品である。剥離痕から図上の下に２本、脚のようなものが延びる様であり３つ又のものになる可能性がある。また、図上の下の方に延びている部分の下側にも剥離痕が見られる。立たせるために支えたものが付いていたのであろうか。小片であるが伊勢型甕の破片があったため、本遺構を２期であると判断した。

Ｐ69（第16図）

南区の南側のやや東に位置し、撹乱、ＳＤ３、Ｐ６に切られる。平面形は他の遺構で壊されているため全体は不明であるが、円形を呈すものと考えられる。規模は長径1.18m、短径0.78mを測る。

遺物は土師器の破片23点、須恵器の破片３点が出土しているが、実測できるものはなかった。須恵器が出土していることから２期と推定した。

その他の出土遺物（第36図246～251）

246はＳＫ60から出土した須恵器の蓋、247はＳＫ62から出土した須恵器の無台杯の口縁部である。248はＳＤ10から出土している砥石で、使用痕は１面のみで確認できる。249はＰ33出土の土師器の有段高杯である。杯の部分だけ残存しており、外面に縦方向のミガキが施され、内面の口縁部から胴部の中くらいまでに櫛描直線文が施文される。250はＰ63出土の焼塩土器、美濃式１類のものである。251はＰ65出土の鉢形の土師器で、内外面が赤彩されている。

（５）ＳＢ14周辺の出土遺物について

ＳＢ14からはミニチュア土器（144）、丸玉（145）と特異な遺物が出土している。また、ＳＢ14を切っているＳＫ64からは耳形を呈する不明土製品（163）、切り合いは無いが隣接するＳＫ85から不明土製品（245）がある。周辺の包含層からも特異な土製品が多く見られる。グリットＧ３からは163と同じ形をした土製品（573）と筒状のものになると思われる不明土製品（567）、グリットＨ４からは円形の土板の側面に線刻が施される不明土製品（571）、グリットＩ３からは土製の勾玉（570）が出土している。このようにＳＢ14周辺には用途不明な土製品が多く出土しており、祭祀に関係する特殊な場があった可能性があるといえる。

第３節　３期の遺構と遺物

３期の状況はあまり明確でないが、７基の土坑が確認された。時期が確定できる遺構は、灰釉陶器Ⅶ期（大原２号窯式～虎渓山１号窯式）が出土する10世紀頃に集中し、これらの遺構と形状等が似るもの１基からは尾張型山茶碗（４型式）が出土している。３期の年代観は、10～13世紀初頭である。

ＳＫ４（第19図・第36図252～254）

南区の南側の西寄りに位置する。ＳＫ30、ＳＫ39を切る。平面形は方形を呈し、規模は長辺1.51m、短辺1.86mを測る。断面形状は箱型となり、埋土は砂質である。

遺物は139点出土しており、この中から灰釉陶器２点、山茶碗１点を実測した。252・253は灰釉陶器で、252は碗Ａの底部、253は稜皿の口縁部である。254は尾張型山茶碗４型式の碗である。本遺構の築造時期は出土遺物から12世紀前半から中頃と考えられる。

ＳＫ６（第19図）

南区の南側の西寄りに位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長径1.52m、短径0.69mを測る。断面形状は箱型となり、埋土は砂質である。

遺物は26点出土しているが、実測できる遺物はなかった。土師器皿のM類が出土していることから本遺構が３期に属するものであると判断した。

ＳＫ23（第19図・第36図255～258）

南区の中央の西寄りに位置する。平面形は不整方形を呈し、規模は長軸1.43m、短軸1.18mを測る。断面の形状は断面の形状は箱型であるが、南側の一部がオーバーハングする。

遺物は123点出土しており、土師器が主体を占める。この中から灰釉陶器１点、須恵器３点を実測した。255は灰釉陶器の碗Ａの口縁部である。256～258は須恵器で、256は高杯か甕の口縁部、257は鉢の胴部、258は甕で、肩部に斜め方向の櫛描き列点文が施文される。本遺構の築造時期は出土遺物から10世紀前半と考えられる。

ＳＫ39（第20図・第36図259、260）

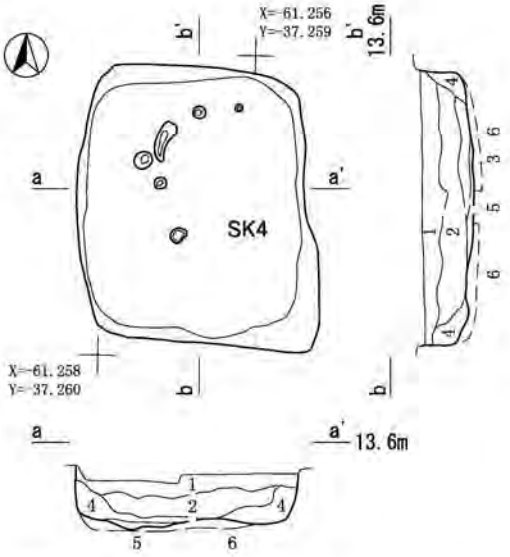
南区の南側の西寄りに位置する。ＳＫ４、ＳＫ33に切られる。平面形は楕円形で、短径1.14mを測る。

遺物は22点出土しており、259は灰釉陶器の碗Ａ、260は砥石で、使用痕は２面確認できる。時期は10世紀と考えられる。

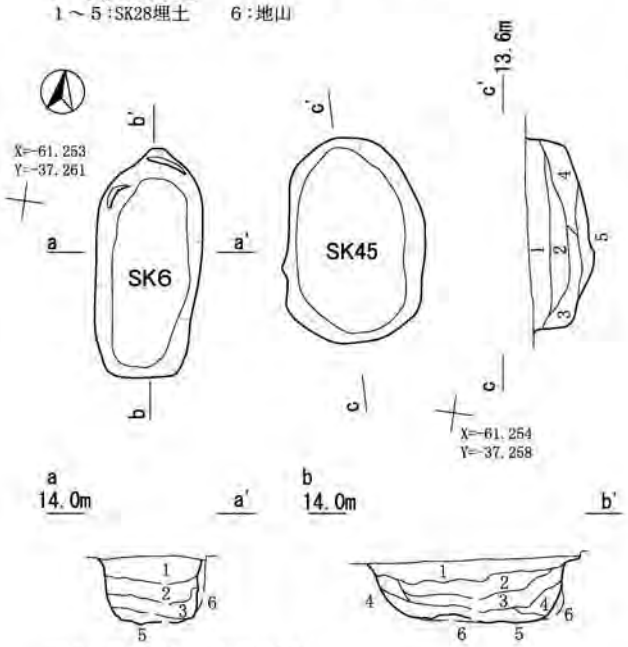
ＳＫ45（第19図）

南区の南側の西寄りに位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長径1.36m、短径0.91mを測る。断面の形状は箱型である。ＳＫ６と並んで位置する。

遺物は63点出土しているが、実測できる遺物はなかった。灰釉陶器の破片が出土してい

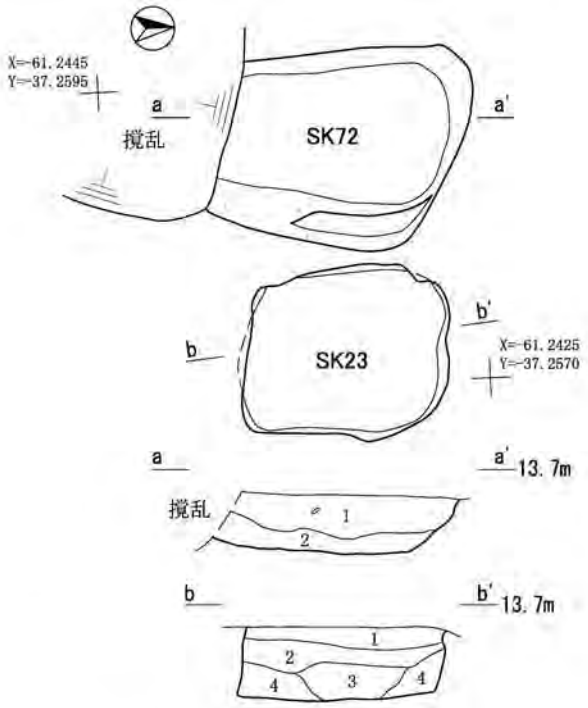


SK28土層
1　暗褐色土（砂質、やや締まる、やや粘性あり、
　　橙白色粒子若干含む）
2　暗褐色土（砂質、１層に比べやや締まり弱い、
　　やや粘性あり、橙白色粒子若干含む）
3　暗茶褐色土（締る、粘性弱い、橙色粒子・炭含む）
4　茶灰色土（砂質、締まる、粘性弱い）
5　灰色土（締まる、粘性弱い、鉄分を含む）
6　黄灰色砂質土
１～５:SK28埋土　　６:地山



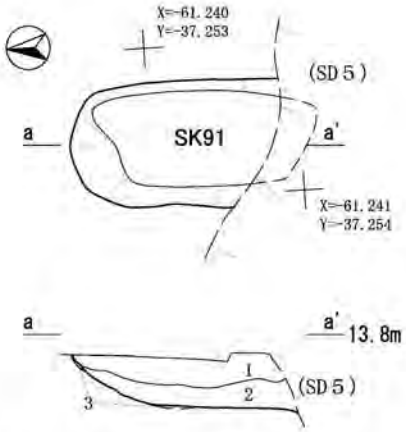
SK６土層（a-a'・b-b'ライン）
1　褐灰色土（砂質、締まる、粘性弱い、マンガン粒含む）
2　淡褐灰色土（やや締まり弱い、やや粘性あり）
3　暗褐灰色土（砂質、やや締まり弱い、やや粘性あり）
4　黄灰色土（砂質、やや締まり弱い、やや粘性あり）
5　灰褐色土（締りやや弱い、やや粘性あり、橙色粒子
　　・黄褐色ブロック若干含む）
6　灰黄色砂質土
１～５:SK６埋土　　６:地山

SK45土層（c-c'ライン）
1　茶褐灰色土（固く締まる、やや粘性あり、マンガン粒含む）
2　褐茶灰色土（やや締まり弱い、やや粘性あり）
3　褐灰色土（やや締まり弱い、やや粘性あり）
4　茶灰色土（やや砂質、締まり弱い、やや粘性あり）
5　灰茶色土（やや砂質、締まり弱い、粘土ブロック若干含む）



SK72土層（a-a'ライン）
1　黄茶灰色土（やや締まりあり、粘性弱い、炭若干含む）
2　青灰色シルト（締まり弱い、粘性ややあり、
　　粘土がブロックに含む、還元化している）

SK23土層（b-b'ライン）
1　茶灰色土（締まる、粘性弱い、灰黄色土ブロック含む）
2　褐灰色土（やや締まる、粘性あり、マンガン粒含む）
3　褐灰色土（やや締まる、黄色砂質土ブロック含む）
4　茶灰色土（やや砂質、やや締まり弱い、粘性あり）



SK91土層
1　茶灰色土（やや締まる、やや粘性あり、砂礫・炭若干含む）
2　青灰粘質土（砂質、やや締まり弱い）
3　淡黄色土

0　　2m

第19図　ＳＫ４・６・23・45・72・91実測図

ることから本遺構が３期に属するものであると判断した。

ＳＫ72（第19図）

南区の中央の西寄りに位置し、撹乱に切られる。平面形は撹乱で壊されているが、残った部分から楕円形を呈すものと考えられる。規模は現状で長辺1.62m、短辺1.34mを測る。断面の形状は箱型で、埋土に若干の炭を含む。また、下層では埋土が還元化しており、青灰色になっていた。

遺物は42点出土しているが、実測できる遺物はなかった。灰釉陶器の破片が出土していることから本遺構が３期に属するものであると判断した。

ＳＫ75（第13図）

南区のほぼ中央に位置し、ＳＢ14、ＳＫ119を切り、ＳＫ64、ＳＫ69、Ｐ32に切られる。平面形は他の遺構により壊されているが、不整円形を呈す。規模は現状で長径1.24m、短径1.22mを測る。南西側にテラス状のものがある。

遺物は56点出土している。出土遺物の中には灰釉陶器の破片が入っており、本遺構を切っているＳＫ69（７世紀後半）と切り合い関係が矛盾する。ＳＫ75から出土している灰釉陶器は２点のみであり、混入の可能性もある。

ＳＫ90（別添図１）

南区北西寄りに位置し、南半がＳＤ５に切られ、Ｐ64を切る。Ｐ64出土遺物に灰釉陶器があるため、３期以降の遺構である。

小結

当期で報告した遺構のうち、第19図に掲載しているＳＫ４・ＳＫ６・ＳＫ23・ＳＫ45・ＳＫ72には似通った点が見られる。平面形状が楕円形もしくは隅丸方形で、断面形状が深い箱形を呈し、埋土は砂質土が多いことである。また、出土遺物は小片が多い。構築時期は、大部分が10世紀と見られるが、一部13世紀初頭まで下るものもあるようである。

第４節　４期の遺構と遺物

この時期の遺構は、古瀬戸後Ⅳ期古段階・東濃型山茶碗脇之島３号窯式・土師器皿Ｃ１類などを出土する15世紀中葉頃に集中する。通常岐阜市内では、３期と４期の間の時期のものとして、尾張型山茶碗（４～６型式）・東濃型山茶碗（白土原～大洞東窯式）が多く出土するが、今回の調査区では極めて希少である。

（１）南区検出の遺構と遺物

土坑群１（第20図・第36・37図261～283）

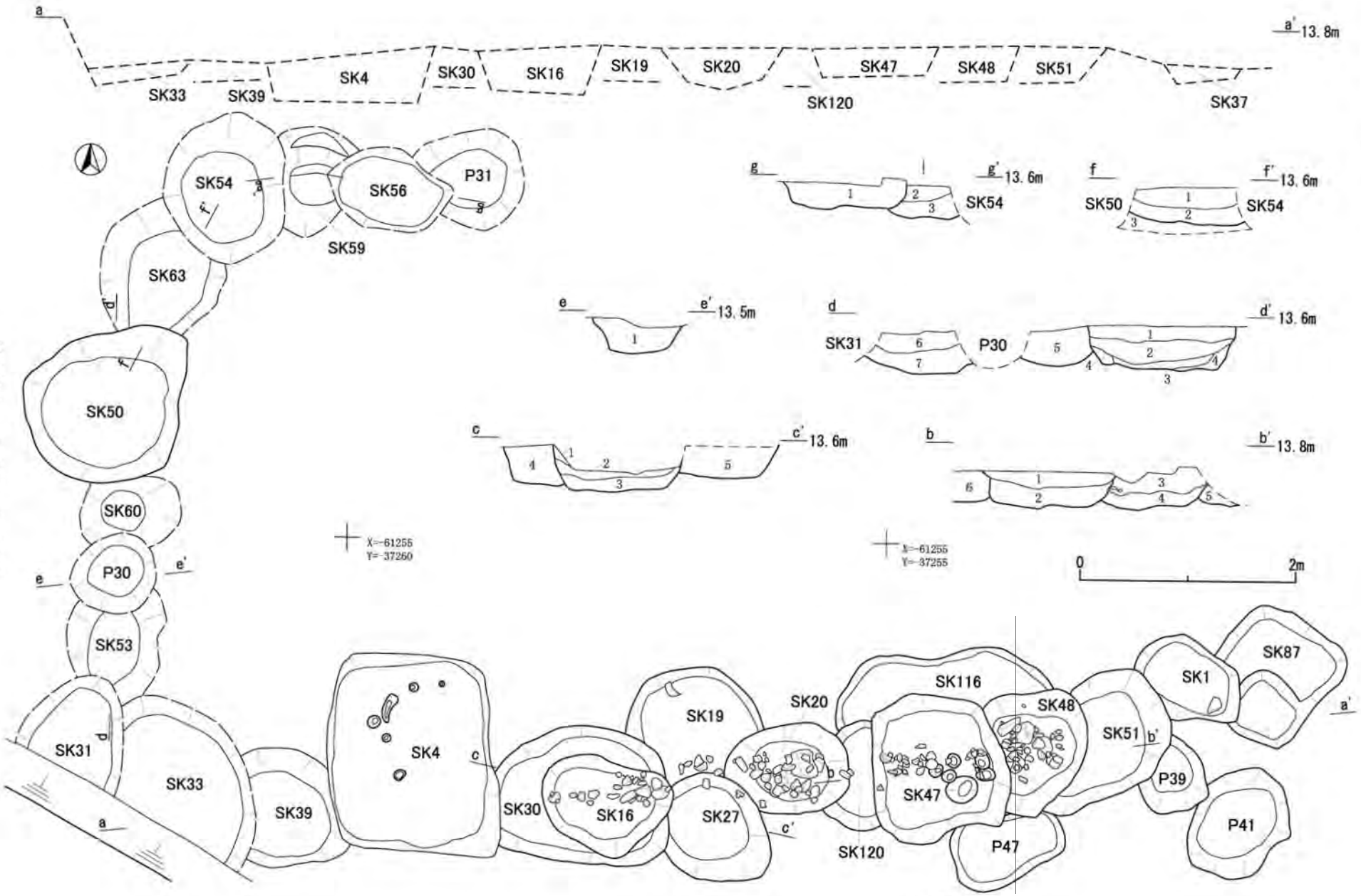
南区の南側の中央寄りに位置する。土坑が23基（ＳＫ１、３、16、20、21、27、30、31、33、37、39、47、48、50、51、53、54、56、59、60、63、116、120）、ピットが５基（Ｐ30、31、39、41、47）の計27基の遺構が連続して築かれている様に見えるが、出土遺物を検討すると、南辺のＳＫ４（３期）を境に東の直線状のものと、西の「コ」字状のものに分けられる。なお、ＳＫ３はＳＫ47とＳＫ48の上に検出された遺構であるが、煩雑になるため図を省略した。

東の直線状のもの（ＳＫ30～ＳＫ87）は、長さ約８ｍを測り、出土遺物と切り合い関係からほぼ全てが４期の遺構群といえる。土坑中から出土した礫や遺物の配置を見ると、遺構を超えて、ほぼ直線的に出土しており、また遺構の底のレベルが近似している。これらのことから、一連の遺構群は、溝状のひとつの遺構の埋土の差を誤認して検出した可能性が高いと思われる。この遺構群の東方向の延長には、ＳＤ４があり、位置・方向が合致することも、この仮説を補強するものである。この場合、ＳＫ４との切り合い関係に不整合が生じるが、現地での確認が十分でなかったと見られる。

一方の西の遺構群は、直線的に連続して掘削されているのは同様であるが、４期の遺物を出土したのはＳＫ50のみであり、状況はよく分からない。ＳＫ39との切り合い関係から４期の遺構と見られるが、そもそも一連の遺構群と認識して良いのか、判断できない。

遺物は、東の直線的な遺構群から集中して出土しており、この中から19点を実測した。261～263はＳＫ16から出土したものである。261は東濃型山茶碗の底部で、丸石３号窯式に比定される。263は鉄滓である。図上下側は弧を描くように残っており、これは碗など弧状の底で固まったものであろう。264～266はＳＫ19から出土したものである。当期の遺物としては、264の尾張型山茶碗の碗があり、６型式に比定される。267～271はＳＫ20から出土したものである。267は古瀬戸後Ⅳ期古段階の擂鉢、268はＭ３類の土師器皿、269は尾張型山茶碗５型式の碗、270は平瓦、271は砥石である。273～280はＳＫ47から出土したものである。273は古瀬戸後Ⅳ期の擂鉢である。274・275は灰釉陶器で、274は段皿か稜皿、275は椀Ｂである。276～279は須恵器、280は砥石である。281はＳＫ50から出土した東濃型山茶碗の碗で、脇之島３号窯式と見られる。282、283はＳＫ３から出土したもので、両者とも古瀬戸後Ⅳ期の擂鉢である。

土坑群１の時期は、一連の遺構と考えた場合、古瀬戸後Ⅳ期古段階・脇之島３号窯式の時期と推測される。



土坑群１

第20図　土坑群１実測図

SK47・SK48・SK51・SK120土層(b-b'ライン)
1　暗茶灰色土（締まる、粘性弱い、炭・橙色粒子少し含む）
2　灰茶褐色土（締まる、粘性弱い、炭若干含む）
3　暗褐色土（締まる、炭若干含む）
4　褐茶色土（締まる、粘性弱い）
5　灰褐色土（やや締まる）
6　茶灰色土（やや締まる）
1・2:SK47埋土　　3・4:SK48埋土　　5:SK51埋土
6:SK120埋土

SK50・SK53・SK60土層(d-d'ライン)
1　茶褐色土（締まる、粘性弱い）
2　淡茶灰色土（締まる、粘性弱い、中央部分は還元化し、青灰色になっている）
3　青灰色土（砂質、締まり弱い、還元化している）
4　褐黄灰色土（やや砂質、締まり弱い、やや粘性あり、一部還元化している）
5　灰茶色土（締まる、黄灰色砂ブロックを下方に多く含む）
6　茶灰色土（やや締まり弱い、やや粘性あり、橙色粒子若干含む）
7　淡黄茶灰色土（砂質土、やや締まり弱い、粘性弱い、灰色土ブロック若干含む）
1～4:SK50埋土　　5:SK60埋土　　6～7:SK53埋土

SK16・SK27・SK30土層(c-c'ライン)
1　茶灰色土（やや締まる）
2　茶褐灰色土（砂質、やや締まる）
3　淡茶灰色土（砂質、やや締まる）
4　暗灰茶色土（炭若干含む）
5　暗茶灰色土
1～3:SK16埋土　　4:SK30埋土
5:SK27埋土

P30土層(e-e'ライン)
1　褐灰色土（締まる、やや粘性あり、橙色粒子若干含む）

SK63土層(f-f'ライン)
1　灰褐色土（締まる、粘性弱い、黄褐色砂ブロック若干含む）
2　灰褐色土（１層に比べ締まり弱い、粘性強い、炭・黄色褐色砂若干含む）
3　黄褐色砂
1～2:SK63埋土　　3:地山

SK56・SK59土層(g-g'ライン)
1　暗褐灰色土（やや砂質、炭微量に含む、橙色粒子若干含む）
2　暗茶色土（やや砂質締まる、粘性弱い）
3　茶灰色土（やや締まり弱い、粘性弱い、炭微量に含む）
1:SK56　　2～3:SK59

ＳＤ４（第21図）

南区の南側の東に位置する。ＳＢ13、ＳＫ10、Ｐ43を切る。流路を東西方向にとり、西端は途切れているが、東端は調査区外に延びる。このため全長は不明であるが、現状で長さ1.89m、幅0.65mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ約0.19mである。

遺物は10点出土しているが、実測できる遺物はなかった。本遺構の築造時期は、東濃型山茶碗の破片が出土していることと、土坑群１との位置関係から、４期に属するものと推測する。

土坑群２（第21図・第37図284～296）

南区の南側に位置するＳＫ58・ＳＫ５・ＳＫ32・ＳＫ25である。切り合い関係からは、西から東へ次々と掘っては埋めている状況があるが、出土遺物から時期差は見られない。土坑群１同様、ひとつの溝状遺構である可能性が高い。

ＳＫ５は南区の南側の東寄りに位置し、ＳＫ32、ＳＤ５に切られ、ＳＫ58を切る。平面形はややいびつな円形を呈す。規模は長径1.4m、短径1.38mを測る。

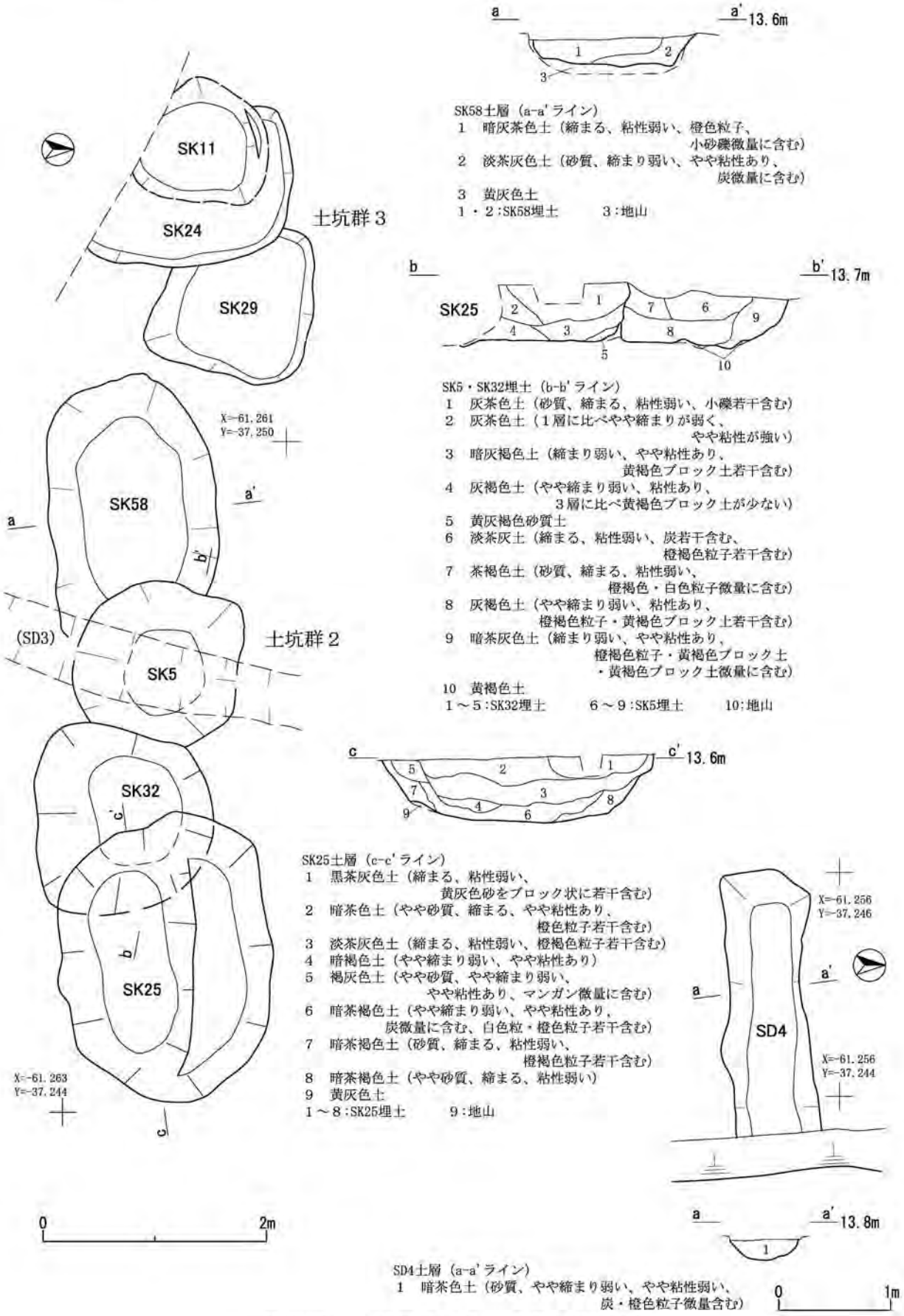
遺物は16点出土しているが、実測できる遺物はなかった。須恵器、土師器しか出土していないが、ＳＫ32・58との切り合い関係から、築造時期は４期に属する。

ＳＫ25は南区の南側の東寄り位置し、ＳＫ32を切る。平面形は不整な円形を呈す。規模は長径2.63m、短径1.95mを測る。

遺物は192点出土しており、この中から山茶碗１点、瀬戸美濃陶器１点、土師器皿１点などを実測した。284は瀬戸美濃産陶器で、古瀬戸後Ⅳ期の擂鉢である。285は東濃型山茶碗の脇之島３号窯式のもので、286はＣ１類の土師器皿である。287～289は須恵器、290は土師器である。本遺構の築造時期は出土遺物から４期のものである。

ＳＫ32は南区の南側の東寄りに位置し、ＳＫ25に切られ、ＳＫ５を切る。平面形は他の遺構によって壊されているが、円形を呈す。規模は現状で長径1.57m、短径1.07mを測る。北側にテラス状のものがある。

遺物は82点出土しており、この中から山茶碗１点、土師器皿２点を実測した。291は東



第21図　土坑群２・３、ＳＤ４実測図

濃型山茶碗の皿で、大畑大洞４号窯式古段階のものである。内面に墨とみられる痕跡が観察できる。292はＣ１類の土師器皿、293はＣ２類の土師器皿である。本遺構の築造時期は出土遺物から４期である。

ＳＫ58は南区の南側の東寄り側に位置し、ＳＫ70を切り、ＳＫ５に切られる。平面形は一部、壊されているが、楕円形を呈す。規模は現状で長径1.86m、短径1.51mを測る。

遺物は77点出土しており、この中から山茶碗１点、土師器皿２点を実測した。294は東濃型山茶碗の碗の口縁部で、脇之島３号窯式のものである。295・296はＣ１類の土師器皿である。本遺構の築造時期は出土遺物から４期である。

土坑群３

ＳＫ11・24・29（第21図・第37図297～299）

南区の南側の西端に位置する。切り合い関係からＳＫ29→24→11と推移するが、ＳＫ29から東濃型山茶碗脇之島３号窯式（299）、ＳＫ24から土師器皿Ｃ１類（297）が出土しており、ほぼ同時期に造られた可能性が高い。ＳＫ11からは古瀬戸・大窯の陶器片が出土していることから、３基の遺構は連続して掘られたか、あるいは一連の遺構であると見られる。ＳＫ５・25・32・58の土坑群とは直線状に並び、方向もほぼ同じであることから、土坑群１・２と同様、溝であった可能性もある。

小結

土坑群１～３及びＳＤ４は南区の南側という近接した位置で検出した遺構である。土坑群１～３が溝状遺構である可能性は既に指摘したところであるが、注目すべきはその配置と方向である。これらは全て同じ方向で、真東西より東が約５度北に傾く。概ね磁北を用いた場合の東西である。また土坑群１東半とＳＤ４は南辺が揃っているようである。

土坑群１東半は、西端がＳＫ30、東端はＳＫ87と推測される。ＳＫ30より西の遺構であるＳＫ４・ＳＫ39・ＳＫ33・ＳＫ31やそれらが属するＩ１・Ｉ０グリッドから山茶碗や古瀬戸の出土が無いことから、西端はＳＫ30で良いようである。また同様に東端についても、ＳＫ87の東のＳＢ５・ＳＫ18・Ｐ16やＩ５グリッドから当期の遺物は出土していない。ただＳＫ107・Ｊ５グリッドからそれぞれ東濃型山茶碗が１点出土しているが、これはＳＤ４の端部がわずかに西方向へ延びる可能性を示唆するものである。土坑群２の東であるＳＫ17・Ｐ42・ＳＫ12からも当期の遺物が出土していないことから、ＳＫ25を東端とするものと捉えることができる。土坑群２と土坑群３は、わずかに位置にずれが生じており、関連が不明である。

以上のことから、それぞれの規模は、土坑群１東半は長さ約10.5m、幅約1.8m、ＳＤ４は長さ3.0m以上、幅0.9m、土坑群２は長さ約8.5m、幅約1.8mを測ると推測できる。また土坑群１とＳＤ４の間は約6.0mの空白地帯があり、ＳＤ４南端と土坑群２の北端の距離は約6.0mである。

このことは図面と遺物の整理過程で推測したもので、現地での検証作業は行えていない。よって可能性の指摘に留まるものである。

（２）北区ⅳ面検出の遺構と遺物

北区ⅳ面のベースとなるⅳ層中からは、古瀬戸後Ⅳ期古段階、土師器皿Ｃ１類が出土している。またⅳ面で検出された遺構からは、東濃型山茶碗脇之島３号窯式、土師器皿Ｃ１類が出土する。全ての遺構から時期が判明する遺物の出土があったわけではないが、北ⅳ面で確認できる遺構は、南区４期の遺構と同時期である可能性が極めて高い。

ＳＫ129（第22図・第37図300）

北区の南側のほぼ中央に位置し、Ｐ235を切る。規模は長辺0.91m、短辺0.65mを測る。この遺構の上層（１～４層）の埋土には炭・煤ブロック、焼土塊が多く混じり、５層は被熱している。また、遺構の側面から底面にかけては硬化し、特に側面はより硬くなっている。底部にはピットなどの人為的な痕跡を確認することはできなかった。出土遺物は少なく、小片が多いのもこの遺構の特徴といえる。上部構造などの復元をする根拠を得ることはできなかったが、炭・煤ブロック、焼土塊が混じり、被熱し、硬化している部分が確認できたことから、ここで何かを燃やしていたと考えられるが、明確な性格は不明である。

遺物は16点出土し、大半が土師器であった。この中から山茶碗１点を実測した。300は東濃型山茶碗で脇之島３号窯式に比定できる。

本遺構の築造時期は出土遺物と北区ⅳ層上面で検出できたことから４期のものと推測される。

ＳＫ133（第22図・第37図301）

北区の北側の中央部分に位置する。平面形は楕円形を呈す。規模は長径0.90m、短径0.60mを測る。埋土に炭・焼土を微量に含む。

出土遺物の総数は35点で、古瀬戸後期の瀬戸美濃産陶器、土師器皿が出土している。301は土師器皿Ｃ２類である。

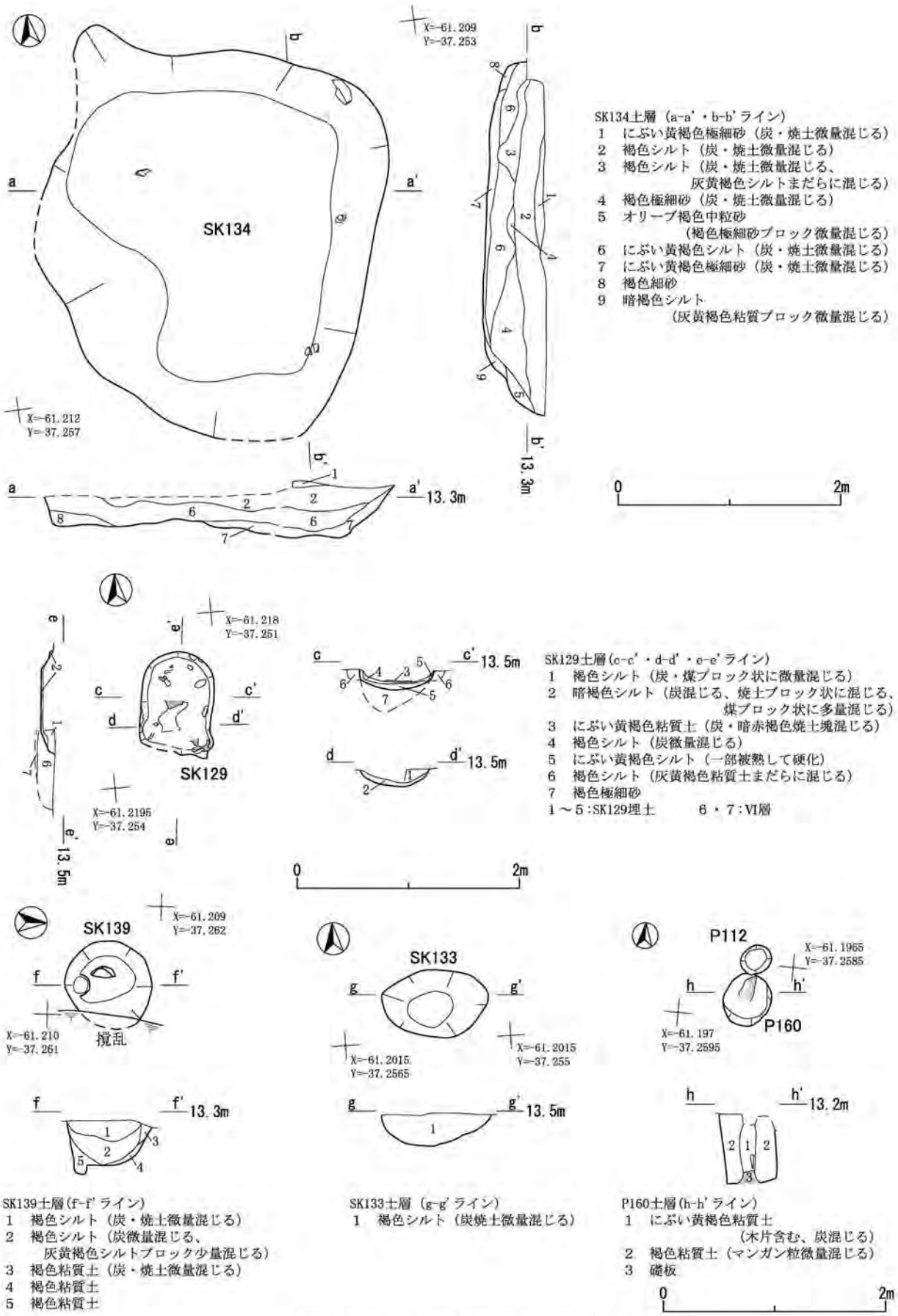
本遺構の築造時期は北区ⅳ層上面で検出できたことから４期のものと推測される。

ＳＫ134（第22図・第37図302～306）

北区のほぼ中央に位置する。大形の土坑で、断面形は皿状を呈する。撹乱のため平面形は不整形に残存するが、本来は正方形に近い隅丸方形の竪穴状遺構と見られる。規模は長辺4.17m、短辺3.40mを測る。埋土に炭・焼土を微量に含む。

遺物は161点出土しており、この中から山茶碗１点、瀬戸美濃産陶器３点、土師器皿１点を実測した。302～304は古瀬戸製品である。302は後Ⅰ期の平碗、303は後Ⅲ期の卸皿、304は後Ⅲ～Ⅳ期の平碗である。305は東濃型山茶碗の碗であるが高台が無い。よって脇之島３号窯式に分類したが、底部が広く、通常のものと大きく器形が異なる。306は土師器皿のＣ１類で、口径10cm程度のやや大型の法量である。

本遺構の築造時期は出土遺物と北区ⅳ層上面で検出できたことから４期のものである。



第22図　北区ⅳ面検出遺構実測図

ＳＫ139（第22図・第37図307、308）

北区の中央の西寄りに位置し、ＳＤ２、撹乱に切られている。平面形は円形を呈す。規模は現状で長径0.82m、短径0.79mを測る。また、埋土には炭・焼土を微量に含む。

遺物は32点出土しており、この中から土師器皿１点、鉄製品１点を実測した。307はＣ１類の土師器皿である。308は残っている部分が少なく、全体の様子を知ることはできないが、断面形が三角形をしているため刀と判断した。断面を肉眼観察したところ、刀身の周囲に鞘らしきものが見られたため、分析に依頼した。その結果、鞘と断定するには至らなかったが、布などの繊維質のものを巻いていた可能性を指摘された（第５章第５節参照）。

本遺構の築造時期は出土遺物と北区ⅳ層上面で検出できたことから４期のものと推測できる。

Ｐ160（第22図・第37図309）

北区の北側の西寄りに位置し、ＳＤ11を切り、Ｐ112に切られる。平面形は円形を呈す。規模は長径0.46m、短径0.44mを測る。掘方底部に、上面が平坦な長辺35cm、短辺17cm、厚さ9.5cmの木のブロックが置かれていた。柱を支えるものと見られ、半截したピットの断面にも、柱の痕跡（１層）を確認できた。柱穴であることは間違いないが、対になるピットは確認できず、建物などは検出されなかった。

出土遺物は木製品（309）１点のみである。図上の上の中心部はやや凹んでおり、柱を乗せるために凹ませたものと考えられる。腐食のため、加工痕は確認することができなかった。

本遺構の築造時期は、北区ⅳ層上面で検出できたことから４期と推測できる。

その他の出土遺物（第37図311、312）

311はＰ135から出土した中国製の白磁で、碗と見られる。312はＰ144出土の土師器で、口縁部には指圧痕があり、凹凸が激しい。

北ⅳ層出土遺物（第40図431～436）

431は尾張型山茶碗の碗である。432はＣ１類の土師器皿、433は古瀬戸後Ⅳ期古段階の卸皿、434は灰釉陶器の段皿の口縁部である。石製品が２点出土しており、435はチャート製の石鏃、436は砥石である。

（３）詳細な時期が不明の遺構と遺物

ＳＫ91（第19図）

南区の北側の中央に位置し、ＳＤ５に切られる。平面形は楕円形を呈すものと考えられる。規模は現状で長径1.58m、短径0.81mを測る。埋土に若干の砂礫と炭を含む。

遺物は85点出土しているが、実測できる遺物はなかった。東濃型山茶碗の破片が出土していることから本遺構が４期に属するものであると判断した。

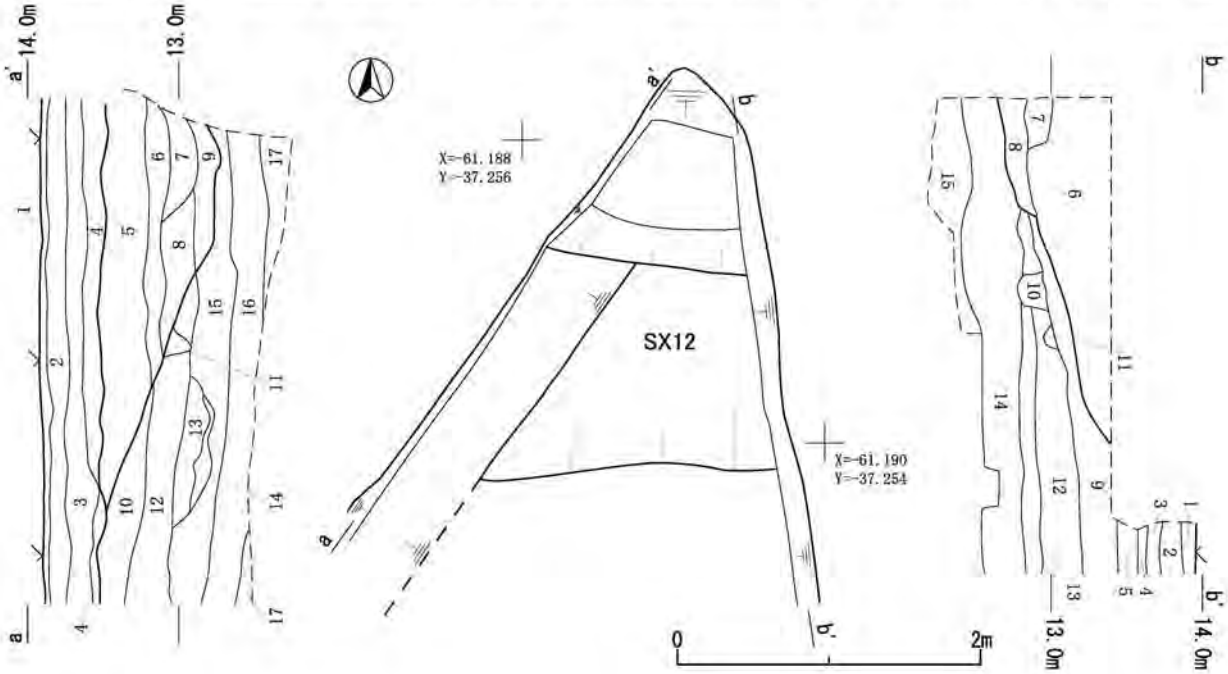
第５節　５期の遺構と遺物

（１）北iii面検出遺構（５−１期）

北iii面のベースである北iii層からは古瀬戸後Ⅳ期新、土師器皿Ｂ１類・Ｂ２−ａ類・Ｂ２−ｂ類が出土している。北iii面検出遺構・北ii層から出土する遺物も同様であることから、北iii面検出遺構は戦国期のものといえる。北iii層は北区北端のみの確認である。北区近世以降の水田によって削平されているため、本来の範囲は不明である。

ＳＸ12（第23図・第38図314〜316）

北区の北端に位置する。大半が調査区外になるため、平面形は不明である。規模は現状で長辺2.62m、短辺2.24mを測る。断面形状は遺構端部から緩やかに下っていき、底の近



a−a'ライン
1　暗褐色シルト
2　暗褐色極細砂（炭微量に混じる）
3　にぶい黄褐色シルト（炭・焼土微量混じる）
4　暗褐色シルト（炭・焼土混じる）
5　にぶい黄褐色粘質土（炭・焼土・マンガン粒微量混じる）
6　暗褐色粘質土（マンガン粒少量混じる、炭微量混じる）
7　褐色シルト（灰黄褐色シルトブロック微量混じる）
8　褐色粘質土（マンガン粒微量混じる、褐色極細砂ブロック状に少量混じる）
9　暗褐色粘質土（灰黄褐色粘質土まだらに混じる、マンガン粒微量混じる）
10　褐色シルト（締まり強い、炭・焼土微量混じる）
11　暗褐色粘質土
12　褐色粘質土（締まり強い、炭・焼土微量混じる）
13　褐色粘質土
14　にぶい黄褐色粘質土（マンガン粒微量混じる）
15　褐色シルト（マンガン粒微量混じる）
16　にぶい黄褐色粘質土（灰黄褐色粘質土まだらに混じる）
17　にぶい黄褐色粘質土
1〜3：Ⅰ層　4：Ⅳ層　5〜9：SX12埋土
10：Ⅴ層　11：遺構？　12：Ⅵ層
13・14：遺構？　15：Ⅶ層　16：地山

b−b'ライン
1　暗褐色シルト
2　暗褐色極細砂（炭微量混じる）
3　にぶい黄褐色シルト（炭・焼土微量混じる）
4　暗褐色シルト（炭・焼土混じる）
5　褐色シルト（締まり強い、炭・焼土微量混じる）
6　にぶい黄褐色粘質土（マグネシウム粒・炭・焼土微量混じる）
7　褐色シルト（灰黄褐色シルトブロック微量混じる）
8　暗褐色粘質土（マグネシウム粒微量混じる、灰黄褐色粘質土まだらに混じる）
9　褐色粘質土（締まる、炭・焼土微量混じる）
10　にぶい黄褐色粘質土（炭・焼土微量混じる）
11　褐色粘質土（灰黄褐色シルトブロック微量混じる）
12　褐色シルト（マグネシウム粒・灰黄褐色シルトブロック微量混じる、褐色極細砂まだらに混じる）
13　暗褐色粘質土（炭微量混じる）
14　にぶい黄褐色粘質土（灰黄褐色粘質土まだらに混じる）
15　にぶい黄褐色粘質土
1〜3：Ⅰ層　4：Ⅳ層　5：Ⅴ層
6〜8：SX12　9：Ⅵ層　10・11：遺構？
12：Ⅶ層　13：SB18　14：Ⅷ層
15：地山

第23図　ＳＸ12実測図

くで若干低くなり、二段落ちとなる。調査時は戦国期の溝と考えていたが、調査後に北西側で工事立会を行った際、対岸の壁は確認できなかった。溝ではなく、池のような大きな穴または落ち込みであると考えている。

遺物は52点出土しており、この中から瀬戸美濃産陶器１点、土師器皿２点を実測した。314・316は土師器皿で、314はＭ４類、316はＣ１類である。315は古瀬戸後Ⅳ期の釜で、肩部に剥離痕があり、把手が付いていたと考えられる。

北区ⅲ層上面で検出できたことから、本遺構の築造時期は５－１期である。

ＳＢ15（第24図・第38図317、318）

北区の北側に位置する掘立柱建物である。確認できる範囲では、建物の大きさは東西4.20ｍ、南北6.59ｍを測る。主柱間は東西約3.80ｍ、南北約2.90ｍを基本とし、南辺のみ柱と柱の中間に小さい柱（ＳＢ15-５）を据えていたようで、北辺・中央には見られない。北辺の中央にあたる位置にピットがあるが、これは北ⅱ層上面で検出されたもので、層位的に異なる。全ての掘方の底には扁平な川原石が置かれており、また断面では柱痕が確認できた。また、ＳＢ15の北半に炭・焼土層（北区ⅱ層）が広がる。ＳＢ15と焼土層の関係については後述する。

遺物は14点出土しており、この中から土師器皿１点、鉄製品１点を実測した。共にＳＢ15-１から出土している。317はＣ２類の土師器皿である。318は鉄釘で、建物に使用していたものと考えられる。

出土遺物と北区ⅱ層上面で検出できたことから、本遺構の築造時期は５－１期である。

ＳＫ130（第25図・第38図319～327）

北区の北側の中央部分に位置する。東西方向のサブトレンチ掘削中に遺構が確認できたため、東側の一部は検出することはできなかった。遺構の規模は現状で長径1.29ｍ、短径0.83ｍを測る。埋土全体に炭・焼土が混じっており、２層には被熱している河原石が含まれていた。河原石が西側に集中することから、西側から東側へと廃棄されたと推測される。

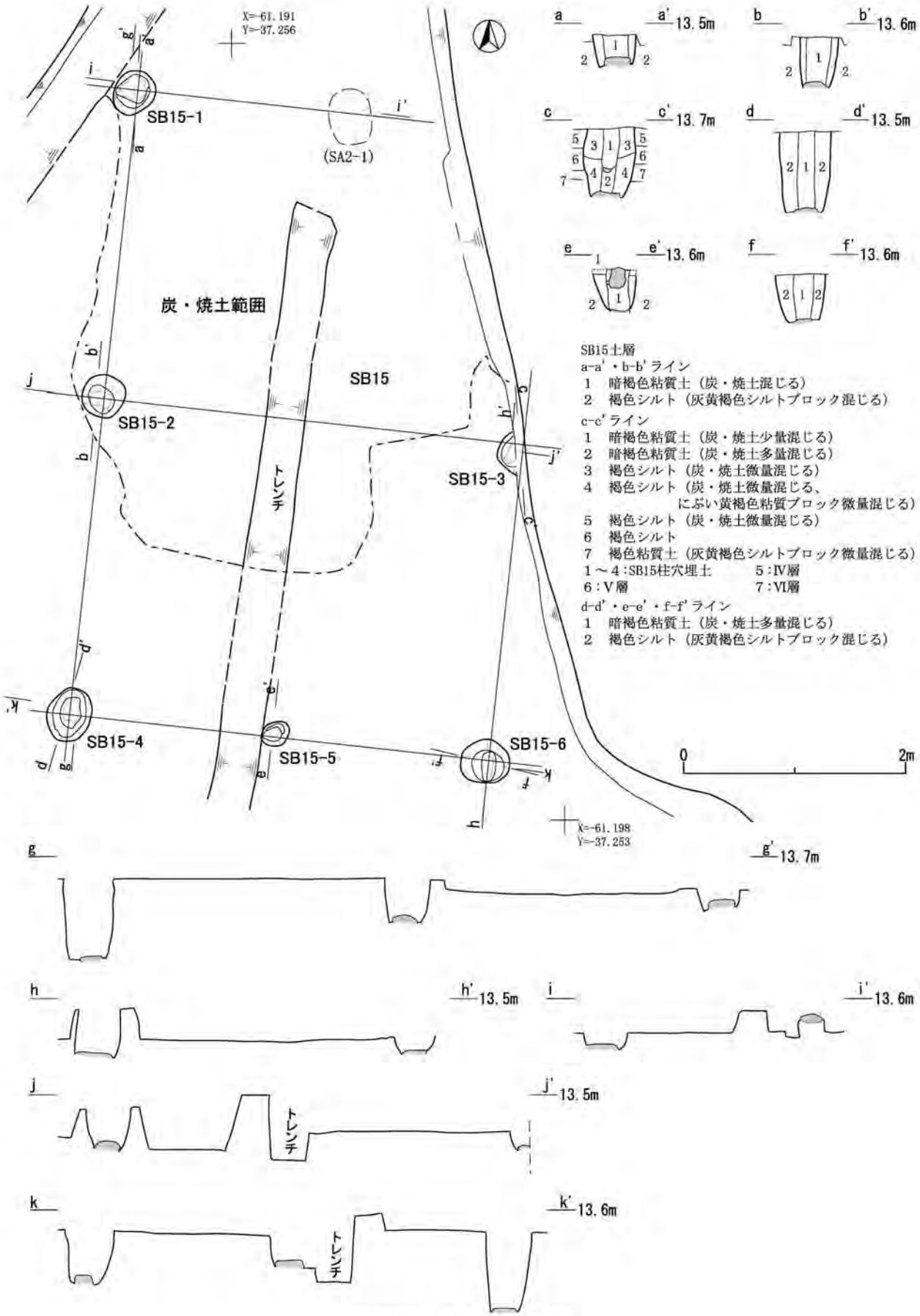
遺物は73点出土しており、この中から土師器皿６点、瀬戸美濃陶器３点を実測した。319～321は瀬戸美濃陶器で、319は碗か皿の口縁部、320と321は古瀬戸後Ⅳ期新段階の天目茶碗である。321は同じく北Ⅲ面で検出されたＰ105（別添図５）出土の破片と接合している。322～327は土師器皿で、322はＢ２－ａ類、口径16cm以上の大型品である。それ以外はＢ２－ｂ類である。324と325にはタール痕が見られる。

出土遺物と北区ⅱ層上面で検出できたことから、本遺構の築造時期は５－１期である。

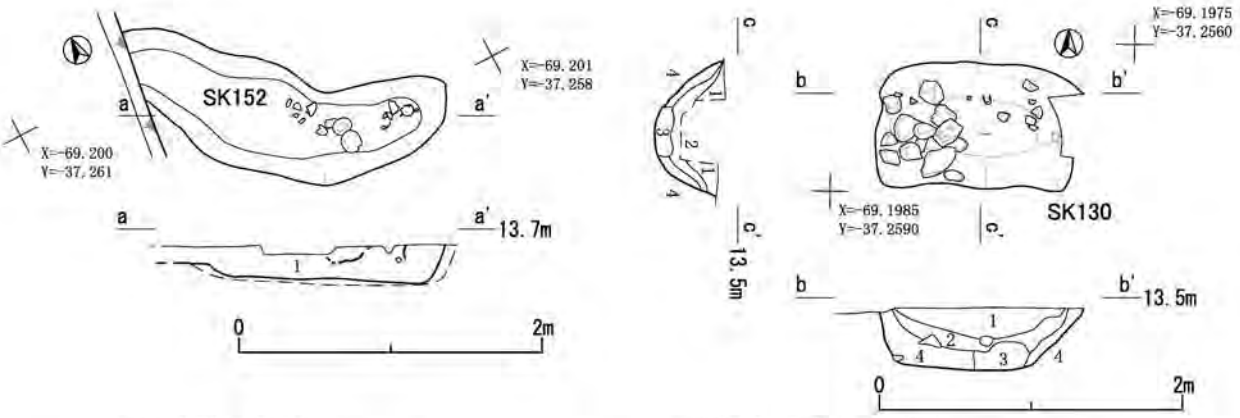
ＳＫ152（第25図・第38図328～339）

北区の北側の西寄りに位置する。平面形は西端が調査区外になるが、不整楕円形を呈す。規模は現状で長径2.06ｍ、短径0.73ｍを測る。埋土に炭・焼土を微量に含んでいる。

この遺構からは72点の遺物が出土し、その中で53点が土師器皿であった。実測遺物はすべて土師器皿で、328～330はＢ１類、330はＢ２－ｂ類の可能性もある。331～336はＢ２－



第24図　ＳＢ15実測図



SK152土層（a-a'ライン）
1　褐色シルト（炭・焼土微量混じる）

SK130土層（b-b'・c-c'ライン）
1　褐色シルト（炭・焼土ブロック状微量混じる）
2　暗褐色シルト（焼土ブロック状に混じる、炭ブロック状に少量混じる、礫混じる）
3　灰黄褐色粘質土（焼土・炭微量混じる）
4　にぶい黄褐色シルト（炭微量混じる）

第25図　ＳＫ130・152実測図

ａ類、337～339はＢ２－ｂ類である。313の外面底部に木目の圧痕が見られる。332の内面には鉄を主成分とする赤色の付着物が観察できる。

出土遺物と北区ⅲ層上面で検出できたことから、本遺構の築造時期は５－１期である。

整地層北ⅲ層（第40図437～469）

北ⅲ層の分布は、北区北端から約10mの範囲に限定される。北区は元来北下がりの傾斜を有する地形であったことは、第３章で述べたとおりで、北区南半が近世以降の遺構で削平されたことを考慮しても、北区北半のみの限られた範囲にしか分布しない土層と推測される。

北ⅲ層の直下の北ⅳ層は、包含される遺物と上面検出遺構の時期から、古瀬戸後Ⅳ期古段階に形成されたと見られる。一方、北ⅲ面検出遺構は古瀬戸後Ⅳ期新段階のもので、わずかな期間に北ⅲ層は形成されたと考えられる。鷺山地区での後Ⅳ期新段階は、広い範囲にわたって、大規模な土木工事を行う時期であり、土層に盛土状の堆積は観察できないものの、低地を埋め立て、屋敷地を造築した可能性が高いと考えられることから、北ⅲ層は人為的な整地層と捉えている。

北ⅲ層からは多くの遺物が出土し、その中から23点の実測を行った。土師器皿は19点実測し、その中ではＢ２－ｂ類が６点（可能性があるものを含めると８点）と主体を占める。457・458は中国製磁器で、458は南宋期の青磁碗、457は15～16Ｃの白磁皿である。瀬戸美濃陶器は７点実測した。459は古瀬戸後Ⅳ期新段階の香炉の口縁部から胴部にかけてのものである。460は壺の底部。467は古瀬戸後Ⅲ期の縁釉小皿の口縁部である。468は擂鉢で、円板状に２次加工されている。462は土師質の羽釜、465は土師質の焙烙である。469は碁石で、那智黒の可能性がある。452は近世の小碗（杯）で、混入と見られる。

（２）北区ⅱ面検出遺構（５－２期）

ＳＡ２（第26図）

北区の北側に位置する。南北方向の３つのピットから構成される。確認できる部分では長さ3.96m以上を測り、柱間約1.90～2.10mとなる。北端のＳＡ２－１のみ、掘方の底に川原石が設置されていた。上部構造は不明である。

遺物はＳＡ２－１から出土した土師器片１点のみであり、実測できる遺物はなかった。

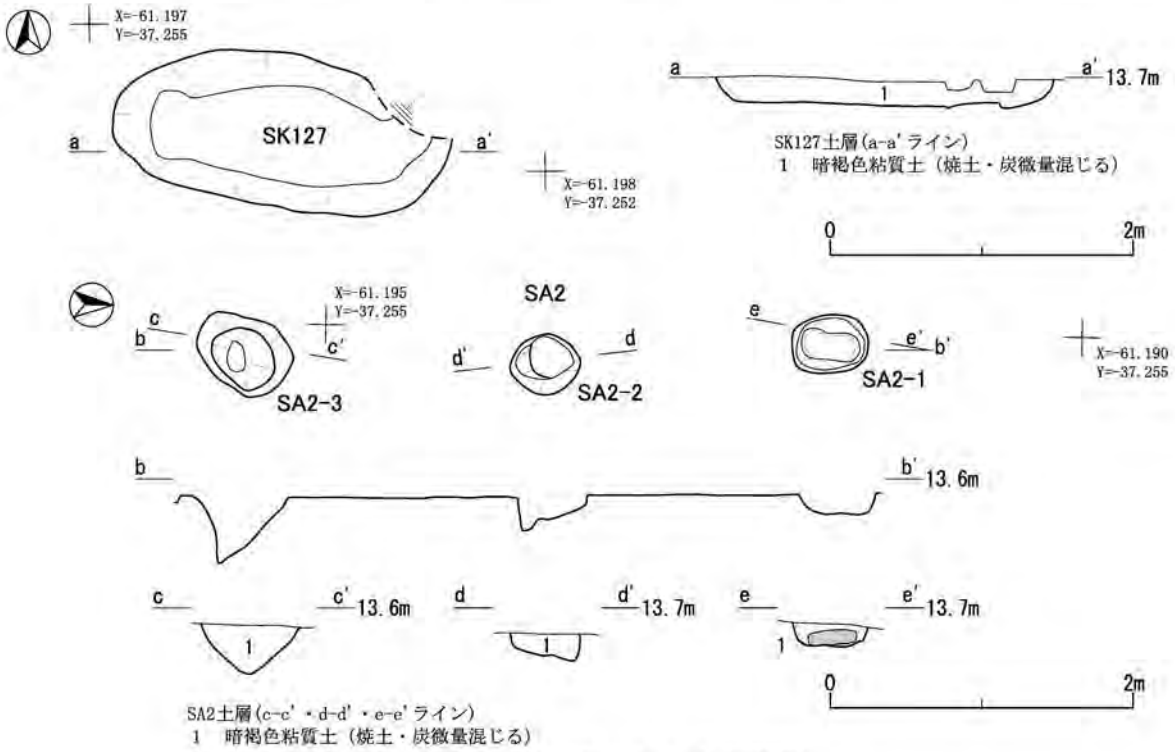
本遺構の築造時期は北区ⅱ層上面で検出できたことから５－２期のものである。

ＳＫ127（第26図・第38図342）

北区の北側に位置し、撹乱に切られる。平面形は撹乱により一部壊されているが、楕円形を呈す。規模は現状で長径2.26m、短径1.01mを測る。埋土に炭・焼土を微量に含んでいる。

遺物は26点出土しており、この中から土師器皿１点を実測した。342はＢ２－ｂ類と見られる土師器皿である。

北区ⅱ層上面で検出できたことから、本遺構の築造時期は５－２期である。



第26図　ＳＫ127、ＳＡ２実測図

焼土層北ⅱ層（第40図470～475）

北ⅱ層の炭・焼土層は広い範囲には見られず、ＳＢ15の周辺にのみ確認できた。また、ＳＢ15の南西側にあるＳＫ130には被熱した河原石が廃棄されていたこともわかった。

このような状況を考えると、ＳＢ15が火災に遭い焼失した直後、燃えた残骸を整地したためにＳＢ15の周辺に北ⅱ層の炭・焼土層が広がっているものと推測される。北ⅱ層上面にＳＡ２など構築物があることから、直後に再び使用していることが分かる。ＳＫ130から出土した被熱した河原石は、屋根の重しなどＳＢ15に使用されていたものが廃棄された状況と見られる。

また、ＳＫ130とＰ105から出土した天目茶碗が接合しており、北ⅲ層上面で検出された遺構は、同時に埋没していると推測されると同時に、５－２期の整地の範囲は確認された炭・焼土層より南へ広がっていた可能性が高い。

北ⅱ層はＳＢ15焼失後の整地の際に形成された層であり、北区ⅲ層上面の遺構とあまり時期差はないものと推測できる。多くの遺物が出土しているが、この中から６点実測を行った。470はＢ２－ａ類の土師器皿、471～473はＢ２－ｂ類の土師器皿である。475は明和１号窯式～大畑大洞４号窯式の東濃型の山茶碗の碗の口縁部である。

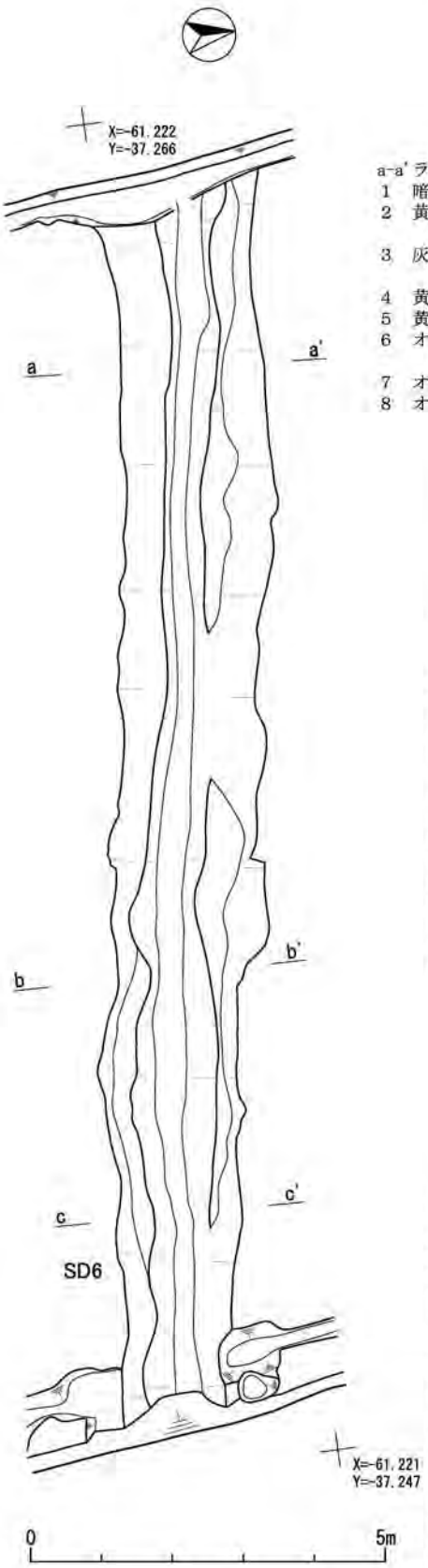
（３）詳細な時期が不明の遺構と遺物

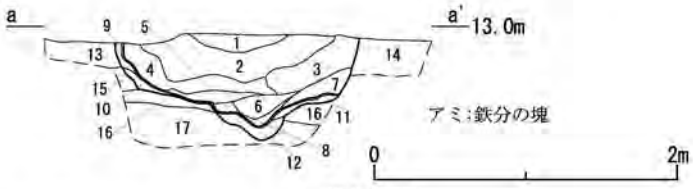
ＳＤ６（第27図・第38図343～360）

北区の南側に位置する。上部が近世の水田・撹乱により削平されているため、掘削された面は不明である。流路を東西方向にとり、両端は調査区外に延びる。このため全長は不明であるが、現状で長さ8.87m、幅2.03mを測る。深さは0.69mとなる。ＳＤ６は埋土と埋土の間に鉄分が溜まる層があること、断面の観察から堆積の仕方が南側は薄いのに対し、北側はブロック状に堆積していることから、一度掘り直されている可能性がある。しかしながら、地盤が砂層であるため、溝の掘削直後に壁面が崩落し堆積した層と、水性堆積の違いに過ぎないとも考えられる。断面形状は、記録を採った３箇所とも、底に一段深い部分が確認される。

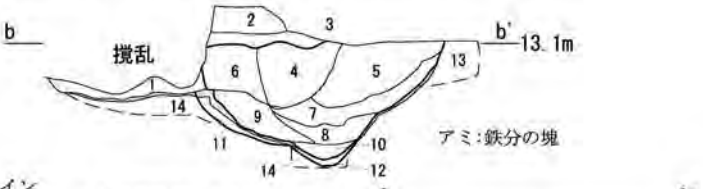
遺物は330点出土しており、この中から瀬戸美濃産陶器４点、土師器皿10点などを実測した。343～345は古瀬戸製品で343は擂鉢の口縁部、344・345は緑釉小皿の口縁部である。346は瀬戸美濃陶器の口縁部であるが、器種は不明である。347～356は土師器皿である。347～349・354はＢ１類、350～352はＢ２－ａ類、353はＢ２－ｂ類、355・356は小型製品であるＤ１類である。353はＢ２－ｂ類に分類したが、外面に規則的な押圧痕が巡り、Ｂ１類の可能性もある。358は須恵器の口縁部であるが、器種は不明で、外面に細かいカキ目を施す。

遺構の時期は、出土遺物から５期の遺構であることは間違いない。この時期、鷺山地区では広範囲に区画溝が検出される。ＳＤ６は、それらと方向を同一にするもので、同様な区画溝と断定できる。後世の削平により、遺構掘削面は明かでないが、ＳＢ15と主軸が揃っており、また広範囲の開発にあたり、最初に溝などによる区画を整備すると考えられるため、５－１期の遺構と推測される。

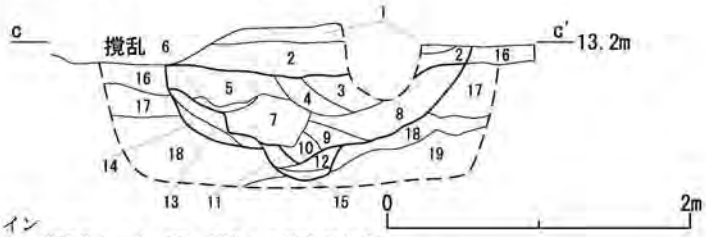




a-a'ライン
1　暗灰黄色シルト（明褐色シミ少量混じる）
2　黄灰色粘質土（明褐色シミ少量混じる、小礫微量混じる）
3　灰色粘質土（黄褐色極細砂ブロック少量混じる）
4　黄褐色極細砂
5　黄褐色極細砂（明褐色細砂まだらに混じる）
6　オリーブ褐色粘質土（灰色粘質ブロック微量混じる）
7　オリーブ褐色極細砂
8　オリーブ褐色シルト（灰色粘質ブロック微量混じる）
9　褐色極細砂
10　暗褐色中粒砂
11　褐色シルト（にぶい黄褐色粘質ブロック少量混じる）
12　褐色中粒砂
13　にぶい黄褐色シルト
14　オリーブ褐色極細砂
15　褐色細砂
16　暗褐色粗砂（小礫混じる）
17　オリーブ褐色中粒砂
１～８:SD6掘直し後埋土
９～12:SD6掘直し前埋土
13～17:地山



b-b'ライン
1　灰黄褐色シルト（明褐色シミ少量混じる）
2　にぶい黄褐色シルト（褐色シミ少量混じる）
3　灰黄褐色シルト（明褐色シミ少量混じる）
4　にぶい黄褐色シルト（小礫・明褐色シミ微量混じる）
5　灰黄褐色極細砂（小礫少量混じる、明褐色シミ混じる）
6　にぶい黄褐色シルト（炭・小礫・明褐色シミ微量混じる）
7　黄褐色シルト（小礫混じる、炭微量混じる）
8　灰色粘質土（小礫・オリーブ褐色中粒砂ブロック・明褐色シミ微量混じる）
9　黄灰色シルト（小礫・明褐色シミ微量混じる）
10　オリーブ黒色粘質土
11　褐色極細砂
12　灰黄褐色シルト（明褐色シミ少量混じる）
13　オリーブ褐色粗砂
14　暗褐色粗砂
1:撹乱　　2～10:SD6掘直し後埋土
11・12:SD6掘直し前埋土　　13～14:地山



c-c'ライン
1　にぶい黄褐色シルト（炭・褐色シミ微量混じる）
2　褐色シルト（灰黄褐色極細砂ブロック・褐色シミ微量混じる）
3　褐色極細砂（炭・焼土・小礫微量混じる）
4　暗褐色シルト（炭・焼土・小礫微量混じる）
5　褐色極細砂（炭・焼土微量混じる、にぶい黄褐色シルトブロックまだらに混じる）
6　暗褐色中粒砂
7　暗褐色極細砂（炭微量混じる、にぶい黄褐色極細砂ブロック微量混じる）
8　褐色シルト
9　褐色極細砂
10　にぶい黄褐色極細砂（炭・暗褐色中粒砂ブロック微量混じる）
11　にぶい黄褐色シルト（暗褐色中粒砂ブロック微量混じる）
12　褐色細砂（炭・小礫・暗褐色粗砂ブロック微量混じる）
13　褐色細砂（暗褐色中粒砂ブロック微量混じる）
14　暗褐色中粒砂
15　褐色シルト（灰黄褐色シルトブロック微量混じる）
16　褐色細砂
17　オリーブ褐色中粒砂
18　暗褐色粗砂（礫混じる）
19　黄褐色細砂
１・２:SX11埋土　　３～10:SD6掘直し後埋土
11～15:SD6掘直し前埋土　　16～19:地山

第27図　ＳＤ６実測図

第６節　６期の遺構と遺物

北区の中央から南にかけて、当期の遺構が多く確認できた。ＳＸ１、ＳＸ６～11は水田跡、ＳＡ１は盛土による道、ＳＤ１～３は地境の溝である。ＳＤ１がＳＸ１ｅによって埋められることを除けば、遺構の配置状況から見て、同時期に展開していたと考えられる。明治期の地籍図と今回検出した道路や地割りはほぼ合致するが、土地の利用状況は畑に変わっている。また昭和10年頃に道路が新設されるが、恐らくそれに伴って区画整理が行われるようで、昭和20年に米軍が撮影した空中写真では、現在に至る地割りに変わっている。

ＳＡ１（第28図）

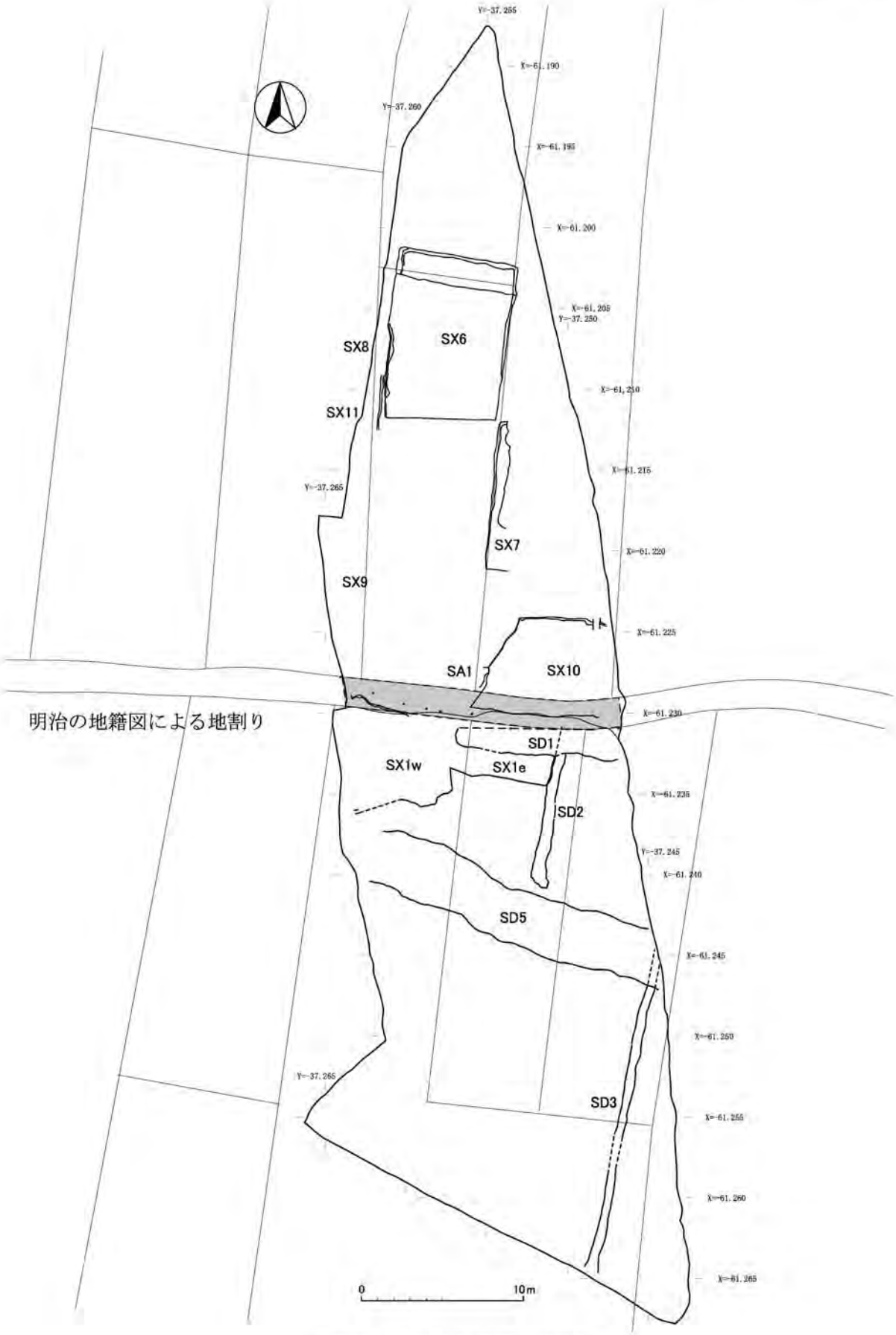
土塁状の盛土である。地籍図には道として描かれているもので、近世に造られたものがそのまま利用されていたと考えられる。上面の幅1.85m、基底部の幅2.17m、高さ0.76mを測り、上面には円礫混じりの砂層が堆積している。盛土の中程には深さ0.5m以上の杭痕が検出でき、１～２mの間隔で緩やかな弧を描くように並んでいた。杭列の性格は、土留め用の板を支えるためのものである可能性が考えられるが、セクション図から読み取れる盛土構造からは、拡幅している様子は見られない。北区西壁のセクション（別添図７のセクション３）によると、地山の砂層を掘り窪め、その中央に盛土を行っている様子が観察でき、ＳＡ１の両側には側溝のような溝状の遺構が同時にあったようである。ただし平面的にはそれらの遺構は確認されていないため、地境でもあるＳＸ９より西でのみの施設かも知れない。なお、別添図６のセクション１は調査当初の先行トレンチによって縦断的に断ち割ってしまった断面図である。

出土遺物は破片のみで、実測できるものはなかった。出土遺物の中に近世のものが一定量出土しており、近世に築造されたものと考えられる。

ＳＤ１（第28図・第39図362～370）

ＳＡ１との境界部を、調査当初の先行トレンチによって縦断的に断ち割ってしまったため、両者を平面的に確認することができなかった。トレンチ底にわずかに残った埋土の状況では、両者が重複することなく造られていたことが確認できる。地籍図による道の範囲もＳＤ１と重なることがないため、道に平行して機能した溝であると判断した。北側の肩を検出できていないが、調査区壁面での確認から推測すると、ほぼ真東西に向きを持つ溝であるといえる。調査区の中程、地籍図での地境で閉じ、西の地割りには延びない。西半は埋没後にＳＸ１ｅが造られており、ある時期に埋められた可能性が高い。遺構の規模は現状で長さ10.20m、幅1.64m、深さ0.59mを測る。

遺物は170点出土している。この中から土師器皿９点を実測した。364はＢ１類、367～369はＢ２－ｂ類、365・366はＢ１類かＢ２類である。362はＭ類で、370はＣ２類、363はＣ１類の可能性があるものである。明確に近世に下るものは無く、戦国期のものが最新の遺物群であるが、他の遺構との関連から近世のものであると判断した。



第28図　６期の遺構分布図

ＳＤ２・ＳＤ３（第28図・第39図371～373）

おおよそ南北方向の小規模な溝である。地籍図での地割りとほぼ平行するが、いずれも位置が1.5m程西にずれている。ＳＸ１の西半と東半の境界部も同様であることから、それぞれが当時の地割りを示すものであると考えられるが、地籍図との不整合の理由は分からない。

ＳＤ２の最新遺物は古瀬戸製品であるが、ＳＤ３からは近世のものが出土している。371はＳＤ２出土の瀬戸美濃陶器で、古瀬戸後Ⅳ期新段階～大窯第１段階の緑釉皿である。372・373はＳＤ３出土の瀬戸美濃陶器で、共に近世の摺絵皿である。

ＳＤ５（第29図・第39図374～393）

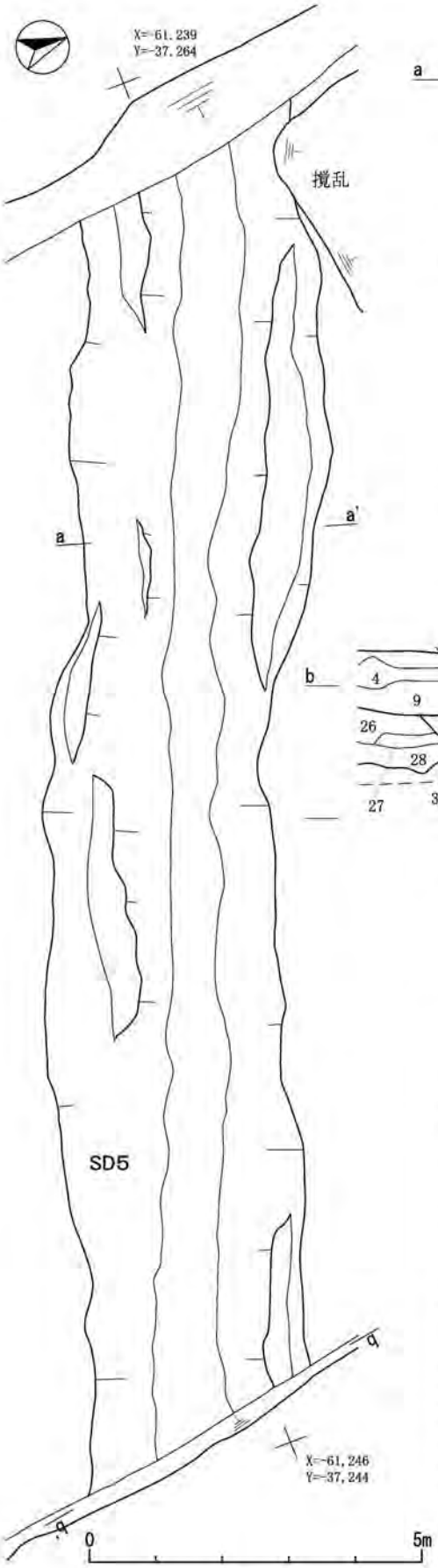
南区の南に位置し、ＳＫ28・ＳＫ82・ＳＫ86・ＳＫ88・ＳＫ91を切る。ＳＤ３との切り合いは不明である。流路を北西―南東方向にとり、両端は調査区外に延びる。このため全長は不明であるが、現状で長さ約9.96m、幅2.00mを測る。断面形は扁平なＵ字形を呈し、深さ約0.8mを測る大規模なものである。部分的にテラス状になるところが見られる。

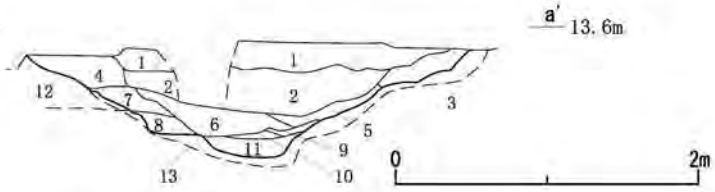
遺物は170点出土している。その中から瀬戸美濃陶器４点、土師器皿10点、土師器３点、須恵器２点、山茶碗１点を実測した。391は磁器の碗で外面に染付が見られる。392・393は連房第１～２小期の瀬戸美濃陶器で、392は皿の口縁部、393は壺の口縁部である。380は古瀬戸後Ⅳ期新段階の香炉である。381～390は土師器皿である。377・378は須恵器で、377は尾張産の平瓶の口縁部である。374～376は土師器で、374は受口状口縁甕で、内面に横ハケ調整が見られる。376はパレス壺の口縁部、375は台付甕である。379は尾張型山茶碗の底部で、高台が剥離している。392が最下層から出土していることから本遺構の築造時期は６期であるが、近世初頭に掘削されている可能性が高い。

ＳＸ１・６～11（第28図・第39図394～416）

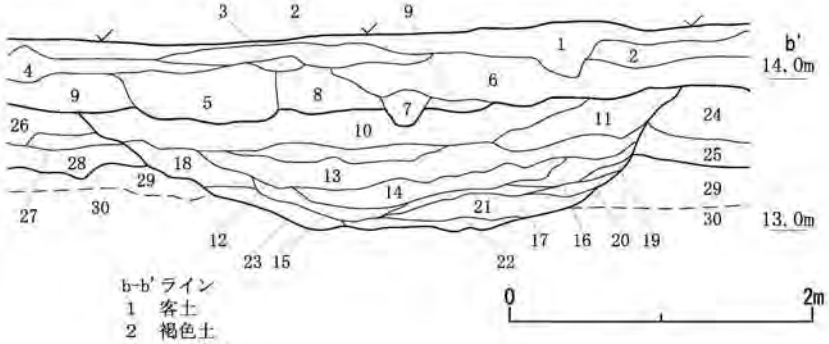
ＳＸ１は南区、ＳＸ６～11は北区に位置する。南区と北区と広域に分布する水田の跡である。ＳＸ６～８・11は明治の地籍図の地割りとほぼ平行するように水田が区画されていたことが確認できた。また南区北側で分析を行った結果、プラント・オパールを確認することができた（第６章第２節（１）参照）。このため、この地点で稲作を行っていたことを示しており、自然科学分析からも水田であることが明らかとなった。

出土遺物はＳＸ１からは565点と多くの遺物が出土した。この中から23点を実測した。394は縄文土器の口縁部、395・396は受口状口縁甕の口縁部、397は高杯の口縁部である。398は須恵器の高杯の脚部、399は器種不明の口縁部で須恵器の可能性がある。400は灰釉陶器の碗、401は清郷型鍋の口縁部、402は東濃型山茶碗、403は古瀬戸後Ⅳ期新段階の天目茶碗、404～409は土師器皿である。410は室町～戦国時代の風炉の口縁部。411は志野の皿で連房第３～４小期、412は瀬戸の陶器の碗で連房第８～９小期。413・414は近世のもので、413は美濃の陶器の鉢、414は青磁の碗である。415・416は土鈴で、415は肩部に沈線が描かれる。394以外の遺物の時期は本調査区で確認できているもので、削平によって混じり込んだものと理解することができる。





a-a'ライン
1　茶灰色土（固く締まる、粘性弱い、炭・小礫・橙色粒子若干含む）
2　褐灰色土（やや締まり弱い、やや粘性あり、砂質土・炭・橙褐色粒子を若干含む）
3　淡灰茶色土（やや締まり弱い、やや粘性あり、砂含む）
4　暗褐灰色土（堅く締まる、粘性弱い、黄色土ブロック若干含む）
5　暗灰褐色土（やや締まり弱い、やや粘性あり、マンガン含む）
6　褐灰色砂質土
7　茶灰土（締まり弱い、やや粘性あり、砂含む）
8　褐灰色砂質土
9　灰色粘質土
10　暗灰褐色砂質土（淡茶色粘質ブロック含む）
11　淡茶灰色土（固く締まる、粘性弱い、灰色ブロック若干含む）
12　暗褐色砂
13　淡黄色土
1～11:SD５埋土　　12・13:地山



b-b'ライン
1　客土
2　褐色土
3　茶灰色土
4　灰褐色土
5　黒灰色土
6　茶褐色土
7　淡茶灰色土
8　茶褐色土
9　暗灰褐色土
10　褐灰色土（固く締まる、粘性弱い、炭化物・橙色粒子若干含む）
11　暗褐灰色土（締まる、粘性弱い、炭化物・橙色粒子若干含む）
12　灰褐色土（やや砂質、締まる、粘性弱い、鉄分若干含む）
13　褐灰色土（やや砂質、締まる、粘性弱い、橙色粒子若干含む、
黄褐色ブロック土を若干含む）
14　暗褐灰色土（やや砂質、やや締まり弱い、粘性あり、炭化物若干含む、）
15　灰褐色粘質土（マンガンを多く含む）
16　黄茶褐色土（締り弱い、粘性強い、橙色粒子若干含む）
17　茶褐色砂質土
18　黄灰褐色土（やや砂質、灰色粘土ブロック若干含む）
19　淡茶灰砂質土
20　黄茶灰砂質土
21　褐灰色砂質土
22　暗褐灰色砂質土（灰色粘土ブロック若干含む）
23　褐灰色砂質土（黄茶粘土ブロック若干含む）
24　灰褐色土（締まる、炭化物・橙褐色粒子若干含む）
25　灰褐色土
26　灰黄茶色土（締まる、粘性弱い、炭化物若干含む）
27　黄灰茶色土（固く締まる、粘性弱い）
28　暗黄灰色土（やや砂質、締まる、粘性弱い）
29　黄灰色砂質土
30　淡茶灰色砂質土
1～6・7～9：Ⅰ層　　10～23:SD５埋土　　24・25:SK82埋土
26～28:SK101埋土　　29・30:地山

第29図　ＳＤ５実測図

第７節　時期不明の遺構と遺物

ＮＲ（第30図・第39図420～423）

Ｐ区で検出した自然流路である。流路を南北方向にとり、両端は調査区外に延び、流路の西肩も調査区外である。このため全長・幅共に不明であるが、現状で長さ14.62m、幅3.72m以上、深さは0.91m以上を測る。自然流路と判断したため完掘は行わなかった。

ＮＲはＰⅲ層を切って流れており、古墳時代前期頃からの自然流路であると考えられる。土層観察の結果、堆積土は古墳時代前期と戦国時代以降に２時期にわたって堆積し、セクションと平面においても堆積の違いを確認することができた。

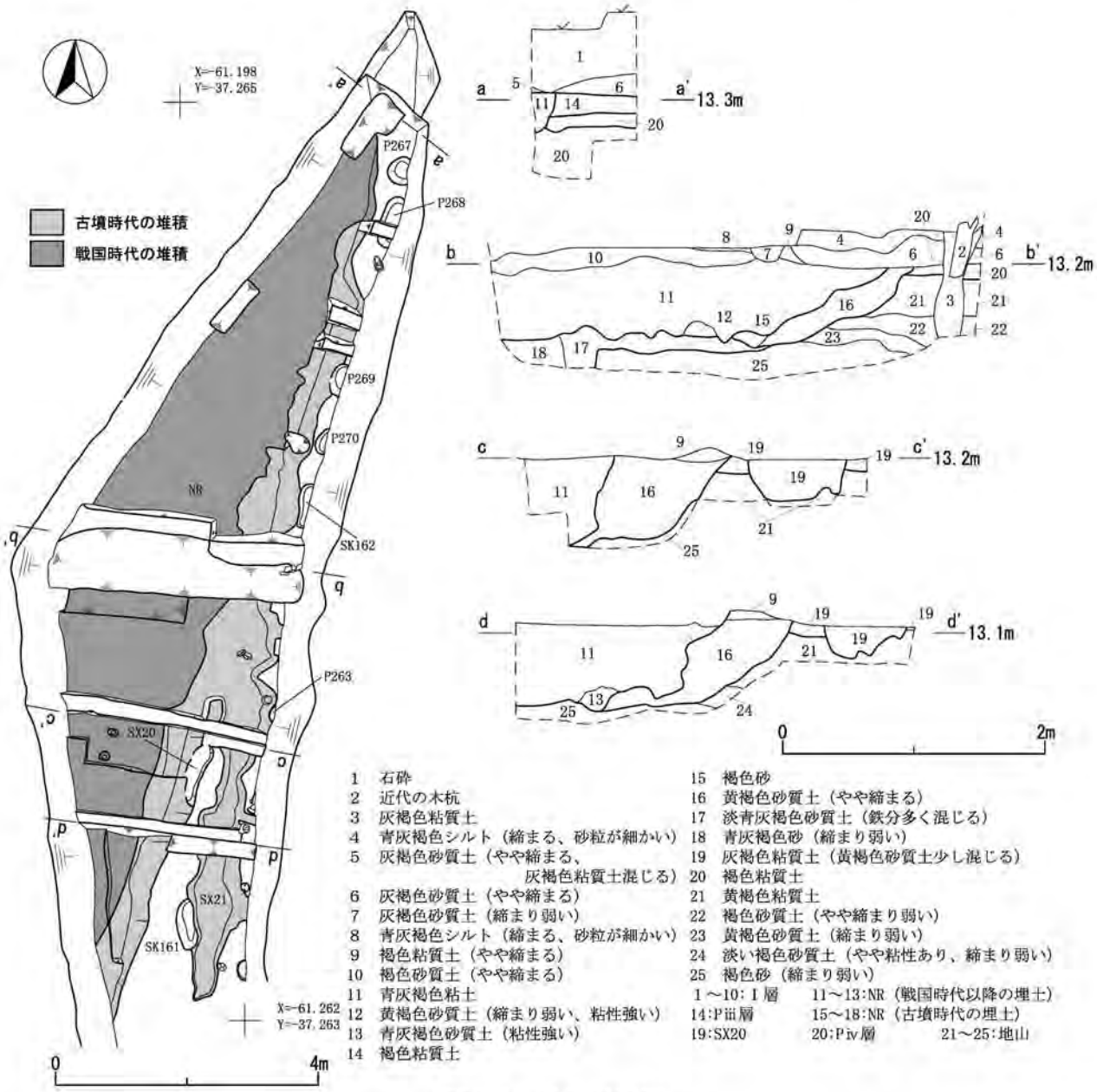
古墳時代前期の堆積土においてはセクションｂ－ｂ’の17層において落ち込みを確認した。トレンチの反対側の壁においても同じ落ち込みを確認することができたが、平面では確認することができなかった。この落ち込みは、古墳時代前期に杭を打ち、護岸工事などを行った可能性がある。しかし、木片などは確認することはできなかった。また、セクションｃ－ｃ’の南側でも２つの浅い落ち込みを確認した。この２つの落ち込みは非常に浅かったため、先に述べた落ち込みとは異なるものと考えられる。

戦国時代以降の堆積土においてはセクションｃ－ｃ’、ｄ－ｄ’はセクションｂ－ｂ’に比べＮＲの肩の角度は急である。これはセクションｃ－ｃ’、ｄ－ｄ’部分あたりが、ＮＲの西へ曲がっていく部分、ちょうど屈折点となるためであると考えられる。水の流れによって侵食したため、流路の肩の角度が急になっていると考えられる。また、Ｐ区調査開始前に北側で工事立会を行ったところ戦国時代以降の埋土と同じ埋土が広がっていたため、北側に続くようである。南側は先に述べたように土層観察からＰ区の南側で大きく西へ曲がっていくと推測している。

遺物は137点出土しており、この中から土師器３点、土師器皿１点を実測した。420・422・421は土師器で、420はＳ字状口縁台付甕の口縁部で、口縁外面２段目に押引き刺突文があるＡ類である。422は底部だけが残っており器種は不明である。内面には丁寧なミガキ調整が施されている。421は有稜高杯である。423は戦国時代以降の堆積土（11層）から出土した土師器皿で、Ｃ２類の可能性がある。

その他の出土遺物（第39図417～419、424～426）

遺構の時期が特定できなかったが、実測した遺物について記述する。417はＳＸ３から出土した近世の肥前産の碗である。418はＳＸ４から出土した美濃産の陶器で、連房第10小期の筒形碗である。419はＳＸ23から出土した畿内系の須恵器の身である。424はＳＫ９出土のＣ１類の可能性がある土師器皿である。425はＰ68出土の土鈴である。426はＰ260出土の灰釉陶器の碗の底部である。



1　石砕
2　近代の木杭
3　灰褐色粘質土
4　青灰褐色シルト（締まる、砂粒が細かい）
5　灰褐色砂質土（やや締まる、灰褐色粘質土混じる）
6　灰褐色砂質土（やや締まる）
7　灰褐色砂質土（締まり弱い）
8　青灰褐色シルト（締まる、砂粒が細かい）
9　褐色粘質土（やや締まる）
10　褐色砂質土（やや締まる）
11　青灰褐色粘土
12　黄褐色砂質土（締まり弱い、粘性強い）
13　青灰褐色砂質土（粘性強い）
14　褐色粘質土
15　褐色砂
16　黄褐色砂質土（やや締まる）
17　淡青灰褐色砂質土（鉄分多く混じる）
18　青灰褐色砂（締まり弱い）
19　灰褐色粘質土（黄褐色砂質土少し混じる）
20　褐色粘質土
21　黄褐色粘質土
22　褐色砂質土（やや締まり弱い）
23　黄褐色砂質土（締まり弱い）
24　淡い褐色砂質土（やや粘性あり、締まり弱い）
25　褐色砂（締まり弱い）

1～10：Ⅰ層　11～13：NR（戦国時代以降の埋土）
14：Pⅲ層　15～18：NR（古墳時代の埋土）
19：SX20　20：Pⅳ層　21～25：地山

第30図　ＮＲ実測図

第８節　各層の出土遺物

北ⅱ～ⅲ層出土遺物（第40図476～481）

ⅱ層からサブトレンチを掘った際に出土した遺物である。476は古瀬戸後Ⅳ期新段階の筒形香炉、外面のみ鉄釉が施される。480は古瀬戸後Ⅳ期の碗の口縁部である。477は土師器皿Ｃ２類、478は土師器皿Ｂ２－ｂ類で、口縁部にタール痕が見られる。

北ⅰ層出土遺物（第40図482～485）

ⅰ層の中でも、近代の水田と考えられるところから出土したものである。表土と撹乱から出土したものは後で記述する。482は美濃須衛産の須恵器の坏身で、７世紀後半のものである。483は近世の瀬戸美濃陶器の碗。484は土師器皿Ｂ２－ａ類。485は19世紀の瀬戸美濃磁器の皿で内面に染付が見られる。

Ｐⅲ層出土遺物（第40図486～493）

486～493はすべて土師器である。486はＳ字状口縁台付甕のＡ類。487～489は台付甕である。490・491は有段高杯で、490は口径が30cmを越える大型製品である。492は高杯の脚部。493は甕の口縁部で、内外面に横ハケ調整を施す。

南区Ⅱ層（包含層）出土遺物（第41～44図494～662）

南区ではⅡ層の掘り下げ・遺構検出の際、グリットごとに遺物の取り上げを行った。整理の段階で分析を行ったが、傾向を見いだすことはできなかったため、グリッドごとではなく、遺物の種類ごとに実測図を掲載した。

494～566、568、569は土師器である。504は壺の頸部である。頸部の外面に沈線が施され、口縁部に近い内面部分に櫛描文が施文される。506は壺の底部である。外面の底に粘土を足しているが、調整が不十分で貼り付けた痕跡が明瞭に確認できる。接地面は非常に狭いが平坦な部分を作りだしている。514・515は器壁が非常に薄く作られ、口縁部が直口するもので、外面にススが付着している。両者は同一個体の可能性が高い。今回、遺構からは出土しておらず、同種のものは２点以外見られない。516は加飾壺の口縁部と見られる。表裏に突帯を貼り付け、斜め方向の櫛描文を施している。表面には山形文が崩れた様な文様が描かれており、裏面には口縁端部に羽状文が描かれている。内外両面に赤彩が施される。518は今回唯一確認できたＳ字甕Ｄ類である。549は有稜高杯の口縁部で、外面に櫛描直線文と斜格子文が交互に描かれている。560・561は器台で、内外面共に丁寧なミガキ調整が行われ、口縁端部の外面には櫛描直線文が施されている。568はミニチュア土器の底部である。

567・570～573は土製品である。567・571～573は用途不明な土製品である。隅丸方形の角の様な断面形状を呈し、筒状に復元できるものであると考えられる。内外面共にハケ調整を行っている。571の形状は円形の土板状のものと考えられ、側面には線刻が施されている。572は焼成が甘く、生焼けである。断面は円形を呈す。何かの把手の可能性も考えられる。573は耳形を呈し、やや湾曲する。ＳＫ67から同じ形をした土製品が出土している。570は土製の勾玉である。

574～610は須恵器である。594は壺の口縁部で、波状文が施される。596は甑の底部。602・

603は碗の口縁部で、口縁端部が凹状になるものである。610は美濃市丸山窯産の長頸壺の口縁部で、外面に縦方向のハケ目が施される。

611～619は古墳時代後期から古代の土師器である。611の器種は不明である。土師器としたが、底部に横方向のケズリがみられ、焼成不良の須恵器の可能性もある。617は平底甕を模したと見られる土製品である。618・619は美濃式１類の焼塩土器である。

620は中世常滑産の擂鉢である。621～625は灰釉陶器で、621は花瓶の口縁部である。626～632は山茶碗。633・634は瓦質土器で、633は室町～戦国時代の風炉の口縁部である。635・636中国製の磁器で、635は青磁の香炉、636は染付皿で、碁笥底になると見られる。共に明代のものである可能性がある。637は中国製の白磁碗の底部である。638～643は土師器皿である。644～652は瀬戸美濃陶器である。遺構は確認されていないが、大窯第１段階から第３段階のものが出土している。645は底部以外を打ち欠いており、２次加工されている。653～658は土錘。659は鉄製品である。断面にＶ字状の溝があり、木目などは確認することはできなかったが、木身に装着するためのものであったと考えられる。Ｕ字状の鍬鋤先の一部であると考えられる。

660は砥石。661は土鈴で、662は土鈴の中に入っていたと考えられる土玉である。

南区サブトレンチ出土遺物（第44図663～677）

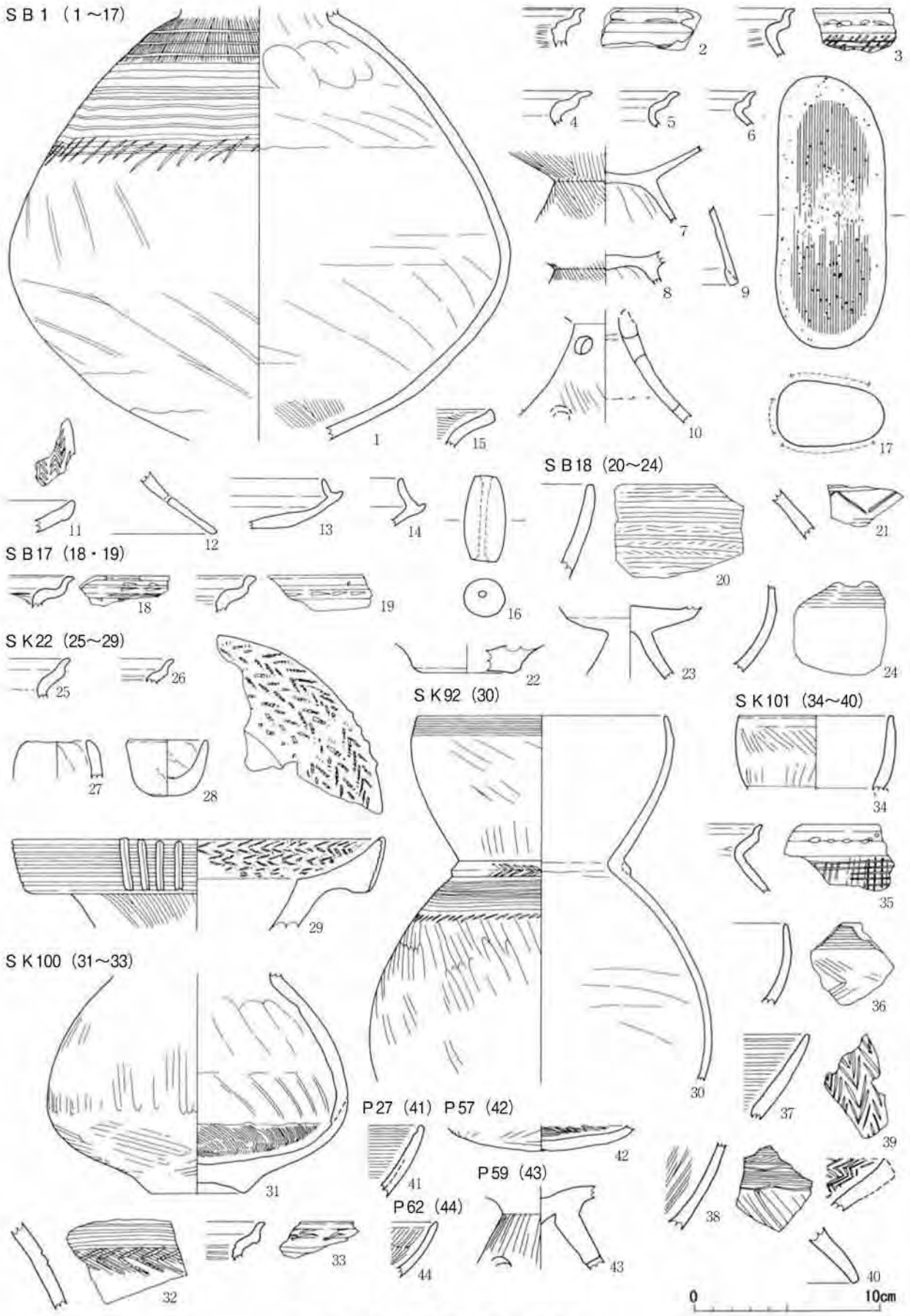
663～677はサブトレンチを入れた時に出土した遺物で、大部分はⅡ層あるいは遺構埋土から出土したものである。663・664・668は須恵器で、663は鉢の口縁部、664はかえりの付く蓋である。665・670～673は土師器である。666・667・677は土師器皿、669・674～676は瀬戸美濃産陶器である。

表土（第44図678～687）

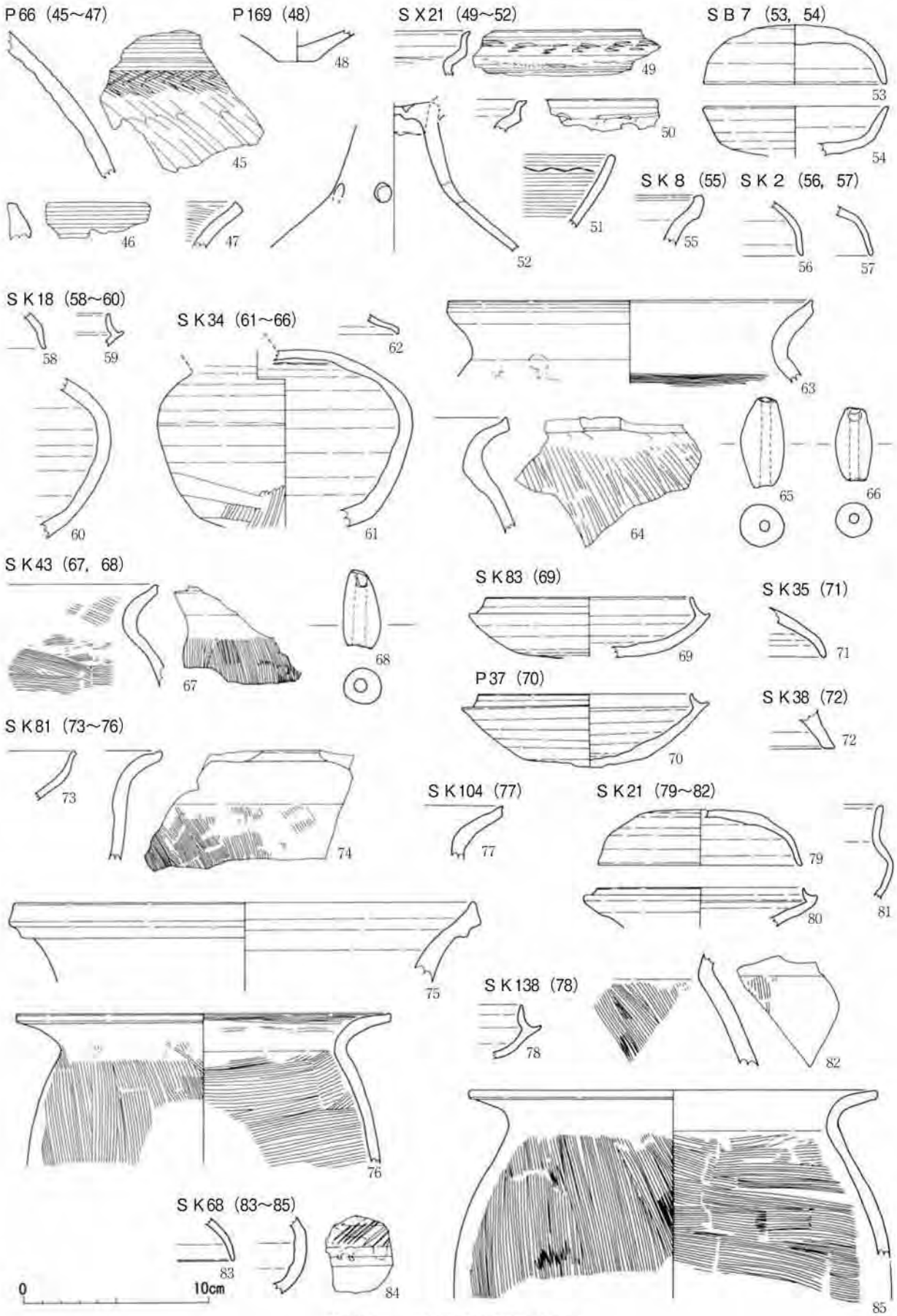
678～687は表土から出土したもので、主に重機掘削の時に出たものである。678は今回の調査で唯一確認できた水神平型式の弥生土器の深鉢で、外面に羽根状条痕が見られる。680・681・685は須恵器で、681・685は美濃須衛産である。682はＣ２類の土師器皿である。683は南部系山茶碗、684は古瀬戸後Ⅱ期の折縁小皿である。686・687はロクロ土師器で、687は10世紀の小碗である。

撹乱など（第44図688～703）

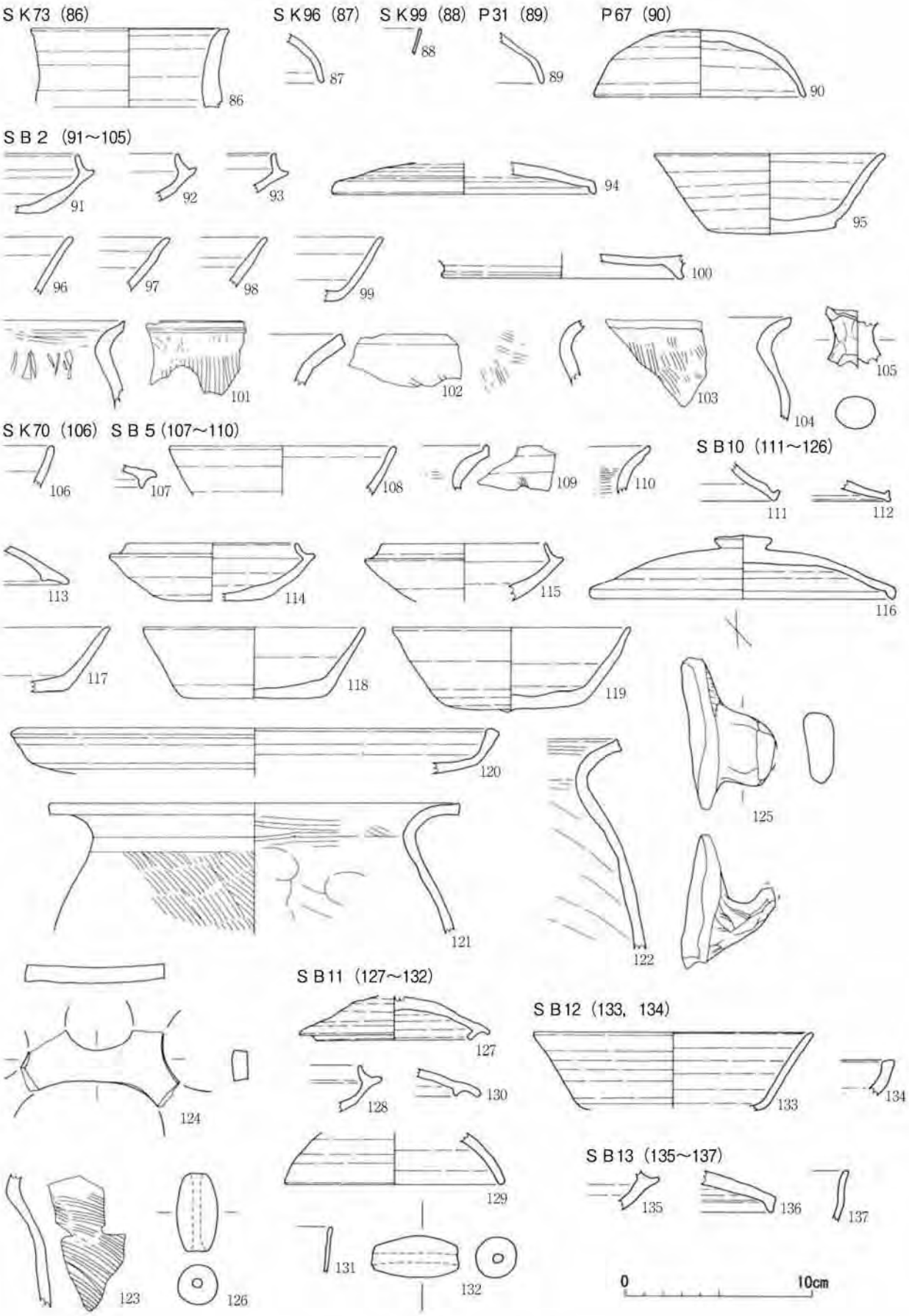
688～701は撹乱、702は排土、703は出土場所不明なものである。692は石鏃で、石材は下呂石である。698は土製の面で、人の顔が表現されている。近世の玩具であろう。701は16世紀の青磁の鎬連弁文碗である。702は土師器で、甑の把手部分と考えられる。非常に硬く焼き締まっている。弧状を描くのではなく、ほぼ直線で、上面に小さい粘土塊を２つ付け、滑り止めのようにしている。時期は不明であるが、古墳時代や古代のものではないと考えられる。比較的新しいものであろう。703は須恵器の甕で、外面には格子目タタキ痕があり、内面には同心円文当具痕が見られる。


ＳＢ１（１～17）
ＳＢ18（20～24）
ＳＢ17（18・19）
ＳＫ22（25～29）
ＳＫ92（30）
ＳＫ101（34～40）
ＳＫ100（31～33）
Ｐ27（41）Ｐ57（42）
Ｐ59（43）
Ｐ62（44）
0
10cm

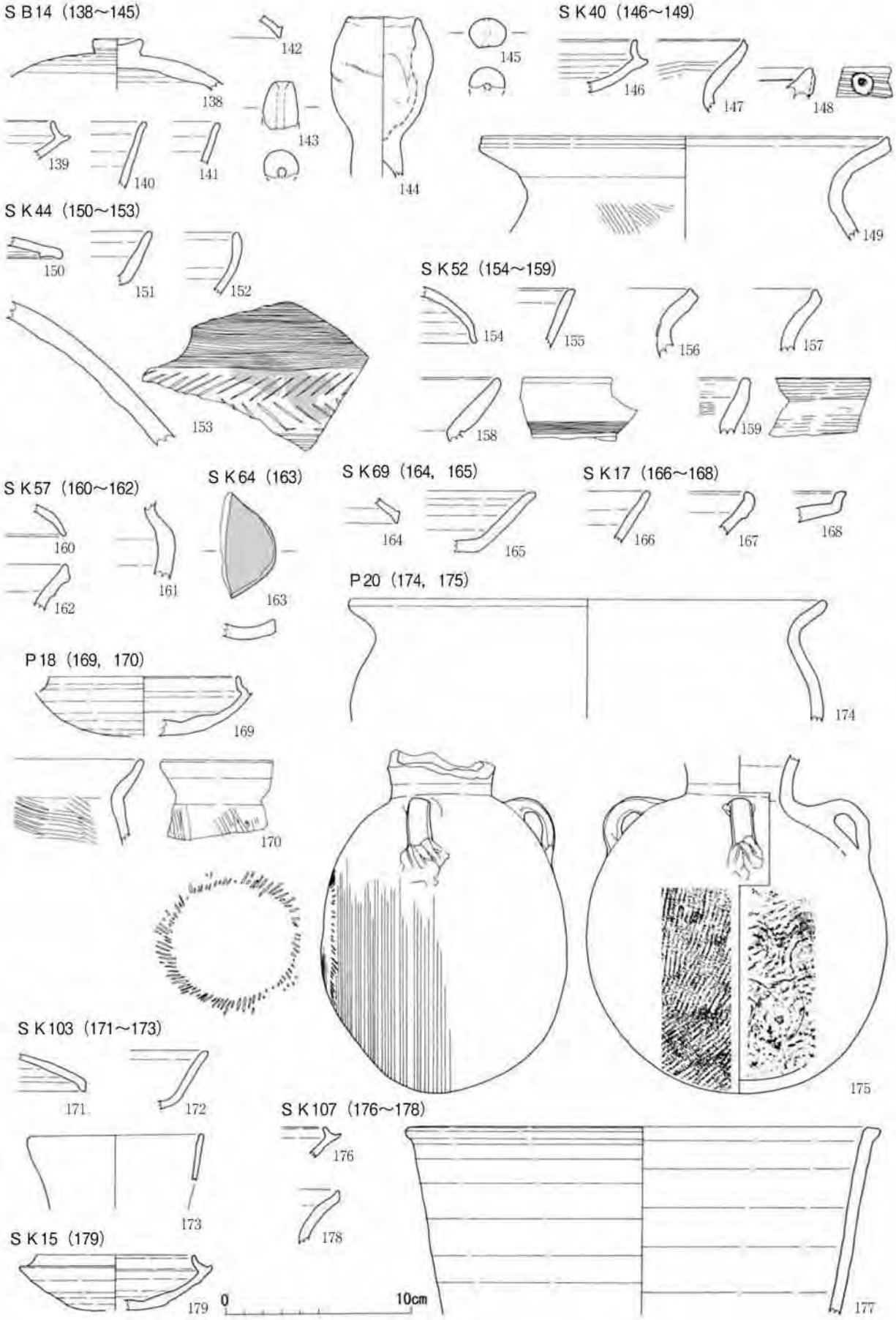
第31図　遺物実測図（１）


P66 (45～47)
P169 (48)
SX21 (49～52)
SB7 (53, 54)
SK8 (55)
SK2 (56, 57)
SK18 (58～60)
SK34 (61～66)
SK43 (67, 68)
SK83 (69)
SK35 (71)
P37 (70)
SK38 (72)
SK81 (73～76)
SK104 (77)
SK21 (79～82)
SK138 (78)
SK68 (83～85)
0
10cm

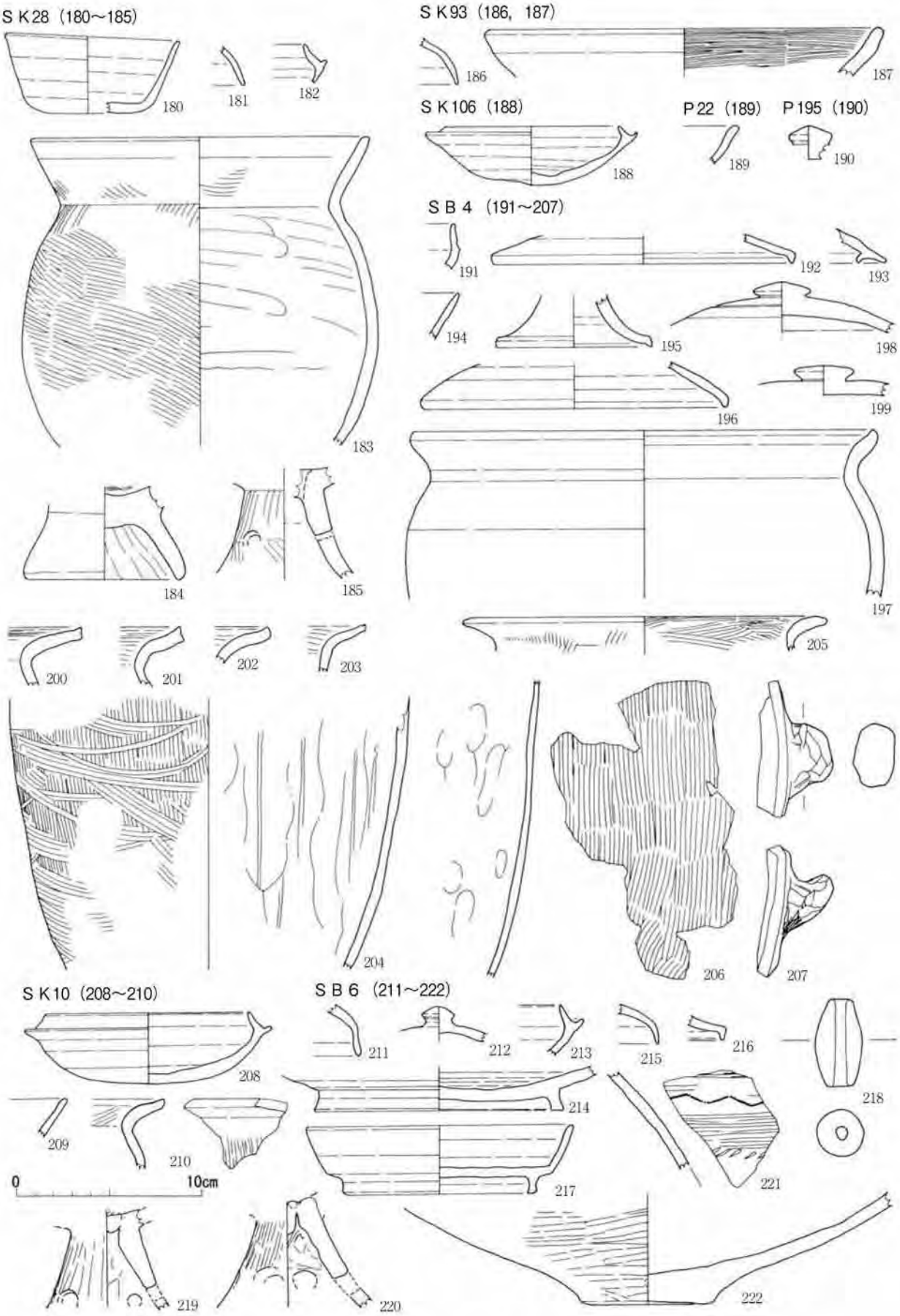
第32図　遺物実測図（2）


ＳＫ73（86）
ＳＫ96（87）
ＳＫ99（88）
Ｐ31（89）
Ｐ67（90）
ＳＢ２（91～105）
ＳＫ70（106）
ＳＢ５（107～110）
ＳＢ10（111～126）
ＳＢ11（127～132）
ＳＢ12（133，134）
ＳＢ13（135～137）
0
10cm

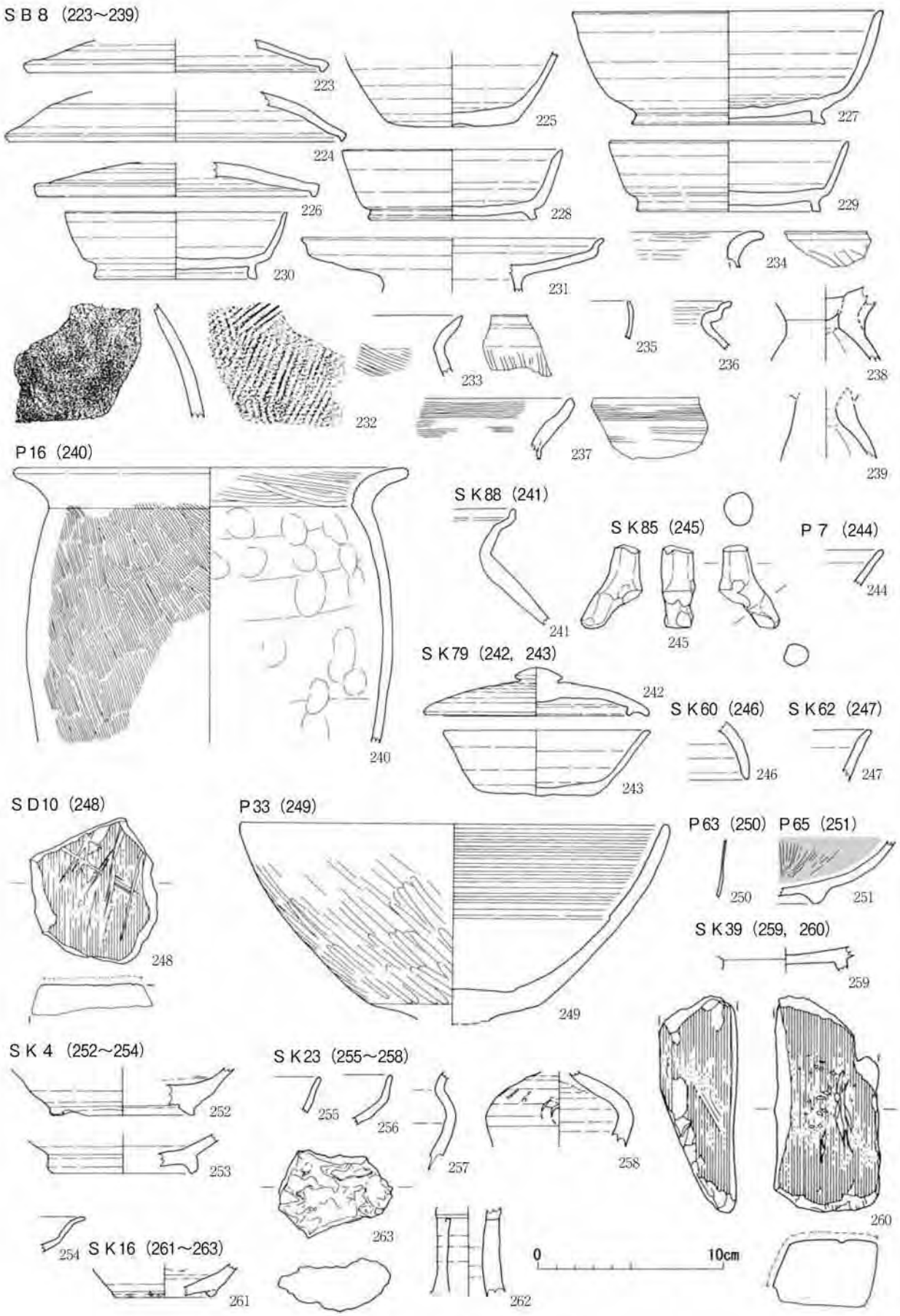
第33図　遺物実測図（３）


S B 14 (138～145)
S K 40 (146～149)
S K 44 (150～153)
S K 52 (154～159)
S K 57 (160～162)
S K 64 (163)
S K 69 (164, 165)
S K 17 (166～168)
P 20 (174, 175)
P 18 (169, 170)
S K 103 (171～173)
S K 107 (176～178)
S K 15 (179)
0
10cm

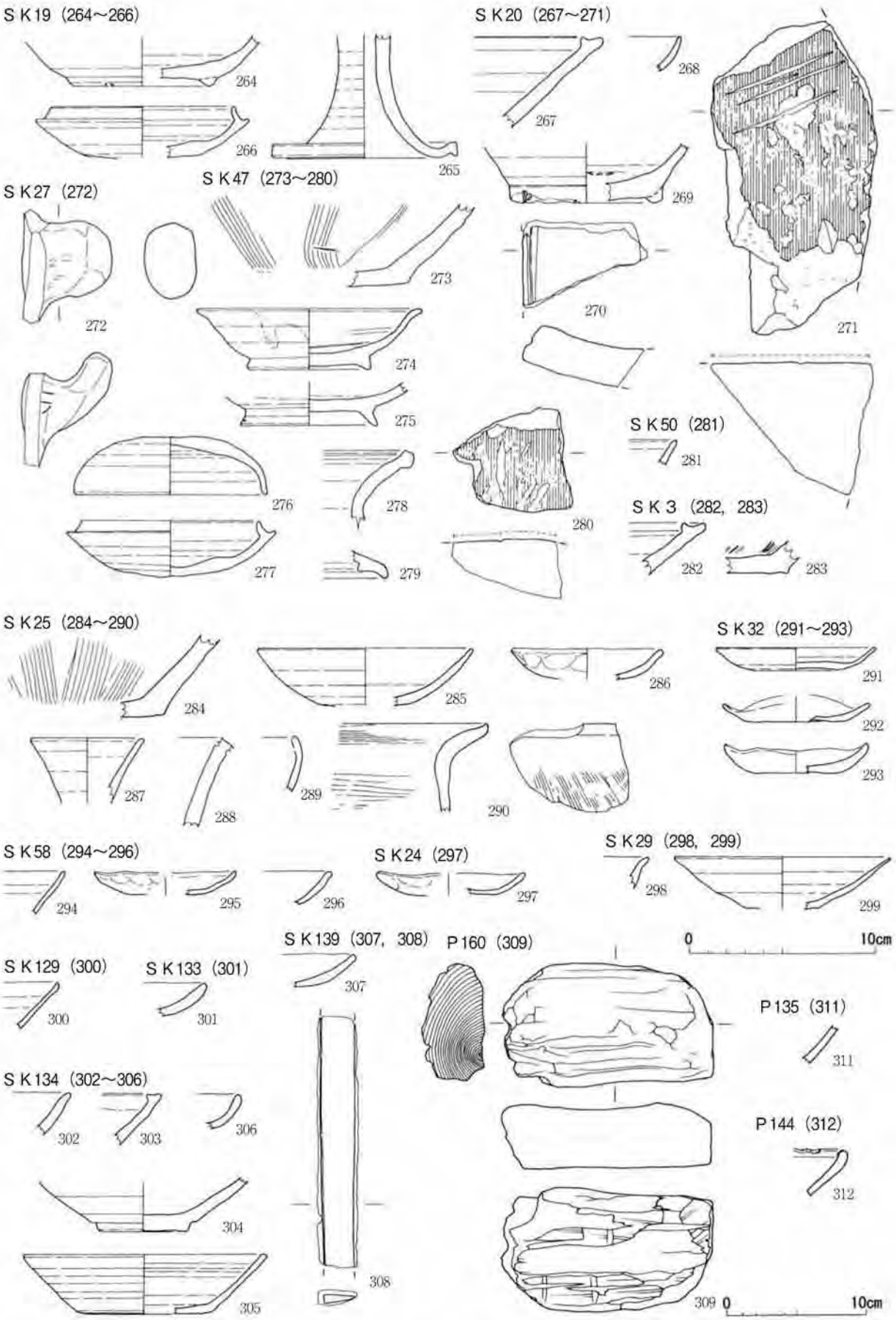
第34図　遺物実測図（4）


ＳＫ28（180～185）
ＳＫ93（186，187）
ＳＫ106（188）
Ｐ22（189）
Ｐ195（190）
ＳＢ４（191～207）
ＳＫ10（208～210）
ＳＢ６（211～222）
0
10cm

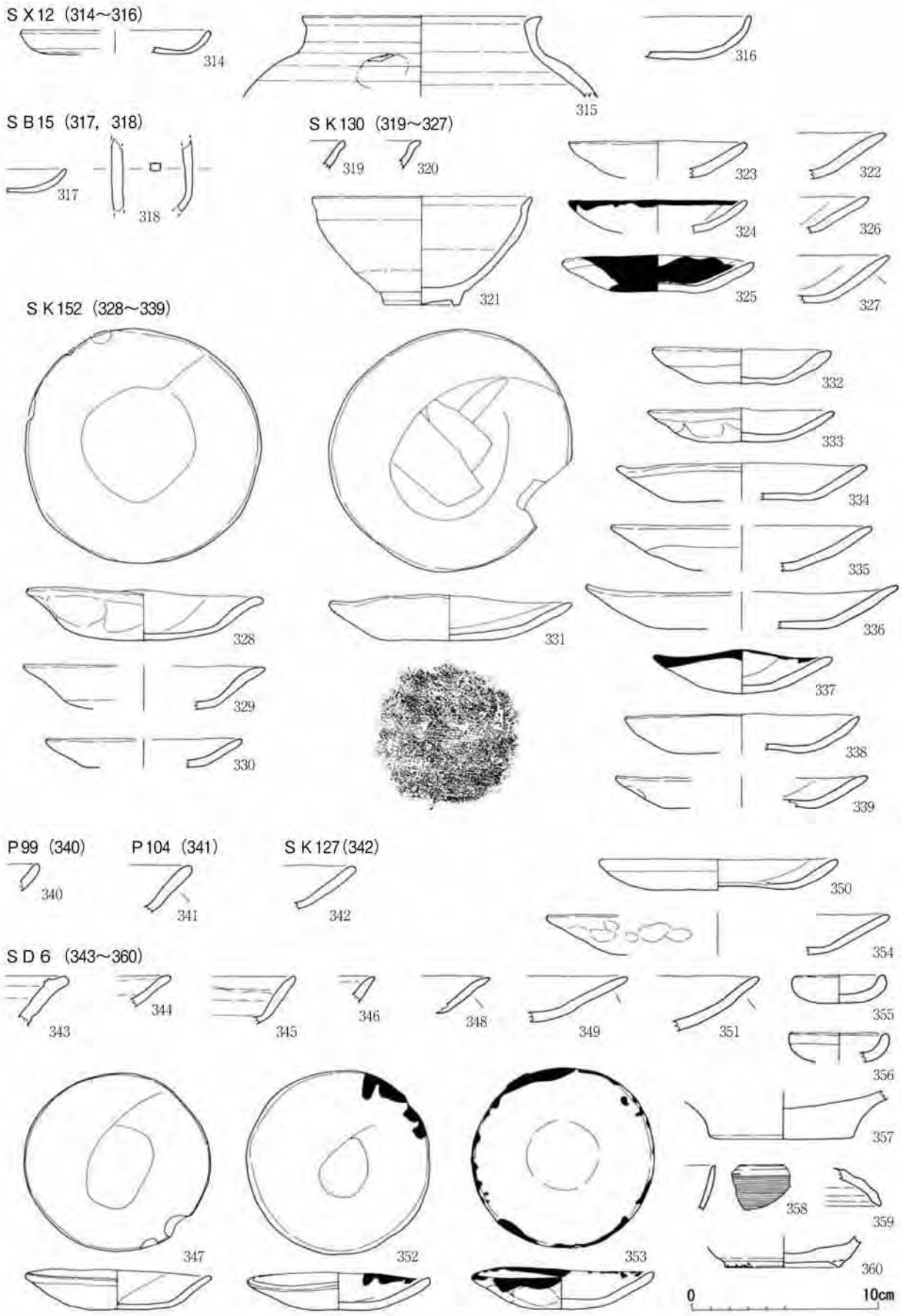
第35図　遺物実測図（５）


SB8 (223～239)
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
P16 (240)
240
SK88 (241)
241
SK85 (245)
245
P7 (244)
244
SK79 (242, 243)
242
243
SK60 (246)
246
SK62 (247)
247
SD10 (248)
248
P33 (249)
249
P63 (250)
250
P65 (251)
251
SK39 (259, 260)
259
260
SK4 (252～254)
252
253
254
SK23 (255～258)
255
256
257
258
263
SK16 (261～263)
261
262
0
10cm

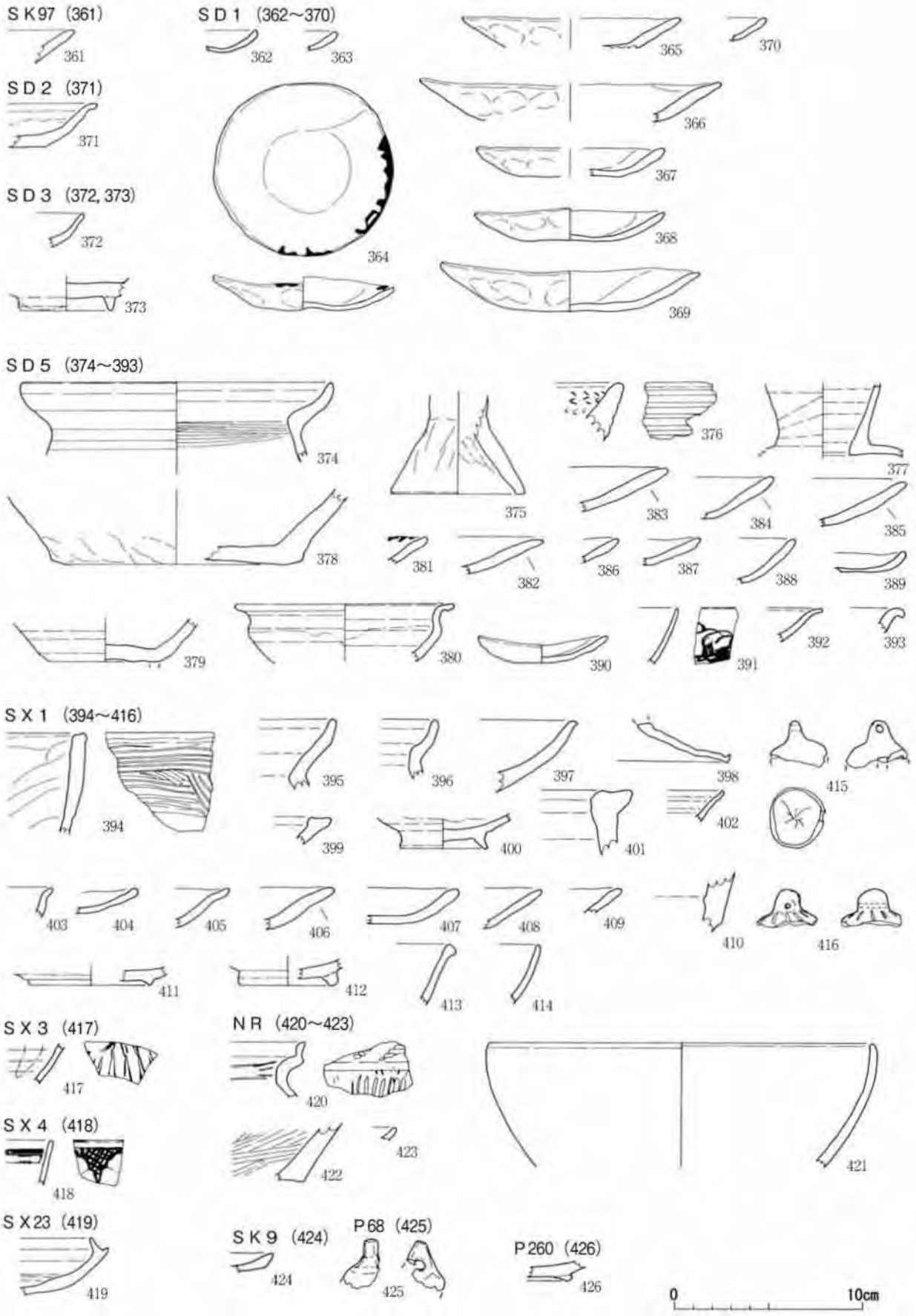
第36図　遺物実測図（6）


ＳＫ19（264～266）
264
265
266
ＳＫ20（267～271）
267
268
269
270
271
ＳＫ27（272）
272
ＳＫ47（273～280）
273
274
275
276
277
278
279
280
ＳＫ50（281）
281
ＳＫ３（282，283）
282
283
ＳＫ25（284～290）
284
285
286
287
288
289
290
ＳＫ32（291～293）
291
292
293
ＳＫ58（294～296）
294
295
296
ＳＫ24（297）
297
ＳＫ29（298，299）
298
299
0
10cm
ＳＫ139（307，308）
307
308
ＰＫ160（309）
309
0
10cm
ＳＫ129（300）
300
ＳＫ133（301）
301
ＰＫ135（311）
311
ＳＫ134（302～306）
302
303
306
304
305
ＰＫ144（312）
312

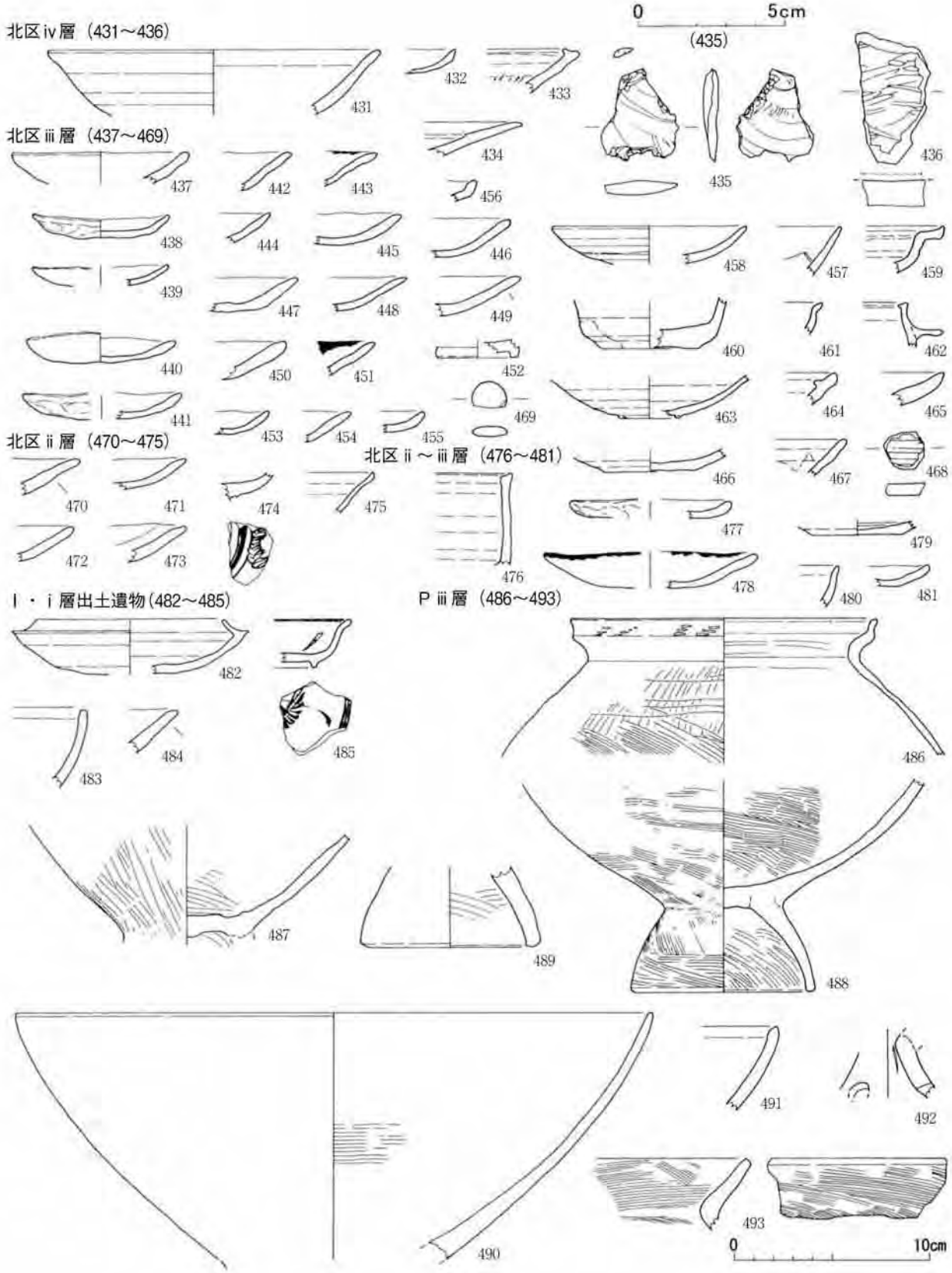
第37図　遺物実測図（７）


S X 12 (314～316)
314
315
316
S B 15 (317, 318)
317
318
S K 130 (319～327)
319
320
321
322
323
324
325
326
327
S K 152 (328～339)
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
P 99 (340)
340
P 104 (341)
341
S K 127 (342)
342
350
354
S D 6 (343～360)
343
344
345
346
348
349
351
355
356
357
358
359
360
347
352
353
0
10cm

第38図　遺物実測図（8）

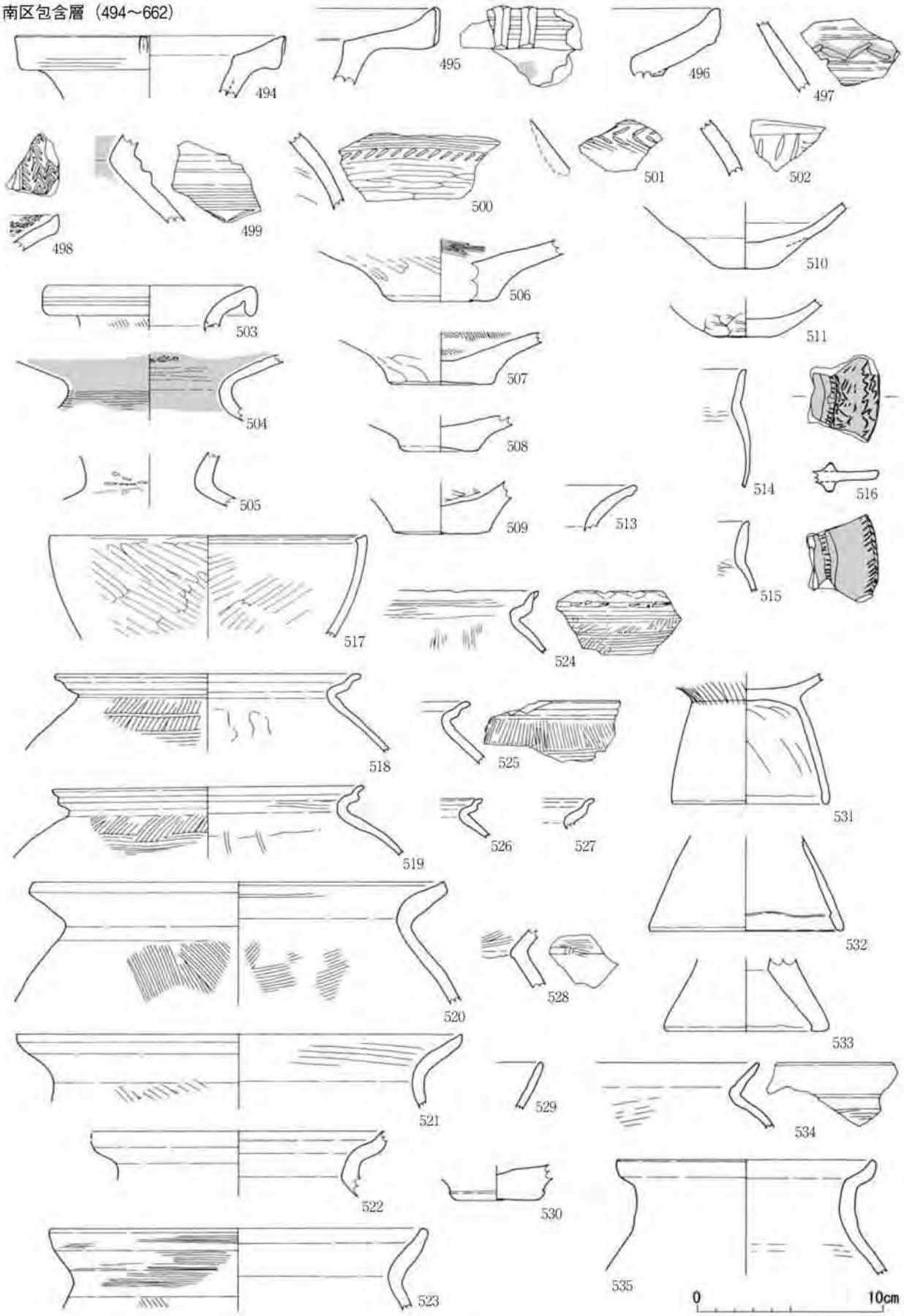

ＳＫ97（361）
361
ＳＤ１（362～370）
362
363
365
370
ＳＤ２（371）
371
366
367
ＳＤ３（372, 373）
372
364
368
373
369
ＳＤ５（374～393）
374
376
377
375
383
384
385
378
381
382
386
387
388
389
379
380
390
391
392
393
ＳＸ１（394～416）
395
396
397
398
415
394
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
416
411
412
413
414
ＳＸ３（417）
417
ＮＲ（420～423）
420
ＳＸ４（418）
418
422
423
421
ＳＸ23（419）
419
ＳＫ９（424）
424
Ｐ68（425）
425
Ｐ260（426）
426
0
10cm

第39図　遺物実測図（９）

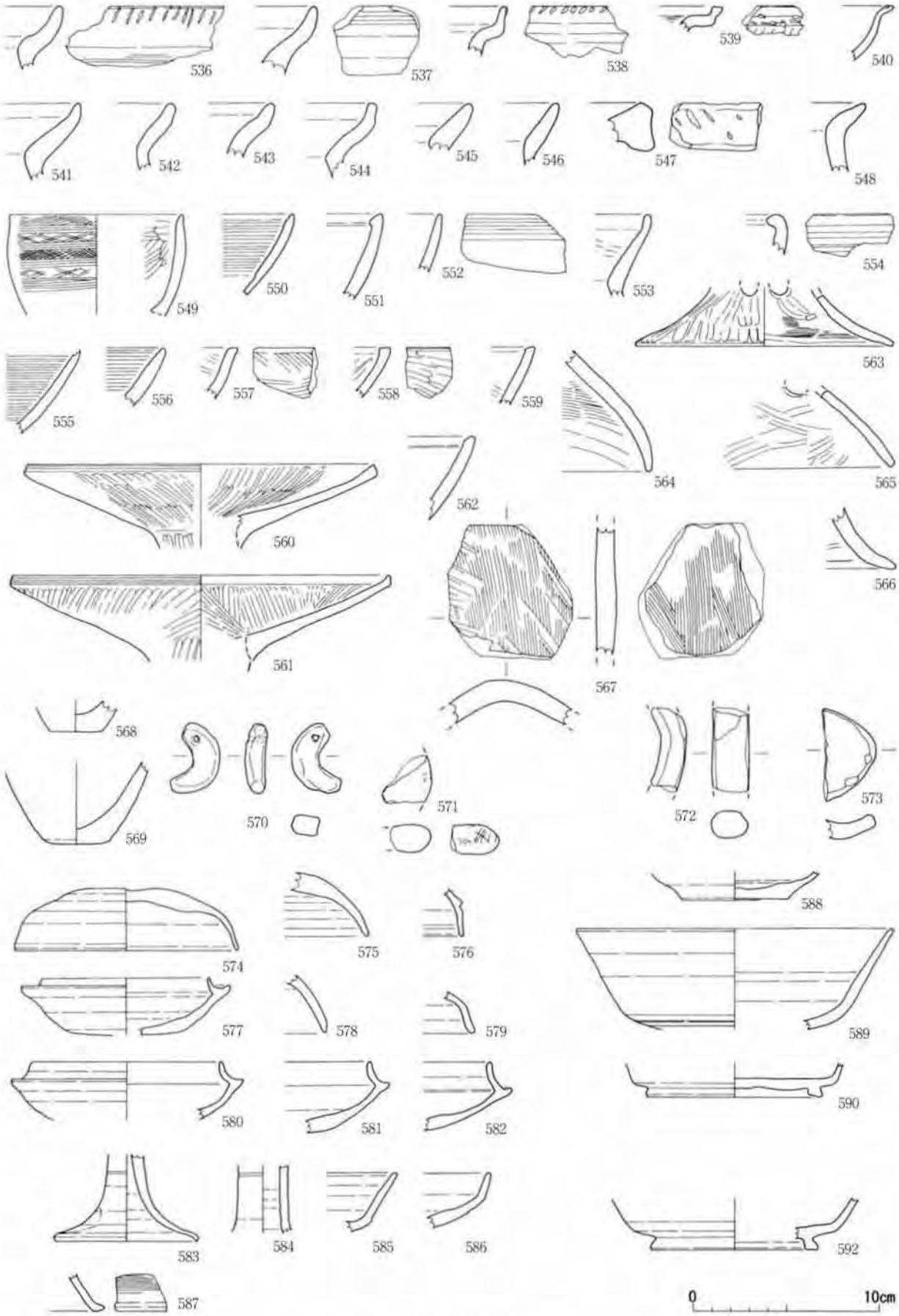


第40図　遺物実測図（10）

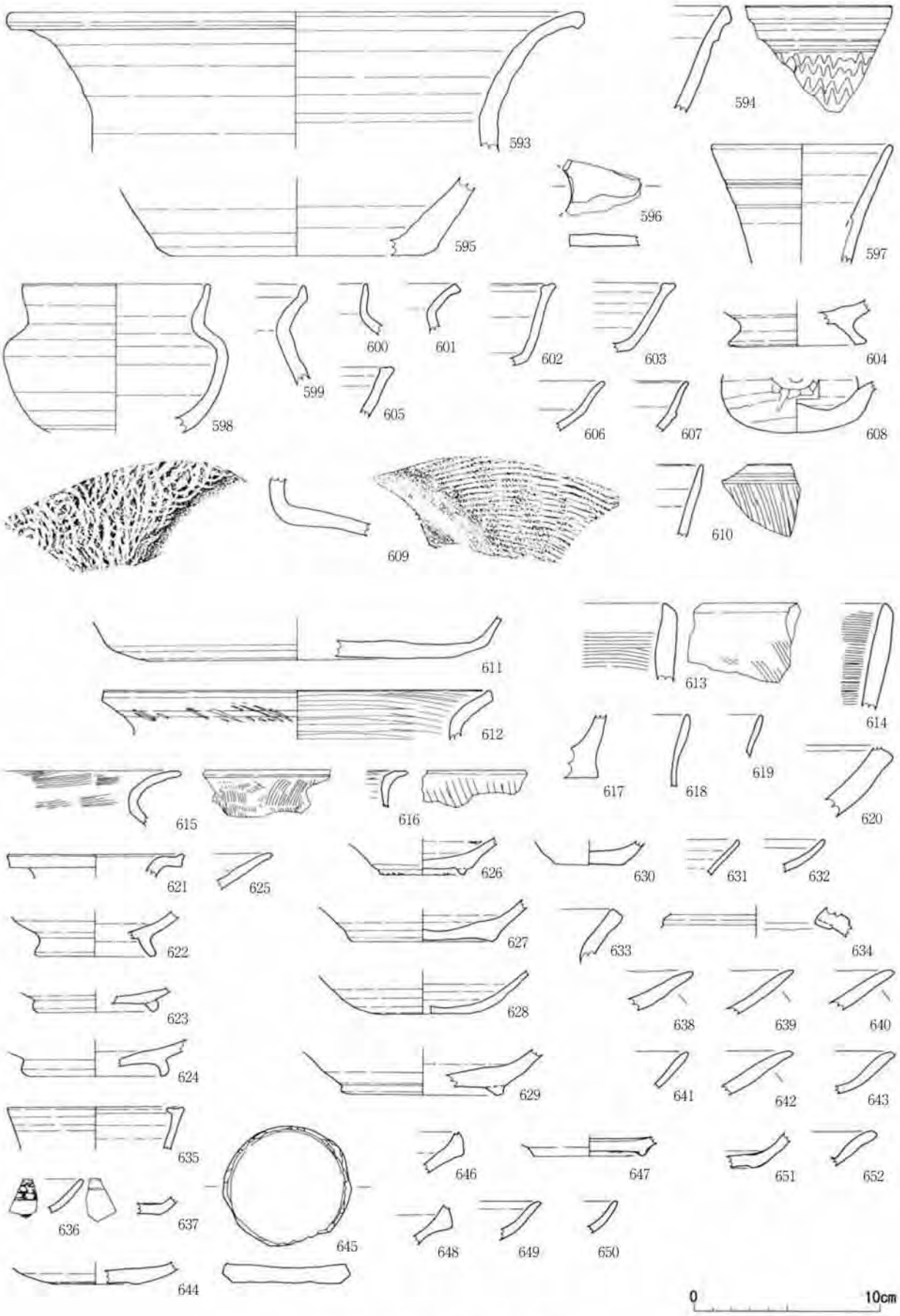
南区包含層（494～662）



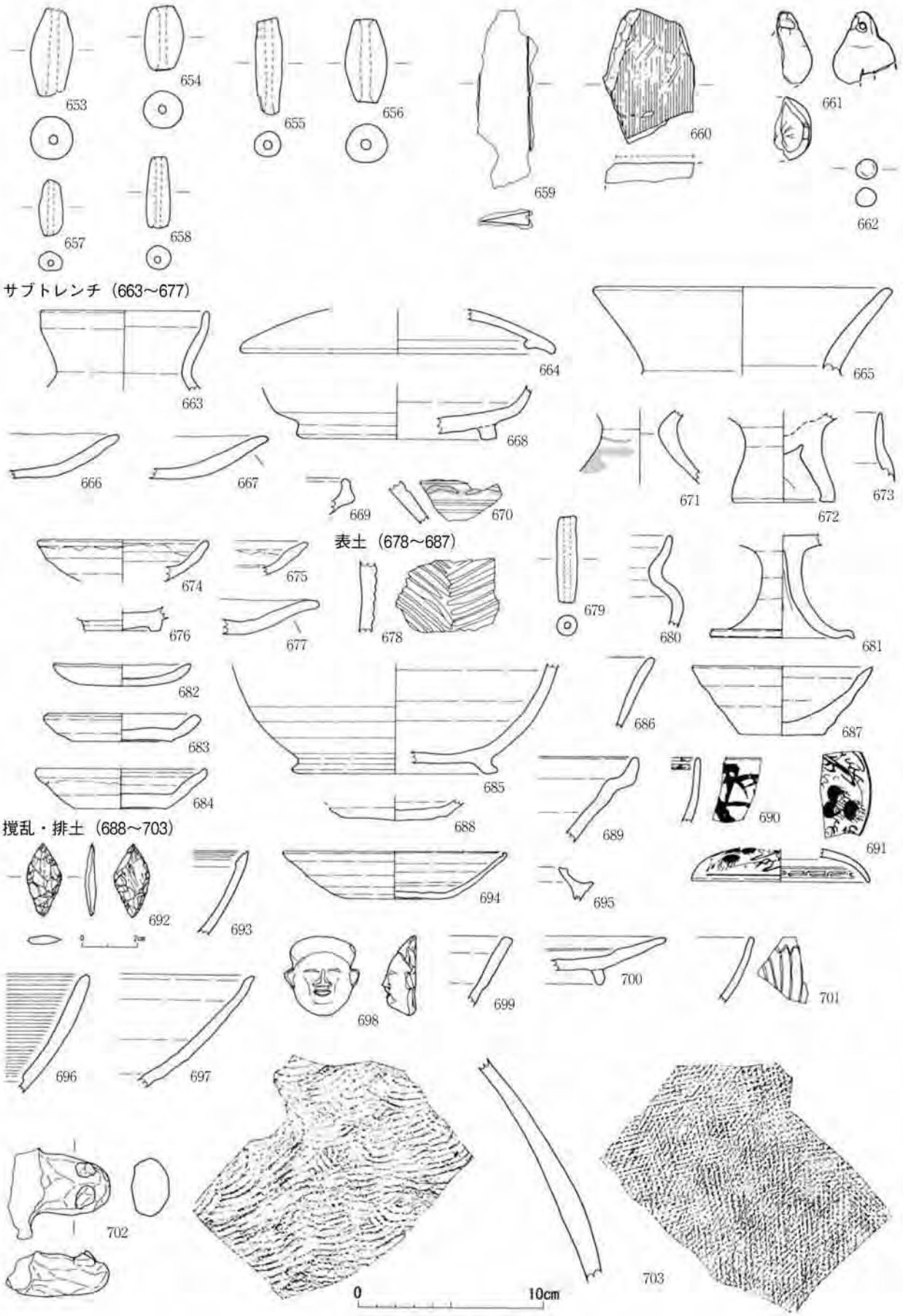
第41図　遺物実測図（11）



第42図　遺物実測図（12）



第43図　遺物実測図（13）



第44図　遺物実測図（14）

地区	遺構名	グリッド	検出面	時期	平面形	規　　模	計	土師	須恵	灰釉	尾型	東型	古瀬	古大	大窯	か	土製	鉄製	近世	そ の 他	整理番号
	ＳＢ																				
S	ＳＢ１	Ｋ３		1	方形	長辺5.04、短径4.41、深0.23	822	815	6								1			石製品１	30
S	ＳＢ２	Ｌ５		2-2	不明	長辺2.7、短辺(3.71)、深0.53	491	452	39											土師器？１	45
S	ＳＢ３	Ｈ０		2	不整形	長軸(2.87)、短軸(0.47)、深0.24	21	17	4												49
S	ＳＢ４	Ｉ６		2-3	方形	長辺3.05、短辺(2.00)、深0.23	516	466	50											須恵器？１	60
S	ＳＢ５	Ｉ５		2-2	不明	長軸(2.9)、短軸(2.57)、深0.26	127	120	7												64
S	ＳＢ６	Ｃ３		2-3	方形	長辺4.21、短辺3.86、深0.29	533	504	27								2				65
S	ＳＢ７	Ｍ６		2-1	方形	長辺(2.79)、短辺0.62、深0.17	35	31	4												67
S	ＳＢ８	Ｄ５		(2-3)	方形	長辺4.02、短辺3.57、深0.17	779	719	60												75
S	ＳＢ９	Ｃ５		2-1	方形	長辺(3.57)、短辺(3.37)、深0.15	35	35													76
S	ＳＢ10	Ｉ４		2-2	方形	長辺(4.07)、短辺(3.62)、深0.33	792	730	59			2					1				77
S	ＳＢ11	Ｉ４		2-2	長方形	長辺(2.83)、短辺(0.91)、深0.24	91	76	14								1				99
S	ＳＢ12	Ｈ４		2-2	長方形	長辺(2.68)、短辺2.68、深0.36	283	264	19												102
S	ＳＢ13	Ｆ３		2-2	方形	長辺2.97、短辺2.6、深0.19	73	64	8			1									130
S	ＳＢ14	Ｈ３		2-2	方形	長辺3.42、短辺3.05、深0.31	307	275	28			1					3				138
N	ＳＢ15-1	ｃ５	北iii	5-1	円形	長径0.41、短径0.39、深0.40	3	1								1		1		焼土塊２	320
N	ＳＢ15-2	ｄ４	北iii	5-1	円形	長径0.40、短径0.39、深0.40	9	6	2								1				319
N	ＳＢ15-3	ｄ６	北iii	5-1	楕円形	長径0.30、短径0.17、深0.61															386
N	ＳＢ15-4	ｄ４	北iii	5-1	楕円形	長径0.49、短径0.39、深0.72															339
N	ＳＢ15-5	ｅ５	北iii	5-1	円形	長径(0.36)、短径0.34、深0.39	2	2													334
N	ＳＢ15-6	ｅ５	北iii	5-1	楕円形	長径0.45、短径0.38、深0.44															335
N	ＳＢ16	ｍ６	北vi	1	不明	長辺(0.76)、短辺(0.73)、深0.47	11	11													371
N	ＳＢ17	ｌ６	北vi	1	方形	長辺3.02、短辺(2.62)、深0.34	119	119													372
N	ＳＢ18	ｂ５	北vi	1	方形	長辺(1.56)、短辺(1.43)、深0.04	44	44													497
	ＳＥ																				
N	ＳＥ１	ｋ１	北ｉ	6	楕円形	長径(3.17)、短径2.48、深1.88	1	1													308
N	ＳＥ２	ｄ６	北vi	1	不明	—	1	1													504
	ＳＤ																				
S	ＳＤ１	A3-A6		6	扁平Ｕ字形	長(10.20)、幅1.64、深0.59	170	115	20			6				29				不明陶器１	7
S	ＳＤ２	B5-D5		6	扁平Ｕ字形	長(10.00)、幅0.64、深0.21	47	37	9				1								10
S	ＳＤ３	G6-L4		6	Ｕ字形	長(17.89)、幅0.41、深0.25	143	112	14		2	2	3			7			3	近世？２	18
S	ＳＤ４	ｊ６		4	逆台形	長(1.89)、幅0.65、深0.19	10		6			1				3				陶器１	31
S	ＳＤ５	C1-F6		6	扁平Ｕ字形	長(9.96)、幅2.0、深0.8	1770	1371	191	21	10	26	2	8		141				陶器４・玉砂利？１	70
N	ＳＤ６	l1-n6	北ii or iii	5	Ｕ字形	長(8.87)、幅2.03、深0.69	330	227	36	18	2	12	5	6		24					332
N	ＳＤ７	d4-c6	北ｖ	2	Ｕ字形	長(5.8)、幅0.69、深0.24	12	11	1												415
N	ＳＤ８	b5-c5	北vi	1	扁平Ｕ字形	長(3.97)、幅1.18、深0.25	26	26												（Ｓ字甕２）	416
N	ＳＤ９	c4-d6	北ｖ	2(-2)	扁平Ｕ字形	長(6.60)、幅0.82、深0.18	10	10													466
N	ＳＤ10	c4-d4	北ｖ	2	Ｕ字形	長(2.58)、幅0.55、深0.20															467
N	ＳＤ11	d3-d6	北vi	1	Ｕ字形	長(3.48)、幅0.61、深0.19	9	8	1												468
N	ＳＤ12	c5-j2	北vi	1	Ｕ字形	長(11.10)、幅0.20、深0.21	83	80								3				（Ｓ字あり）	478

第３表　遺構・出土遺物集計表（１）

地区	遺構名	グリッド	検出面	時期	平面形	規　　模	計	土師	須恵	灰釉	尾型	東型	古瀬	古大	大窯	か	土製	鉄製	近世	そ の 他	整理番号
	ＳＫ																				
S	ＳＫ１	Ｉ４		4	方形	長辺1.08、短辺(0.72)、深0.28	75	71	4											不明陶器２	12
S	ＳＫ２	Ｃ５		2−1	不整円形	長辺(1.01)、短辺(0.86)、深0.21	47	34	13												15
S	ＳＫ３	Ｉ３		3 or 4	不整円形	長径(1.56)、短径(1.34)、深0.22	28	22	5				1							近世？１	20
S	ＳＫ４	Ｉ１		3	方形	長辺1.51、短辺1.86、深0.33	139	102	30	6	1										28
S	ＳＫ５	Ｋ５		4	不整円形	長径1.4、短径1.38、深0.49	16	13	3												35
S	ＳＫ６	Ｈ１		３？	不整楕円形	長径1.52、短径0.69、深0.43	26	15	11												41
S	ＳＫ７	Ｉ０		2	長方形	長辺1.28、短辺(1.14)、深0.52	61	45	16												44
S	ＳＫ８	Ｍ６		2−1	方形	長辺(0.99)、短辺(0.82)、深0.2	25	21	4												47
S	ＳＫ９	Ｇ１		—	方形	長辺2.23、短辺(0.85)、深0.19	60	51	8							1					48
S	ＳＫ10	Ｉ６		2−3	方形	長辺(1.54)、短辺(1.26)、深0.17	37	25	12												51
S	ＳＫ11	Ｋ３		(4)	不整形	長軸1.14、短軸(1.06)、深0.41	94	83	10					1							52
S	ＳＫ12	Ｌ６		—	長方形	長辺1.12、短辺(0.55)、深0.19	41	37	4											陶器１	53
S	ＳＫ13	Ｍ６		2	方形	長辺(0.91)、短辺(0.65)、深0.20	19	16	3												54
S	ＳＫ14	Ｌ６		2	不明	長軸(1.2)、短軸(0.45)、深0.15	14	13	1												55
S	ＳＫ15	Ｊ３		2−2	不整楕円形	長径1.25、短径1.06、深0.3	86	83	3												59
S	ＳＫ16	Ｉ２		4	不整形	長軸1.24、短軸1.06、深0.45	177	143	24	5		4						1			61
S	ＳＫ17	Ｋ６		2−2	方形	長辺(4.12)、短辺(2.17)、深0.29	230	212	18												63
S	ＳＫ18	Ｉ５		2−1	不明	長軸1.23、短軸(0.84)、深0.25	72	65	7												69
S	ＳＫ19	Ｉ２		4	楕円形	長径1.28、短径(0.98)、深0.28	64	56	5		2	1									71
S	ＳＫ20	Ｉ２		4	楕円形	長径(1.17)、短径0.82、深0.37	22	12	6		2		1			1				陶器２・瓦１・石製品１	72
S	ＳＫ21	Ｃ４		2−1	楕円形	長径(2.11)、短径1.4、深0.18	29	24	5												73
S	ＳＫ22	Ｌ５		1	不整方形	長軸2.48、短軸2.00、深0.25	122	122													74
S	ＳＫ23	Ｅ２		3	不整方形	長軸1.43、短軸1.18、深0.47	123	104	18	1											79
S	ＳＫ24	Ｋ３		4	不整楕円形	長径(1.53)、短径1.24、深0.33	115	95	13			5				2				焼塩１	81
S	ＳＫ25	Ｌ６		4	不整楕円形	長径2.63、短径1.95、深0.68	192	164	22			2	1			3					82
S	ＳＫ26	Ｈ６		2	方形	長辺(1.25)、短辺(0.34)、深0.33															83
S	ＳＫ27	Ｊ２		4	不整円形	長径(1.06)、短径0.99、深0.35	8	4	4												84
S	ＳＫ28	Ｄ１		2−2	不整円形	長径2.77、短径(0.86)、深0.26	84	79	5												85
S	ＳＫ29	Ｋ４		4	不整方形	長軸1.70、短軸1.47、深0.43	181	178	1			1	1								86
S	ＳＫ30	Ｉ２		4	不整楕円形	長径1.58、短径(1.28)、深0.39															87
S	ＳＫ31	Ｉ０		—	不整楕円形	長径1.04、短径(0.91)、深0.19	9	7	2												89
S	ＳＫ32	Ｌ５		4	不整円形	長径1.57、短径(1.07)、深0.19	82	64	13		1	2				2					90
S	ＳＫ33	Ｉ０		—	不整円形	長径0.5、短径0.39、深0.26	58	46	12												91
S	ＳＫ34	Ｇ３		2−1	不整形	長辺1.26、短辺9.6、深0.2	144	130	12								2			須恵器？１	95
S	ＳＫ35	Ｇ６		2−1	不整円形	長径2.02、短径1.54、深0.3	20	18	2												96
S	ＳＫ36	Ｆ４		2	長方形	長辺1.15、短辺0.89、深0.2	14	13	1												97
S	ＳＫ37	Ｃ６		2−1	長方形	長辺1.83、短辺(1.2)、深0.12	38	37	1												100
S	ＳＫ38	Ｇ６		2−1	不明	長辺(1.76)、短辺(1.32)、深0.21	19	18	1												101
S	ＳＫ39	Ｉ１		3	円形	長径1.12、短径(0.76)、深0.19	22	18	3	1										石製品１	103
S	ＳＫ40	Ｇ４		2−2	平行四辺形	長辺2.6、短辺2.34、深0.23	415	393	18	1							1	2			105
S	ＳＫ41	Ｅ３		—	楕円形	長径1.47、短径0.69、深0.11	7	7													106

第４表　遺構・出土遺物集計表（２）

地区	遺構名	グリッド	検出面	時期	平面形	規　　模	計	土師	須恵	灰釉	尾型	東型	古瀬	古大	大窯	か	土製	鉄製	近世	そ の 他	整理番号
S	SK42	E2		—	方形	長辺1.34、短辺0.83、深0.26	18	18													108
S	SK43	F1		2-1	不整方形	長辺(2.09)、短辺1.31、深0.46	73	62	9			1					1				109
S	SK44	F4		2-2	不整楕円形	長径1.34、短径1.13、深0.21	137	119	18												110
S	SK45	H1		3	楕円形	長径1.36、短径0.91、深0.48	63	56	6	1											112
S	SK46	H2		2	不整形	長辺1.91、短辺1.34、深0.34	37	36	1												113
S	SK47	I3		4	方形	長辺1.41、短辺1.26、深0.27	149	120	24	4			1							石製品2・古瀬戸？1	114
S	SK48	I3		4	不整円形	長径(1.18)、短径0.82、深0.32	17	17													115
S	SK49	G3		2	不整円形	長径(1.81)、短径1.34、深0.29	24	23	1												119
S	SK50	H0		4	不整形	長辺1.72、短辺1.44、深0.43	21	17	3			1									120
S	SK51	I3		4	長方形	長辺(1.3)、短辺1.08、深0.43	22	21	1												121
S	SK52	H4		2-2	不整楕円形	長径1.45、短径1.05、深0.32	141	132	7	2											122
S	SK53	I0		—	楕円形	長径(1.14)、短径0.89、深0.43	21	21													124
S	SK54	G1		(2)	不整円形	長径1.39、短径1.12、深0.41	55	46	9												125
S	SK55	G5		—	不整円形	長径0.81、短径0.61、深0.16	14	14													126
S	SK56	G1		2	不整楕円形	長径1.17、短径0.76、深0.3	22	21	1												127
S	SK57	G3		2(-2)	方形	長辺2.56、短辺(0.88)、深0.15	32	29	3												128
S	SK58	K4		4	楕円形	長径(1.86)、短径1.51、深0.25	77	61	8	1	3	2				2					129
S	SK59	G1		—	円形	長径1.05、短径(0.44)、深0.35	2	2													131
S	SK60	H0		(2)	楕円形	長径0.93、短径(0.62)、深0.4	22	19	3											焼塩4	132
S	SK61	G3		—	円形	長径0.4、短径(0.38)、深0.25															133
S	SK62	G1		2	不整円形	長径(1.32)、短径0.89、深0.21	81	78	3												134
S	SK63	H1		—	不整楕円形	長径1.18、短径(1.06)、深0.44	7	6	1											不明陶器1	135
S	SK64	G3		2(-2)	楕円形	長径(1.24)、短径(1.14)、深0.1	23	22									1				136
S	SK65	G2		—	不整円形	長径1.25、短径(0.67)、深0.2	13	13													139
S	SK66	G1		2	楕円形	長径(1.01)、短径0.87、深0.16	17	14	3												140
S	SK67	F1		—	不整形	長辺1.17、短辺(1.02)、深0.24	9	9													141
S	SK68	E1		2-1	不整形	長辺1.39、短辺(0.97)、深0.35	108	104	4												142
S	SK69	G3		2-2	楕円形	長径(1.38)、短径0.73、深0.26	62	58	4												143
S	SK70	L4		2-2	円形	長径1.93、短径(1.4)、深0.33	4	3	1												146
S	SK71	G4		—	不整形	長辺1.36、短辺1.07、深0.11	8	8													147
S	SK72	E2		3	不整形	長辺(1.62)、短辺(1.34)、深0.35	42	37	4	1											151
S	SK73	J5		2-2	不整形	長辺1.47、短辺0.95、深0.24	7	6	1												155
S	SK74	F4		—	不整形	長辺0.88、短辺(0.72)、深0.17	6	6													159
S	SK75	G3		3	不整円形	長径(1.24)、短径(1.22)、深0.34	56	51	3	2											161
S	SK76	G4		2	不整形	長辺(1.25)、短辺1.06、深0.23	6	5	1												163
S	SK77	G4		—	不整形	長辺1.47、短辺(1.38)、深0.2	4	4													164
S	SK78	F4		2	不整形	長辺0.81、短辺(0.69)、深0.26	3	2	1												165
S	SK79	F4		2-3	円形	長径0.69、短径(0.64)、深0.32	27	20	7												166
S	SK80	E1		—	不整形	長辺(1.32)、短辺(0.84)、深0.14	11	11													167
S	SK81	G6		2-1	不整円形	長径1.54、短径1.16、深0.24	35	32	3												168
S	SK82	G6		2	不整形	長辺(1.64)、短辺(1.01)、深0.12	68	56	12												169
S	SK83	F2		2-1	不整円形	長径(1.56)、短径(1.49)、深0.25	18	16	2												173

第5表　遺構・出土遺物集計表（3）

地区	遺構名	グリッド	検出面	時期	平面形	規　　模	計	土師	須恵	灰釉	尾型	東型	古瀬	古大	大窯	か	土製	鉄製	近世	そ の 他	整理番号
S	SK84	D1		—	不整形	長辺(1.55)、短辺(1.36)、深0.19	4	4													175
S	SK85	I3		2	不整円形	長径1.56、短径0.84、深0.37	40	39									1				176
S	SK86	E4		2	不整形	長辺(0.63)、短辺(0.42)	4	4													178
S	SK87	I4		4	方形	長辺1.22、短辺1.07、深0.35	10	3	1	1	3	1								常滑1	179
S	SK88	F4		2-2/3	不整円形	長径(0.98)、短径0.67、深0.18	13	10	3												181
S	SK89	I3		—	不整楕円形	長径1.39、短径(0.64)、深0.34	9	9													182
S	SK90	C2		3 or 4	不整形	長辺1.41、短辺0.55、深0.16	51	49	2												183
S	SK91	D4		4？	楕円形	長径(1.58)、短径0.81、深0.38	85	75	8	1		1									185
S	SK92	D4		1	楕円形	長径1.43、短径0.59、深0.21	48	48													186
S	SK93	B3		2-2	方形	長辺1.45、短辺(1.25)、深0.23	52	49	3											不明1	188
S	SK94	B3		2	長方形	長辺1.45、短辺(1.25)、深0.24	24	22	2												189
S	SK95	B4		1	不整形	長辺(1.4)、短辺1.3、深0.12	6	6													193
S	SK96	B3		2-1	方形	長辺1.55、短辺1.4、深0.13	9	8	1												194
S	SK97	A1		5	不整楕円形	長径1.5、短径(1.0)、深0.17	24	20				1				3					195
S	SK98	C4		—	不明	長辺(1.65)、短辺(1.5)、深0.1	105	105													197
S	SK99	H6		2(-1)	不整形	長辺(1.63)、短辺(1.34)、深0.17	103	98	4											焼塩1	199
S	SK100	B5		1	不整形	長辺1.6、短辺(1.2)、深0.32	81	81													200
S	SK101	E6		1	不整方形	長辺(2.46)、短辺(2.27)、深0.33	142	142													201
S	SK102	B1		—	円形	長径(0.8)、短径(0.6)、深0.28	9	9													204
S	SK103	H6		2-2	不明	長辺1.7、短辺(0.81)、深0.22	94	85	9											焼塩5	206
S	SK104	G6		2-1	不明	長辺(1.15)、短辺(1.1)、深0.15	12	12													210
S	SK105	C3		—	不整形	長辺2.1、短辺1.2、深0.14	8	8													211
S	SK106	C2		2-2	不明	長辺1.2、短辺(0.19)、深0.1															214
S	SK107	I5		2-2	不整楕円形	長径2.20、短径(0.56)、深0.11	107	97	9			1									222
S	SK108	B3		—	円形	長径(0.76)、短径1.18、深0.1	8	8													224
S	SK109	H2		2	不整円形	長径1.47、短径1.46、深0.21	10	8	2												226
S	SK110	G2		—	不整円形	長径1.82、短径1.65、深0.11	3	3													227
S	SK111	H3		2	不整楕円形	長径1.86、短径0.85、深0.35	6	5	1												228
S	SK112	H2		2	不整円形	長径(1.66)、短径(1.21)、深0.19	9	7	2												229
S	SK113	H2		2	不整円形	長径(0.54)、短径(0.52)、深0.16	18	17	1												230
S	SK114	G2		—	不整円形	長径(1.70)、短径(1.74)、深0.22	2	2													231
S	SK115	C4		—	円形	長径1.61、短径(1.47)、深0.18															233
S	SK116	I3		—	不整形	長辺2.04、短辺(0.58)、深0.07															242
S	SK117	F4		—	不整形	長辺1.38、短辺1.22、深0.11															243
S	SK118	G2		—	長方形	長辺(1.03)、短辺0.89、深0.16															246
S	SK119	H3		2	不整形	長辺(1.43)、短辺(0.59)、深0.12															254
S	SK120	I3		—	不整円形	長径1.03、短径(0.49)、深0.35															256
S	SK121	C4		—	不整円形	長径0.83、短径0.84、深0.13															258
S	SK122	C5		—	不整形	長辺1.34、短辺0.75、深0.23															259
S	SK123	K6		—	不整円形	長径2.25、短径(1.34)、深—															261
S	SK124	K3		2	不明	—															267
S	SK125	D5		—																	269
N	SK126	b5	北ii	5-2	不整形	長辺1.46、短辺0.52、深0.07	3	1	2												311

第6表　遺構・出土遺物集計表（4）

地区	遺構名	グリッド	検出面	時期	平面形	規　　模	計	土師	須恵	灰釉	尾型	東型	古瀬	古大	大窯	か	土製	鉄製	近世	そ の 他	整理番号
N	SK127	e 5	北ii	5-2	楕円形	長径2.26、短径1.01、深0.17	26	15	1					1		9					325
N	SK129	l 4	北iv	4	不整形	長辺0.91、短辺0.65、深0.16	16	15				1									341
N	SK130	e 4	北iii	5-1	楕円形	長径(1.29)、短径0.83、深0.41	73	14	7			1	2	3		35		11			342
N	SK131	c 4	北iv	4	円形	長径(0.92)、短径0.92、深0.32	2	2													345
N	SK132	d 4	北iv	4	長方形	長辺0.64、短辺0.28、深0.20															350
N	SK133	f 5	北iv	4	不整円形	長径0.90、短径0.60、深0.29	35	20	3				1			11					363
N	SK134	i 4	北iv	4	不整形	長辺4.17、短辺3.40、深0.51	161	93	17	1		9	10			31					367
N	SK135	d 6	北iv	4	円形	長径0.40、短径0.33、深0.34	5	5													370
N	SK136	l 5	北vi	—	不整円形	長径(0.46)、短径0.44、深0.19															374
N	SK137	l 5	北vi	—	不整円形	長径0.95、短径(0.63)、深0.17															375
N	SK138	l 5	(北vi)	2-1	不整形	長径(1.79)、短径0.94、深0.19	28	27	1												376
N	SK139	h 2	北iv	4	円形	長径(0.82)、短径0.79、深0.49	32	26	3	1						1		1			390
N	SK140	d 4	北iv	4	長方形	長辺0.72、短辺(0.69)、深0.12	4	1				2		1							412
N	SK141	d 4	北iv	4	不整楕円形	長径(1.47)、短径0.95、深0.10	1	1													413
N	SK142	b 5	北iv	4	円形	長径0.69、短径(0.19)、深0.34															417
N	SK143	g 5	北vi	1	不整円形	長径0.80、短径0.75、深0.19															429
N	SK144	d 5	北iv	4	不整形	長辺(2.16)、短辺1.03、深0.47															431
N	SK145	j 2	—	—	楕円形	長径(1.83)、短径(0.58)、深0.16															445
N	SK146	k 4	—	—	楕円形	長径0.78、短径0.64、深0.17															476
N	SK147	l 1	—	—	不整楕円形	長径1.46、短径(1.16)、深0.47															500
N	SK148	c 4	北vi		楕円形	長径0.80、短径0.48、深0.16															503
N	SK149	k 5	—	—	円形	長径1.59、短径(0.70)、深0.34															520
N	SK150	k 4	—	—	不整楕円形	長径0.69、短径0.51、深0.28															521
S	SK151	C 5		2-1	不明	長辺(0.62)、短辺(0.5)、深0.21	7		7												104
N	SK152	f 4	北iii	5-1	不整楕円形	長径(2.06)、短径0.73、深0.23	71	12	2	2		2				53					330
P	SK160				欠番																
P	SK161		Piii	—	楕円形	長径0.77、短径(0.25)、深0.18															
P	SK162		Piv	—	楕円形	長径0.69、短径(0.17)、深0.18															
SA																					
S・N	SA1	o1-A6	I	6	—	長(17.26)、幅2.17、高0.76	78	29	20	2		2		7			1		17	瓦1・青磁1	268
N	SA2-1	c 5	北ii	5-2	楕円形	長径0.52、短径0.38、深0.15	1	1													322
N	SA2-2	c 5	北ii	5-2	円形	長径0.49、短径0.41、深0.17															323
N	SA2-3	d 5	北ii	5-2	楕円形	長径0.60、短径0.48、深0.30															328
SX																					
S	SX1	A1-B6		6	不整形	—	565	418	47	11	1	19	2			30			36	弥生1・磁器8・瓦2・瓦器2	1
S	SX2	B4-C4		6	不明	—	155	136	17	1							1			不明陶器2	2
S	SX3	C5-C6		6	不明	—	25	21	3										1		5
S	SX4	J 2		6	不明	—															13
S	SX5	F 5		6	不明	—	11	9	1					1							22

第7表　遺構・出土遺物集計表（5）

地区	遺構名	グリッド	検出面	時期	平面形	規　　模	計	土師	須恵	灰釉	尾型	東型	古瀬	古大	大窯	か	土製	鉄製	近世	そ の 他	整理番号
N	SX6	f3-i5	北i	6	長方形	長辺(10.72)、短辺7.46、深0.35	126	102	12					4		4			4	瓦2	301
N	SX7	j5-m6	北i	6	長方形	長辺(9.22)、短辺(1.22)、深0.18	158	134	12			2	1			9					302
N	SX8	g2-i2	北i	6	長方形	長辺(3.46)、短辺(0.30)、深0.21	44	37	2			2						3		石器1・陶器1	303
N	SX9	m1	北i	6	不明	—	428	312	37	6	1	8	1	6		37		4	16	瓦1	304
N	SX10	m4-p6	北i	6	長方形	長辺(7.64)、短辺3.95、深0.35	92	68	8			4		2		5	1	1	3	陶器1	306
N	SX11	j2-l1	北i	6	長方形	長辺(10.28)、短辺(1.04)、深0.36	47	37	4	1	1					4				瓦1	307
N	SX12	b5	北iii	5-1	不明	—	52	33	8	1		1	2	1		6					331
P	SX20		—	—	不整形	長辺(0.99)、短辺(0.27)、深0.12	4	4													
P	SX21		Piii	1	不整形	長辺4.58、短辺(1.01)、深0.13	56	56													
P	SX22		Piii	—	不整形	長辺(2.13)、短辺(1.42)、深0.14															
P	SX23		Piii	—	不整形	長辺(2.25)、短辺(1.55)、深0.30															
P																					
S	P1	K4		—	円形	径0.29、深0.1	1	1													17
S	P2	J4		2	方形	一辺0.54、深0.37	3	2	1												19
S	P3	K4		—	円形	径0.24、深0.1															21
S	P4	H1		—	円形	径0.57、深0.1	9	9													24
S	P5	E3		2	不整円形	長径(0.49)、短径(0.47)、深0.07	2		2												25
S	P6	E3		—	円形	径0.47、深0.15															26
S	P7	F5		2-2/3	円形	径0.11、深-	36	4	32												32
S	P8	I2		—	円形	径0.41、深0.12															33
S	P9	I3		2	円形	径0.49、深0.13	29	25	4												34
S	P10	G3		2	円形	径0.50、深0.5	11		11												40
S	P11	F1		—	円形	径0.53、深0.37	18		18												42
S	P12	H0		2	円形	長径0.71、短径(0.3)、深0.34	17		17												43
S	P13	L5		2	円形	径0.3、深0.18	5	4	1												56
S	P14	L5		2	不明	—	3	3													57
S	P15	I5		3 or 4	楕円形	長径1.05、短径0.65、深0.59	60	59	1												58
S	P16	I5		2-3	円形	長径1.79、短径(1.16)、深0.73	17	17													62
S	P17	K2		2	不整円形	長径0.87、短径0.43、深0.05	5	4	1												66
S	P18	K5		2-2	円形	長径0.6、短径0.77、深0.38	21	20	1												68
S	P19	D1		—	不明	長辺(0.78)、短辺0.64、深0.23	2	2													78
S	P20	H6		2-2/3	円形	長径0.54、短径0.41、深0.3	2		2												80
S	P21	F3		2	長方形	長辺(1.02)、短辺0.72、深0.15	11	10	1												88
S	P22	J5		2-2	円形	長径0.5、短径0.39、深0.26	3	2	1												92
S	P23	H6		—	不整円形	長径(0.75)、短径0.74、深0.31	12	12													93
S	P24	E3		3 or 4	不整楕円形	長径1.38、短径0.29、深0.09	4	2			1	1									94
S	P25	E3		2	楕円形	長径0.85、短径0.84、深0.08	4	2	2												98
S	P27	F3		1	不整形	長辺0.89、短辺(0.64)、深0.08	5	5													107
S	P28	K3		—	楕円形	長径0.45、短径0.37、深0.08															111
S	P29	G1		(2)	円形	径0.4、深0.12	6	5	1												117
S	P30	I0		(2)	円形	径0.76、深0.27	27	25	2												118

第8表　遺構・出土遺物集計表（6）

地区	遺構名	グリッド	検出面	時期	平面形	規　　模	計	土師	須恵	灰釉	尾型	東型	古瀬	古大	大窯	か	土製	鉄製	近世	そ の 他	整理番号
S	P31	G1		2-1	楕円形	長径0.93、短径0.54、深0.26	39	37	2												123
S	P32	G3		2	楕円形	長径1.38、短径0.95、深0.3	8	8													137
S	P33	E1		2	長方形	長辺(0.91)、短辺(0.81)、深0.2	13	5	6	2											144
S	P34	F2		—	不整楕円形	長径1.1、短径(0.52)、深0.21	5	5													145
S	P35	G4		—	不整形	長辺0.88、短辺0.42、深0.35	5	5													148
S	P36	L6		—	楕円形	長径1.11、短径(0.93)、深0.15	7	7													149
S	P37	F2		2-1	楕円形	長径(0.93)、短径0.84、深0.22	1		1												150
S	P38	G3		2	不明	長辺(0.76)、短辺(0.57)、深0.26	1		1												152
S	P39	J3		4	楕円形	長径0.67、短径(0.55)、深0.07	5	5													153
S	P40	F2		—	不整円形	長径1.08、短径(0.78)、深0.25	5	5													154
S	P41	J4		4	不整円形	長径1.08、短径0.79、深0.3	2	1		1											156
S	P42	L6		—	楕円形	長径0.75、短径(0.7)、深0.14	4	4													157
S	P43	J5		—	円形	長径0.95、短径(0.48)、深0.34	8	8													158
S	P44	M6		—	不明	長辺(0.88)、短辺(0.72)、深0.09	44	44													160
S	P45	J5		—	不明	長辺0.88、短辺0.39、深0.07	4	4													162
S	P46	D3		3 or 4	円形	長径0.49、短径0.41、深0.08	17	10	4		1					2					171
S	P47	J3		—	不整円形	長径1.06、短径0.58	9	9													172
S	P48	D3		3 or 4	円形	長径0.43、短径0.4、深0.09	15	12	2							1					174
S	P49	D2		—	円形	長径0.73、短径0.55、深0.1	9	9													177
S	P50	J4		—	円形	長径0.78、短径0.70、深0.06	1	1													180
S	P51	H3		2	円形	長径0.41、短径0.32、深0.08	6	4	2												184
S	P52	B5		—	不明	長辺2.07、短辺1.87、深0.23	1	1													187
S	P53	A3		—	方形	長辺(0.6)、短辺0.45、深0.03	6	6													191
S	P54	B5		—	円形	長径0.95、短径(0.5)、深0.16	28	28													192
S	P55	B5		—	不明	長辺0.65、短辺0.4	8	8													196
S	P56	G5		—	不整円形	長径1.63、短径1.46、深0.48	5	5													198
S	P57	A3		1	不整形	長辺1.55、短辺(0.6)、深0.08	5	5													202
S	P58	B1		—	楕円形	長径(0.95)、短径0.9、深0.25	7	7													203
S	P59	F4		1	不整円形	長径(1.41)、短径1.36、深0.18	6	6													205
S	P60	D5		2	不整形	長辺0.75、短辺0.52、深0.15	6	5	1												207
S	P61	H6		2	不明	長辺(0.68)、短辺(0.54)、深0.03	35	34	1												209
S	P62	B2		1	不整形	長辺1.0、短辺0.9、深0.14	19	19													212
S	P63	C3		2	楕円形	長径0.53、短径0.41、深0.2	6	4	2												213
S	P64	C2		3？	不明	長辺0.53、短辺0.41、深0.4	15	13	1	1											215
S	P65	H6		—	円形	長径(0.51)、短径(0.46)、深0.22	8	8												土師器？1	216
S	P66	B4		1	円形	長径0.80、短径(0.50)、深0.46	23	23													217
S	P67	B2		2-1	円形	長径0.89、短径0.72、深0.22	4	3	1												218
S	P68	H6		—	円形	長径0.87、短径(0.62)、深0.38	18	15	2								1				219
S	P69	I5		2	楕円形	長径1.18、短径0.78、深0.29	23	20	3												220
S	P70	B3		—	不明	長辺1.25、短辺(1.00)、深0.4	3	3													221
S	P71	G1		—	不明	長辺(0.71)、短辺(0.47)、深0.1	4	4													223
S	P72	B3		—	円形	長径0.37、短径0.33、深0.15	1	1													225
S	P73	H2		2	円形	長径(0.54)、短径(0.52)、深0.21	1		1												232

第9表　遺構・出土遺物集計表（7）

地区	遺構名	グリッド	検出面	時期	平面形	規　　模	計	土師	須恵	灰釉	尾型	東型	古瀬	古大	大窯	か	土製	鉄製	近世	そ の 他	整理番号
S	P74	H 6		—	円形	長径(0.50)、短径(0.40)、深0.19															234
S	P75	A 1		—	不整形	長辺0.75、短辺(0.5)、深0.60															235
S	P76	B 3		—	楕円形	長径0.55、短径0.40、深0.15															236
S	P77	B 6		—	楕円形	長径(0.80)、短径(0.56)、深0.04															237
S	P78	B 3		—	円形	長径0.37、短径0.29、深0.17															238
S	P79	B 4		—	円形	長径1.20、短径(1.10)、深0.51															239
S	P80	D 5		—	不明	長辺(1.09)、短辺(0.86)、深0.23															240
S	P81	E 6		—	円形	長径0.43、短径0.40、深0.26															241
S	P82	G 4		—	不明	長辺0.91、短辺(0.61)、深0.20															244
S	P83	E 2		—	円形	長径0.84、短径(0.29)、深0.90															245
S	P84	G 2		—	円形	長径0.34、短径0.32、深0.15															247
S	P85	F 2		—	不明	長辺(0.89)、短辺(0.24)、深0.15															248
S	P86	F 2		—	不明	長辺(1.05)、短辺(0.39)、深0.19															249
S	P87	F 2		—	楕円形	長径1.36、短径0.24、深0.16															250
S	P88	G 6		—	不整楕円形	長径0.81、短径0.59、深-															251
S	P89	H 3		—	円形	長径0.41、短径0.39、深-															252
S	P90	J 4		—	不整楕円形	長径0.90、短径0.54、深0.15															253
S	P91	I 3		—	円形	長径0.32、短径0.29、深0.04															255
S	P92	H 0		—	円形	長径(0.81)、短径(0.28)、深0.11															257
S	P93	F 5		—	円形	長径0.31、短径0.28、深0.26															260
S	P94	H 2		—	円形	長径0.53、短径0.48、深0.30															262
N	P95	c 5	北ii	5-2	円形	長径0.22、短径0.18、深0.05															315
N	P96	c 5	北ii	5-2	円形	長径0.40、短径0.32、深0.10															316
N	P97	c 5	(北i)	—	楕円形	長径0.17、短径0.10、深0.06															321
N	P98	c 5	北iii	5-1	不明	長辺(0.47)、短辺0.12、深0.15	1	1													324
N	P99	d 4	北iii	5-1	楕円形	長径0.60、短径0.48、深0.30	5		1			1				3					326
N	P100	e 6	(北i)	—	円形	長径0.31、短径0.24、深0.17	5	2	1	1	1										327
N	P101	e 5	(北i)	—	円形	長径0.42、短径0.19、深0.12	1	1													329
N	P102	d 4	(北i)	—	円形	長径0.31、短径0.30、深0.17															333
N	P103	f 4	北iii	5-1	円形	長径2.90、短径(2.00)、深0.08	5	5													336
N	P104	f 4	北iii	5-1	不整方形	長辺0.37、短辺0.26、深0.20	5		1					1		3					337
N	P105	f 4	北iii	5-1	円形	長径0.28、短径0.25、深0.12	4	1					1			2					338
N	P106	d 4	北iv	4	円形	長径0.56、短径0.54、深0.20	1	1													340
N	P107	c 4	北iv	4	楕円形	長径(0.49)、短径(0.29)、深0.17															343
N	P108	c 5	北iv	4	円形	長径0.43、短径0.41、深0.35															344
N	P109	d 4	北iv	4	楕円形	長径0.41、短径0.24、深0.18															346
N	P110	d 4	北iv	4	楕円形	長径0.41、短径0.35、深0.11	1	1													347
N	P111	d 4	北iv	4	円形	長径0.19、短径0.18、深0.07															348
N	P112	d 4	北iv	4	円形	長径0.29、短径0.25、深0.46															349
N	P113	c 5	北iii	5-1	円形	長径0.16、短径0.15、深0.07															351
N	P114	d 5	北iii	5-1	円形	長径0.27、短径0.24、深0.09															352
N	P115	d 5	北iv	4	円形	長径0.26、短径0.22、深0.19															353
N	P116	e 5	北iv	4	円形	長径0.25、短径0.24、深0.05															354

第10表　遺構・出土遺物集計表（8）

地区	遺構名	グリッド	検出面	時期	平面形	規　　模	計	土師	須恵	灰釉	尾型	東型	古瀬	古大	大窯	か	土製	鉄製	近世	そ の 他	整理番号
N	P117	e 5	北iv	4	円形	長径0.20、短径0.17、深0.04															355
N	P118	f 4	北iv	4	円形	長径(0.30)、短径(0.11)、深0.09															356
N	P119	h 3	北iv	4	円形	長径0.57、短径(0.25)、深0.11	9	5	1		1	2									357
N	P120	g 3	北iv	4	楕円形	長径0.19、短径0.14、深0.05	5	4		1											358
N	P121	i 2	北iv	4	円形	長径0.26、短径0.22、深0.10	2	2													359
N	P122	h 4	北iv	4	円形	長径0.40、短径(0.24)、深0.19	5	4						1							360
N	P123	h 3	北iv	4	楕円形	長径0.41、短径0.34、深0.12	4	3	1												361
N	P124	e 5	北iv	4	円形	長径0.37、短径0.34、深0.07															362
N	P125	i 3	北iv	4	円形	長径0.33、短径0.32、深0.04															364
N	P126	e 6	北iv	4	円形	長径0.46、短径0.41、深0.09															366
N	P127	h 5	北iv	4	円形	長径0.22、短径0.17、深0.27															368
N	P128	l 5	北vi	—	円形	長径0.40、短径(0.32)、深0.11	5	5													373
N	P129	l 5	北vi	—	不整円形	長径0.24、短径0.20、深0.14	11	11													377
N	P130	l 5	北vi	—	円形	長径0.24、短径0.22、深0.25	2	2													378
N	P131	l 5	北vi	—	円形	長径0.10、短径0.08、深0.33															379
N	P132	l 5	北vi	—	円形	長径0.12、短径0.10、深0.10															380
N	P133	c 4	北iv	4	円形	長径0.40、短径0.40、深0.11															381
N	P134	d 4	北iv	4	楕円形	長径0.33、短径0.24、深0.13	1	1													382
N	P135	d 4	北iv	4	不整形	長辺0.37、短辺0.30、深0.14	5	4								1					383
N	P136	c 4	北iv	4	楕円形	長径(0.45)、短径0.38、深0.06															384
N	P137	c 4	北iv	4	楕円形	長径0.32、短径(0.27)、深0.07															385
N	P138	f 3	北iv	4	円形	長径0.20、短径(0.19)、深0.13															387
N	P139	g 3	北iv	4	円形	長径0.20、短径0.17、深0.10	2									2					388
N	P140	h 3	北iv	4	楕円形	長径(0.39)、短径0.19、深0.07															389
N	P141	i 2	北iv	4	円形	長径0.27、短径0.26、深0.29	1	1													391
N	P142	h 3	北iv	4	楕円形	長径0.30、短径0.24、深0.23															392
N	P143	i 3	北iv	4	円形	長径0.34、短径0.27、深0.21															393
N	P144	h 4	北iv	4	円形	長径0.32、短径0.31、深0.45	3	3													394
N	P145	h 3	北iv	4	円形	長径0.34、短径0.29、深0.40															395
N	P146	g 5	北iv	4	円形	長径0.16、短径0.14、深0.15															396
N	P147	g 5	北iv	4	円形	長径0.22、短径0.21、深0.30															397
N	P148	h 5	北iv	4	円形	長径0.27、短径0.26、深0.24															398
N	P149	h 5	北iv	4	円形	長径0.42、短径0.41、深0.37	3	2				1									399
N	P150	h 5	北iv	4	円形	長径0.57、短径0.56、深0.70															400
N	P151	g 3	北iv	4	円形	長径0.25、短径(0.15)、深0.14															401
N	P152	d 4	北iv	4	円形	長径0.29、短径0.20、深0.11															402
N	P153	d 4	北iv	4	不整円形	長径0.27、短径0.26、深0.19	1	1													403
N	P154	d 4	北iv	4	円形	長径0.25、短径0.24、深0.11															404
N	P155	d 4	北iv	4	方形	長辺0.45、短辺0.44、深0.16															405
N	P156	d 4	北iv	4	楕円形	長径0.30、短径0.27、深0.13															406
N	P157	d 4	北iv	4	円形	長径0.29、短径0.28、深0.19	2	1	1												407
N	P158	d 4	北iv	4	円形	直径0.17、深0.14															408
N	P159	d 4	北iv	4	円形	長径0.23、短径0.22、深0.17	1	1													409

第11表　遺構・出土遺物集計表（9）

地区	遺構名	グリッド	検出面	時期	平面形	規　　模	計	土師	須恵	灰釉	尾型	東型	古瀬	古大	大窯	か	土製	鉄製	近世	そ の 他	整理番号
N	P160	d 4	北iv	4	円形	長径0.46、短径0.44、深0.64															410
N	P161	d 5	北iv	4	楕円形	長径0.30、短径0.23、深0.28															411
N	P162	d 5	北iv	4	楕円形	長径0.42、短径0.28、深0.14	1	1													414
N	P163	e 4	北iv	4	不明	—	3	2				1									418
N	P164	g 5	北iv	4	円形	長径0.40、短径0.38、深0.20															419
N	P165	g 5	(北vi)	−	円形	長径0.45、短径0.44、深0.31	7	4				2		1							420
N	P166	h 5	北vi	1	不整円形	長径0.50、短径0.47、深0.37	2	2													421
N	P167	h 5	北vi	1	円形	長径0.24、短径0.24、深0.22															422
N	P168	e 3	北vi	1	楕円形	長径0.36、短径0.25、深0.31	1	1													423
N	P169	e 4	北vi	1	円形	長径0.59、短径0.57、深0.23															424
N	P170	e 5	北iv	4	円形	直径0.25、深0.12															425
N	P171	f 5	北vi	1	円形	長径0.28、短径0.26、深0.24															426
N	P172	f 6	北vi	1	不整円形	長径0.49、短径0.41、深0.49	1	1													427
N	P173	f 5	北vi	1	円形	長径0.48、短径0.47、深0.53															428
N	P174	d 5	北iv	4	円形	長径0.27、短径0.26、深0.27															430
N	P175	l 1	—	—	円形	長径(0.36)、短径(0.18)、深0.12															432
N	P176	l 1	—	—	楕円形	長径0.17、短径0.13、深0.05															433
N	P177	m 1	—	—	楕円形	長径(0.20)、短径0.15、深0.05															434
N	P178	l 1	—	—	楕円形	長径0.37、短径0.21、深0.05															435
N	P179	m 1	—	—	楕円形	長径0.54、短径0.37、深0.16															436
N	P180	m 1	—	—	円形	長径0.44、短径0.40、深0.10															437
N	P181	m 1	—	—	楕円形	長径0.25、短径0.20、深0.06															438
N	P182	m 1	—	—	円形	直径0.07、深0.05															439
N	P183	m 1	—	—	円形	直径0.30、深0.06															440
N	P184	m 2	—	—	楕円形	長径0.21、短径0.17、深0.10															441
N	P185	m 2	—	—	円形	長径0.37、短径0.34、深0.08															442
N	P186	l 1	—	—	不明	長辺(0.25)、短辺(0.27)、深0.15															443
N	P187	j 2	—	—	円形	長径0.25、短径0.23、深0.17															444
N	P188	j 2	—	—	円形	長径0.28、短径0.22、深0.11															446
N	P189	k 1	—	—	円形	長径0.29、短径0.26、深0.09															447
N	P190	h 6	—	—	楕円形	長径0.45、短径0.37、深0.19															448
N	P191	h 5	—	—	円形	直径0.24、深0.19															449
N	P192	k 6	—	—	楕円形	長径0.45、短径0.37、深0.17															450
N	P193	g 4	(北vi)	—	不整円形	長径0.36、短径0.35、深0.16	4	3	1												451
N	P194	g 4	北vi	1	不整円形	長径0.35、短径0.30、深0.27															452
N	P195	g 4	(北vi)	2−2	不整形	長辺0.70、短辺0.38、深0.43	9	7	2												453
N	P196	g 3	北vi	1	不整形	長辺4.00、短辺0.38、深0.24	2	2													454
N	P197	g 3	北vi	1	円形	長径0.20、短径0.18、深0.08															455
N	P198	g 3	北vi	1	楕円形	長径0.20、短径0.13、深0.07															456
N	P199	d 5	北v	2	円形	直径0.15、深0.04															457
N	P200	d 4	北v	2	円形	長径(0.51)、短径0.49、深0.09															458
N	P201	d 4	北v	2	円形	直径0.16、深0.04															459
N	P202	d 4	北v	2	円形	長径0.16、短径0.14、深0.04															460

第12表　遺構・出土遺物集計表（10）

地区	遺構名	グリッド	検出面	時期	平面形	規　　模	計	土師	須恵	灰釉	尾型	東型	古瀬	古大	大窯	か	土製	鉄製	近世	そ の 他	整理番号
N	P 203	d 4	北 v	2	円形	長径0.09、短径0.08、深0.04															461
N	P 204	d 4	北 v	2	円形	直径0.11、深0.03															462
N	P 205	d 4	北 v	2	円形	長径0.52、短径0.51、深0.18															463
N	P 206	d 4	北 v	2	楕円形	長径0.61、短径0.47、深0.25															464
N	P 207	e 5	北 v	2	円形	直径0.19、深0.05															465
N	P 208	f 4	北vi	1	円形	長径0.39、短径0.37、深0.30	3	3													469
N	P 209	i 4	—	—	楕円形	長径0.56、短径0.48、深0.21															470
N	P 210	i 3	—	—	円形	長径0.50、短径0.44、深0.17															471
N	P 211	j 3	—	—	円形	長径0.23、短径0.22、深0.14															472
N	P 212	j 3	—	—	円形	長径0.30、短径0.28、深0.25															473
N	P 213	k 3	—	—	楕円形	長径0.33、短径0.25、深0.12															474
N	P 214	k 3	—	—	円形	長径0.54、短径0.50、深0.18															475
N	P 215	d 5	北 v	2	円形	長径0.17、短径0.14、深0.04															477
N	P 216	f 5	北vi	1	円形	長径0.27、短径0.26、深0.37															479
N	P 217	g 5	北vi	1	円形	長径0.39、短径0.35、深0.31	1	1													480
N	P 218	g 5	北vi	1	円形	長径0.40、短径(0.27)、深0.12															481
N	P 219	h 5	(北vi)	—	円形	長径(0.39)、短径(0.38)、深0.27	5	4								1					483
N	P 220	g 5	北vi	1	円形	長径0.25、短径0.20、深0.07															484
N	P 221	h 4	(北vi)	—	円形	長径0.30、短径0.25、深0.25	1		1												485
N	P 222	h 5	北vi	1	不整円形	長径0.40、短径0.38、深0.19	1	1													486
N	P 223	h 5	(北vi)	—	円形	長径(0.41)、短径0.37、深0.27	9	7				2									487
N	P 224	h 5	北vi	1	円形	長径0.20、短径0.17、深0.12															488
N	P 225	i 5	(北vi)	—	円形	長径0.34、短径0.30、深0.13	1			1											489
N	P 226	i 5	北vi	1	円形	長径0.25、短径0.24、深0.09	1	1													490
N	P 227	m 2	—	—	円形	直径0.25、深0.21															491
N	P 228	g 3	北iv	4	不整形	長辺(0.37)、短辺0.36、深0.37															492
N	P 229	f 4	北iv	4	円形	直径0.27、深0.17	6	6													493
N	P 230	f 4	北iv	4	円形	長径0.28、短径0.27、深0.16	4	4													494
N	P 231	h 3	北iv	4	円形	長径0.43、短径0.37、深0.32															495
N	P 232	i 2	北iv	4	楕円形	長径0.87、短径0.58、深0.51	7	7													496
N	P 233	k 2	—	—	円形	長径0.39、短径0.36、深0.22															498
N	P 234	k 2	—	—	円形	長径0.28、短径(0.17)、深0.15															499
N	P 235	l 4	北iv	4	不整形	長辺(0.51)、短辺(0.32)、深0.12															501
N	P 236	g 3	北vi	1	円形	長径0.38、短径0.37、深0.53															511
N	P 237	g 3	北vi	1	円形	直径0.30、深0.32															512
N	P 238	g 3	北vi	1	円形	長径0.31、短径0.30、深0.19															513
N	P 239	h 4	北vi	1	円形	直径0.22、深0.09															514
N	P 240	h 4	北vi	1	円形	長径0.27、短径0.24、深0.08															515
N	P 241	h 3	北vi	1	円形	長径0.37、短径0.34、深0.11															516
N	P 242	i 3	北vi	1	円形	長径0.27、短径0.26、深0.11															517
N	P 243	i 3	北vi	1	円形	長径0.31、短径0.20、深0.07															518
N	P 244	i 3	北vi	1	円形	長径0.22、短径0.21、深0.10															519
N	P 245	l 4	—	—	不整形	長辺0.55、短辺0.26、深0.19															522

第13表　遺構・出土遺物集計表（11）

地区	遺構名	グリッド	検出面	時期	平面形	規　　模	計	土師	須恵	灰釉	尾型	東型	古瀬	古大	大窯	か	土製	鉄製	近世	そ の 他	整理番号
N	P246	l 4	—	—	円形	長径0.55、短径0.52、深0.12	5	5													523
N	P247	g 6			欠番																
N	P248	h 6			欠番																
N	P249	h 6			欠番																
N	P250	g 6			欠番																
P	P260		NR上	—	円形	長径0.41、短径0.22、深0.12	1	1													
P	P261		NR上	—	円形	直径0.48、深0.09	1		1												
P	P262		NR上	—	円形	直径0.38、深0.10	4	4													
P	P263		P iv	2	不明	長径(0.27)、短径(0.12)、深0.15															
P	P264		NR上	—	楕円形	長径0.37、短径0.28、深0.16															
P	P265		NR上	—	円形	直径0.28、深0.09	1	1													
P	P266				欠番																
P	P267		P iii	2	不明	長径0.43、短径0.30、深0.16															
P	P268		P iii	2	不明	長径0.81、短径0.28、深0.17															
P	P269		P iv	2	楕円形	長径(0.49)、短径(0.20)、深0.18	6	6													
P	P270		P iv	2	不明	長径(0.48)、短径(0.15)、深0.19															
P	P271				欠番																
P	P272		—	—	円形	長径0.43、短径(0.19)、深0.19	2	1	1												
P	P273		—	—	不明	長径0.20、短径(0.20)、深0.20	2	2													
P	P274		P iv	2	円形	長径(0.32)、短径(0.15)、深0.18															
P	P275		P iv	2	不整形	長径(0.50)、短径(0.13)、深0.19															
P	NR		P iii	1	不明	長14.62、幅3.72、深(0.91)	137	134	1			1				1					

第14表　遺構・出土遺物集計表（12）

地区	層	グリッド	計	土師	須恵	灰釉	尾型	東型	古瀬	古大	大窯	か	土製	鉄製	近世	そ の 他
N	北ｖ層		73	69				1				1		1	1	
N	北iv層		881	676	103	20	3	22	7	19		27	3	1		石器１・石製品？１・瓦１
N	北iii層		1,578	967	154	36	14	82	10	29	1	260	1	16	8	石製品３・青磁１・近世？１
N	北ii層		134	87	13	2	1	9		1		20		1		染付１
N	北ii～iii層		265	156	17	8	2	7		8	1	66				
N	北ii～ｖ層		307	211	23	4	3	11	2	3	2	46		1	1	
N	崩落土		17	15					1		1					
N	表土		16	13	1					1				1		
N	攪乱		410	285	33	8	8	16	4	5		14	1	1	35	常滑２・不明陶器４・瓦６
N	排土		9	6				1				2				陶器１
N	不明		24	15	4	1		2				2				
S	Ⅱ層	Ａ１	2									2				
S	Ⅱ層	Ａ２	26	9	2	2						11			2	
S	Ⅱ層	Ａ３	24	17	2	1		1				3				
S	Ⅱ層	Ａ４	6	3	2										1	
S	Ⅱ層	Ａ５	10	8	1							1				
S	Ⅱ層	Ｂ２	58	53	2	1				1					1	
S	Ⅱ層	Ｂ３	260	248	6		1					3			2	
S	Ⅱ層	Ｂ４	151	142	4	1						2			2	
S	Ⅱ層	Ｂ５	211	188	12		1	1		1		5			3	
S	Ⅱ層	Ｂ６	47	45	2											
S	Ⅱ層	Ｃ１	40	26	10							4				
S	Ⅱ層	Ｃ２	93	80	8				1			4				
S	Ⅱ層	Ｃ３	307	286	17	4										
S	Ⅱ層	Ｃ４	108	97	11											
S	Ⅱ層	Ｃ５	350	313	26	1		3	1			4			2	
S	Ⅱ層	Ｃ６	246	240		1		2				3				
S	Ⅱ層	Ｄ１	63	62								1				
S	Ⅱ層	Ｄ２	87	71	9	1				2		4				
S	Ⅱ層	Ｄ３	31	23	2							6				
S	Ⅱ層	Ｄ４	86	66	5	3		2	1	2		6			1	
S	Ⅱ層	Ｄ５	117	100	9			1				6			1	
S	Ⅱ層	Ｄ６	167	147	9	1		5				2			3	
S	Ⅱ層	Ｅ１	135	130	3							2				
S	Ⅱ層	Ｅ２	109	98	8							3				瓦１
S	Ⅱ層	Ｅ３	143	91	21		2	4				25				常滑１・白磁１
S	Ⅱ層	Ｅ４	58	44	5							9				ロクロ土師器１
S	Ⅱ層	Ｅ５	346	247	32			3	2	1	1	58			2	
S	Ⅱ層	Ｅ６	280	233	25		1					17			4	
S	Ⅱ層	Ｆ１	79	70	6					1					2	
S	Ⅱ層	Ｆ２	12	9	2							1				
S	Ⅱ層	Ｆ３	193	157	23	3	1	2	1			3			3	
S	Ⅱ層	Ｆ４	322	270	44	3		2	1	1					1	青磁１
S	Ⅱ層	Ｆ５	273	241	23			2		1					6	青磁１
S	Ⅱ層	Ｆ６	127	96	19			2	2	1		5			2	陶器１
S	Ⅱ層	Ｇ１	22	17	4	1										
S	Ⅱ層	Ｇ２	204	178	19	1						4			2	
S	Ⅱ層	Ｇ３	298	249	40	2		1		1		4	1			
S	Ⅱ層	Ｇ４	296	248	33		2			1		7			5	
S	Ⅱ層	Ｇ５	420	375	37	4		2				1			1	
S	Ⅱ層	Ｇ６	321	287	20			1		1		8			4	
S	Ⅱ層	Ｈ０	8	8												
S	Ⅱ層	Ｈ１	207	183	21							3				
S	Ⅱ層	Ｈ２	140	122	15	1	1					1				
S	Ⅱ層	Ｈ３	181	149	30	1						1				
S	Ⅱ層	Ｈ４	257	220	28	1	1					5			2	常滑１
S	Ⅱ層	Ｈ５	141	128	9	3		1								
S	Ⅱ層	Ｈ６	191	177	14											
S	Ⅱ層	Ｉ１	85	80	4	1										
S	Ⅱ層	Ｉ２	49	43	6											
S	Ⅱ層	Ｉ３	136	112	22		1		1							
S	Ⅱ層	Ｉ４	445	389	42		5	2	3	1					3	

第15表　出土遺物集計表（１）

地区	層	グリッド	計	土師	須恵	灰釉	尾型	東型	古瀬	古大	大窯	か	土製	鉄製	近世	その他
S	Ⅱ層	I 5	78	72	5										1	
S	Ⅱ層	I 6	434	399	25	1	1					5			3	
S	Ⅱ層	J 1	3	3												
S	Ⅱ層	J 2	437	423	10		1					2			1	ロクロ土師器1・瓦1
S	Ⅱ層	J 3	507	464	38		1					4				
S	Ⅱ層	J 4	244	221	18		1					2			2	
S	Ⅱ層	J 5	128	107	18			1				1			1	青磁1
S	Ⅱ層	J 6	400	360	32	1		1				5			1	
S	Ⅱ層	K 2	16	15								1				
S	Ⅱ層	K 3	427	388	36			1				2				
S	Ⅱ層	K 4	559	522	30		2	1				4				
S	Ⅱ層	K 5	240	223	16							1				
S	Ⅱ層	K 6	154	134	19							1				
S	Ⅱ層	L 5	312	282	27	1	1	1								
S	Ⅱ層	L 6	309	273	30	1	1	3							1	
S	Ⅱ層	M 4	44	37	6	1										
S	Ⅱ層	M 5	8	7	1											
S	Ⅱ層	M 6	96	80	9	2	1					4				
S	Ⅱ層	不明	1,491	1,275	140	5	7	12	2	1	1	40	5		3	石製品1
S	表土		531	452	46	1		5		1	1	18			7	ロクロ土師器1・瓦1
S	撹乱		287	238	26	3	2	1				12	1		4	瓦3
S	排土		103	91	6		1		1			2			2	
S	不明		6									2			4	染付1・陶器1
合計			6,814	6,066	538	16	19	26	3	2	2	106	6	0	30	

土師：土師器　須恵：須恵器　灰釉：灰釉陶器　尾型：尾張型山茶碗　東型：東濃型山茶碗　古瀬：古瀬戸　古大：古瀬戸～大窯　か：土師器皿　土製：土製品　鉄製：鉄製品　近世：近世陶磁器

第16表　出土遺物集計表（2）

番号	遺構名	種類	器種	法量	備考	実測番号
17	SB1	石製品	砥石	長さ(14.7)　巾(5.9)　厚さ(4.0)	砂岩、使用痕3面、被熱	506
248	SD10	石製品	砥石	長さ(7.9)　巾(6.9)　厚さ(1.7)	砂岩、使用面1面	567
260	SK39	石製品	砥石	長さ(11.7)　巾(5.8)　厚さ(4.2)	砂岩、使用痕3面	15
263	SK16	鉄製品	碗形滓	巾(6.1)　厚さ(2.9)		156
271	SK20	石製品	砥石	長さ(16.8)　巾(9.0)　厚さ(7.8)	砂岩、使用痕1面、被熱	14
280	SK47	石製品	砥石	長さ(5.6)　巾(5.9)　厚さ3.0	砂岩、使用痕1面	56
308	SK139	鉄製品	直刀か	長さ(13.9)　巾(2.9)　厚さ0.5		562
318	SB15-1	鉄製品	釘	長さ(3.9)　巾(0.6X0.4)		514
435	北iv層	石器	石鏃	長さ(3.2)　巾(2.6)　厚さ(0.6)	チャート	583
436	北iv層	石製品	砥石	長さ(6.7)　巾(3.9)　厚さ(1.5)	砂岩、使用痕1面	582
469	北iii層	石製品	碁石	直径(1.8)　高(0.5)		621
659	Ⅱ層(I 6)	鉄製品	U字鎌か	長さ(9.7)　巾(2.7)　厚さ0.8	V字状溝あり	339
660	Ⅱ層(H 3)	石製品	砥石	長さ(7.2)　巾(5.0)　厚さ(1.2)	ホルンフェルス？、使用面1面	379
692	撹乱	石器	石鏃	長さ(2.6)　巾(1.2)　厚さ(0.3)	下呂石、押圧技法	652

第17表　遺物観察表（1）

番号	遺構名	種　類	器　種	編年分類	外面調整	内面調整	口径	器高	底径	その他法量	備　考	実測番号
1	ＳＢ１	土師器	加飾壺		斜めケズリ	斜めナデ、横ナデ	—	(23.2)	—	最大径(27.0)	外面上半赤彩	488
2	ＳＢ１	土師器	Ｓ字状口縁台付甕	Ａ類	横ナデ	横ハケ	—	(2.2)	—			493
3	ＳＢ１	土師器	Ｓ字状口縁台付甕	Ａ類	口：横ナデ 体：縦ハケ→横ハケ	口：横ナデ 体：横ハケ	—	(2.7)	—			492
4	ＳＢ１	土師器	Ｓ字状口縁台付甕	ＢＣ類	横ナデ	横ナデ	—	(1.9)	—			494
5	ＳＢ１	土師器	Ｓ字状口縁台付甕	ＢＣ類	横ナデ	横ナデ	—	(1.9)	—			496
6	ＳＢ１	土師器	Ｓ字状口縁台付甕	ＢＣ類	横ナデ	横ナデ	—	(1.9)	—			495
7	ＳＢ１	土師器	Ｓ字状口縁台付甕		縦ハケ	台：縦ナデ	—	(4.2)	—		内面底部以外炭化物付着	490
8	ＳＢ１	土師器	Ｓ字状口縁台付甕		縦ハケ	—	—	(1.8)	—		内面底部炭化物付着	489
9	ＳＢ１	土師器	Ｓ字状口縁台付甕		—	—	—	(4.3)	—			491
10	ＳＢ１	土師器	高杯		縦ミガキ	—	—	(6.1)	—		内面に爪の跡が残る	497
11	ＳＢ１	土師器	広口壺		—	—	—	(1.7)	—		内面赤彩	499
12	ＳＢ１	土師器	高杯		—	—	—	(3.3)	—			498
13	ＳＢ１	須恵器(不明)	杯身	７Ｃ後半	回転ナデ 底：回転ヘラ切り無調整	回転ナデ	—	(2.7)	—		外面自然釉	501
14	ＳＢ１	須恵器(不明)	杯身	６Ｃ後葉	—	回転ナデ	—	(2.7)	—		外面自然釉	500
15	ＳＢ１	土師器	伊勢型甕	Ａ１類	横ナデ	横ハケ	—	(2.0)	—			504
16	ＳＢ１	土製品	土錘		—	—	—	4.6	—	巾2.2		505
17	ＳＢ１	石製品	砥石		—	—	—	—	—		(第17表)	506
18	ＳＢ17	土師器	Ｓ字状口縁台付甕	Ａ類	横ナデ 刺突	口：横ナデ 体：横ハケ	—	(1.8)	—			558
19	ＳＢ17	土師器	Ｓ字状口縁台付甕	Ａ類	横ナデ 刺突	口：横ナデ 体：横ハケ	—	(2.1)	—			559
20	ＳＢ18	土師器	有稜高杯		—	—	—		—			572
21	ＳＢ18	土師器	パレス壺		—	—	—	(2.8)	—		外面赤彩	574
22	ＳＢ18	土師器	壺か		—	—	—	(2.1)	—			573
23	ＳＢ18	土師器	高杯		—	—	—	(2.9)	—			571
24	ＳＢ18	土師器	有稜高杯		—	—	—	(5.0)	—			570
25	ＳＫ22	土師器	Ｓ字状口縁台付甕	ＢＣ類	—	—	—	(2.1)	—			190
26	ＳＫ22	土師器	Ｓ字状口縁台付甕	ＢＣ類	横ナデ	口：横ナデ 体：横ハケ	—	(1.4)	—			191
27	ＳＫ22	土師器	ミニチュア		—	—	3.6	(2.0)			手づくね	36
28	ＳＫ22	土師器	ミニチュア		—	—	(4.4)	3.0	—		手づくね	35
29	ＳＫ22	土師器	パレス壺	Ｂ類	縦ハケ	—	(20.0)	(4.9)	—			192
30	ＳＫ92	土師器	長頸壺		ミガキ	横ナデ	(13.6)	(19.7)	—			37
31	ＳＫ100	土師器	壺		ミガキ	体：縦ナデ 底：ハケ	—	(11.9)	(5.1)	最大径(16.2)	色調：赤褐色	293
32	ＳＫ100	土師器	加飾壺		斜めハケ→横ハケ	—	—	(4.7)	—			294
33	ＳＫ100	土師器	Ｓ字状口縁台付甕	Ａ類	口：横ナデ 体：横ハケ	横ナデ	—	(2.1)	—			292
34	ＳＫ101	土師器	直口壺		ミガキ	—	(8.4)	(4.0)	—			300
35	ＳＫ101	土師器	Ｓ字状口縁台付甕	Ａ類	口：横ナデ 体：縦ハケ→横ハケ	—	—	(3.7)	—			295
36	ＳＫ101	土師器	有稜高杯		口：横ハケ 体：斜めミガキ	—	—	(4.4)	—			298
37	ＳＫ101	土師器	有段高杯		縦ミガキ	縦ハケ	—	(4.6)	—			296
38	ＳＫ101	土師器	有稜高杯		横ハケ、縦ミガキ	縦ミガキ	—	(4.7)	—			299
39	ＳＫ101	土師器	広口壺		—	—	—	(2.8)	—			297
40	ＳＫ101	土師器	台付甕		—	—	—	(3.0)	—			301
41	Ｐ27	土師器	有段高杯		—	横ハケ	—	(3.8)	—			244
42	Ｐ57	土師器	壺		ミガキ	ハケ	—	(1.4)	—			302
43	Ｐ59	土師器	高杯		縦ミガキ	—	—	(4.5)	—			303
44	Ｐ62	土師器	高杯		縦ミガキ	縦ミガキ	—	(3.9)	—			307
45	Ｐ66	土師器	加飾壺		—	—	—	(2.0)	—		色調：赤褐色	310
46	Ｐ66	土師器	パレス壺		縦ミガキ、横ナデ	—	—	(8.0)	—			309
47	Ｐ66	土師器	伊勢型甕	Ａ１類	縦ハケ→横ナデ	横ハケ	—	(2.5)	—			308
48	Ｐ169	土師器	壺か		—	—	—	(1.7)	(1.8)			566
49	ＳＸ21	土師器	Ｓ字状口縁台付甕	Ａ類	—	横ハケ	—	(2.5)	—			747
50	ＳＸ21	土師器	Ｓ字状口縁台付甕	Ａ類	縦ハケ	横ナデ	—	(1.8)	—			752
51	ＳＸ21	土師器	有段高杯		—	横ハケ	—	(4.0)	—		内面に山形の刺突文	750
52	ＮＲ	土師器	高杯		—	—	—	(8.2)	—			745
53	ＳＢ７	須恵器(不明)	杯蓋	７Ｃ中葉	回転ナデ 天：回転ヘラ切り無調整	回転ナデ	(9.9)	3.2	—			174
54	ＳＢ７	須恵器 (濃内系か)	高杯	７Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	(9.8)	(2.7)	—			173
55	ＳＫ８	須恵器(不明)	壺	７Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.7)	—			133
56	ＳＫ２	須恵器 (美濃須衛)	蓋	７Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.9)	—			109
57	ＳＫ２	須恵器 (美濃須衛)	蓋	７Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.7)	—			108
58	ＳＫ18	須恵器(不明)	蓋		回転ナデ	回転ナデ	—	(2.0)	—			178
59	ＳＫ18	須恵器(不明)	杯身	７Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	—	(1.8)	—			177

第18表　遺物観察表（２）

番号	遺構名	種　類	器　種	編年分類	外面調整	内面調整	口径	器高	底径	その他法量	備　考	実測番号
60	ＳＫ18	須恵器(不明)	壺	６Ｃ後半～７Ｃ前半	回転ナデ 底：回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	(8.1)	—			179
61	ＳＫ34	須恵器 (美濃須衛)	平瓶	７Ｃ中葉	底：平行タタキ→静止ケズリ	回転ナデ	—	(9.6)	—	最大径13.8	肩まで自然釉かかる	227
62	ＳＫ34	須恵器(尾張)	蓋	７Ｃ代	—	回転ナデ	—	(1.1)	—		外面自然釉	228
63	ＳＫ34	土師器	伊勢型甕	Ａ１類	口：横ナデ 体：縦ハケ	口：横ナデ 体：横ハケ	(19.6)	(4.4)	—			229
64	ＳＫ34	土師器	伊勢型甕	Ａ２類	口：横ナデ 体：縦ハケ	横ナデ	—	(6.3)	—			230
65	ＳＫ34	土製品	土錘		—	—	—	4.9	—	巾2.4		231
66	ＳＫ34	土製品	土錘		—	—	—	4.0	—	巾2.0		232
67	ＳＫ43	土師器	伊勢型甕	Ａ１類	口：横ナデ 体：縦ハケ	横ハケ	—	(5.4)	—			245
68	ＳＫ43	土製品	土錘		—	—	—	(4.1)	—	巾2.1	外面スス付着	32
69	ＳＫ83	須恵器 (美濃須衛)	杯身	７Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	(11.0)	(3.3)	—			286
70	Ｐ37	須恵器 (美濃須衛)	杯身	７Ｃ前半	回転ナデ 底：回転ヘラ切り無調整	回転ナデ	11.4	4.0	—			280
71	ＳＫ35	須恵器(不明)	蓋	６Ｃ後半～７Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.7)	—			226
72	ＳＫ38	須恵器(不明)	長頸瓶	７Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.1)	—			238
73	ＳＫ81	須恵器 (美濃須衛)	甑		回転ナデ	回転ナデ	—	(2.7)	—			282
74	ＳＫ81	土師器	甕		口：横ナデ 体：縦ハケ	横ナデ	—	(5.8)	—		内面炭化物・外面スス付着	284
75	ＳＫ81	須恵器(不明)	甕	６Ｃ代か	—	—	(26.4)	(4.3)	—		内外面自然釉	283
76	ＳＫ81	土師器	伊勢型甕	Ａ１類	口：横ナデ 体：縦ハケ	横ナデ	(20.0)	(2.1)	—			285
77	ＳＫ104	土師器	伊勢型甕	Ａ１類	—	—	—	(3.0)	—			306
78	ＳＫ138	須恵器 (畿内系)	杯身	ＴＫ208併行期	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.9)	—			560
79	ＳＫ21	須恵器 (美濃須衛か)	杯蓋	７Ｃ中葉	回転ナデ 天：回転ヘラ切り無調整	回転ナデ	(10.8)	3.0			焼成不良	188
80	ＳＫ21	須恵器 (須山窯)	杯身	７Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	(11.1)	(2.1)	—			187
81	ＳＫ21	須恵器(不明)	鉢	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(5.1)	—			189
82	ＳＫ21	土師器	甕		縦ハケ	縦ハケ	—	(5.1)	—		刷毛目が細かい	186
83	ＳＫ68	須恵器 (畿内系)	蓋	７Ｃ代	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.3)	—			275
84	ＳＫ68	須恵器(不明)	甑	ＴＫ209－ＴＫ217併行期	口：回転ナデ 体：回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	(4.2)	—		外面に自然釉	276
85	ＳＫ68	土師器	伊勢型甕	Ａ１類	口：横ナデ 体：縦ハケ	横ナデ	(21.6)	(11.3)	—		外面スス付着	274
86	ＳＫ73	須恵器(不明)	提瓶か平瓶	７Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	(10.4)	(3.3)	—		接合部にハケを施す	281
87	ＳＫ96	須恵器(不明)	蓋	７Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.8)	—			290
88	ＳＫ99	土師器	焼塩土器	美濃式１類	—	—	—	(1.4)	—	器壁0.2		291
89	Ｐ31	須恵器(不明)	蓋	６Ｃ後半～７Ｃ前半	回転ナデ	—	—	(2.8)	—		内面自然釉	254
90	Ｐ67	須恵器 (美濃須衛)	杯蓋	７Ｃ中葉	回転ナデ 天：回転ヘラ切り無調整	回転ナデ	11.1	3.7	3.7			21
91	ＳＢ２	須恵器(不明)	杯身	７Ｃ前半	回転ナデ 底：回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	(3.1)	—			123
92	ＳＢ２	須恵器(不明)	杯身	７Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.6)	—			122
93	ＳＢ２	須恵器(不明)	杯身	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.1)	—			128
94	ＳＢ２	須恵器(不明)	蓋	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	(15.4)	(1.2)	—		内面被熱	127
95	ＳＢ２	須恵器 (畿内系か)	無台杯	７Ｃ後半	回転ナデ 底：回転ヘラ切り無調整	回転ナデ	12.0	4.4	6.9			20
96	ＳＢ２	須恵器 (美濃須衛)	無台杯	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(3.1)	—			124
97	ＳＢ２	須恵器(不明)	無台杯	７Ｃ後半～８Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.7)	—			125
98	ＳＢ２	須恵器(不明)	無台杯	７Ｃ後半～８Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.9)	—			130
99	ＳＢ２	須恵器 (美濃須衛)	無台杯	７Ｃ後半～８Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	—	(3.5)	—			129
100	ＳＢ２	須恵器(不明)	皿か蓋		—	—	—	(1.3)	(12.6)		焼成不良	126
101	ＳＢ２	土師器	伊勢型甕	Ａ１類	縦ハケ	横ハケ	—	(4.7)	—		内面に工具痕	118
102	ＳＢ２	土師器	伊勢型甕	Ａ１類	横ナデ→縦ハケ	横ナデ	—	(2.9)	—			121
103	ＳＢ２	土師器	伊勢型甕	Ａ２類	縦ハケ	斜めハケ	—	(4.7)	—			119
104	ＳＢ２	土師器	甕		—	—	—	(5.6)	—			120
105	ＳＢ２	土師器	ミニチュア		指オサエ	—	—	(3.1)	—		高杯の脚部か	131
106	ＳＫ70	須恵器(不明)	杯	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.3)	—			279
107	ＳＢ５	須恵器(不明)	蓋	７Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	—	(1.4)	—			160
108	ＳＢ５	須恵器 (畿内系か)	無台杯	７Ｃ代	回転ナデ	回転ナデ	(11.2)	(2.7)	—			161
109	ＳＢ５	土師器	伊勢型甕	Ａ１類	縦ハケ	横ハケ	—	(2.4)	—			162
110	ＳＢ５	土師器	伊勢型甕	Ａ２類	横ナデ	横ハケ	—	(2.5)	—			163
111	ＳＢ10	須恵器(不明)	高杯	ＴＫ208併行期	回転ナデ	—	—	(2.0)	—			209

第19表　遺物観察表（３）

番号	遺構名	種　類	器　種	編年分類	外面調整	内面調整	口径	器高	底径	その他法量	備　考	実測番号
112	ＳＢ10	須恵器(不明)	高杯	ＴＫ209併行期	回転ナデ	—	—	(1.1)	—			210
113	ＳＢ10	須恵器(不明)	蓋	７Ｃ中葉	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.1)	—		焼成不良	207
114	ＳＢ10	須恵器(美濃須衛)	杯身	７Ｃ中葉	回転ナデ 底：回転ヘラ切り無調整	回転ナデ	(9.2)	3.1	—			32
115	ＳＢ10	須恵器(美濃須衛)	杯身	７Ｃ中葉	回転ナデ	回転ナデ	(8.9)	(3.1)	—		焼成不良	208
116	ＳＢ10	須恵器(不明)	蓋	７Ｃ後葉	回転ナデ 天：回転ヘラケズり	回転ナデ	(16.4)	3.0	—			28
117	ＳＢ10	須恵器(美濃須衛か)	無台杯	７Ｃ後葉	回転ナデ 底：回転ヘラ切り無調整	回転ナデ	—	(3.5)	—			18
118	ＳＢ10	須恵器(美濃須衛)	無台杯	７Ｃ後半～８Ｃ前半	回転ナデ 底：回転ヘラ切り無調整	回転ナデ	(11.9)	3.8	(7.7)		焼成不良	17
119	ＳＢ10	須恵器(美濃須衛)	無台杯	７Ｃ後半～８Ｃ前半	回転ナデ 底：回転ヘラ切り無調整	回転ナデ	12.8	4.5	7.2		外面一部被熱	16
120	ＳＢ10	須恵器(美濃須衛か)	盤	７Ｃ後半～８Ｃ前半	(口)回転ナデ (底)回転ヘラケズり	回転ナデ	(26.2)	(2.4)	—			211
121	ＳＢ10	土師器	伊勢型甕	Ａ２類	口：横ナデ 体：縦ハケ	口：横ハケ 体：指オサエ、ナデ	(22.0)	(8.0)	—			50
122	ＳＢ10	土師器	伊勢型甕	Ａ２類	口：横ナデ 体：縦ハケ	口：横ハケ 体：斜めケズり	—	(11.3)	—		外面スス付着	51
123	ＳＢ10	土師器	伊勢型甕	Ａ２類	斜めハケ	横ハケ	—	(7.0)	—			9
124	ＳＢ10	須恵器	甑		—	—	—	(1.1)	—	厚さ0.8	焼成不良	48
125	ＳＢ10	土師器	甑か		縦ハケ	—	—	(2.8)	—		外面下半スス付着	47
126	ＳＢ10	土製品	土錘		—	—	—	4.2	—	巾2.2		49
127	ＳＢ11	須恵器(美濃須衛か)	蓋	ＴＫ209～ＴＫ217併行期	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.4)	8.2		外面自然釉	233
128	ＳＢ11	須恵器(畿内系)	杯身	ＴＫ217併行期	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.5)	—			235
129	ＳＢ11	須恵器(不明)	蓋	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	(11.6)	(2.5)	—	器壁0.3	色調：赤褐色	236
130	ＳＢ11	須恵器(不明)	蓋	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(1.5)	—		外面自然釉	234
131	ＳＢ11	土師器	焼塩土器	美濃式１類	—	—	—	(2.5)	—			237
132	ＳＢ11	土製品	土錘		—	—	—	4.7	—	巾2.3	外面スス付着	33
133	ＳＢ12	須恵器(美濃須衛)	無台杯	７Ｃ後半	回転ナデ 底：回転ヘラケズり	回転ナデ	(14.6)	(4.2)	—			239
134	ＳＢ12	須恵器	盤か		横ナデ	横ナデ	—	(1.9)	—		焼成不良	240
135	ＳＢ13	須恵器(畿内系)	杯身	ＴＫ217併行期	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.2)	—			260
136	ＳＢ13	須恵器(不明)	蓋	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.2)	—			261
137	ＳＢ13	須恵器(美濃須衛)	鉢		回転ナデ	回転ナデ	—	(2.0)	—		内面自然釉	262
138	ＳＢ14	須恵器(畿内系)	蓋	ＴＫ43併行期	回転ナデ 天：回転ヘラケズり	回転ナデ	—	(2.7)	—			266
139	ＳＢ14	須恵器(不明)	杯身	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.1)	—			267
140	ＳＢ14	須恵器(不明)	無台杯		回転ナデ	回転ナデ	—	(3.7)	—			268
141	ＳＢ14	須恵器(不明)	無台杯		回転ナデ	回転ナデ	—	(2.3)	—			269
142	ＳＢ14	須恵器(不明)	高杯		—	—	—	(2.3)	—		内面自然釉	270
143	ＳＢ14	土製品	土錘		—	—	—	(2.6)	—	巾1.9		272
144	ＳＢ14	土師器	ミニチュア		—	—	3.7	(8.6)	—		手づくね	271
145	ＳＢ14	土製品	丸玉		—	—	—	(1.0)	—	巾2.0		273
146	ＳＫ40	須恵器(畿内系)	杯身	ＴＫ217併行期か	回転ナデ 底：回転ヘラケズり	回転ナデ	—	(2.8)	—			241
147	ＳＫ40	土師器	伊勢型甕	Ａ２類	横ナデ	横ハケ	—	(4.0)	—			243
148	ＳＫ40	土師器	加飾壺		—	—	—	(1.8)	—			384
149	ＳＫ40	土師器	伊勢型甕	Ａ１？類	口：横ナデ 体：縦ハケ	横ナデ	(21.8)	(5.6)	—			242
150	ＳＫ44	須恵器(不明)	蓋	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(1.1)	—			248
151	ＳＫ44	須恵器(不明)	杯	７Ｃ後半～８Ｃ前半	回転ナデ 底：回転ヘラケズり	回転ナデ	—	(2.9)	—			249
152	ＳＫ44	須恵器(不明)	鉢	７Ｃ後半～８Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	—	(3.4)	—			247
153	ＳＫ44	土師器	加飾壺		—	—	—	(7.8)	—		外面赤彩か	246
154	ＳＫ52	須恵器(畿内系)	蓋	７Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	—	(3.1)	—			250
155	ＳＫ52	須恵器(不明)	壺か平甑	７Ｃ代	回転ナデ	回転ナデ	—	(3.2)	—			251
156	ＳＫ52	土師器	伊勢型甕	Ａ２類	横ナデ	横ナデ	—	(3.8)	—			252
157	ＳＫ52	土師器	伊勢型甕	Ａ１類	—	—	—	(3.4)	—			253
158	ＳＫ52	土師器	くの字状口縁甕		横ナデ	横ナデ	—	(3.5)	—		外面スス付着	387
159	ＳＫ52	土師器	受口状口縁甕		横ハケ	横ハケ	—	(3.1)	—		外面スス付着	386
160	ＳＫ57	須恵器(不明)	蓋	７Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.1)	—			255
161	ＳＫ57	須恵器(美濃須衛)	鉢	７Ｃ代	回転ナデ	回転ナデ	—	(4.3)	—			257
162	ＳＫ57	須恵器(不明)	甕		—	—	—	(2.5)	—		内外面自然釉	256

第20表　遺物観察表（４）

番号	遺構名	種　類	器　種	編年分類	外面調整	内面調整	口径	器高	底径	その他法量	備　考	実測番号
163	ＳＫ64	土製品	—							長5.8 厚2.9	赤彩	265
164	ＳＫ69	須恵器(不明)	高杯	ＴＫ209～ＴＫ217 併行期	回転ナデ	—	—	(1.4)	—			277
165	ＳＫ69	須恵器(不明)	無台杯	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(3.3)	—			278
166	ＳＫ17	須恵器(不明)	杯	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.8)	—			158
167	ＳＫ17	須恵器(不明)	壺	７Ｃ代	回転ナデ	回転ナデ	—	(1.4)	—			159
168	ＳＫ17	須恵器(不明)	甕		回転ナデ	回転ナデ	—	(1.7)	—			157
169	Ｐ18	須恵器 (美濃須衛)	杯身	７Ｃ中葉	回転ナデ 底：回転ヘラ切り 無調整	回転ナデ	(10.2)	3.2	—			175
170	Ｐ18	土師器	受口状口縁甕		口：横ナデ 体：縦ハケ	口：横ナデ 体：横ハケ	—	(4.5)	—			176
171	ＳＫ103	須恵器(不明)	蓋	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.8)	—			305
172	ＳＫ103	須恵器(不明)	無台杯	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(3.2)	—			304
173	ＳＫ103	土師器	焼塩土器	美濃式１類	—	—	9.2	(4.0)		器壁0.3		5
174	Ｐ20	須恵器(不明)	鉢	７Ｃ後半～８Ｃ前半	—	—	(25.4)	(6.5)	—		焼成不良	217
175	Ｐ20	須恵器(不明)	提瓶		格子目タタキ 回転ケズリ	同心円当て具	—	(24.8)	—	最大幅 21.7	有文，把手３カ所	487
176	ＳＫ107	須恵器(不明)	杯身	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(1.7)	—		焼成不良	312
177	ＳＫ107	須恵器(不明)	瓶	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	(24.2)	(10.1)	—		焼成不良	314
178	ＳＫ107	須恵器(不明)	壺	７Ｃ代	回転ナデ	回転ナデ	—	(3.1)	—			313
179	ＳＫ15	須恵器 (美濃須衛)	杯身	７Ｃ後半	回転ナデ 底：回転ヘラ切り 無調整	回転ナデ	(8.4)	3.0	—			140
180	ＳＫ28	須恵器(不明)	無台杯	７Ｃ後葉	回転ナデ 底：回転ヘラケズリ	回転ナデ	4.5	4.4	4.7			1
181	ＳＫ28	須恵器(不明)	蓋	７Ｃ後半	回転ナデ	—	—	(2.1)	—		内面自然釉	46
182	ＳＫ28	須恵器(不明)	杯身	７Ｃ代	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.1)	—			45
183	ＳＫ28	土師器	甕		口：斜めハケ 体：横ハケ	口：横ハケ，横ナデ 体：横ナデ	(18.3)	(16.6)	—		外面にススが付着	42
184	ＳＫ28	土師器	台付甕		—	指オサエ	—	(5.0)	8.7		内面炭化物・外面ススが付着	43
185	ＳＫ28	土師器	高杯		縦ミガキ	—	—	(6.0)	—			44
186	ＳＫ93	須恵器(不明)	蓋	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.6)	—			289
187	ＳＫ93	土師器	くの字状口縁甕		横ナデ	横ハケ	(20.6)	(2.6)			内面炭化物・外面ススが付着	288
188	ＳＫ106	須恵器 (畿内系)	杯身	７Ｃ後半	回転ナデ 底：回転ヘラ切り 無調整	回転ナデ	9.3	3.2	—			727
189	Ｐ22	須恵器(不明)	無台杯	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.1)	—			225
190	Ｐ195	須恵器 (畿内系か)	蓋	７Ｃ後半	—	—	—	(1.8)	—		宝珠つまみ	568
191	ＳＢ４	須恵器(不明)	杯	７Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.5)	—			144
192	ＳＢ４	須恵器(不明)	蓋	７Ｃ後葉	—	回転ナデ	(16.2)	(1.6)	—		外面自然釉	142
193	ＳＢ４	須恵器(不明)	蓋	７Ｃ後半	回転ナデ 天：回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	(1.9)	—			147
194	ＳＢ４	須恵器(不明)	杯	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.1)	—			148
195	ＳＢ４	須恵器(不明)	高杯	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.8)	(8.4)			149
196	ＳＢ４	須恵器 (美濃須衛)	蓋	７Ｃ後半～８Ｃ前半	回転ナデ 天：回転ヘラケズリ	回転ナデ	(14.6)	(2.4)	—			146
197	ＳＢ４	須恵器(不明)	鉢	７Ｃ後半～８Ｃ前半	—	—	(25.5)	(9.0)	—		焼成不良	39
198	ＳＢ４	須恵器(老洞)	蓋	８Ｃ前半	回転ナデ 天：回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	(2.8)	—		外面自然釉 表面に沈線	145
199	ＳＢ４	須恵器 (美濃須衛)	蓋	８Ｃ前半	回転ケズリ	回転ナデ	—	(1.7)	—			141
200	ＳＢ４	土師器	伊勢型甕	Ａ１類	口：横ナデ 体：縦ナデ	横ハケ	—	(3.1)	—			151
201	ＳＢ４	土師器	伊勢型甕	Ａ２類	横ナデ	横ハケ	—	(3.2)	—		外面ススが付着	153
202	ＳＢ４	土師器	伊勢型甕	Ａ２類	横ナデ	横ハケ	—	(2.0)	—		内面炭化物・外面ススが付着	152
203	ＳＢ４	土師器	伊勢型甕	Ａ２類	横ハケ	横ナデ	—	(2.6)	—		内面炭化物付着	150
204	ＳＢ４	土師器	伊勢型甕	Ａ２類	縦ハケ，横ハケ	縦ケズリ	—	(14.6)	—	胴部径(21.6)	外面一部ススが付着	38
205	ＳＢ４	土師器	平底甕		口：横ナデ 体：縦ハケ	横ハケ	(19.6)	(1.9)				10
206	ＳＢ４	土師器	平底甕		縦ハケ	指オサエ	—	(16.0)	—		内面炭化物付着	11
207	ＳＢ４	土師器	瓶		—	横ナデ	—	(7.1)	—		外面一部ススが付着	143
208	ＳＫ10	須恵器 (美濃須衛)	杯身	須衛65 ～蘇原６号窯期(新)	回転ナデ 底：回転ヘラケズリ	回転ナデ	(10.8)	3.8	—			7
209	ＳＫ10	須恵器 (美濃須衛)	杯	７Ｃ後半～８Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.1)	—			135
210	ＳＫ10	土師器	伊勢型甕	Ａ１類	口：横ナデ 体：縦ハケ	口：横ハケ 体：横ナデ	—	(3.8)	—			136
211	ＳＢ６	須恵器(不明)	蓋	７Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.8)	—			171

第21表　遺物観察表（５）

番号	遺構名	種　類	器　種	編年分類	外面調整	内面調整	口径	器高	底径	その他法量	備　考	実測番号
212	ＳＢ６	須恵器(不明)	蓋	７Ｃ前半	—	回転ナデ	—	(1.9)	—		外面自然釉，宝珠つまみ 杯Ｇの蓋か長頸瓶の蓋	169
213	ＳＢ６	須恵器 (美濃須衛)	杯身	７Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.7)	—			172
214	ＳＢ６	須恵器(尾張)	盤	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.4)	(13.4)		金属写し	26
215	ＳＢ６	須恵器 (陶内系か)	蓋	７Ｃ代	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.1)	—			168
216	ＳＢ６	須恵器 (美濃須衛)	高杯	７Ｃ代	回転ナデ	回転ナデ	—	(1.4)	—			170
217	ＳＢ６	須恵器 (美濃須衛)	有台杯	Ⅳ期小２期 (８Ｃ中葉)	回転ナデ 底：回転ヘラ切り 無調整	回転ナデ	(14.1)	3.7	(10.2)			25
218	ＳＢ６	土製品	土錘		—	—	—	4.8	—	巾2.7		167
219	ＳＢ６	土師器	高杯		縦ミガキ	—	—	(5.4)	—		内面に工具痕	166
220	ＳＢ６	土師器	高杯		縦ミガキ	指オサエ	—	(6.0)	—			165
221	ＳＢ６	土師器	パレス壺		横ハケ	—	—	(5.2)	—		外面赤彩	381
222	ＳＢ６	土師器	壺		横ミガキ	—	—	(6.0)	(6.0)		外面スス付着	164
223	ＳＢ８	須恵器 (美濃須衛か)	蓋	７Ｃ後葉	回転ナデ 天：回転ヘラケズリ	回転ナデ	(15.0)	(2.9)	—		内面被熱	196
224	ＳＢ８	須恵器(尾張)	蓋	７Ｃ後葉	回転ナデ 天：回転ヘラケズリ	回転ナデ	(17.8)	(2.7)	—			197
225	ＳＢ８	須恵器 (美濃須衛)	無台杯	７Ｃ後葉	回転ナデ 底：回転ヘラ切り 無調整	回転ナデ	—	(4.0)	—		内面炭化物付着	198
226	ＳＢ８	須恵器(不明)	蓋	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	(15.6)	(1.8)	—			193
227	ＳＢ８	須恵器(尾張)	有台杯	７Ｃ後半か	回転ナデ 底：回転ヘラケズリ	回転ナデ	(16.6)	6.1	(10.2)		外面自然釉 佐波理写し	27
228	ＳＢ８	須恵器 (美濃須衛)	有台杯	８Ｃ中葉	回転ナデ 底：回転ヘラ切り 無調整	回転ナデ	(11.8)	3.8	(8.5)		内面底部炭化物付着	194
229	ＳＢ８	須恵器 (美濃須衛)	有台杯	８Ｃ中葉	回転ナデ 底：回転ヘラケズリ	回転ナデ	(12.8)	3.8	(9.8)		内面被熱	23
230	ＳＢ８	須恵器 (美濃須衛か)	有台杯	Ⅳ期小２期 (８Ｃ中葉)	回転ナデ 底：回転ヘラケズリ	回転ナデ	(11.8)	3.7	(8.4)			19
231	ＳＢ８	須恵器(不明)	有台盤		回転ナデ	回転ナデ	(16.4)	(3.6)	—			199
232	ＳＢ８	須恵器(尾張か)	甕		タタキ	—	—	—	—		当具磨消	195
233	ＳＢ８	土師器	伊勢型甕	Ａ１類	口：横ナデ 体：縦ハケ	口：横ハケ 体：斜めハケ	—	(2.4)	—			202
234	ＳＢ８	土師器	平底甕	Ｂ２かＢ３類	縦ハケ	横ハケ	—	(2.0)	—			201
235	ＳＢ８	土師器	焼塩土器	美濃式１類	—	—	—	(2.1)	—	器壁0.3		200
236	ＳＢ８	土師器	Ｓ字状口縁台付甕	ＢＣ類	口：横ナデ 体：縦ハケ	横ナデ	—	(2.6)	—		外面口縁部スス付着	206
237	ＳＢ８	土師器	受口状口縁甕		横ハケ	横ハケ	—	(3.3)	—			205
238	ＳＢ８	土師器	高杯		—	指オサエ	—	(4.0)	—			204
239	ＳＢ８	土師器	器台		—	指オサエ	—	(3.9)	—			203
240	Ｐ16	土師器	平底甕	Ｂ２類か	縦ハケ	口：横ハケ 体：横ナデ 指オサエ	(21.3)	(14.8)	—		内面炭化物・外面スス付着	40
241	ＳＫ88	須恵器 (美濃須衛)	甕	７Ｃ後半～８Ｃ前半	口：回転ナデ 体：平行タタキ	口：回転ナデ 体：同心円当具痕	—	(6.4)	—		焼成不良	4
242	ＳＫ79	須恵器 (美濃須衛か)	蓋	７Ｃ中葉	回転ナデ	回転ナデ	11.9	2.6	9.9			24
243	ＳＫ79	須恵器(不明)	無台杯	８Ｃ代	回転ナデ	回転ナデ 底：底部ヘラ切り 無調整	11.0	3.6	6.3		焼成不良	6
244	Ｐ７	須恵器(不明)	無台杯	７Ｃ後半～８Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.0)	—			132
245	ＳＫ85	土製品	—		—	—	—	4.5	—			287
246	ＳＫ60	須恵器(不明)	蓋		回転ナデ	回転ナデ	—	(3.2)	—			263
247	ＳＫ62	須恵器(不明)	無台杯		回転ナデ	回転ナデ	—	(3.0)	—			264
248	ＳＤ10	石製品	砥石		—	—	—	—	—		(第17表)	567
249	Ｐ33	土師器	有段高杯		縦ケズリ	横ハケ、横ナデ	(23.2)	(10.8)	—		外面スス付着	8
250	Ｐ63	土師器	焼塩土器	美濃式１類	—	—	—	(3.0)	—	器壁0.2		13
251	Ｐ65	土師器か	鉢		縦ミガキ	横ナデ	—	(3.4)	—		内外面赤彩	34
252	ＳＫ４	山茶碗 (尾張型)	碗	４型式	回転ナデ 底：回転糸切り	回転ナデ	—	(2.6)	(7.6)			117
253	ＳＫ４	灰釉陶器	碗Ａ	Ⅶ期古～新	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.2)	(7.4)			115
254	ＳＫ４	灰釉陶器	稜皿	Ⅶ期新～Ⅷ期古	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.7)	—			116
255	ＳＫ23	灰釉陶器	碗Ａ	Ⅶ期古	—	—	—	(2.0)	—			216
256	ＳＫ23	須恵器 (美濃須衛か)	高杯か瓶	７Ｃ後半	(口)回転ナデ (胴)回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	(3.1)	—			212
257	ＳＫ23	須恵器(不明)	鉢	７Ｃ後半～８Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	—	(5.2)	—			214
258	ＳＫ23	須恵器 (美濃須衛)	瓶	７Ｃ後半～８Ｃ前半	肩：回転ナデ 底：回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	(4.1)	—			215
259	ＳＫ39	灰釉陶器	碗Ａ	Ⅶ期古～新	回転ナデ	回転ナデ	—	(1.4)	—			383
260	ＳＫ39	石製品	砥石		—	—	—	—	—		(第17表)	15

第22表　遺物観察表（６）

番号	遺構名	種　類	器　種	編年分類	外面調整	内面調整	口径	器高	底径	その他法量	備　考	実測番号
261	ＳＫ16	山茶碗（東濃型）	碗	丸石３号窯式	回転ナデ 底：回転糸切り	回転ナデ	—	(1.8)	(5.0)			155
262	ＳＫ16	須恵器（畿内系）	高杯	ＴＫ209併行期	回転ナデ	回転ナデ	—	(4.9)	—		長脚２段３方透	154
263	ＳＫ16	鉄滓	碗形滓		—	—	—	—	—		（第17表）	156
264	ＳＫ19	山茶碗（尾張型）	碗	６型式	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.7)	(7.1)			181
265	ＳＫ19	須恵器（美濃須衛）	高杯	７Ｃ中葉	回転ナデ	回転ナデ	—	(6.7)	(10.0)			180
266	ＳＫ19	須恵器（美濃須衛）	杯身	７Ｃ後半	回転ナデ 底：回転ヘラ切り 無調整	回転ナデ	(9.8)	(2.8)	—			728
267	ＳＫ20	陶器（瀬戸美濃）	擂鉢	古瀬戸後Ⅳ期古	回転ナデ	回転ナデ	—	(6.2)	—		錆釉	183
268	ＳＫ20	土師器	皿	Ｍ３類	横ナデ	横ナデ	—	(1.9)	—			184
269	ＳＫ20	山茶碗（尾張型）	碗	５型式	回転ナデ 底：回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	(3.2)	(7.4)			182
270	ＳＫ20	瓦	平瓦		—	—	—	(2.0)	—			185
271	ＳＫ20	石製品	砥石		—	—	—	—	—		（第17表）	14
272	ＳＫ27	土師器	瓶か鍋		—	—	—	(5.9)	—			220
273	ＳＫ47	陶器（瀬戸美濃）	擂鉢	古瀬戸後Ⅳ期古～新	回転ナデ 底：回転糸切り	—	—	(4.4)	—		錆釉	59
274	ＳＫ47	灰釉陶器	段皿か稜皿	Ⅶ期新	回転ナデ	回転ナデ	(11.8)	3.3	6.3			58
275	ＳＫ47	灰釉陶器	碗Ｂ	Ⅶ期新	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.3)	7.1			57
276	ＳＫ47	須恵器（不明）	杯蓋	７Ｃ後葉	回転ナデ 天：回転ヘラ切り 無調整	回転ナデ	(10.4)	3.1	—		焼成不良	52
277	ＳＫ47	須恵器（不明）	杯身	７Ｃ後葉	回転ナデ 底：回転ヘラ切り 無調整	回転ナデ	9.4	3.1	—			54
278	ＳＫ47	須恵器（美濃須衛）	甕か	７Ｃ後葉	回転ナデ	回転ナデ	—	(4.2)	—			55
279	ＳＫ47	須恵器（不明）	蓋	７Ｃ後葉	回転ナデ	回転ナデ	—	(1.5)	—			53
280	ＳＫ47	石製品	砥石		—	—	—	—	—		（第17表）	56
281	ＳＫ50	山茶碗（東濃型）	碗	脇之島３号窯式か	—	—	—	(1.4)	—			385
282	ＳＫ３	陶器（瀬戸美濃）	擂鉢	古瀬戸後Ⅳ期	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.8)	—		錆釉	114
283	ＳＫ３	陶器（瀬戸美濃）	擂鉢	古瀬戸後Ⅳ期	底：回転糸切り	回転ナデ	—	(1.8)	—		錆釉	113
284	ＳＫ25	陶器（瀬戸美濃）	擂鉢	古瀬戸後Ⅳ期	回転ナデ 底：回転糸切り	—	—	(4.4)	—		錆釉	219
285	ＳＫ25	山茶碗（東濃型）	碗	脇之島３号窯式	回転ナデ 底：回転糸切り	回転ナデ	(11.6)	(3.1)	(5.1)			218
286	ＳＫ25	土師器	皿	Ｃ１類	無調整	一方向ナデ	(7.8)	(1.7)	—		内面タール痕	2
287	ＳＫ25	須恵器（不明）	平瓶	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	(5.9)	(3.5)	—		被熱	61
288	ＳＫ25	須恵器（尾張）	甕		回転ナデ	—	—	(5.0)	—			60
289	ＳＫ25	須恵器（不明）	鉄碗形鉢	７Ｃ後半～８Ｃ	回転ナデ	回転ナデ	—	(3.0)	—			62
290	ＳＫ25	土師器	伊勢型甕	Ａ１類	口：横ナデ 体：縦ハケ	横ハケ	—	(4.9)	—		外面スス付着	63
291	ＳＫ32	山茶碗（東濃型）	皿	大畑大洞４号窯式 古段階	回転ナデ 底：回転糸切り	回転ナデ	(8.3)	1.3	(4.4)		内面墨痕	29
292	ＳＫ32	土師器	皿	Ｃ２類か	無調整	一方向ナデ	(8.0)	(1.5)	—		内面タール痕	223
293	ＳＫ32	土師器	皿	Ｃ２類	無調整	一方向ナデ	(7.8)	1.6	—			224
294	ＳＫ58	山茶碗（東濃型）	碗	脇之島３号窯式	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.3)	—			258
295	ＳＫ58	土師器	皿	Ｃ１類	無調整	一方向ナデ	(7.6)	(1.3)	—			382
296	ＳＫ58	土師器	皿	Ｃ１類	—	—	—	(2.2)	—			259
297	ＳＫ24	土師器	皿	Ｃ１類	無調整	一方向ナデ	(8.0)	(1.2)	—			12
298	ＳＫ29	陶器（瀬戸美濃）	天目茶碗	連房第１～２小期	—	—	—	(1.7)	—			222
299	ＳＫ29	山茶碗（東濃型）	碗	脇之島３号窯式	回転ナデ 底：回転糸切り	回転ナデ	(11.6)	(2.8)	—			221
300	ＳＫ129	山茶碗（東濃型）	碗	脇之島３号窯式	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.5)	—		外面スス付着 内面自然釉	548
301	ＳＫ133	土師器	皿	Ｃ２類	無調整	一方向ナデ	—	1.8	—			557
302	ＳＫ134	陶器（瀬戸美濃）	平碗	古瀬戸後Ⅰ期	—	—	—	(2.5)	—		灰釉	509
303	ＳＫ134	陶器（瀬戸美濃）	卸皿	古瀬戸後Ⅲ期	—	—	—	(3.8)	—		灰釉	510
304	ＳＫ134	陶器（瀬戸美濃）	平碗	古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期	底：露呈 回転ヘラケズリ	—	—	(2.5)	—		灰釉	508
305	ＳＫ134	山茶碗（東濃型）	碗	脇之島３号窯式か	回転ナデ 底：回転糸切り	回転ナデ	(13.0)	(3.2)	(6.3)			507
306	ＳＫ134	土師器	皿	Ｃ１類	無調整	一方向ナデ	—	(1.9)	—			511
307	ＳＫ139	土師器	皿	Ｃ１類	無調整	一方向ナデ	—	(1.8)	—			563
308	ＳＫ139	鉄製品	直刀か				—		—		（第17表）	562
309	Ｐ160	木製品	礎板									730

第23表　遺物観察表（７）

番号	遺構名	種　類	器　種	編年分類	外面調整	内面調整	口径	器高	底径	その他法量	備　考	実測番号
311	P135	白磁(中国)	碗か	南宋期	—	—	—	(2.1)	—			561
312	P144	土師器	擂鉢か		—	—	—	(2.5)	—		口縁に工具痕・外面スス付着	564
314	SX12	土師器	皿	M４類	横ナデ	横ナデ	(10.0)	(1.3)	—			531
315	SX12	陶器(瀬戸美濃)	釜	古瀬戸後Ⅳ期	回転ナデ	回転ナデ	(12.6)	(4.3)	—		錆釉	529
316	SX12	土師器	皿	M４類	無調整	一方向ナデ	—	(2.3)	—			530
317	SB15-1	土師器	皿	C２類	無調整	一方向ナデ	—	(1.3)	—			513
318	SB15-1	鉄製品	釘				—		—		(第17表)	514
319	SK130	陶器(瀬戸美濃)	碗か皿		—	—	—	(1.5)	—		灰釉	556
320	SK130	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗	古瀬戸後Ⅳ期新	—	—	—	(1.6)	—		鉄釉	554
321	SK130 P105	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗	古瀬戸後Ⅳ期新	—	—	(11.8)	5.9	4.0		鉄釉・外面腰部錆釉	547
322	SK130	土師器	皿	B２-a類	横ナデ	横ナデ	—	(2.5)	—		口径16cm以上	552
323	SK130	土師器	皿	B２-b類	無調整	横ナデ	(9.3)	(1.9)	—			550
324	SK130	土師器	皿	B２-b類	無調整	横ナデ	(9.2)	(1.7)	—		タール痕	551
325	SK130	土師器	皿	B２-b類	無調整	横ナデ	(10.0)	(2.0)	—		タール痕	549
326	SK130	土師器	皿	B２-b類	無調整	横ナデ	—	(2.0)	—			555
327	SK130	土師器	皿	B２-a類	無調整	横ナデ	—	(2.6)	—			553
328	SK152	土師器	皿	B１類	無調整	一方向ナデ→横ナデ	12.3	2.9	—			521
329	SK152	土師器	皿	B１類	無調整	横ナデ	(12.6)	(2.3)	—			526
330	SK152	土師器	皿	B１かB２-b類	無調整	横ナデ	(10.2)	(1.5)	—			517
331	SK152	土師器	皿	B２-b類	横ナデ	一方向ナデ→横ナデ	12.7	2.5	—		外面底部に木目痕	522
332	SK152	土師器	皿	B２-a類	横ナデ	一方向ナデ→横ナデ	(9.2)	1.9	—		内面赤色物付着	527
333	SK152	土師器	皿	B１かB２-a類	横ナデ	一方向ナデ→横ナデ	9.7	1.8	—			525
334	SK152	土師器	皿	B２-a類	横ナデ	一方向ナデ→横ナデ	(13.0)	(2.0)	—			523
335	SK152	土師器	皿	B２-a類	横ナデ	横ナデ	(13.6)	(2.4)	—			524
336	SK152	土師器	皿	B２-a類	横ナデ	横ナデ	(16.6)	(2.3)	—			519
337	SK152	土師器	皿	B２-b類	無調整	横ナデ	(9.2)	(2.4)	—		タール痕	520
338	SK152	土師器	皿	B２-b類	無調整	一方向ナデ→横ナデ	(12.4)	(2.1)	—			528
339	SK152	土師器	皿	B２-b類	無調整	横ナデ	(13.2)	(1.7)	—			518
340	P99	土師器	皿	B２類	無調整	横ナデ	—	(1.5)	—			516
341	P104	土師器	皿	B１類	横ナデ	横ナデ	—	(2.5)	—			546
342	SK127	土師器	皿	B２-b類か	無調整	横ナデ	—	(2.4)	—			515
343	SD６	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	古瀬戸後Ⅳ期古	—	—	—	(2.7)	—		錆釉	537
344	SD６	陶器(瀬戸美濃)	緑釉小皿	古瀬戸後Ⅳ期古	回転ナデ	回転ナデ	—	(1.7)	—		灰釉	536
345	SD６	陶器(瀬戸美濃)	緑釉小皿	古瀬戸後Ⅳ期新	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.6)	—		灰釉	658
346	SD６	陶器(瀬戸美濃)	—	古瀬戸	—	—	—	(1.4)	—		灰釉	534
347	SD６	土師器	皿	B１類	横ナデ	一方向ナデ→横ナデ	10.0	2.2	—			575
348	SD６	土師器	皿	B１類	横ナデ	横ナデ	—	(2.0)	—			532
349	SD６	土師器	皿	B１類	無調整	横ナデ	—	(2.4)	—			535
350	SD６	土師器	皿	B２-a類	横ナデ	横ナデ	(12.5)	(1.7)	—			544
351	SD６	土師器	皿	B２-a類	横ナデ	横ナデ	—	(3.0)	—		口径約16cm	538
352	SD６	土師器	皿	B２-a類	横ナデ	一方向ナデ→横ナデ	(9.8)	(2.1)	—		口縁にタール痕	576
353	SD６	土師器	皿	B２-b類	無調整	横ナデ	9.4	2.3	—		タール痕・外面に規則的な指頭圧痕	543
354	SD６	土師器	皿	B１類	無調整	横ナデ	(18.0)	(2.1)	—			542
355	SD６	土師器	皿	D１類	—	—	4.5	1.5	—			533
356	SD６	土師器	皿	D１類	横ナデ	一方向ナデ	(5.0)	(1.5)	—			539
357	SD６	土師器	壺		—	—	—	(2.6)	(7.5)			541
358	SD６	須恵器(不明)	—		横ハケ	横ナデ	—	(2.4)	—			540
359	SD６	須恵器(不明)	蓋	TK209併行期	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.0)	—			657
360	SD６	山茶碗(尾張型)	碗	６型式	回転ナデ 底：回転糸切り		—	(1.6)	(5.9)			545
361	SK97	土師器	皿	B２類	—	—	—	(2.6)	—			388
362	SD１	土師器	皿	M類	無調整	一方向ナデ	—	(1.2)	—			68
363	SD１	土師器	皿	C１類	無調整	一方向ナデ	—	(1.0)	—			66
364	SD１	土師器	皿	B１類	無調整	一方向ナデ→横ナデ	(9.6)	(1.6)	—		タール痕	30
365	SD１	土師器	皿	B１かB２-b類	無調整	横ナデ	(11.6)	(1.7)	—			65
366	SD１	土師器	皿	B１かB２-a類	無調整	横ナデ	(16.0)	(2.2)	—			64
367	SD１	土師器	皿	B２-b類	無調整	一方向ナデ→横ナデ	(10.0)	(1.5)	(5.2)			69

第24表　遺物観察表（８）

番号	遺構名	種　類	器　種	編年分類	外面調整	内面調整	口径	器高	底径	その他法量	備　考	実測番号
368	ＳＤ１	土師器	皿	Ｂ２－ｂ類	無調整	一方向ナデ →横ナデ	(9.9)	(1.7)	—			31
369	ＳＤ１	土師器	皿	Ｂ２－ｂ類	無調整	一方向ナデ →横ナデ	13.7	2.2	—			3
370	ＳＤ１	土師器	皿	Ｃ２類	無調整	一方向ナデ	—	(1.2)	—			67
371	ＳＤ２	陶器 (瀬戸美濃)	緑釉皿	古瀬戸後Ⅳ期新 ～大窯第１段階	回転ナデ 底：回転糸切り	回転ナデ	—	(2.3)	—		灰釉	107
372	ＳＤ３	陶器 (瀬戸美濃)	折縁皿	連房第５～６小期	回転ヘラケズリ	—	—	(1.8)	—		灰釉	112
373	ＳＤ３	陶器 (瀬戸美濃)	折縁皿	近世	底：回転ヘラケズリ	—	—	(1.5)	(4.8)		灰釉	111
374	ＳＤ５	土師器	受口状口縁甕		口：横ナデ 体：ケズリ	横ナデ	(16.4)	(4.2)	—			104
375	ＳＤ５	土師器	台付甕		縦ナデ	指オサエ	—	(5.2)	(7.0)			103
376	ＳＤ５	土師器	パレス壺	Ｃ類	—	—	—	(3.2)	—		内外面赤彩	105
377	ＳＤ５	須恵器(尾張)	平瓶	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(4.0)	—			102
378	ＳＤ５	須恵器(不明)	甕		斜めナデ	—	—	(4.0)	(13.2)			729
379	ＳＤ５	山茶碗 (尾張型)	碗	７型式	回転ナデ 底：回転糸切り	回転ナデ	—	(2.3)	(6.0)		高台剥離	87
380	ＳＤ５	陶器 (瀬戸美濃)	香炉	古瀬戸後Ⅳ期新	回転ナデ	回転ナデ	(11.6)	(3.1)	—		錆釉	91
381	ＳＤ５	土師器	皿	Ｂ１類	横ナデ	—	—	(1.4)	—		タール痕	96
382	ＳＤ５	土師器	皿	Ｂ２－ａ類	横ナデ	横ナデ	—	(2.0)	—			97
383	ＳＤ５	土師器	皿	Ｂ２－ａ類	横ナデ	横ナデ	—	(2.5)	—			98
384	ＳＤ５	土師器	皿	Ｂ２－ａ類	横ナデ	横ナデ	—	(2.2)	—			100
385	ＳＤ５	土師器	皿	Ｂ２－ａ類	横ナデ	横ナデ	—	(2.5)	—			99
386	ＳＤ５	土師器	皿	Ｂ２－ｂ類	無調整	横ナデ	—	(2.4)	—			101
387	ＳＤ５	土師器	皿	Ｂ２－ｂ類	無調整	横ナデ	—	(1.9)	—			89
388	ＳＤ５	土師器	皿	Ｂ２－ｂ類	無調整	横ナデ	—	(1.5)	—			90
389	ＳＤ５	土師器	皿	Ｃ２類	無調整	一方向ナデ	—	(1.1)	—			95
390	ＳＤ５	土師器	皿	Ｃ２類	無調整	一方向ナデ	6.9	1.3	—			88
391	ＳＤ５	磁器	碗		—	—	—	(3.0)	—		染付	94
392	ＳＤ５	陶器 (瀬戸美濃)	皿	連房第１～２小期	—	—	—	(1.8)	—		灰釉(外面下半拭い取り)	92
393	ＳＤ５	陶器 (瀬戸美濃)	壺	連房第１～２小期	—	—	—	(1.3)	—		灰釉	93
394	ＳＸ１	縄文土器	縄文土器	縄文晩期	貝殻条痕	斜めナデ	—	(14.3)	—			70
395	ＳＸ１	土師器	受口状口縁甕		横ナデ	—	—	(3.3)	—		外面スス付着	71
396	ＳＸ１	土師器	受口状口縁甕		横ナデ	横ナデ	—	(3.2)	—		外面口縁部スス付着	72
397	ＳＸ１	土師器	高杯		—	—	—	(3.9)	—			73
398	ＳＸ１	須恵器(不明)	高杯	ＴＫ209併行期	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.0)	—			77
399	ＳＸ１	須恵器か					—	(1.4)	—		焼成不良	76
400	ＳＸ１	灰釉陶器	椀	Ⅶ期古～新	回転ナデ 底：回転糸切り	回転ナデ	—	(2.1)	(4.4)			78
401	ＳＸ１	土師器	清郷型鍋		—	横ナデ	—	(3.4)	—		清郷型	74
402	ＳＸ１	山茶碗 (東濃型)	碗	脇之島３号窯式 か生田２号窯式	回転ナデ 底：回転糸切り	回転ナデ	—	(1.7)	—			79
403	ＳＸ１	陶器 (瀬戸美濃)	天目茶碗	古瀬戸後Ⅳ期新			—	(1.6)	—		鉄釉	80
404	ＳＸ１	土師器	皿	Ｃ２類	無調整	—	—	(1.1)	—			392
405	ＳＸ１	土師器	皿	Ａ２類？	横ナデ	横ナデ	—	(2.1)	—			84
406	ＳＸ１	土師器	皿	Ｂ１類	—	横ナデ	—	(2.3)	—			389
407	ＳＸ１	土師器	皿	Ｂ２－ｂ類	無調整	一方向ナデ →横ナデ	—	(2.0)	—			390
408	ＳＸ１	土師器	皿	Ｂ２－ｂ類	無調整	横ナデ	—	(2.2)	—		内面タール痕	391
409	ＳＸ１	土師器	皿	Ｂ２－ｂ類？	横ナデ	横ナデ	—	(1.3)	—			85
410	ＳＸ１	瓦質土器	風炉	室町～戦国時代			—	(3.1)	—			75
411	ＳＸ１	陶器(志野)	皿	連房第３～４小期			—	(1.0)	(6.4)		長石釉	82
412	ＳＸ１	陶器(瀬戸)	碗	連房第８～９小期			—	(1.5)	(5.0)		灰釉	81
413	ＳＸ１	陶器(美濃)	鉢	近世			—	(3.2)	—		灰釉	83
414	ＳＸ１	青磁	碗	近世			—	(3.1)	—			86
415	ＳＸ１	土製品	土鈴		—	—	—	(2.5)	—	巾(3.0) 孔径0.3		393
416	ＳＸ１	土製品	土鈴		—	—	—	(2.0)	—	巾(3.2) 孔径0.2		394
417	ＳＸ３	磁器(肥前)	碗	近世	—	回転ナデ	—	(2.2)	—		赤絵	106
418	ＳＸ４	陶器(美濃)	筒形碗	連房第10小期	—	回転ナデ	—	(2.3)	—		染付	110
419	ＳＸ23	須恵器 (畿内系)	杯身	７Ｃ前半	回転ナデ 底：回転ヘラ切り 無調整	回転ナデ	—	(5.1)	—			735
420	ＮＲ	土師器	Ｓ字状口縁台付甕	Ａ類	縦ハケ	横ハケ	—	(3.0)	—			732
421	ＮＲ	土師器	高杯か		—	—	(10.5)	(6.7)	—			746
422	ＮＲ	土師器	壺か		—	横ミガキ	—	(3.2)	—			731
423	ＮＲ	土師器	皿	Ｃ２類	—	—	—	(0.8)	—			733
424	ＳＫ９	土師器	皿	Ｃ１類？	—	—	—	(1.0)	—			134
425	Ｐ68	土製品	土鈴		—	—	—	(2.7)	—			311
426	Ｐ260	灰釉陶器	碗か	Ⅶ新～Ⅷ古	—	—	—	(1.1)	—			737

第25表　遺物観察表（９）

番号	遺構名	種　類	器　種	編年分類	外面調整	内面調整	口径	器高	底径	その他法量	備　考	実測番号
431	北iv層	山茶碗（尾張型）	碗	４型式	回転ナデ	—	(16.8)	(3.4)	—			580
432	北iv層	土師器	皿	Ｃ１類	—	一方向ナデ	—	(1.2)	—			585
433	北iv層	陶器（瀬戸美濃）	卸皿	古瀬戸後Ⅳ期古	—	—	—	(2.3)	—		灰釉	584
434	北iv層	灰釉陶器	段皿	Ⅷ期古～新	回転ナデ	回転ナデ	—	(1.7)	—			579
435	北iv層	石器	石鏃				—		—		（第17表）	583
436	北iv層	石製品	砥石		—	—	—	—	—		（第17表）	582
437	北iii層	土師器	皿	Ｂ２−ｂ類？	無調整	横ナデ	(8.8)	(1.6)	—			596
438	北iii層	土師器	皿	Ｃ２類	無調整	一方向ナデ	(7.0)	(1.1)	—			595
439	北iii層	土師器	皿	Ｃ２類	無調整	—	(6.8)	(1.0)	—			612
440	北iii層	土師器	皿	Ｃ２類	無調整	一方向ナデ	(8.4)	(1.4)	—			604
441	北iii層	土師器	皿	Ｃ２類	無調整	一方向ナデ	(7.8)	(1.2)	—			607
442	北iii層	土師器	皿	Ｂ１類	横ナデ	横ナデ	—	(1.9)	—			593
443	北iii層	土師器	皿	Ｂ１類	横ナデ	横ナデ	—	(2.0)	—		タール痕	602
444	北iii層	土師器	皿	Ｂ１かＢ２−ｂ類	横ナデ	横ナデ	—	(1.5)	—			618
445	北iii層	土師器	皿	Ｂ２−ｂ類	横ナデ	横ナデ	—	(1.8)	—			609
446	北iii層	土師器	皿	Ｂ２−ｂ類	無調整	横ナデ	—	(2.0)	—			603
447	北iii層	土師器	皿	Ｂ２−ｂ類	無調整	横ナデ	—	(1.8)	—			597
448	北iii層	土師器	皿	Ｂ２−ｂ類	無調整	横ナデ	—	(1.7)	—			611
449	北iii層	土師器	皿	Ｂ２−ａ類	横ナデ	—	—	(2.0)	—			606
450	北iii層	土師器	皿	Ｂ２−ｂ類	無調整	横ナデ	—	(2.6)	—			591
451	北iii層	土師器	皿	Ｂ２−ｂ類	無調整	横ナデ	—	(1.7)	—		タール痕	610
452	北iii層	陶器（瀬戸美濃）	小杯か小碗	近世	回転ケズリ	—	—	(0.9)	(4.0)			599
453	北iii層	土師器	皿	Ｃ２類か	無調整	横ナデ	—	(1.2)	—			613
454	北iii層	土師器	皿	Ｂ２−ｂ類	無調整	横ナデ	—	(1.6)	—			588
455	北iii層	土師器	皿	Ｍ３類	横ナデ	横ナデ	—	(1.1)	—			617
456	北iii層	土師器	皿	Ｃ１類	指頭圧痕	一方向ナデ	—	(1.0)	—			619
457	北iii層	青磁（中国）	碗	Ⅴ～Ⅶ類 南宋	—	—	—	(2.4)	—			601
458	北iii層	白磁（中国）	皿	Ｂ群 15～16C	底：露呈 回転ヘラケズリ	—	(9.8)	(2.0)	—			592
459	北iii層	陶器（瀬戸美濃）	香炉	古瀬戸後Ⅳ期新	—	回転ナデ	—	(2.4)	—		錆釉	614
460	北iii層	陶器（瀬戸美濃）	壺	古瀬戸後期	回転ケズリ	—	—	(2.6)	(5.0)		鉄釉	615
461	北iii層	陶器（瀬戸美濃）	天目茶碗	古瀬戸後Ⅳ期新	—	—	—	(1.6)	—			605
462	北iii層	土師器	羽釜	Ａ２類	—	横ナデ	—	(2.3)	—		外面スス付着	578
463	北iii層	山茶碗（東濃型）	碗	大洲東１号窯式	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.2)	(3.0)			594
464	北iii層	陶器（瀬戸美濃）	擂鉢	古瀬戸後Ⅳ期古	—	—	—	(1.7)	—		錆釉	620
465	北iii層	土師器	焙烙		—	—	—	(1.7)	—		外面スス付着	600
466	北iii層	山茶碗（東濃型）	碗	脇之島３号窯式	回転ナデ	回転ナデ	—	(1.1)	(4.4)			590
467	北iii層	陶器（瀬戸美濃）	緑釉小皿	古瀬戸後Ⅲ期	—	—	—	(1.8)	—		灰釉	616
468	北iii層	陶器（瀬戸美濃）	擂鉢	古瀬戸後Ⅳ期新							加工円盤・錆釉	
469	北iii層	石製品	碁石		—	—	—	—	—		（第17表）	621
470	北ii層	土師器	皿	Ｂ２−ａ類	横ナデ	横ナデ	—	(1.8)	—			631
471	北ii層	土師器	皿	Ｂ２−ｂ類	無調整	横ナデ	—	(1.5)	—			635
472	北ii層	土師器	皿	Ｂ２−ｂ類	無調整	横ナデ	—	(1.6)	—			632
473	北ii層	土師器	皿	Ｂ２−ｂ類	無調整	横ナデ	—	(1.9)	—			633
474	北ii層	磁器	碗	近世か	—	—	—	(1.5)	—		染付	634
475	北ii層	山茶碗（東濃型）	碗	明和１号窯式～大畑大洲４号窯式	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.1)	—			636
476	北ii か北iii層	陶器（瀬戸美濃）	筒形香炉	古瀬戸後Ⅳ期新	—	回転ナデ	—	(4.7)	—		外面鉄釉・内面無釉	622
477	北ii か北iii層	土師器	皿	Ｃ２類	無調整	一方向ナデ	(8.0)	(0.9)	—			624
478	北ii か北iii層	土師器	皿	Ｂ２−ｂ類	無調整	横ナデ	(10.6)	(2.0)	—		口縁部タール痕	626
479	北ii か北iii層	陶器（瀬戸美濃）	灯明皿	大窯第１－２段階	回転ナデ 底：回転糸切り	回転ナデ	—	(0.7)	(4.6)		無釉	623
480	北ii か北iii層	陶器（瀬戸美濃）	碗	古瀬戸後Ⅳ期	—	—	—		—		鉄釉	627
481	北ii か北iii層	土師器	皿	Ｃ２類								
482	北i層	須恵器（美濃須衛）	杯身	７Ｃ後半	—	回転ナデ	(10.4)	(2.8)	—			656
483	北i層	陶器（瀬戸美濃）	碗	近世	—	—	—		—		内外面灰釉	654
484	北i層	土師器	皿	Ｂ２−ａ類	横ナデ	横ナデ	—	(2.1)	—			655
485	北i層	磁器（瀬戸美濃）	皿	19世紀	—	—	—	(2.4)	—		内面染付	653
486	Ｐ面層	土師器	Ｓ字状口縁台付甕	Ａ類	縦ハケ→斜ハケ	横ハケ	(15.8)	(7.5)	—			748

第26表　遺物観察表（10）

番号	遺構名	種　類	器　種	編年分類	外面調整	内面調整	口径	器高	底径	その他法量	備　考	実測番号
487	P 亜層	土師器	台付甕		縦ハケ	横ハケ	—	(6.3)	—		外面スス付着	739
488	P 亜層	土師器	台付甕		横ハケ	横ハケ	—	(11.2)	(9.0)			740
489	P 亜層	土師器	台付甕		—	—	—	(4.2)	(8.5)			744
490	P 亜層	土師器	有段高杯		—	横ハケ	(30.4)	(12.7)	—			751
491	P 亜層	土師器	有段高杯		—	—	—	(4.4)	—			743
492	P 亜層	土師器	高杯		—	—	—	(3.6)	—			741
493	P 亜層	土師器	くの字状口縁甕		横ハケ	横ハケ	—	(3.7)	—		外面スス付着	742
494	南Ⅱ層〔J 2〕	土師器	パレス壺		—	—	(14.4)	(3.4)	—		内外面赤彩	359
495	南Ⅱ層〔B 3〕	土師器	パレス壺		—	—	—	(4.2)	—		外面赤彩	688
496	南Ⅱ層〔H 4〕	土師器	広口壺		—	—	—	(3.8)	—		色調：赤褐色	369
497	南Ⅱ層〔J 3〕	土師器	パレス壺		—	—	—	(3.7)	—		外面赤彩	363
498	南Ⅱ層〔K 3〕	土師器	広口壺		—	—	—	(1.9)	—		内外面赤彩	432
499	南Ⅱ層〔D 5〕	土師器	パレス壺		横ハケ	横ナデ	—	(4.7)	—		内外面赤彩	423
500	南Ⅱ層〔B 3〕	土師器	加飾壺		横ミガキ	横ナデ	—	(4.1)	—			451
501	南Ⅱ層〔B 3〕	土師器	加飾壺		—	—	—	(3.0)	—		外面赤彩	453
502	南Ⅱ層〔B 3〕	土師器	加飾壺		—	—	—	(3.0)	—			454
503	南Ⅱ層〔E 5〕	土師器	壺		縦ハケ	—	(11.6)	(2.4)	—			403
504	南Ⅱ層〔K 4〕	土師器	壺		首：横ハケ	縦ハケ	—	(3.5)	—	頸部(8.8)	内外面赤彩	354
505	南Ⅱ層〔M 5〕	土師器	壺		縦ハケ	—	—	(2.4)	—			700
506	南Ⅱ層〔M 4〕	土師器	壺		斜めミガキ	斜めハケ	—	(3.4)	(5.1)			702
507	南Ⅱ層〔C 6〕	土師器	壺		縦ナデ	縦ハケ	—	(2.8)	(5.8)			441
508	南Ⅱ層〔I 4〕	土師器	壺		—	—	—	(2.0)	(4.4)			345
509	南Ⅱ層〔C 5〕	土師器	壺		—	斜めナデ	—	(2.8)	(5.2)			446
510	南Ⅱ層〔B 3〕	土師器	壺		—	—	—	(3.6)	—		底部に粘土を貼り付け	450
511	南Ⅱ層〔C 6〕	土師器	壺		斜めケズリ	斜めナデ	—	(2.0)	3.4			440
513	南Ⅱ層〔K 3〕	土師器	壺		—	横ナデ	—	(2.5)	—			431
514	南Ⅱ層〔C 6〕	土師器	鉢		横ナデ	横ナデ 一部横ハケ	—	(6.4)	—		外面スス付着 513と同一か	438
515	南Ⅱ層〔C 6〕	土師器	鉢		横ナデ	横ナデ 一部横ハケ	—	(3.8)	—		内面炭化物・外面スス付着	439
516	南Ⅱ層〔B 3〕	土師器	加飾壺		—	—	—	—	—	—	内外面赤彩	321
517	南Ⅱ層〔D 5〕	土師器	有段高杯		斜めミガキ	斜めミガキ	(17.2)	(5.5)	—			422
518	南Ⅱ層〔D 6〕	土師器	S 字状口縁台付甕	D 類	口：横ナデ 体：縦ハケ→横ハケ	横ナデ	(16.5)	(4.2)	—			448
519	南Ⅱ層〔G 3〕	土師器	S 字状口縁台付甕	B C 類	縦ハケ→横ハケ	横ハケ	(16.8)	(3.8)	—			415
520	南Ⅱ層〔G 5〕	土師器	伊勢型甕	A 1 類	縦ハケ 口：横ナデ	横ハケ 口：横ナデ	(22.6)	(6.6)	—			418
521	南Ⅱ層〔G 3〕	土師器	伊勢型甕	A 1 類	縦ハケ 口：横ナデ	縦ハケ 口：横ハケ	(2.4)	(4.0)	—			416
522	南Ⅱ層〔G 6〕	土師器	受口状口縁甕		横ナデ	横ナデ	(15.9)	(3.5)	—		外面頸部スス多く付着	457
523	南Ⅱ層〔H 5〕	土師器	受口状口縁甕		口：横ハケ 体：縦ハケ	横ナデ	(20.0)	(4.5)	—			332
524	南Ⅱ層〔J 5〕	土師器	S 字状口縁台付甕	A 類	口：横ハケ、綱突 体：縦ハケ→横ハケ	口：横ハケ 体：縦ハケ	—	(3.3)	—		外面口縁部スス付着	340
525	南Ⅱ層〔K 4〕	土師器	S 字状口縁台付甕	B C 類	横ハケ→縦ハケ	横ナデ	—	(3.4)	—			350
526	南Ⅱ層〔C 6〕	土師器	S 字状口縁台付甕	B C 類	口：横ナデ 体：縦ハケ	横ナデ	—	(2.1)	—			435
527	南Ⅱ層〔C 6〕	土師器	S 字状口縁台付甕	B C 類	—	—	—	(1.6)	—			434
528	南Ⅱ層〔K 4〕	土師器	甕		口：横ハケ 体：縦ハケ	横ハケ	—	(3.5)	—			711
529	南Ⅱ層〔K 4〕	土師器	甕か		—	—	—	(2.5)	—			712
530	南Ⅱ層〔J 2〕	土師器	壺か鉢		—	—	—	(1.9)	(4.4)			360
531	南Ⅱ層〔K 5〕	土師器	S 字状口縁台付甕		体：斜めハケ	台：ナデ	—	(7.0)	(9.0)			329
532	南Ⅱ層〔K 4〕	土師器	S 字状口縁台付甕		—	—	—	(5.1)	(10.2)			351
533	南Ⅱ層〔C 5〕	土師器	台付甕		—	—	—	(4.0)	—			445
534	南Ⅱ層〔K 4〕	土師器	甕		横ハケ	横ハケ	—	(13.6)	—		外面黄褐色	352
535	南Ⅱ層〔L 5〕	土師器	受口状口縁甕		横ナデ	横ナデ	(13.8)	(6.2)	—			372
536	南Ⅱ層〔C 6〕	土師器	受口状口縁甕		横ナデ	横ナデ	—	(3.4)	—			437
537	南Ⅱ層〔D 6〕	土師器	受口状口縁甕		—	—	—	(3.7)	—			675
538	南Ⅱ層〔E 2〕	土師器	受口状口縁甕		横ナデ	横ナデ	—	(2.7)	—			413
539	南Ⅱ層〔J 3〕	土師器	受口状口縁甕		口：横ナデ 体：縦ハケ	横ナデ	—	(1.4)	—			362
540	南Ⅱ層〔D 5〕	土師器	鉢か		—	—	—	(2.9)	—		口縁部を折り曲げる	678
541	南Ⅱ層〔I 1〕	土師器	受口状口縁甕		横ナデ	横ナデ	—	(4.0)	—			467
542	南Ⅱ層〔H 4〕	土師器	受口状口縁甕		—	—	—	(3.6)	—			368
543	南Ⅱ層〔B 3〕	土師器	受口状口縁甕		横ナデ	横ナデ	—	(2.9)	—		外面スス付着	449
544	南Ⅱ層〔I 1〕	土師器	受口状口縁甕		横ナデ	横ナデ	—	(4.1)	—		外面スス付着	468
545	南Ⅱ層〔L 5〕	土師器	くの字状口縁甕		—	—	—	(2.6)	—			705
546	南Ⅱ層〔G 5〕	土師器	くの字状口縁甕		—	—	—	(3.4)	—			419
547	南Ⅱ層〔G 6〕	土師器	壺か		—	—	—	(2.6)	—			659
548	南Ⅱ層〔G 6〕	土師器	甕		—	—	—	(3.7)	—		内面炭化物付着	660
549	南Ⅱ層〔D 5〕	土師器	有稜高杯		—	横ミガキ	(9.4)	(5.4)	—		外面に線刻文様	424
550	南Ⅱ層〔D 6〕	土師器	有段高杯		横ハケ	縦ミガキ	—	(4.4)	—			395

第27表　遺物観察表（11）

番号	遺構名	種　類	器　種	編年分類	外面調整	内面調整	口径	器高	底径	その他法量	備　考	実測番号
551	南Ⅱ層(Ｈ６)	土師器	有稜高杯		—	—	—	(4.6)	—			401
552	南Ⅱ層(Ｆ３)	土師器	有稜高杯		横ハケ	—	—	(3.1)	—			664
553	南Ⅱ層(Ｄ１)	土師器	受口状口縁甕		—	横ハケ	—	(4.4)	—			680
554	南Ⅱ層(Ｋ４)	土師器	—		—	—	—	(2.2)	—			353
555	南Ⅱ層(Ｋ４)	土師器	有段高杯		縦ミガキ	横ハケ	—	(4.5)	—			355
556	南Ⅱ層(Ｄ６)	土師器	有段高杯		横ハケ	—	—	(3.1)	—			396
557	南Ⅱ層(Ｅ６)	土師器	高杯か		斜めハケ→横ハケ	横ハケ	—	(2.7)	—			668
558	南Ⅱ層(Ｅ６)	土師器	有段高杯		横ミガキ	斜めミガキ	—	(2.7)	—			667
559	南Ⅱ層(Ｋ３)	土師器	高杯		—	ミガキ	—	(3.1)	—			714
560	南Ⅱ層(Ｄ５)	土師器	器台	Ｂ１類	斜めミガキ	斜めミガキ	(19.0)	(4.5)	—			421
561	南Ⅱ層(Ｄ６)	土師器	器台	Ｂ類	縦ミガキ	縦ミガキ	(20.1)	(4.6)	—			319
562	南Ⅱ層(Ｈ４)	土師器	鉢		—	—	—	(4.5)	—			370
563	南Ⅱ層(Ｊ４)	土師器	高杯		縦ミガキ	横ハケ	—	(3.2)	(13.8)			398
564	南Ⅱ層(Ｊ２)	土師器	高杯		—	横ハケ	—	(6.5)	—			696
565	南Ⅱ層(Ｊ４)	土師器	高杯		—	斜めハケ	—	(4.0)	—			399
566	南Ⅱ層(Ｊ３)	土師器	高杯		横ナデ	横ケズリ	—	(3.2)	—		内面丁寧な調整	698
567	南Ⅱ層(Ｇ３)	—	不明		縦ハケ→ 一部横ケズリ	縦ハケ	—	(7.2)	—	中6.7		662
568	南Ⅱ層(Ｅ６)	土師器	ミニチュア		—	—	—	(1.7)	2.8			669
569	南Ⅱ層(Ｃ３)	土師器	平底甕		—	—	—	(4.4)	(3.7)		内面炭化物付着	320
570	南Ⅱ層(Ｉ３)	土製品	勾玉		—	—	—	3.8	—	中2.7		322
571	南Ⅱ層(Ｈ４)	土製品	—		—	—	—	(1.5)	—		刻みがある	691
572	南Ⅱ層(Ｋ５)	土製品	—		—	—	—	(4.5)	—	中(2.0)	把手か	459
573	南Ⅱ層(Ｇ３)	土製品	—		—	—	—	(5.0)	—	中2.8		663
574	南Ⅱ層(Ｌ６)	須恵器 (美濃須衛)	杯蓋	７Ｃ後半	回転ナデ 天：回転ヘラケズリ	回転ナデ	(11.9)	(3.4)	(3.4)			704
575	南Ⅱ層(Ｌ６)	須恵器(不明)	蓋	７Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.5)	(7.4)		外面底部に工具痕	374
576	南Ⅱ層(Ｊ３)	須恵器(尾張)	蓋	Ｈ—44号窯式	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.5)	—		外面に自然釉	365
577	南Ⅱ層(Ｋ６)	須恵器 (畿内系)	杯身	７Ｃ前半	回転ナデ 底：回転ヘラケズリ	回転ナデ	(8.9)	(3.1)	—			397
578	南Ⅱ層(Ｉ６)	須恵器(不明)	蓋	８Ｃ前半	回転ナデ 天：回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	(3.2)	—			692
579	南Ⅱ層(Ｈ５)	須恵器(不明)	蓋	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.2)	—			335
580	南Ⅱ層(Ｇ６)	須恵器(不明)	杯身	ＴＫ217併行期	—	回転ナデ	—	(3.1)	—		外面自然釉	430
581	南Ⅱ層(Ｅ６)	須恵器 (美濃須衛か)	杯身	７Ｃ前半	—	回転ナデ	—	(2.8)	—		外面自然釉	407
582	南Ⅱ層(Ｊ３)	須恵器(不明)	杯身	ＴＫ43併行期	—	—	—	(3.7)	—			366
583	南Ⅱ層(Ｇ２)	須恵器(尾北)	高杯	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(4.7)	(7.5)		外面自然釉	318
584	南Ⅱ層(Ｄ５)	須恵器(不明)	高杯		—	回転ナデ	—	(3.7)	—		外面自然釉	676
585	南Ⅱ層(Ｉ６)	須恵器 (美濃須衛か)	高杯	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(3.2)	—			337
586	南Ⅱ層(Ｂ５)	須恵器(不明)	高杯	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(3.0)	—			465
587	南Ⅱ層(Ｂ３)	須恵器 (畿内系)	高杯	６Ｃ末	横ナデ ハケ目	横ナデ	—	(2.0)	—		外面に沈線	456
588	南Ⅱ層(Ｋ５)	須恵器 (美濃須衛)	杯か	７Ｃ後半	—	回転ナデ	—	(1.5)	(5.6)			709
589	南Ⅱ層(Ｇ４)	須恵器 (美濃須衛)	無台杯	７Ｃ後半	回転ナデ 底：回転糸切り	回転ナデ	(17.0)	(5.4)	—			460
590	南Ⅱ層(Ｃ５)	須恵器 (美濃須衛)	有台杯	８Ｃ中葉	回転ナデ 底：回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	(1.9)	—			444
592	南Ⅱ層(Ｋ３)	須恵器 (美濃須衛)	有台杯	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.8)	(9.0)		金属写し	400
593	南Ⅱ層(Ｋ５)	須恵器 (畿内系か 尾張)	甕	７Ｃ後半	横ナデ	横ナデ	(30.4)	(7.5)	—		焼成不良	707
594	南Ⅱ層(Ｊ３)	須恵器 (尾張か)	壺	７Ｃ初頭	—	回転ナデ	—	(2.8)	—		外面に波状文	367
595	南Ⅱ層(Ｋ５)	須恵器(不明)	平鉢か		回転ナデ	回転ナデ	—	(4.2)	(13.4)			708
596	南Ⅱ層(Ｂ５)	須恵器(不明)	瓶	７Ｃ代	—	—	—	(0.7)	—			466
597	南Ⅱ層(Ｌ５)	須恵器(不明)	平瓶か長頸瓶	７Ｃ代	回転ナデ	回転ナデ	(9.5)	(6.4)	—			706
598	南Ⅱ層(Ｂ６)	須恵器 (美濃須衛)	短頸壺	７Ｃ前半	口～体：回転ナデ 底：回転ケズリ	回転ナデ	(10.1)	(8.0)	—			464
599	南Ⅱ層(Ｉ４)	須恵器 (美濃須衛)	鉢	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(5.4)	—			347
600	南Ⅱ層(Ｋ３)	須恵器(不明)	鉢	７Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.8)	—			713
601	南Ⅱ層(Ｍ４)	須恵器(不明)	鉢		回転ナデ	回転ナデ	—	(2.7)	—			703
602	南Ⅱ層(Ｇ４)	須恵器 (畿内系か)	碗		回転ナデ	回転ナデ	—	(4.4)	—		金属写し	425
603	南Ⅱ層(Ｉ４)	須恵器(不明)	碗		回転ナデ	回転ナデ	—	(3.7)	—			348
604	南Ⅱ層(Ｌ６)	須恵器(不明)	長頸瓶	７Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.5)	(7.4)		内面底部に自然釉	375
605	南Ⅱ層(Ｈ５)	須恵器(不明)	杯	７Ｃ中～後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.7)	—		金属写し	334
606	南Ⅱ層(Ｆ３)	須恵器(不明)	甑	Ｂ２－ａ類	回転ナデ	—	—	(2.7)	—		内面自然釉	429
607	南Ⅱ層(Ｈ４)	須恵器(不明)	甑	７Ｃ前半	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.7)	—		外面に自然釉	371
608	南Ⅱ層(Ｇ３)	須恵器 (畿内系)	甑	７Ｃ前半	回転ナデ 底：ヘラケズリ	回転ナデ	—	(3.2)	—			417

第28表　遺物観察表（12）

番号	遺構名	種　類	器　種	編年分類	外面調整	内面調整	口径	器高	底径	その他法量	備　考	実測番号
609	南Ⅱ層〔Ｌ５〕	須恵器（美濃須衛）	甕	７Ｃ前半	平行タタキ	同心円当て具	—	(4.0)	—		当具痕残い	373
610	南Ⅱ層〔Ｈ６〕	須恵器（美濃丸山）	長頸壺	７Ｃ初頭	回転ナデ	回転ナデ	—	(3.9)	—			402
611	南Ⅱ層〔Ｈ２〕	土師器	—		底：横ケズリ	—	—	(2.2)	(16.2)			316
612	南Ⅱ層〔Ｉ６〕	土師器	伊勢型甕	Ａ１類	横ナデ	横ハケ	(20.7)	(2.7)	—		口縁部に刺突	317
613	南Ⅱ層〔Ｍ５〕	土師器	甑		斜めハケ	横ハケ	—	(4.2)	—			701
614	南Ⅱ層〔Ｊ３〕	土師器	甑		縦ハケ	横ハケ	—		—			699
615	南Ⅱ層〔Ｊ３〕	土師器	甕		縦ハケ	横ハケ	—	(3.0)	—			364
616	南Ⅱ層〔Ｃ６〕	土師器	平底甕	Ｂ２類か	縦ハケ	横ハケ	—	(2.0)	—			442
617	南Ⅱ層〔Ｃ６〕	土師器	ミニチュア		—	—	—	(3.4)	—			682
618	南Ⅱ層〔Ｉ６〕	土師器	焼塩土器	美濃式１類	—	—	—	(3.9)	—	器壁0.5		338
619	南Ⅱ層〔Ｈ５〕	土師器	焼塩土器	美濃式１類	—	—	—	(2.4)	—	器壁0.4		333
620	南Ⅱ層〔Ａ２〕	常滑	擂鉢	中世後期	回転ナデ	回転ナデ	—	(3.9)	—			463
621	南Ⅱ層〔Ｇ３〕	灰釉陶器	花瓶	Ⅶ期	—	—	—		—		内外面灰釉	661
622	南Ⅱ層〔Ｈ１〕	灰釉陶器	深碗	Ⅶ期中～新	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.5)	(6.2)			336
623	南Ⅱ層〔Ｆ５〕	灰釉陶器	皿	Ⅶ期古～新	回転ナデ 底：回転糸切り	回転ナデ	—	(1.2)	(6.2)			344
624	南Ⅱ層〔Ｅ４〕	灰釉陶器	皿か		回転ナデ	回転ナデ	—	(2.0)	(8.0)			410
625	南Ⅱ層〔Ｉ４〕	灰釉陶器	段皿	Ⅶ期中～新	—	—	—	(2.0)	—			349
626	南Ⅱ層〔Ｋ６〕	山茶碗（東濃型）	碗	大畑大洞４号窯式 古段階	回転ナデ 底：回転ヘラケズリ	回転ナデ	—	(2.0)	(4.8)			420
627	南Ⅱ層〔Ｊ６〕	山茶碗（尾張型）	碗	６型式	回転ナデ 底：回転糸切り	回転ナデ	—	(2.3)	(7.5)			330
628	南Ⅱ層〔Ｌ６〕	山茶碗（東濃型）	碗	脇之島３号窯式	回転ナデ 底：回転糸切り	回転ナデ	—	(2.4)	(5.0)			377
629	南Ⅱ層〔Ｌ６〕	山茶碗（尾張型）	碗	４型式	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.5)	(8.0)			376
630	南Ⅱ層〔Ｇ１〕	山茶碗（尾張型）	皿	５型式	底：回転糸切り	回転ナデ	—	(1.4)	3.9			426
631	南Ⅱ層〔Ｈ２〕	山茶碗（東濃型）	碗	脇之島３号窯式	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.0)	—			357
632	南Ⅱ層〔Ｅ５〕	山茶碗（東濃型）	碗	脇之島３号窯式	回転ナデ	回転ナデ	—	(1.8)	—			672
633	南Ⅱ層〔Ｋ４〕	瓦質土器	風炉	室町～戦国時代	横ナデ	横ナデ	—	(2.9)	—			710
634	南Ⅱ層〔Ｅ５〕	瓦質土器	—		—	—	—	(1.7)	—	頸部径(9.2)		670
635	南Ⅱ層〔Ｋ４〕	青磁（中国）	香炉	明代か	—	—	(9.4)	(2.3)	—			356
636	南Ⅱ層〔Ｊ２〕	磁器（中国）	皿	明代か	—	—	—	(2.3)	—			361
637	南Ⅱ層〔Ａ３〕	白磁（中国）	皿	Ⅸ類	—	—	—	(1.1)	—			689
638	南Ⅱ層〔Ｅ５〕	土師器	皿	Ｂ２－ａ類	横ナデ	横ナデ	—	(2.1)	—			671
639	南Ⅱ層〔Ｃ２〕	土師器	皿	Ｂ２－ａ類	横ナデ	横ナデ	—	(2.4)	—			461
640	南Ⅱ層〔Ｃ２〕	土師器	皿	Ｂ２－ａ類	横ナデ	横ナデ	—	(2.2)	—			462
641	南Ⅱ層〔Ｈ２〕	土師器	皿	Ｂ２類	無調整	横ナデ	—	(2.0)	—			358
642	南Ⅱ層〔Ｇ５〕	土師器	皿	Ｂ２－ａ類	横ナデ	一方向ナデ →横ナデ	—	(2.4)	—			428
643	南Ⅱ層〔Ｌ６〕	土師器	皿	Ｂ２－ｂ類	無調整	横ナデ	—	(2.7)	—			378
644	南Ⅱ層〔Ｆ５〕	陶器（瀬戸美濃）	緑釉小皿	古瀬戸後Ⅲ期	回転ナデ 底：回転糸切り	回転ナデ	—	(1.2)	(4.8)		（灰釉）	343
645	南Ⅱ層〔Ｋ３〕	陶器（瀬戸美濃）	緑釉小皿	古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期古	底：回転糸切り	回転ナデ	—	(1.1)	5.9		加工円盤・スス付着・（鉄釉）	433
646	南Ⅱ層〔Ｅ６〕	陶器（瀬戸美濃）	擂鉢	古瀬戸後Ⅳ期新	回転ナデ	回転ナデ	—	(2.0)	—		錆釉	409
647	南Ⅱ層〔Ｅ４〕	陶器（瀬戸美濃）	皿	大窯第１～２段階	—	—	—	(1.1)	(6.0)		灰釉	411
648	南Ⅱ層〔Ｃ６〕	陶器（瀬戸美濃）	擂鉢	大窯第１段階	—	—	—	(2.2)	—		錆釉	443
649	南Ⅱ層〔Ｅ６〕	陶器（瀬戸美濃）	端反皿	大窯第１段階	—	—	—	(2.1)	—		灰釉	408
650	南Ⅱ層〔Ｅ５〕	陶器（瀬戸美濃）	丸皿	大窯第２段階	—	—	—	(2.2)	—		鉄釉	674
651	南Ⅱ層〔Ｅ５〕	陶器（瀬戸美濃）	稜皿	大窯第３段階後半	—	—	—	(1.9)	—		灰釉	404
652	南Ⅱ層〔Ｃ５〕	陶器（瀬戸美濃）	内禿皿	大窯３段階	—	—	—	(1.9)	—		鉄釉	447
653	南Ⅱ層〔Ｈ３〕	土製品	土錘		—	—	—	4.8	—	巾2.3		325
654	南Ⅱ層〔Ｌ６〕	土製品	土錘		—	—	—	3.5	—	巾2.1		324
655	南Ⅱ層〔Ｊ２〕	土製品	土錘		—	—	—	5.2	—	巾1.6		328
656	南Ⅱ層〔Ｅ６〕	土製品	土錘		—	—	—	4.5	—	巾2.3		327
657	南Ⅱ層〔Ｉ６〕	土製品	土錘		—	—	—	3.1	—	巾1.3		323
658	南Ⅱ層〔Ｇ４〕	土製品	土錘		—	—	—	3.9	—	巾1.3		326
659	南Ⅱ層〔Ｉ６〕	鉄製品	Ｕ字鎌か								（第17表）	339
660	南Ⅱ層〔Ｈ３〕	石製品	砥石		—	—	—	—	—		（第17表）	379
661	南Ⅱ層〔Ｇ６〕	土製品	土鈴		—	—	—	(3.9)	—	巾(1.9) 孔径0.5		458
662	南Ⅱ層〔Ｊ５〕	土製品	土玉		—	—	—	—	—	直径1.1	土鈴の玉か	341
663	サブトレ	須恵器（美濃須衛）	鉢	７Ｃ代	回転ナデ	回転ナデ	(9.1)	(4.3)	—			718

第29表　遺物観察表（13）

番号	遺構名	種　類	器　種	編年分類	外面調整	内面調整	口径	器高	底径	その他法量	備　考	実測番号
664	サブトレ	須恵器 (美濃須衛)	蓋	７Ｃ後半	—	回転ナデ	(17.0)	(2.4)	—		外面自然釉	470
665	サブトレ	土師器	広口壺		—	—	(16.2)	(4.8)	—		外面赤彩？	473
666	サブトレ	土師器	皿	Ｂ２-ｂ類	無調整	横ナデ	—	(2.3)	—			628
667	サブトレ	土師器	皿	Ｂ２-ａ類	横ナデ	横ナデ	—	(2.3)	—		口径約16cm	474
668	サブトレ	須恵器(不明)	有台杯	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(3.0)	(10.8)		焼成不良	715
669	サブトレ	陶器 (瀬戸美濃)	擂鉢	大窯第１段階	—	—	—	(1.9)	—		錆釉	630
670	サブトレ	土師器	パレス壺		—	—	—	(2.3)	—		外面赤彩	720
671	サブトレ	土師器	高杯か		—	—	—	(4.0)	—			717
672	サブトレ	土師器	台付甕		—	—	—	(4.8)	(5.6)			469
673	サブトレ	須恵器	短頸壺		—	—	—	(3.7)	—		焼成不良	716
674	サブトレ	陶器 (瀬戸美濃)	緑釉小皿	古瀬戸後Ⅳ期新	回転ナデ	回転ナデ	(9.0)	(2.0)	—		灰釉	648
675	サブトレ	陶器 (瀬戸美濃)	緑釉小皿	古瀬戸後Ⅳ期新	回転ナデ	回転ナデ	—	(1.8)	—		灰釉	649
676	サブトレ	陶器 (瀬戸美濃)	天目茶碗	古瀬戸後Ⅳ期新	—	—	—	(1.3)	4.1		鉄釉・高台周辺錆釉	651
677	サブトレ	土師器	皿	Ｂ１かＢ２-ａ類	横ナデ	横ナデ	—	(1.9)	—		口径約16cm	650
678	表土	弥生土器	深鉢	水神平	羽根状条痕	—	—	(3.9)	—			475
679	表土	土製品	土錘		—	—	—	4.7	—	重1.1		483
680	表土	須恵器(不明)	鉢	７Ｃ後半	口：回転ナデ 体：回転ケズリ	回転ナデ	—	(5.0)	—			721
681	表土	須恵器 (美濃須衛)	高杯	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(5.5)	—			476
682	表土	土師器	皿	Ｃ２類	無調整	一方向ナデ	(7.4)	1.2	—			482
683	表土	山茶碗 (尾張型)	皿	７～８型式	体：回転ナデ 底：回転糸切り	横ナデ	8.5	1.5	5.4		内外面口縁部タール状	479
684	表土	陶器 (瀬戸美濃)	折縁小皿	古瀬戸後Ⅱ期	体：横ナデ 底：回転糸切り	—	(9.3)	(2.2)	(5.0)		灰釉	481
685	表土	須恵器 (美濃須衛)	碗	７Ｃ後半	回転ナデ	回転ナデ	—	(5.9)	(11.2)			477
686	表土	ロクロ土師器	椀		回転ナデ	回転ナデ	—	(3.8)	—			725
687	表土	ロクロ土師器	小椀	10世紀	体：回転ナデ 底：回転糸切り	横ナデ	(9.7)	3.7	4.6			478
688	撹乱	陶器 (瀬戸美濃)	緑釉小皿	古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期古	底：回転糸切り	—	—	(1.1)	(5.4)		(鉄釉)	639
689	撹乱	陶器 (瀬戸美濃)	擂鉢	連房第４小期	—	—	—	(4.7)	—		錆釉	754
690	撹乱	陶器(美濃)	碗	19世紀			—	(3.5)	—		染付	486
691	撹乱	磁器 (瀬戸美濃)	蓋	19世紀			(9.6)	(1.8)	—		染付	485
692	撹乱	石器	石鏃		—	—	—	—	—		(第17表)	652
693	撹乱	土師器	有段高杯		—	—	—	(4.5)	—			472
694	撹乱	山茶碗 (東濃型)	碗	脇之島３号窯式	回転ナデ 底：回転糸切り	回転ナデ	(12.0)	(2.6)	(5.0)			641
695	撹乱	土師器	羽釜	Ａ２類	回転ナデ	—	—	(1.8)	—			640
696	撹乱	土師器	有段高杯		—	ハケ目	—	(6.4)	—			471
697	撹乱	陶器 (瀬戸美濃)	平碗	古瀬戸後Ⅲ期	下半：露胎	—	—	(3.3)	—		灰釉	638
698	撹乱	土製品	面		—	—	—	4.3	—	重4.1	人面	642
699	撹乱	陶器 (瀬戸美濃)	擂鉢	古瀬戸後Ⅳ期古	横ナデ	横ナデ	—	(3.8)	—		錆釉	637
700	撹乱	灰釉陶器	段皿	Ⅷ期古～中	回転ナデ	回転ナデ	—	(1.6)	—			645
701	撹乱	青磁(中国)	碗	16世紀 中国南方系	—	—	—	(3.5)	—		鎬連弁文	647
702	排土	不明陶器	甑か		ナデ	—	—	(4.9)	—			646
703	不明	須恵器 (美濃須衛)	甕	７Ｃ後半	格子目タタキ	同心円文当具	—	(10.6)	—			577

第30表　遺物観察表（14）

第５章　自然科学分析

第１節　花粉化石群集

（１）鷺山市場遺跡南区の花粉化石群集

新山雅広（パレオ・ラボ）

１．はじめに

鷺山市場遺跡は、岐阜市に所在する。ここでは、近世の古植生の推定および水田層の検証を目的として花粉化石群集を検討した。

２．試料

花粉化石群集の検討は、南区の３地点（Ａ２、Ａ４、Ｂ６地点）より採取された合計４試料について行った。以下に、各地点の試料を記載する。なお、時代については、いずれの試料も近世以降（おそらく近世）と考えられており、Ａ２、Ｂ６地点の試料についてはプラント・オパール分析も行われた。

Ａ２地点（１試料）：本地点は、６層に層位区分される。試料は、水田層の可能性が考えられている上位より北区セクション１の10層より採取された。灰褐色粘質土で根状や塊状の褐鉄鉱が認められる。

Ａ４地点（１試料）：灰色砂質粘土層より採取された。褐鉄鉱が認められ、特に上面での集積が著しい。本層は、Ｂ６地点の試料２の土層に相当する可能性が考えられているが、水田層ではない。

Ｂ６地点（２試料）：本地点は、６層に層位区分される。試料は、水田層の可能性が考えられている北区セクション１の８層（試料１）と北区セクション１の10層（試料２）の土層より採取された。試料１は、褐灰色土で褐鉄鉱がまばらに認められる。試料２は、灰褐色粘質土で褐鉄鉱がまばらに認められる。

３．方法

花粉化石の抽出は、試料約２～３ｇを10％水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（酢酸による脱水、濃硫酸１に対して無水酢酸９の混液で湯煎約５分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

４．花粉化石群集の記載（第31表、図版15-１）

全試料で同定された分類群数は、樹木花粉７、草本花粉７、形態分類で示したシダ植物胞子２である。いずれの試料も十分な花粉化石が産出せず、花粉化石分布図として示すことができなかった。以下に、各地点の花粉化石群集を記載する。

Ａ２地点（１試料）：草本のアブラナ科と分類群不明が各１個産出したのみであった。

Ａ４地点（１試料）：樹木花粉のスギ属、クリ属、草本花粉のイネ科、アカザ科-ヒユ科、シダ植物胞子が僅かに産出した。

Ｂ６地点（２試料）：試料１は、樹木花粉のマツ属複維管束亜属、草本花粉のイネ科、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科、シダ植物胞子が僅かに産出した。試料２は、他試料よりは花粉化石の産出個数が多かった。樹木花粉は、マツ属（不明）が若干目立ち、マツ属複維管束亜属、スギ属、ハンノキ属、コナラ亜属、クリ属が僅かに産出した。草本花粉は、イネ科が比較的多産し、アブラナ科が若干目立った。他に、ソバ属、アリノトウグサ属、ヨモギ属、タンポポ亜科が僅かに産出した。

５．考察

検討した結果、いずれの試料も十分な花粉化石が産出せず、近世の古植生を推定することはできなかった。当時の森林は、針葉樹のマツ属複維管束亜属、コウヤマキ属、スギ属、落葉広葉樹のハンノキ属、コナラ亜属、クリ属を含む植物相であったと言うにとどめざるを得ない。Ｂ６地点の試料２では、ソバ属が産出したことから、付近にソバの栽培地が存在していたと考えられる。また、若干目立ち、有用植物を多く含むアブラナ科も栽培されていた可能性がある。そのような耕作地周辺には、アリノトウグサ属、ヨモギ属、タンポポ亜科などが茂る人為的干渉の強い草地が存在していたであろう。このような草地の存在が予想されることから、比較的多産するイネ科は、ススキ、シバなどを含む可能性が考えられる。なお、花粉化石は、水成堆積物である場合には良好に保存されるが、土壌のような酸化条件下では化学的風化により分解・消失し、更にバクテリアによる蝕害も受ける。検討した試料は、花粉化石の保存状況が悪いことから、少なくとも水成環境で安定して堆積したものとは考え難い。つまり、常時滞水した環境ではなく、乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったことが示唆される。

６．おわりに

近世の鷺山市場遺跡の南区Ｂ６地点付近には、ソバの栽培地や人為的干渉の強い草地が存在し、アリノトウグサ属などが生育していた。検討したＡ２、Ａ４、Ｂ６地点の堆積物は、乾燥ないし乾湿を繰り返す環境で堆積したものと考えられた。

（２）鷺山市場遺跡北区ＳＤ６・ＳＸ12の花粉化石群集

新山雅広（パレオ・ラボ）

１．はじめに

鷺山市場遺跡は、岐阜市に所在する。ここでは、戦国時代の区画溝埋土を試料とし、当時の古植生および古環境の推定を目的として花粉化石群集を検討した。

２．試料

花粉化石群集の検討は、北区のＳＸ12埋土より採取された１試料およびＳＤ６埋土より採取された２試料の合計３試料について行った。ＳＸ12の試料は、最下層より採取され、暗灰黄色粘土。ＳＤ６は、溝埋土下層の上位と下位の２試料が採取された。上位層は、暗灰黄色砂混じりシルト質粘土で、径５㎝程度の礫を含み、褐鉄鉱が認められる。下位層は、暗灰黄色粘土質砂で遺物片を含み、褐鉄鉱が認められる。

３．方法

花粉化石の抽出は、試料約２～３ｇを10％水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸１に対して無水酢酸９の混液で湯煎約５分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査した。

４．花粉化石群集の記載

いずれの試料も花粉・胞子化石を全く産出しなかった。

５．考察

検討した結果、いずれの試料も花粉・胞子化石を全く産出せず、古植生を推定することはできなかった。花粉化石は、水成堆積物である場合には良好に保存されるが、土壌のような酸化条件下では化学的風化により分解・消失し、更にバクテリアによる蝕害も受ける。検討した試料は、花粉・胞子化石が全く産出しなかったことから、少なくとも水成環境で安定して堆積したものとは考え難い。つまり、常時滞水した環境ではなく、乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったことが示唆される。

６．おわりに

ＳＸ12と戦国時代の区画溝（ＳＤ６）の埋土は、乾燥ないし乾湿を繰り返す環境で堆積したものと考えられた。

（３）鷺山市場遺跡北区ＳＤ７・ＳＤ９・ＳＤ11の花粉化石群集

新山雅広（パレオ・ラボ）

１．はじめに

鷺山市場遺跡は、岐阜市に所在する。ここでは、古墳時代～古代の古植生および古環境の推定を目的として花粉化石群集を検討した。

２．試料

花粉化石群集の検討は、北区の溝（ＳＤ７、ＳＤ９、ＳＤ11）より採取された合計３試料について行った。試料は埋土最下部より採取され、暗灰黄色シルト質粘土である。なお、時代については、いずれも古墳時代～古代である。

３．方法

花粉化石の抽出は、試料約２ｇを10％水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理(約30分)による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（酢酸による脱水、濃硫酸１に対して無水酢酸９の混液で湯煎約５分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査した。

４．花粉化石群集の記載

ＳＤ11は、シダ植物の単条型胞子を１点のみ産出したが、ＳＤ７、ＳＤ９は花粉・胞子化石を全く産出しなかった。

５．考察

検討した結果、産出した花粉・胞子化石は、ＳＤ11の単条型胞子１点のみであり、古植生を推定することはできなかった。花粉化石は、水成堆積物である場合には良好に保存されるが、土壌のような酸化条件下では化学的風化により分解・消失し、更にバクテリアによる蝕害も受ける。検討した試料は、花粉・胞子化石が産出しなかったことから、少なくとも水成環境で安定して堆積したものとは考え難い。つまり、常時滞水した環境ではなく、乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったことが示唆される。

６．おわりに

古墳時代～古代の溝（ＳＤ７・ＳＤ９・ＳＤ11）の埋土は、乾燥ないし乾湿を繰り返す環境で堆積したものと考えられた。

（４）鷺山市場遺跡Ｐ区の花粉化石

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

１．はじめに

鷺山市場遺跡において行われた発掘調査でＰ区より土壌試料が採取された。以下に遺跡周辺の古植生を検討する目的でこの土壌試料について行った花粉分析の結果・考察を示す。

２．試料と分析方法

試料はＰ区の自然流路ＮＲより採取された２試料（Ｓ１、Ｓ２）である。これら２試料について、Ｓ１はオリーブ灰色の砂質粘土、Ｓ２はオリーブ褐色の粘土質砂である。時期はＳ１が戦国時代以降、Ｓ２が古墳時代初頭と考えられている。花粉分析はこの２試料について以下のような手順にしたがって行った。

試料(湿重約５ｇ)を遠沈管にとり、10％の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5㎜目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46％のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸の割合の混酸を加え３分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

３．分析結果（第32表、図版15-２）

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉２、草本花粉２、形態分類で示したシダ植物胞子２の総計６である。これら花粉の一覧を第32表に示したが、得られた花粉化石数が非常に少なかったことから分布図としては示すことが出来なかった。なお表においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示している。

観察の結果得られた分類群は、樹木類ではコナラ属コナラ亜属とニレ属-ケヤキ属、草本類ではヒユ科、アブラナ科、シダ植物では単条型と三条型の計６分類群であった。なお花粉化石はＳ１のみからの産出であった。検出個数について、花粉化石はすべて１個体のみで、コナラ亜属を除いては破片であった。

４．分析結果について

上記したように観察された花粉化石数は分類群数とともに非常に少なかった。花粉は一般に丈夫な外膜を持ち、池や湿地、海などの水域環境下では良好な状態で保存される。しかしながら水の無い環境下では紫外線や土壌バクテリアなどによって容易に分解されてしまう。今回の試料は自然流路を改作して使用されていると考えられているが、上記のことから試料採取地点は常時水がついていたような環境ではなかったと推測され、多くの花粉は紫外線や土壌バクテリアなどによって分解・消失してしまっているのではないかと思わ

れる。

５．古植生について

上記したように花粉化石はほとんど得られていないことから、遺跡周辺の古植生について言及するのは難しい状況である。その中強いて言えば、花粉化石がわずかながら観察されたＳ１、すなわち戦国時代以降においてコナラ亜属やニレ属-ケヤキ属が生育する落葉広葉樹林が遺跡周辺に存在していた可能性が推察される。またヒユ科、アブラナ科、シダ植物などの雑草類もみられたと思われる。

和　名	学　名	A2	A4	B6-1	B6-2
樹木					
マツ属複維管束亜属	*Pinus subgen. Diplosxylon*	—	—	1	1
マツ属（不明）	*Pinus*（Unknown）	—	—	—	6
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	—	—	—	1
スギ属	*Cryptomeria*	—	2	—	2
ハンノキ属	*Alnus*	—	—	—	1
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	—	—	—	1
クリ属	*Castanea*	—	1	—	2
草本					
イネ科	Gramineae	—	2	3	36
ソバ属	*Fagopyrum*	—	—	—	1
アカザ科–ヒユ科	Chenopodiaceae-Amaranthaceae	—	1	1	—
アブラナ科	Cruciferae	1	—	6	7
アリノトウグサ属	*Haloragis*	—	—	—	1
ヨモギ属	*Artemisia*	—	—	—	1
タンポポ亜科	Liguliflorae	—	—	—	3
シダ植物					
単条型胞子	Monolete spore	—	3	3	6
三条型胞子	Trilite spore	—	1	1	3
樹木花粉	Arboreal pollen	0	3	1	14
草本花粉	Nonarboreal pollen	1	3	10	49
シダ植物胞子	Spores	0	4	4	9
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	1	10	15	72
不明花粉	Unknown pollen	1	3	0	2

第31表　南区花粉化石産出一覧

和　名	学　名	S1	S2
樹木			
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	1	—
ニレ属–ケヤキ属	*Ulmus-Zelkova*	1	—
草木			
ヒユ科	Amaranthaceae	1	—
アブラナ科	Cruciferae	1	—
シダ植物			
単条型胞子	Monolete spore	7	8
三条型胞子	Trilete spore	2	1
樹木花粉	Arboreal pollen	2	6
草木花粉	Nonarboreal pollen	2	0
シダ植物胞子	Spores	9	9
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	13	15
不明花粉	Unkouwn pollen	1	2

第32表　Ｐ区花粉化石産出一覧表

第２節　プラント・オパール分析

（１）鷺山市場遺跡南区のプラント・オパール

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

１．はじめに

イネ科植物の葉に形成される機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壌中より検出されるイネのプラント・オパール（機動細胞珪酸体）個数から稲作の有無についての検討も行われている（藤原　1984）。こうした研究成果を用いて近年プラント・オパール分析から稲作の検討が各地・各遺跡で行われている。

鷺山市場遺跡においても発掘調査に伴い土層断面より採取された土壌試料についてプラント・オパール分析を行い、土壌試料を採取した土層が水田層か否かについて検討した。

２．試料と分析方法

分析用試料は南区ＳＸ１からグリットＢ６のセクション５の５層と６層より採取された２試料（試料番号１、２）と同区グリットＡ２のセクション１の８層より採取された１試料（試料番号３）の計３試料である。各試料について簡単に記すと、試料１はやや粘性の強い灰茶色土、試料２は粘性の強い灰褐色土である。また試料３は褐灰色土である。時期については３試料とも近世以降と考えられている。プラント・オパール分析はこれら３試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約１ｇ（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02ｇのガラスビーズ（直径約40μm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10μm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが300個に達するまで行った。

３．分析結果（図版16）

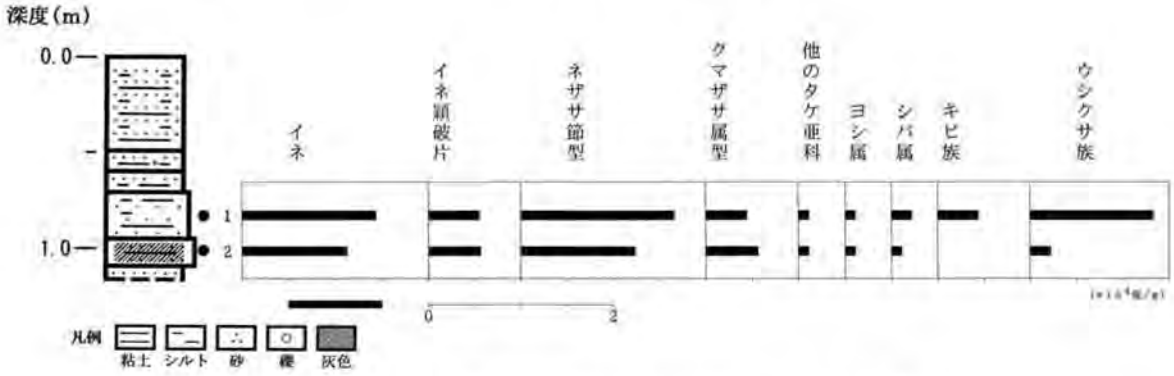
同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料１ｇ当りの各プラント・オパール個数を求め（第33表）、それらの分布を第45図（Ｂ６地点）、第46図（Ａ２地点）に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料１ｇ当りの検出個数である。

検境の結果、全試料よりイネのプラント・オパールが検出された。個数的にはＢ６地点の２試料はともに10,000個以上であるが、Ａ２地点の試料３では3,600個であった。また全試料からイネの穎に形成される珪酸体の微小破片も観察されている。

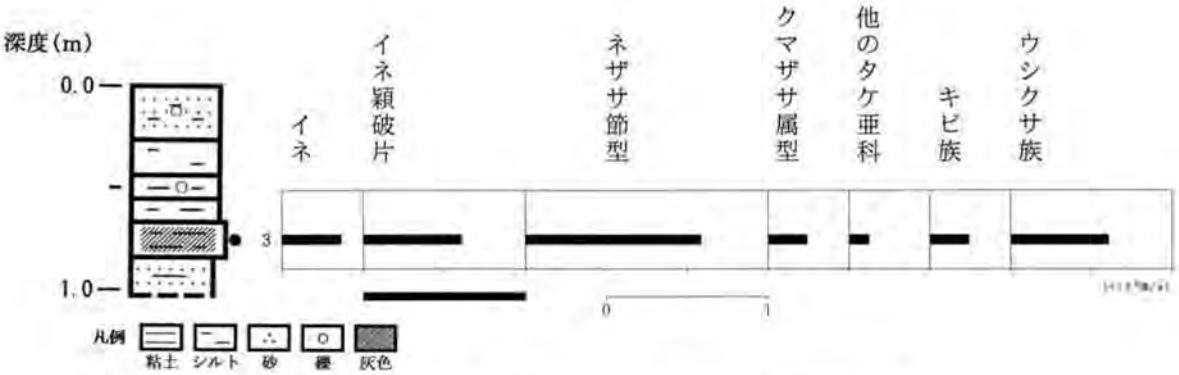
最も多く検出されているのはネザサ節型で、全試料10,000個以上を示している。次いでウシクサ族が多く、試料１では10,000個を越えている。その他クマザサ属型やヨシ属、シ

試料番号	イネ（個/g）	イネ穎破片（個/g）	ネザサ節型（個/g）	クマザサ属型（個/g）	他のタケ亜科（個/g）	ヨシ属（個/g）	シバ属（個/g）	キビ族（個/g）	ウシクサ族（個/g）	不明（個/g）
1	14,400	5,500	16,600	4,400	1,100	1,100	2,200	4,400	13,300	10,000
2	11,300	5,600	12,400	5,600	1,100	1,100	1,100	0	2,300	4,500
3	3,600	6,000	10,900	2,400	1,200	0	0	2,400	6,000	6,000

第33表　試料１ｇ当たりのプラント・オパール個数



第45図　Ｂ６地点のプラント・オパール分布図



第46図　Ａ２地点のプラント・オパール分布図

バ属、キビ族などが検出されているが、個数的には少ない。

４．稲作について

上記したように全試料でイネのプラント・オパールが検出されている。ここで検出個数の目安について記すと、イネのプラント・オパールが試料１ｇ当り5,000個以上検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原　1984）。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。鷺山市場遺跡Ｂ６地点の２試料はともに10,000個以上と5,000個をはるかに越える数のイネのプラント・オパールが検出されており、検出個数からは稲作が行われていた可能性は高いと判断される。一方Ａ２地点の試料３では3,600個と5,000個に達しておらず、検出個数のみからは稲作が

行われていた可能性は低いと判断される。しかしながら5,000個に近い数値が示されており、要因については不明であるがイネのプラント・オパールの密度が低い部分にあたってしまったことも考えられ、稲作については花粉分析等多方面からの検討の上判断されるのが望ましいであろう。

引用文献

藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(１)―数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法―. 考古学と自然科学, ９, p.15-29.

藤原宏志 (1984) プラント・オパール分析法とその応用―先史時代の水田址探査―. 考古学ジャーナル, 227, p. ２-７.

藤原宏志・佐々木彰 (1978) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (２) ―イネ (Oryza) 属植物における機動細胞珪酸体の形状―. 考古学と自然科学, 11, p. ９-20.

第３節　内容物分析

（１）提瓶の内容物分析

藤根　久・中村賢太郎（パレオ・ラボ）

１．はじめに

鷺山市場遺跡の調査では、戦国時代の溝や廃棄土坑、古墳時代の提瓶などが出土した。このうち、提瓶（遺物番号175）は、土坑内から検出された完形品であるが、集落内から検出される事例が少ないことから、如何なる場面において使用されたかが注目される。

土器内容物の分析法は、予想される内容物により決まる訳であるが、低湿地遺跡の出土物を除いて有機物が残存しないことが多く、無機物を対象とした分析を試みるしかない。なお、土器内には、多くの場合放棄された後に周辺土壌が埋積して土器内部には土壌が充填していることから、一次的でない物を対象としているものと考えられる。ここでは、藻塩法による塩の痕跡を調べるために珪藻分析、骨物質を抽出するためにリン・カルシウム分析、その他微細物の検討を行った。

２．試料と方法

試料は、古墳時代提瓶内土壌１試料である（第34表）。

分析は、珪藻分析、リン・カルシウム分析、水洗篩分けによる微細物の観察である。

珪藻分析用の試料は、以下の方法で処理し、珪藻用プレパラートを作成した。

湿潤重量約１ｇ程度取り出し、秤量した後ビーカーに移し30％過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。反応終了後、水を加え１時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を７回ほど繰り返した。残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥した。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作成した。作成したプレパラートは顕微鏡下1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数した。

リン・カルシウム分析用の試料は、土壌を20ｇ程度採取して乾燥させた後、セラミック乳鉢で軽く粉砕した。粉砕した試料は、塩化ビニール製リングに充填した後、油圧プレス機を用いて20ｔプレスをして測定用ブリケットを作成した。最初に、ブリケットで元素マッピング分析を行った後、リン（Ｐ）マッピング画像の濃度の高い位置を５箇所選定して点分析を行った。

測定は、Ｘ線分析顕微鏡（㈱堀場製作所製 XGT-5000TypeⅡ）を用いた。元素マッピングの測定条件は、Ｘ線導管径100μm、電圧50KV、電流自動設定、測定時間10,000secである。点分析の測定条件は、Ｘ線導管径100μm、電圧50KV、電流自動設定、測定時間500secである。定量計算は、標準試料を用いない FP（ファンダメンタルパラメータ）法で半定量分析を行った。

微細物の検討は、150ｇ程度を２φ（250μm）篩を用いて水洗篩分けした。残渣は、実体顕微鏡で観察した。

分析№	分析試料	色　調	堆積物の特徴
1	提瓶内土壌	オリーブ褐色（2.5Y　4／3）	粘土

第34表　分析試料とその特徴

分析試料	点№	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	K_2O	CaO	TiO_2	Cr_2O_3	MnO	Fe_2O_3	Rb_2O	ZrO_2	Y_2O_3	ZrO_2	total
提瓶内土壌	1	0.48	16.61	52.90	13.23	2.75	6.73	0.70	0.31	6.21	0.03	0.02	0.01	0.01	0.02	100.01
	2	0.49	15.38	60.18	10.24	5.51	3.79	0.43	0.16	3.74	0.02	0.02	0.02	0.01	0.02	100.01
	3	0.75	15.87	63.53	5.90	1.93	5.71	0.60	0.18	5.45	0.03	0.01	0.01	0.01	0.02	100.00
	4	0.49	17.23	67.17	2.59	2.73	2.60	1.01	0.11	5.96	0.03	0.02	0.01	0.00	0.03	99.98
	5	1.23	17.50	71.10	0.59	2.19	0.63	0.45	0.26	5.97	0.03	0.02	0.01	0.01	0.02	100.01
最小値		0.48	15.38	52.90	0.59	1.93	0.63	0.43	0.11	3.74	0.02	0.01	0.01	0.00	0.02	
最大値		1.23	17.50	71.10	13.23	5.51	6.73	1.01	0.31	6.21	0.03	0.02	0.02	0.01	0.03	
平均値		0.69	16.52	62.98	6.51	3.02	3.89	0.64	0.20	5.47	0.03	0.02	0.01	0.01	0.02	

第35表　分析結果（FP法による）

３．結果

珪藻分析を行った結果、淡水種珪藻化石のみが検出された（第36表）。なお、環境指標種群は、沼沢湿地付着生指標種群が76個体（37.8%）、陸域指標種群が32個体（15.9%）、その他広布種が43個体（21.4%）、不定および不明種が50個体（24.9%）であった（図版17）。

蛍光Ｘ線分析による元素マッピング分析では、リン（Ｐ）濃度の高い場所が複数検出された（図版21）。これらリン濃度の高い位置における点分析では、リン含有量が0.59～13.23%検出された。また、これに対応する位置におけるカルシウム含有量が0.68～6.73%であった（第35表）。

２φ篩の残渣の観察では、骨状物は確認されなかった。その他の粒子では、炭化材やタール状の炭化物あるいは微細な砕片のような岩片が少量含まれていた（図版17）。

４．考察

森（1991）は、古墳時代～平安時代の製塩遺跡から出土した製塩土器内面にやや黒味のある白色～灰白色の付着物が見られることに注目し、これら付着物中の珪藻化石について検討した。その結果、海水藻場指標種群の珪藻化石が多産することを見出し、土器製塩の海水濃縮過程において海藻が利用されたと考え、藻塩法による製塩の可能性を指摘している。

また、藤根・服部（2000）は、名古屋市伊勢山中学校遺跡から出土した密閉して出土した６世紀後半の須恵器蓋杯内の暗オリーブ褐色の付着物中に、森（1991）と同様の珪藻種群を見出し、塩利用の証拠とした。

提瓶内土の珪藻分析を行った結果、淡水種珪藻化石のみが検出され、藻塩法に伴う藻場指標種群などの珪藻化石は検出されなかったことから、塩の存在は確認されなかった。な

お、内面付着物の有無は不明であり、内面付着物を直接調べてはいないために検出されなかったことは考えられる。

人間を含め動物の骨や歯を構成する主要な無機成分は、水酸燐灰石（ハイドロキシアパタイト：$Ca_5(OH)(PO_4)_3$）からなり、リン（P）とカルシウム（Ca）がほぼ等量含まれている。

土壌中の分析値から、骨成分が残存しているかどうかの判定は、リンおよびカルシウムの両元素がほぼ等量で高い値であることが必要であると思われる。

カルシウムは、堆積物中に含まれる長石類や輝石類（例えば斜長石の端成分である灰長石 Anorthite（$CaAl_2Si_2O_8$）、普通輝石 Augite（$(Ca, Na)(Mg, Fe, Al)(Si, Al)_2O_6$）に含まれる（黒田・諏訪, 1989））として普通に含まれる元素である。一方、リンは、造岩鉱物中には極めて少なく、黒色土壌の母材である植物や現生植物根などに数 ppm 程度に含まれる元素と考えられることから、骨成分を抽出するためには少なくともリン含有量がより高いことが必要である。

元素マッピング分析では、リン濃度の高い部分が複数箇所検出されことから、５カ所を選定して点分析した。その結果、リン含有量が0.59–13.23%、カルシウムが0.63–6.73%と高い値を示している（第35表）。このように、骨の主成分であるリンとカルシウムが高く検出されことから、この提瓶内には骨質物が含まれている可能性がある。なお、提瓶は、古墳内に供されることが多く、偶発的に骨物質が含まれることがあり得る。なお、ここで検出されたリンおよびカルシウムの高い含有量が直ちに人骨であるとは言えない。

水洗篩分けによる微細物の観察では、骨状物は確認されなかった。一方、砕片状粒子が観察されたが、炭化物あるいは炭化材を伴うことから、受熱により岩石が砕片化したことが考えられる。

５．考察

提瓶内の土壌について、珪藻分析やリン・カルシウム分析あるいは微細物の観察を行った。その結果、リン・カルシウム分析において共に高い含有量を示したことから、骨物質の存在の可能性が指摘された。この提瓶内の内容物に関する分析例がないことから、今後出土条件の良い試料について検討結果を待つしかない。

引用文献

藤根　久・服部哲也（2000）密閉して出土した須恵器蓋杯内の内容物―塩利用の証拠―．日本文化財科学会第17回大会研究発表要旨集，116–117.

森　勇一（1991）珪藻分析によって得られた古代製塩についての一考察．考古学雑誌，76（３），62–75.

分　類　群	種群	1
Amphora montana	Q	5
Caloneis aerophila	Q	2
C. bacillum	W	1
Coconeis placentula	W	1
Cybell spp.	?	1
Diploneis spp.	?	1
Eunotia pectinalis var. undulata	O	1
Frustulia vulgaris	W	2
Gomphonema spp.	?	2
Gyrosigma spp.	?	4
Hantzschia amphioxys	Q	20
Navicula veneta	W	8
N. spp.	?	2
Neidium alpinum	W	19
N. spp.	?	1
Nitzschia perminata	W	2
N. nana	Q	4
N. spp.	?	15
Pinnularia borealis	Q	1
P. intermedia	W	1
P. interrupta	W	1
P. subcapitata	O	75
P. spp.	?	11
Stauroneis obtusa	W	2
S. tenera	W	1
Stephanodiscus carconensis	W	1
Surirella angusta	W	3
S. spp.	?	3
Synedra ulna	W	1
Unknown	?	10
沼沢湿地付着生　(O)		76
陸域　(Q)		32
広布　(W)		43
淡水不定・不明種（？）		50
珪藻殻数		201

種群は安藤（1980）に従った

第36表　提瓶内土壌中の珪藻化石

第４節　土器付着赤色物分析

（１）鷺山市場遺跡出土土器付着赤色物分析

竹原弘展（パレオ・ラボ）

１．はじめに

鷺山市場遺跡より出土した土器に付着している赤色物について蛍光Ｘ線分析を行い、顔料の種類を検討した。

２．試料と方法

分析対象資料は、鷺山市場遺跡より出土した土器３点である。分析№１は遺物掲載番号516の土師器で赤色に明瞭に塗彩されている。分析№２は遺物掲載番号163の土製品で表面はうっすらと赤褐色を呈する。分析№３は遺物掲載番号214の須恵器の盤で時期は７世紀後半で、底部裏側表面のひび割れの箇所に赤褐色顔料らしきものの残留が観察される。分析に際して、セロハンテープを土器表面に貼り付けて赤色物を剥がすという形で極少量採取して分析試料とした。

分析装置は（株）堀場製作所製分析顕微鏡 XGT-5000TypeⅡを使用した。この装置はエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置である。装置の仕様は、Ｘ線管が最大50kV・１mA の Rh ターゲット、Ｘ線ビーム径が100μm または10μm、検出器は高純度 Si 検出器（Xerophy）で、試料室の大きさは350×400×40㎜である。検出可能元素は Na～U であるが、Na、Mg といった軽元素は蛍光Ｘ線分析装置の性質上、検出感度が悪いため、試料中に少量含む程度ではピークを検出し難く、検出できてもその定量値はかなり誤差が大きい。

本分析での測定条件は、50kV、1.00mA（自動設定による）、ビーム径100μm、測定時間500s、パルス処理時間Ｐ４（分解能を重視した設定）に設定した。定量分析は標準試料を用いないＦＰ（ファンダメンタル・パラメーター）法による半定量分析を装置付属ソフトで行った。そのため、定量値は誤差を大きめに見積もっておく必要がある。

３．結果

分析により得られたスペクトルおよびＦＰ法による半定量分析結果を図版18～20に示す。いずれも Hg は検出されなかった。

４．考察

日本古代に使用されていた赤色顔料の代表的なものとしては、朱（水銀朱）とベンガラが挙げられる。水銀朱は、硫化水銀 HgS で鉱物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。ベンガラは狭義には三酸化二鉄 Fe_2O_3（鉱物名赤鉄鉱）を指すが、広義には鉄（Ⅲ）の発色に伴う赤色顔料全般を指し（成瀬2004）、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直径約１μm のパイプ状の粒子形状からなるものも多く報告されている。これは鉄バクテリアを起源とすることが判明しており（岡田、1997）、含水水酸化鉄を焼

いて得た赤鉄鉱がこのような形状を示す（成瀬、1998）。

【分析№１】（図版18）

Feが比較的高い割合で検出された。顕微鏡観察すると、*Diploneis* 属等の珪藻が極少量ながらある程度観察された。これは、濃集するための前処理をせずに観察していることを考えると、比較的高い割合で珪藻が含まれているといえる。一般的にこの地域の土壌は珪藻の残存が悪いことが多く、ここで観察された珪藻は赤色顔料の材料となった鉄酸化物の採取時に付随したものである可能性が高いと考えられる。また、僅かながらパイプ状粒子も確認され、いわゆるパイプ状ベンガラによる着色といえる。

【分析№２】（図版19）

セロハンテープで少量採取した試料の分析結果からは、Feは決して高いとはいえない割合でしか検出されなかった。また、顕微鏡観察しても特にパイプ状の粒子は確認されなかった。土器資料の破断面を観察すると、分析№１のような土器表面に赤色顔料が塗布されているのとは異なり、土器表面自体が赤褐色に発色している。そこで破断面について元素マッピング分析を実施した（図版19右下）。その結果、表面赤褐色部からは他の箇所よりもFeが明らかに高い割合で検出されており、鉄（Ⅲ）の発色に伴うものと判断される。土器製作時に表面にFeを多く含むものを予め塗布した後、焼成されたものと思われる。

【分析№３】（図版20）

須恵器底部裏側表面のひび割れ内より採取した試料からは、Si、Alに混じってFeが比較的高い割合で検出されたものの、顕微鏡観察においては特にパイプ状の粒子は観察されなかった。特徴的な顔料である水銀朱や、パイプ状ベンガラなどではないため、この試料については顔料としてのものなのか、それとも埋蔵環境などに由来するものなのかは判断が難しい。

５．おわりに

鷺山市場遺跡より出土した土器に付着している赤色物について分析した結果、いずれも鉄(Ⅲ)による発色である事が推定された。赤色顔料としてはベンガラにあたるといえる。また、分析№１についてはパイプ状ベンガラが確認された。

引用文献

成瀬正和（1998）縄文時代の赤色顔料Ⅰ―赤彩土器―．考古学ジャーナル№438．10-14．ニューサイエンス社．
成瀬正和（2004）正倉院宝物に用いられた無機顔料．正倉院紀要．13-61p．宮内庁正倉院事務所．
岡田文男（1997）パイプ状ベンガラ粒子の復元．日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集．38-39．

第５節　刀付着物分析

（１）岐阜市鷺山遺跡出土直刀付着物について

㈱吉田生物研究所

１．はじめに

岐阜市に所在する鷺山市場遺跡のＳＫ139から出土した刀の身の部分には、何らかの痕跡が認められ以下の通りの調査結果を報告する。

２．資料

調査した資料は第37表に示す直刀１点である。

No.	遺　物　名	概　　要
1	刀	全体が三つに割れている。破損した断面を観察すると、中心にある刀の身の部分と、外側の鉄錆との間に、色調の異なる部分が認められた。

第37表　調査資料一覧

３．方法

全体の鉄錆を落とし、表面を観察した(第47・48図)。さらに、ＦＴ－ＩＲ分析も行った。

４．結果

４－１．観察結果

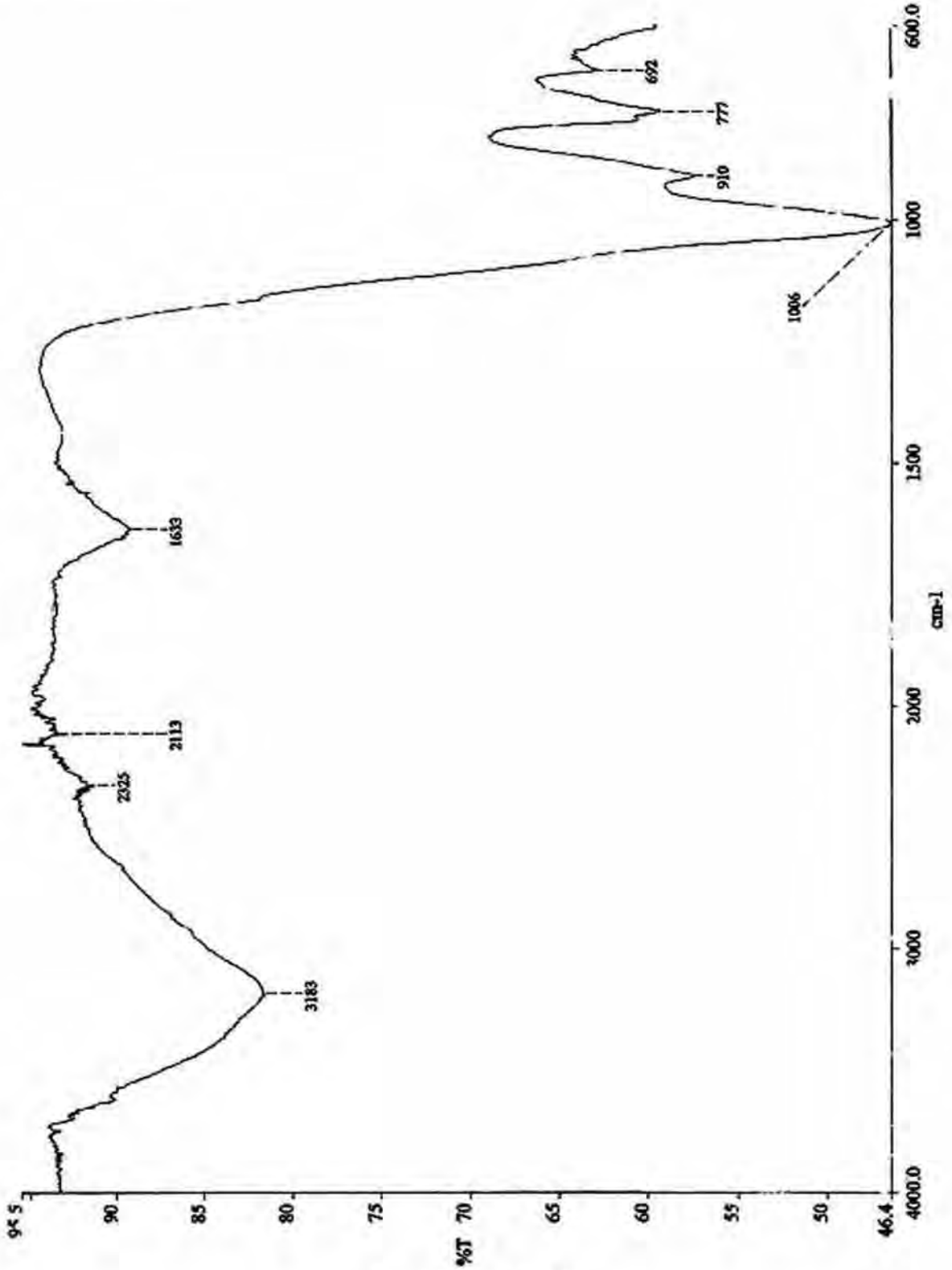
鉄錆部分をほぼ削り落とした面を観察したところ、特に繊維質らしきものは観察されなかった。

第47図　資料表面の拡大写真

第48図　断面の写真

４－２．分析結果

ＦＴ－ＩＲ分析を行ったところ、セルロースの成分による吸収が認められた（第49図）。よって刀身と鉄錆との間に、何らかの有機質が存在した、と考えられる。


95.5
90
85
80
75
70
65
60
55
50
46.4
%T
4000.0
3000
2000
1500
1000
600.0
cm-1
3183
2325
2113
1653
1006
910
777
692

第49図　FT-IR 分析

第６章　総括

第１節　遺構の変遷

今回の調査では弥生時代末期から近世までの遺構を確認した。ここでは時期ごとの遺構変遷をまとめ、鷺山市場遺跡内での今回の調査位置の特徴を抽出しておきたい。第51図に時期ごとの遺構分布を示したが、それぞれ偏りが見られる。これは当時の地形と近世以降の削平による部分が大きいためである。そのため、改めて土層の状況と、調査時における残存状況を概観しておきたい。

今回の調査区での地山は砂層で、南から北へ低くなる堆積が見られる。最も低い北区北半では、砂層（北vii層）の上に粘質土（北vi層）の堆積が見られ、この層中にも遺物が見られないことから、地山であるといえる。北区北半ではその後、４層の土層が堆積し、それぞれの上面で遺構が検出される残りの良い状況であったのに対し、北区南半は６期の遺構によって、広範囲に削平が及んでいた。ほぼ全面にわたって、削平は地山にまで達しており、わずかに検出された遺構も、掘削された面が分からない状況であった。

南区は比較的残存状況は良好で、北半の一部で近世以降の遺構によって削平が見られた。本調査区中最も高い南半では、複数の時期の遺構が多く検出されたが、その複雑さ故に、遺構の認定が困難で、時期設定にも齟齬が生じていることは否定できない。

１期：弥生時代末期から古墳時代初頭

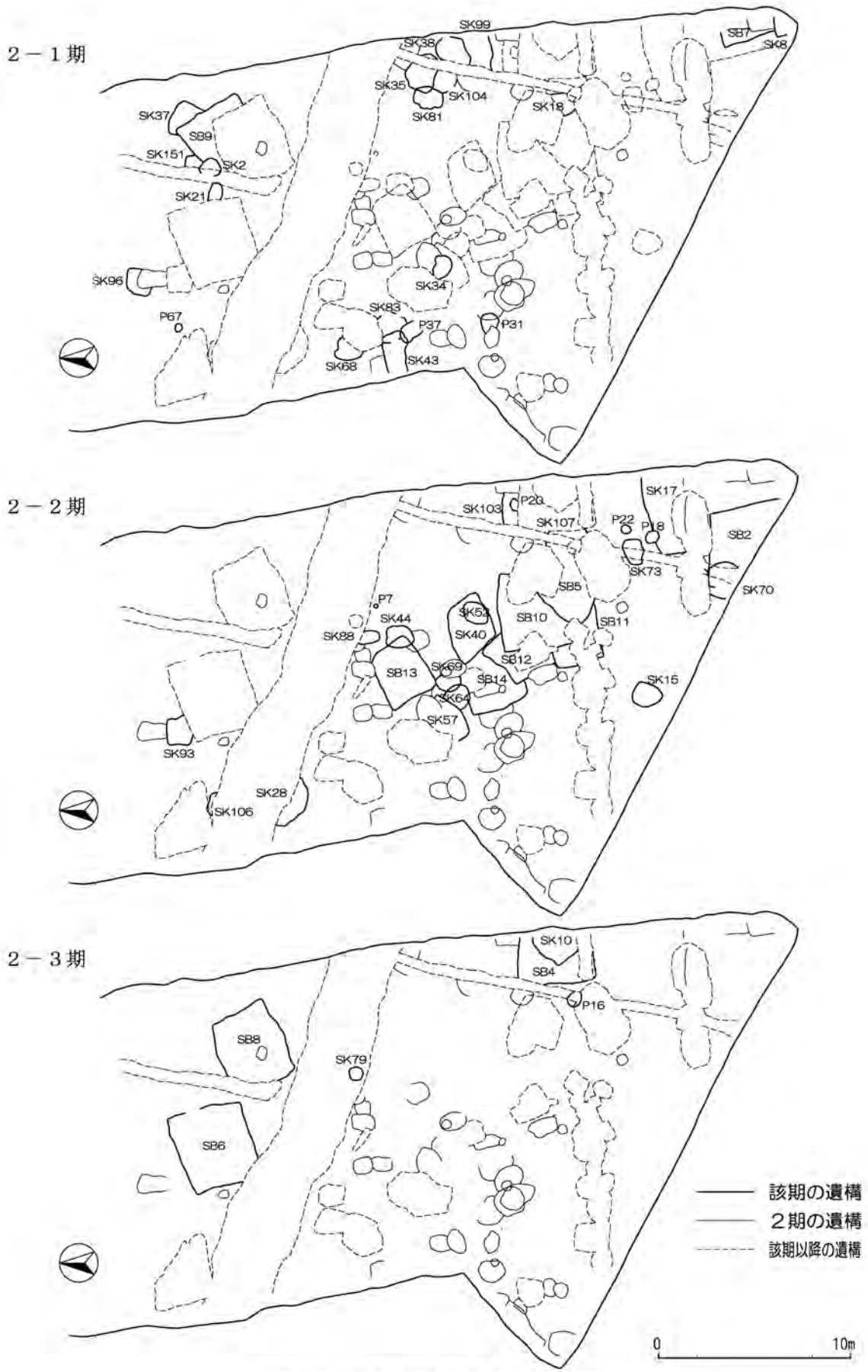
この時期、地形の傾斜は強く、地山レベルで１ｍ以上の比高差があり、北区南東部から南区にかけての微高地と北区北半・Ｐ区の低地に大別できる。微高地上には、検出された竪穴住居４棟のうち３棟（ＳＢ１、16、17）が点在し、土坑（ＳＫ22）も数基が確認されているが、遺構の数自体、多いとはいえない。これは、２期以降の遺構によって壊されていることも原因であるが、微高地上といえども遺跡全体から見れば縁辺部で、土地利用がまだ希薄であったと推測される。包含層からは南区のほぼ全域で当期の遺物が出土しているが、ＳＢ１・ＳＫ22が見られる最高所の南端部分に、比較的集中していることが指摘できる。

一方の低地部の状況は、住居？（ＳＢ18）が１棟造られている以外、Ｐ区で検出された自然流路ＮＲ周辺の溝（ＳＤ11、12）やピットが大部分である。先述したように、ＮＲを積極的に利用していたと見られるＳＸ21や水溜と見られるＳＥ２があるように、低地部でも活動の痕跡が見られる。

調査区自体が鷺山市場遺跡の北西端にあり、地形的にも湿地状の低地に至る微高地の縁辺部にあたる。周辺の調査成果から見ても、当期の集落の中心は南東方向にあったことは間違いなく、調査区内では、微高地上の竪穴住居・土坑と低地の溝・ピットという分布域が見られる。

２期：古墳時代後期から奈良時代

この時期の地形も１期と大差なく、低地部に堆積が進み、若干比高差が減少している程度である。当期の遺構は今回の調査で最も多く検出されており、一部を除けば微高地上の



第50図　時期別遺溝分布図（２期）

南区に集中し、そのため重複状況は激しい。出土遺物から２−１〜３期に細別した。

２−１期に比定される遺構は21基あり、竪穴住居２棟（ＳＢ7、9）の他は大部分が土坑である。第50図に示すとおり、南区の中でも５箇所程に集中して分布している。竪穴住居など大規模な遺構を誤認して分断して掘ってしまったようにも見えるが、いずれにしても遺構が散在することが特徴的である。２−１期は〜７世紀前半と設定しているが、６世紀や７世紀前葉に遡る遺構は少なく、大部分が７世紀の中葉に近い時期と考えている。

２−２期に比定される遺構は23基あり、竪穴住居７棟（ＳＢ2、5、10、11、12、13、14）や大型の土坑（ＳＫ17、40、103）がある。遺構の分布は、２−１期の遺構が築かれていない場所を選んでいるかのような様相を呈するが、遺構の複雑さとそれ故の調査精度を考慮に入れると、可能性の指摘に留まるものである。ただ、居住域として明確になったのはこの時期で、爆発的に増加したともいえる。包含層中から出土した須恵器もこの時期のものが多く、時期を限定できた数以上に遺構が広がっていた可能性は高い。

２−３期と考えられる遺構は６基あり、うち竪穴住居が３棟（ＳＢ4、6、8）を数える。数も少なく、分布の状況も点在的である。衰退過程であることは明かで、８世紀中葉の遺物を最後に、それ以降のものは皆無である。

竪穴住居は、時期ごとに見ても、各期を通じても、向き・規模・内部施設などに規則性は見られない。

北区北半の低地部では、各期を通じても、溝（ＳＤ7、9）が見られる他は、ほとんど遺構が無い。低地部では、堆積によって遺構面が残存していることから、削平を受けて残存しないわけではなく、元来ほとんど利用がされていないと見られる。

３期：平安時代〜鎌倉時代

低地部の堆積はさらに進行していると見られるが、北区北半では、この時期の遺構が検出されていないため、地表面がよく分からない。

遺構は南区のみで検出され、６基の土坑が確認できた。平面形は楕円形か隅丸方形を呈し、断面形状が深い箱形、埋土が砂質土という共通点をもつ。出土遺物はほとんどが細片である。時期は１基が13世紀初頭まで下るものの、10世紀頃に集中して造られたと見られる。

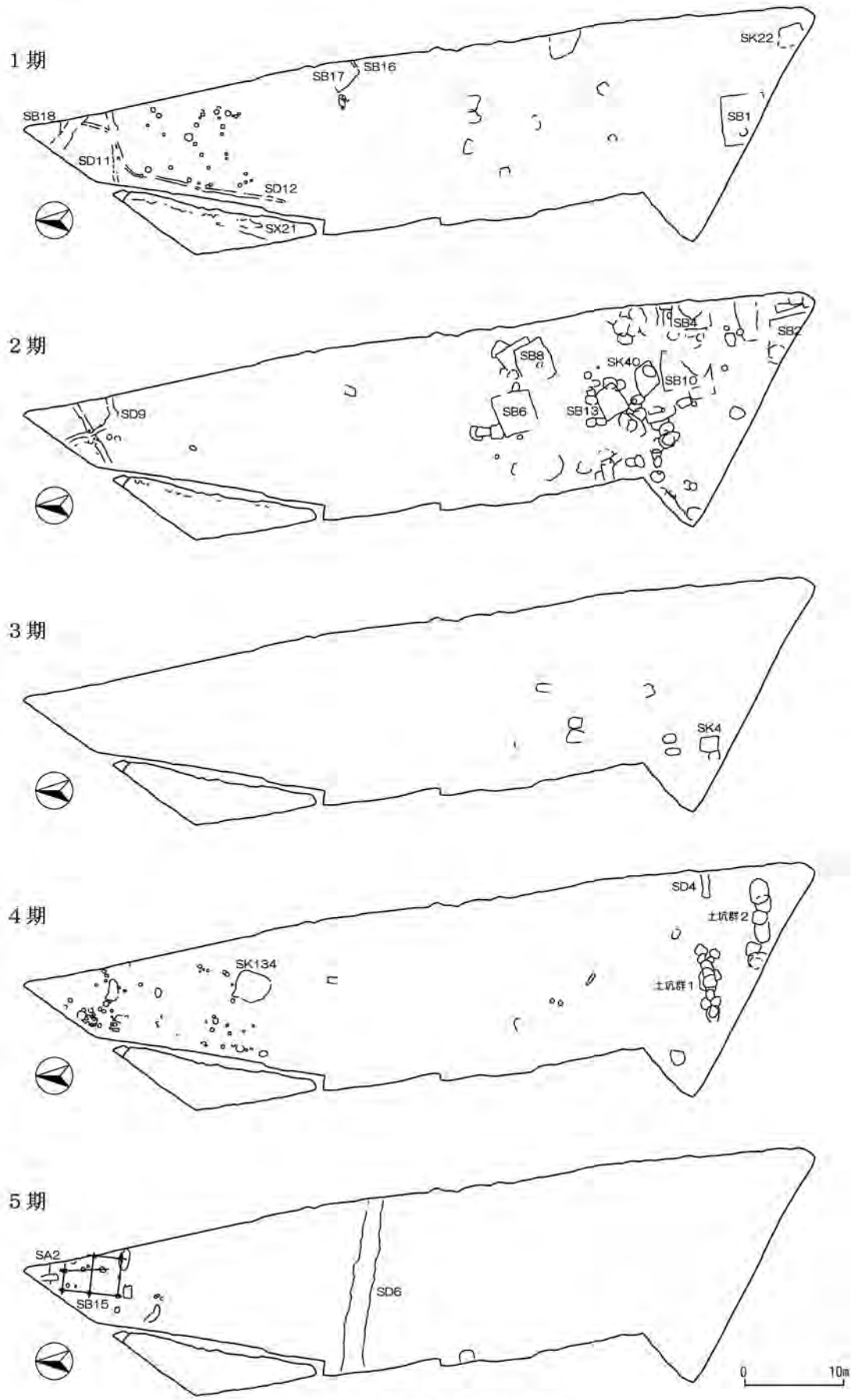
４期：室町時代

北区北半の低地部では層厚30〜40cmの北ⅳ層の堆積があり、２期までの極端な地形の傾斜は解消されている。

遺構は北ⅳ層上での北区北半と南区南半に偏って検出されたが、北区南半、南区北半は５期以降の遺構・撹乱によって、削平されてしまった可能性がある。

北区では土坑11基、ピット60基が検出された。竪穴状遺構と見られるＳＫ134や柱痕の残るＰ160など、建物の存在を示すものがある。また被熱痕のある土坑ＳＫ129などが確認されている。

南区では溝１条、土坑17基、ピット２基が検出されているが、直線状に並ぶ土坑列が溝の可能性があること、溝・土坑列が同一の方向を示すことは既に指摘したとおりである。これらの方向は、真東西方向から西回りに５度傾いており、続く５期の地割りとは明らか



第51図　時期別遺溝分布図

に異なる。また周辺の条里の向きはほぼ真南北であることが予想されており、それとも違うものである。何を基準とした方向であるかは不明であるが、戦国期の直前にある程度の範囲で開発が行われた可能性を示すといえよう。

当期の遺物は古瀬戸後Ⅳ期古段階・東濃型山茶碗脇之島３号窯式・土師器皿Ｃ１が出土している。これらの遺物は時期的にほぼ併行するもので、鷺山地区全体が、広範囲に整備される直前の状況を示していると考えられる。

５期：戦国期

北区北半では北ⅲ層・ⅱ層が確認された。北ⅳ層上面で検出される４期の遺構とは、極めて短い時期差しか認められず、また北ⅲ層上面の時期は、鷺山地区一帯に及ぶ広い範囲での整備が進行することから、北ⅲ層は低地を埋め立てた整地層の可能性が考えられる。もうひとつの北ⅱ層は焼土・炭が大量に包含され、掘立柱建物周辺にしか分布しないことから、火災後の整地層と考えられる。それぞれの上面で遺構が検出でき、北ⅲ面（５−１期）と北ⅱ面（５−２期）に細分できる。

５−１期・５−２期とも、遺構は区画溝であるＳＤ６以外は、北区北半に集中して検出された。北区南半は６期以降の遺構・撹乱によって、削平されてしまった可能性が極めて高い。南区は北半のⅡ層中より、当期の遺物が比較的多く出土していることから、６期の遺構によって壊されている可能性が高いが、南半はⅡ層中の遺物も少なく、元々遺構が希薄であったと見られる。

５−１期の遺構は、掘立柱建物ＳＢ15、廃棄土坑ＳＫ130・ＳＫ152、不明遺構ＳＸ12が主な遺構である。また、層位的には対応させることができないが、区画溝ＳＤ６もこの時期のものである可能性が高いと考えられる。真東西より東回りに８度傾いており、鷺山地区一帯で確認されている溝などの向きと一致する。ＳＤ６より北は、溝で区画された敷地内部の様相を表しており、ある時期に火災に遭っていることが明かとなった。前述したように、南区では明確にこの時期といえる遺構は無い。

５−２期は北区北半で、ＳＡ２と土坑ＳＫ127などが確認されたが、状況は明かでない。ＳＡ２は３基のピットからなるもので、掘立柱建物の可能性もあるが、５−１期のＳＢ15とは方向が異なるのが特徴的である。

６期：近世以降

水田跡ＳＸ１・６〜11、道路の盛土であるＳＡ１、ＳＤ１〜３・５などが主な遺構である。いずれも近世に造られており、５期の地割りとは異なる方向である。この地割りは明治半ばまでは残り、地籍図と道路や地割りがほぼ合致する。昭和10年頃、近くに道路が新設されるに伴って区画整理があったようで、昭和20年の空中写真では、調査前の状況と同じになっていることから昭和初期頃まで続く地割りであったのだろう。そして調査の契機となった今回の区画整理で、さらに変貌を遂げることとなる。

第２節　出土遺物について

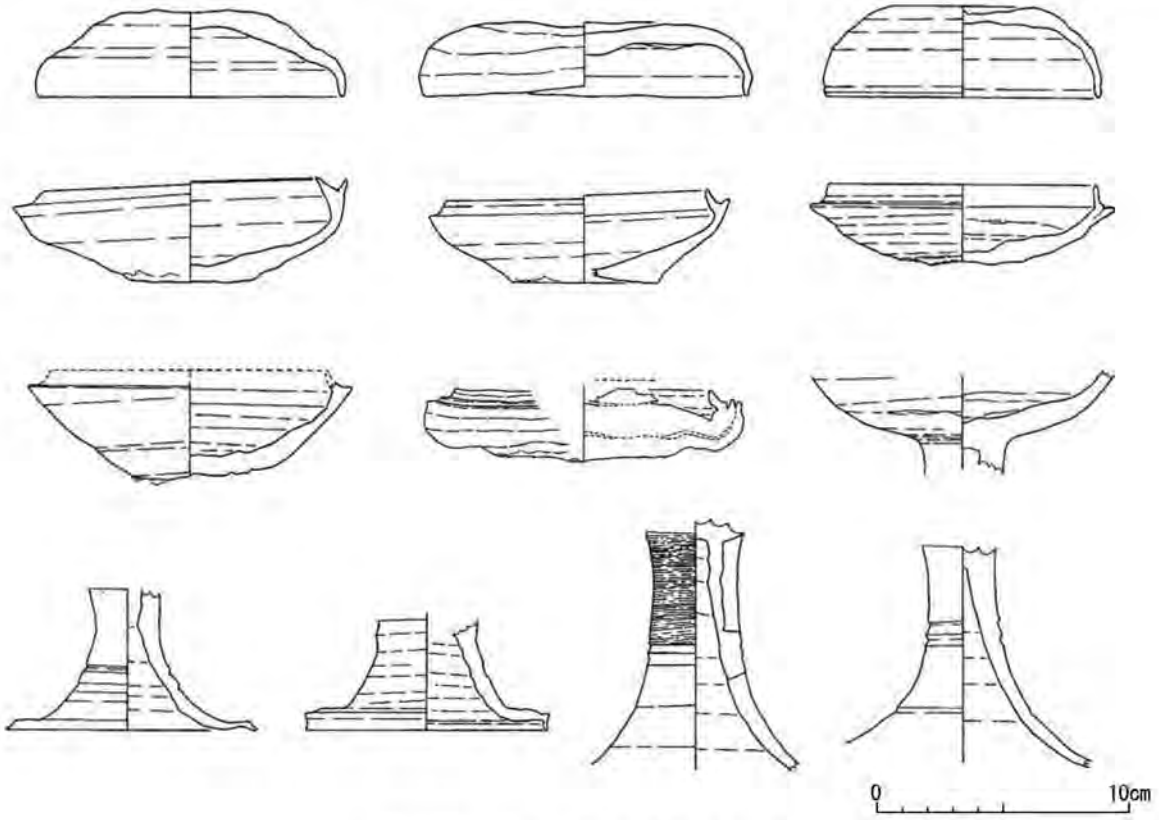
（１）須山古窯産須恵器

今回出土した須恵器の坏身の中で１点だけではあるが、須山古窯産と考えられる坏身を確認することができた。

須山古窯址群は岐阜市彦坂字須山に位置し、伊自良川上流の盆地に向かって東から西に突き出た小丘陵の南斜面に立地している[1]。斜面広範囲に窯壁や焼土塊が散布していることから、複数基の窯が存在していたと考えられている。採取された遺物の中には焼成不良品や焼き歪みの著しいもの、溶着したものが見られる（第52図）。この須恵器窯に対しての評価は渡辺氏が行っている[2]。渡辺氏はいわゆる「畿内系須恵器」の一つの窯であり、各務原市須衛65号窯の蓋杯などと特徴が似ていることを指摘し、須山古窯産の須恵器が須衛65号窯とほぼ同型式か同時期のものとしている。須山古窯址群の時期はＴＫ-217併行期、７世紀第２四半世紀になる。

今までは船来山古墳群で須山窯産須恵器に類似するものがあるといわれている。それ以外は城之内遺跡や鷺山遺跡群の発掘調査において尾張産や美濃須衛産、丸山古窯産の須恵器は確認されていたが、須山窯産須恵器は確認されていない。岐阜市内の後期古墳からも出土した例は確認されていない。

今回、遺物番号80のような須山古窯産の須恵器の坏身が鷺山市場遺跡で見つかったことは須山古窯産須恵器の流通形態の一部が明らかになったといえる。また、古墳時代後期の



第52図　須山古窯出土須恵器

須恵器窯と集落の関係の一端を知ることができる資料である。

（２）特殊提瓶について

Ｐ20から３方向に半環状の把手が付き、腹面に施文されるという非常に珍しい提瓶が出土している。須恵器の中で特殊品であると考えられる。ここではこの提瓶について考察していくこととする。

まず、今回出土した遺物番号175の提瓶の特徴は

①半環状の把手が３つあること

②胴部に櫛状工具による刺突文が円形に施文されること

の２つが挙げられる。

最初に①について考えてみたい。把手が３方向に付く提瓶は岐阜県内で５点出土している。概要は以下のようである。（第53図、第38表）

・宮之脇１号墳―可児市川合にある一辺16.4mの方墳である。内部主体は不明である。提瓶は周濠から出土している。器形は楕円形を呈し、平坦な面はない。把手は半環状に近い鈎状把手となる。器高は29.4cm、最大径23.7cmを測る。古墳の築造時期は他の遺物の混在が激しいため確定はできないが、城山２号窯段階といわれている。提瓶は他の遺物と共に混入した可能性もあるため、時期不明としておく。

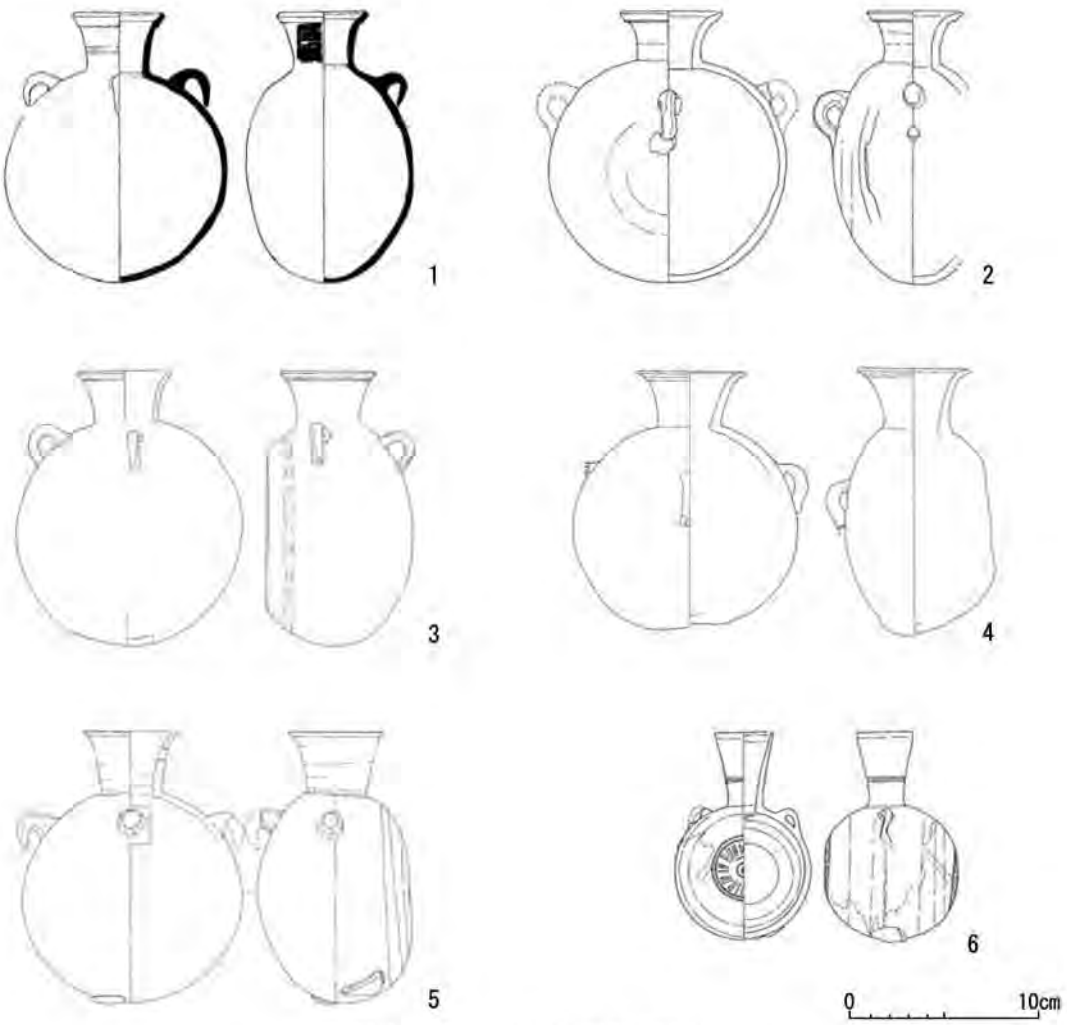
・宮之脇10号墳―可児市川合にある全長約21mの造出し付き円墳である。内部主体は不明である。提瓶は周濠から出土している。器形は胴部の背面が丸く張る。腹面は欠損しているため不明である。把手は半環状把手となる。器高は28.8cm、最大径25.2cmを測る。古墳の築造時期は他の遺物の混在が激しいため確定はできないが、H-61段階までには築造されていたと考えられる。提瓶もH-61段階であると推測される。

・陽徳寺裏山１号墳―関市千疋にある全長約13mの造出し付き円墳である。内部主体は川原石を使用した初期横穴式石室である。提瓶は玄室から出土した。器形は胴部の背面が丸く張るが、腹面は平坦である。把手は半環状把手となる。器高は31.6cm、最大径26.0cmを測る。古墳の築造時期はH-61段階である。提瓶もH-61段階であると考えられる。

・虎渓山１号墳―多治見市弁天町にある直径12.5mの円墳である。内部主体は左片袖式の初期横穴式石室である。提瓶は玄室から出土した。器形は胴部の背面が丸く張るが、覆面は平坦である。把手は半環状把手となる。器高は28.0cm、最大径23.7cmを測る。古墳の築造時期はH-61段階である。提瓶もH-61段階であると考えられる。

・白山古墳群―池田町にある古墳群である。提瓶は古墳から出土したものではなく、池田町が昭和44年に行った分布調査中に白山５号墳付近で採取したものとされている。このため、共伴する遺物は不明である。器形は全体的に丸く、平坦な面はない。把手は鈎状把手となる。器高は28.5cm、最大径23.2cmを測る。

岐阜県内から出土した把手が３方向に付く提瓶をみてきた。これらの遺物はH-61段階に集中して見られる傾向がある。集落から出土した事例はなく、いずれも古墳から出土している。器形に関しては背面が丸く張り、覆面は平坦であるものが主で、腹面が丸くなるものは鷺山市場遺跡で見つかったものと白山古墳群で採取されたものだけである。把手も



第53図　岐阜県出土の特殊提瓶

※一部修正あり
番号は第38表に対応

	出土遺跡	形態・文様			時期	法量（cm）	備考	参考文献
		背面	腹面	把手の形				
1	宮之脇１号墳	丸く張る		鈎状	城山２号窯期	器高29.4　径23.7		文献１
2	宮之脇10号墳	丸く張る	—	半環状	東山61号窯期	器高28.8　径25.2		文献２
3	陽徳寺裏山１号墳	丸く張る	平坦	半環状	東山61号窯期	器高31.6　径26.0		文献３
4	虎渓山１号墳	丸く張る	平坦	半環状	東山61号窯期	器高28.0　径23.7		文献４
5	白山古墳群	丸く張る	平坦	鈎状	不明	器高28.5　径23.2	表採資料	文献５
6	稲荷塚２号墳	胴部両面に２条同心円文と弧状の刺突文			東山15号窯期	器高22.0　径14.4		文献２

第38表　岐阜県出土の特殊提瓶

※径は最大径

文献１　岐阜県教育委員会　可児町教育委員会　1976　『宮之脇遺跡発掘調査報告書』
文献２　可児市教育委員会　1994
『川合遺跡群―「川合北部土地区画整理事業」に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書』
文献３　協同組合連合会岐阜県中小企業福祉センター　関市教育委員会　1976　『陽徳寺裏山古墳群』
文献４　岐阜県　多治見市教育委員会　1996　『虎渓山１号墳発掘調査報告書』
文献５　池田町教育委員会　2001
『岐阜県史跡　願成寺西墳之越古墳群36号墳発掘調査　74～88号墳周辺確認調査報告書』

宮之脇１号墳、白山古墳群で採取されたものの２つだけが鈎状把手となる。

次に②の胴部に文様を施しているものであるが、岐阜県内では可児市稲荷塚２号墳で１例のみ確認されている。

稲荷塚２号墳は次郎兵衛塚１号墳を含む川合古墳群の中の１基で、直径約18mの円墳である。内部主体は川原石積みで複室構造の横穴式石室である。提瓶は石室の後室部分でみつかった。器形は球形である。胴部の両面に２条の同心円文の中に刺突文を弧状に施している。器高は22.0cm、最大径14.4cmを測る。古墳の築造時期はH-15段階であり、提瓶も同じH-15段階と考えられる。

胴部に文様をもつ提瓶は岐阜県内では１点のみで、近隣の地域でも数は非常に少ない。一宮市浅井13号墳で１点見つかっているだけである。稲荷塚２号墳出土の提瓶と今回見つかった提瓶はまず、稲荷塚２号墳出土の提瓶には両面文様が見られるところで異なる。文様構成は放射線状に刺突文を施文するところは同じであるが、鷺山市場遺跡出土の提瓶には２条の同心円文はみられない。また、岐阜県内の事例ではないが、兵庫県の有文提瓶はＴＫ-10段階から造られているようである。

以上、今回見つかった提瓶に関係する提瓶の概要をみてきた。鷺山市場遺跡出土の提瓶のような把手を３つ持ち、胴部に文様を施す提瓶の類例は１つもみられず、鷺山市場遺跡出土の提瓶のみである。時期に関しては類例がないため不明としかいえないが、この周辺の①と②の特徴をもつ提瓶と関連させて考えれば、時期幅が広くなってしまうが、H-61段階からH-15段階の間も作られたものであると考えられる。

最後に遺構との関連について再度考えてみたい。Ｐ20は提瓶と一緒に出土した遺物が７世紀後半から８世紀前半もので、かつ遺構の切り合い関係からＰ20の時期を７世紀後半から８世紀前半の間とした。しかし、類例が無いため時期は特定しにくいが、提瓶自体が７世紀前半頃には器種自体が消滅してしまう。このため、今回見つかった提瓶は８世紀前半の遺物であるとは考えがたい。このためこの提瓶は伝世したものではないかと考えられる。出土状況も非常に丁寧にピットの中に置かれていたことも理解できる。どのような背景があって伝世したのかは不明であるが、大切に扱われていたものであると推測できる。何かの祭事に使われたのものであろうか。口縁部が割られているのも祭事に使われたためではないのか。

今回は①と②の特徴をもつ岐阜県内の提瓶のみ概観した。筆者の力不足により、他地域の事例や提瓶全体の中からの位置付けは行うことができなかった。このことは今後の課題である。

（３）木目痕のある土師器皿について

今回、出土した土師器皿の中に１点のみに土器の裏側に木目が転写されているものを確認した。遺物番号331がそれに該当する。Ｂ２-ａ類の土師器皿で手づくね成形で作られている。今回のような裏側に木目が転写されている土師器皿は発掘調査が行われている岐阜市城之内遺跡、千畳敷遺跡や鷺山遺跡群などでも確認されていない。ここではこの裏側の木目の転写がどのような状況でついたものなのか、製作技法に関わるものなか、このこと

について若干の考察を行うこととする。

土師器皿の製作技法については、1931年に島田貞彦氏が「山城幡枝の土器」という論文の中で、民俗の事例から土師器皿の製作過程を明らかにし[3]、近年では北島大輔氏が山口市大内館出土の土師器皿を検討し、製作技法の復元を行っている[4]。はじめに先行研究を参照しながら土師器皿の製作技法をみていく。

まず、粘土の塊を両手で丸め、更に平たくし円盤状にして左手の掌に置く。そして、円盤状の中央をへこませていく。幡枝のでは左手の掌に置いた円盤状の粘土塊の中央部分を右手の肘先で押し当てへこませる。このようにできた形のものを「ウツゲ」とよばれる木製円盤によって器壁を引き延ばし薄くしている[5]。

次に先に形作ったものをユビオサエやホヘといった道具を使い、成形し、完成させていく。

以上、焼成前までの土師器皿の製作方法についてみてきた。再度、遺物番号313を見てみると、裏側の木目は非常に薄く残っているだけであり、強い力を加えて転写されたものであるとは考えがたい。また、土師器皿の裏側はほぼ平坦であるが、若干指圧の痕跡が残っている。この指圧痕の上にも木目が転写されており、土器の製作が終わった後に、木目が転写されているようである。先に見てきた土器製作技法の中に、土器の形を作った後に木目を転写するような工程を見いだすことはできなかった。この痕跡は土師器皿を作る製作工程によって転写されたものではないようである。島田氏の論文の中に、

「製作に際して平板の上に粘土を載せ、其右方に「みごろ」「うつげ」「ほへ」等を置き、左方には土器を乾燥せしめる為の板を敷く」

とある。今回、確認できた裏側の木目の転写は恐らく、土師器皿を乾燥させる為に板の上に置いた時に転写されたものではないかと推測される。

今回、裏側の木目の転写は土師器皿の製作技法に関わるものではないか、と考えていたが、結果、土師器皿を乾燥させる為に板の上に置いた時に転写されたものと考えられる。非常に残りにくい痕跡であり、希な例といえよう。岐阜市域における戦国時代の土師器皿を製作していく上での製作工程の一部がわかったといえる。

註

1　岐阜市教育委員会　1996　『岐阜市遺跡詳細分布調査報告書』

2　渡辺博人　1999　「第３章　考察」『須衛市立南１号窯址発掘調査報告書―須衛65号窯―』各務原市埋蔵文化財センター

3　島田貞彦　1931　「山城幡枝の土器」『考古学雑誌』

4　北島大輔　2006　「大内氏館跡出土の戦国期土師器皿の製作技法」『山口市埋蔵文化財年報５　―平成16年度―』山口市教育委員会

5　ここまでの製作工程を北島氏は「第一次成形」としている。

図版 1

鷺山市場遺跡 A 区全景（合成写真、上方が北）

図版２

A 区南完掘状況（北から）

SB１遺物出土状況（北から）

SB２完掘状況（北から）

SB４遺物出土状況（東から）

SB４完掘状況（北から）

SB６完掘状況（北から）

作業風景

SB８カマド完掘状況（北から）

SB８完掘状況（北から）

SB15全景（東から）

SB15−１完掘状況（東から）

SB15−２完掘状況（東から）

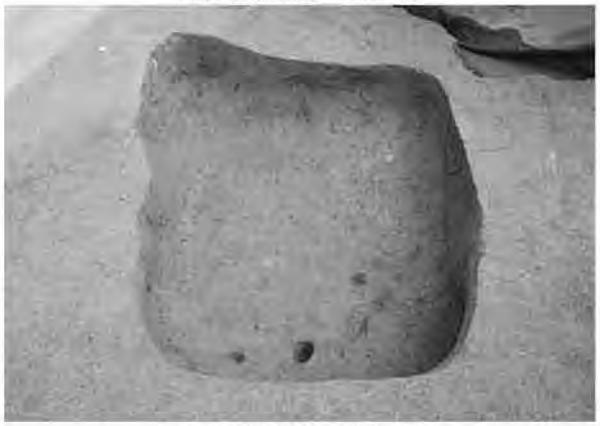
SB15−４完掘状況（西から）

図版４

A 区北完掘状況（北から）

SB17完掘状況（北から）

SB18完掘状況（西から）



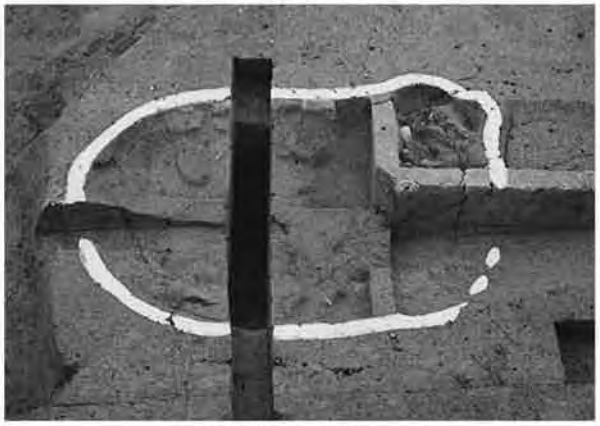
SK４完掘状況（北から）

SK22完掘状況（北から）

SK23完掘状況（東から）

SK25完掘状況（北から）

SK40完掘状況（東から）



SK129完掘状況（西から）

SK130完掘状況（東から）

SK134完掘状況（北から）

SK139完掘状況（東から）

SK152完掘状況（東から）

図版６

SD５完掘状況（東から）

SD６完掘状況（東から）

SD８完掘状況（北から）

SD11・SD12完掘状況（西から）

北区北側溝全景（南より）

南区土坑群（西より）

NR 全景（北から）

SX21遺物出土状況（北から）

P20遺物出土状況（東から）

P160完掘状況（南から）

SX12完掘状況（西から）

作業風景

図版８

30

31

95

1

217

225

119

230

121

116

229

80

180

61

242

173

243

188

70

図版10

249

90

274

263

304

315

175

355

353

331

488

321

328

352

291

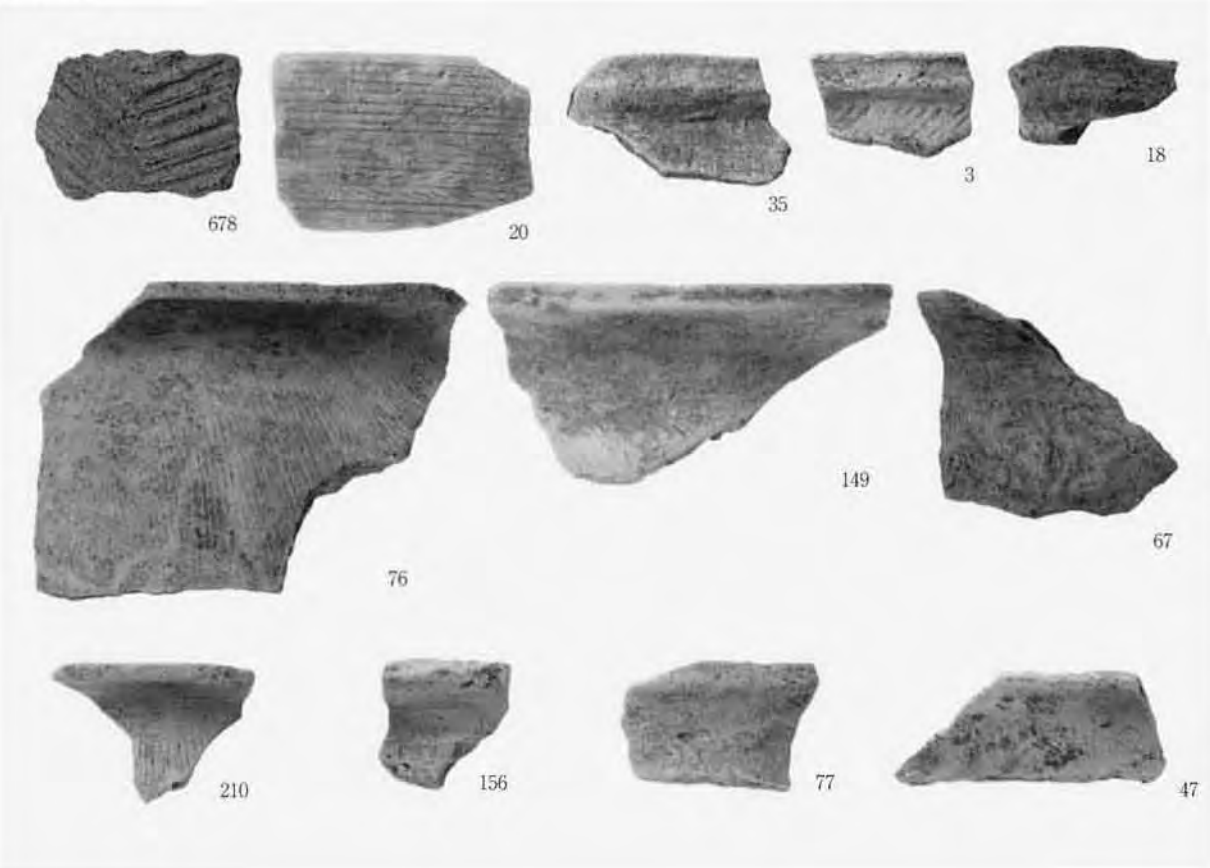
440

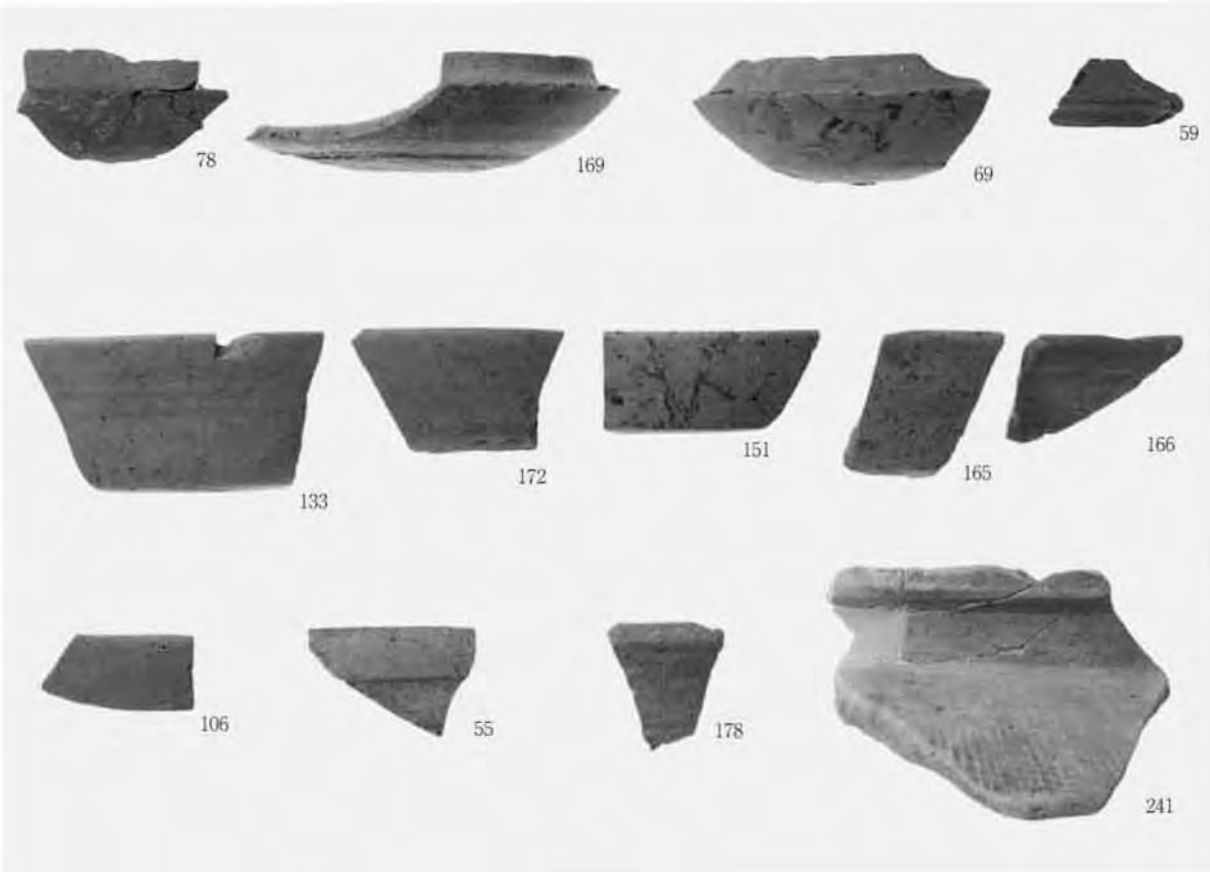
611

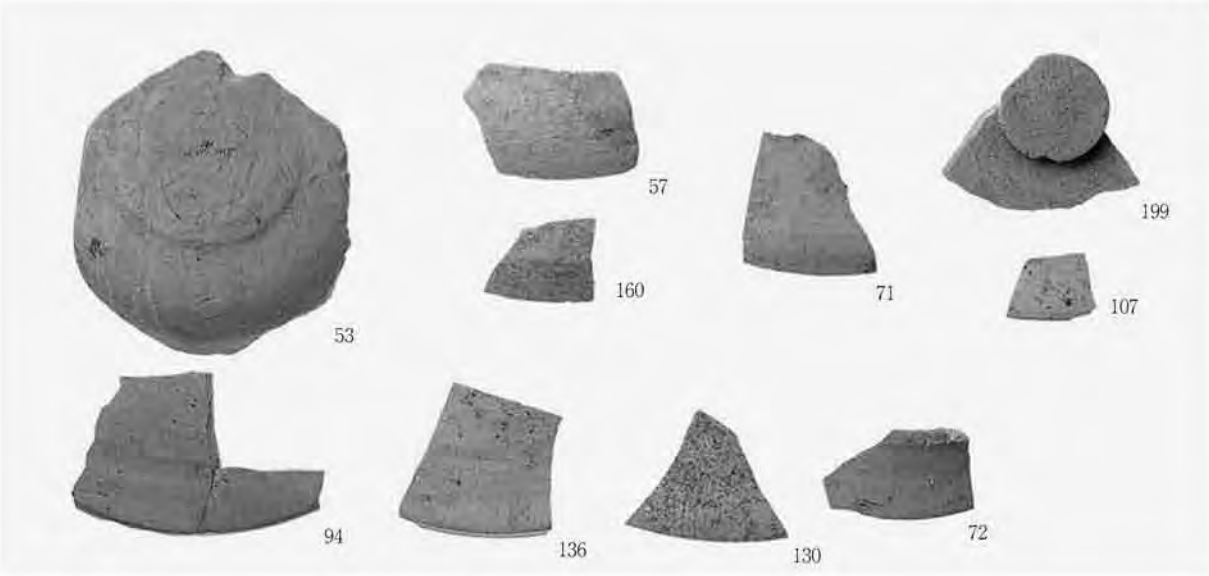
51

393
392
391

図版12


678
20
35
3
18
76
149
67
210
156
77
47


78
169
69
59
133
172
151
165
166
106
55
178
241


53
57
160
71
199
107
94
136
130
72

144

27
28
568
145
571
245
570
572

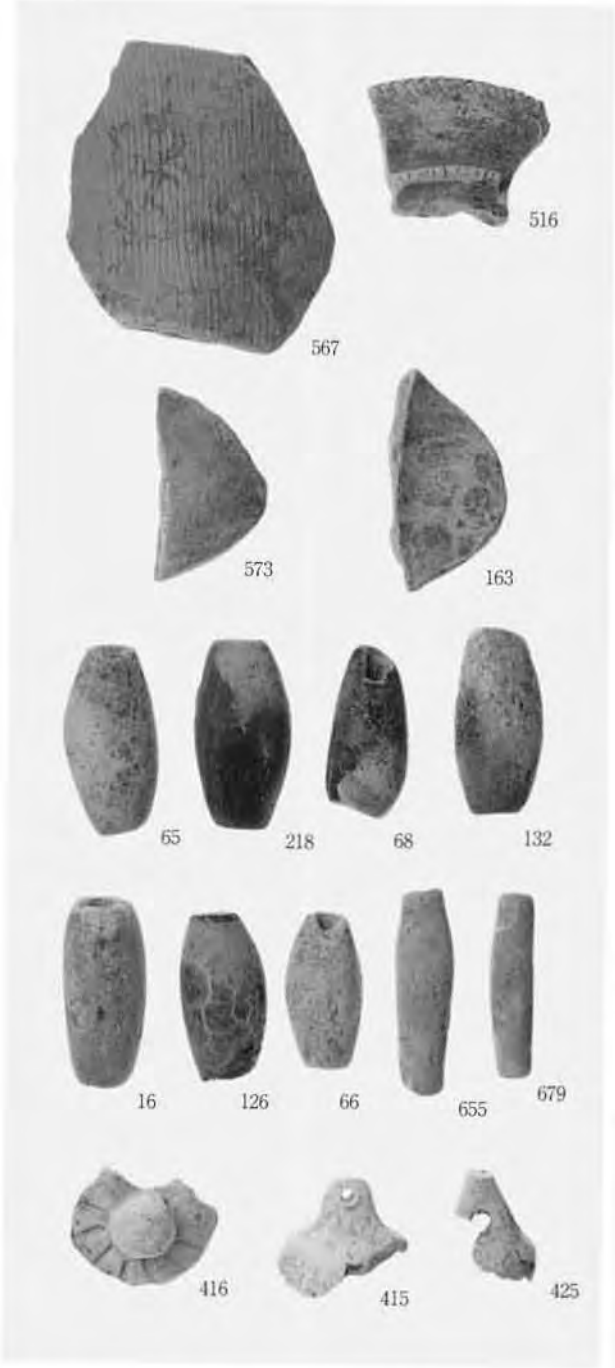
660
248
17

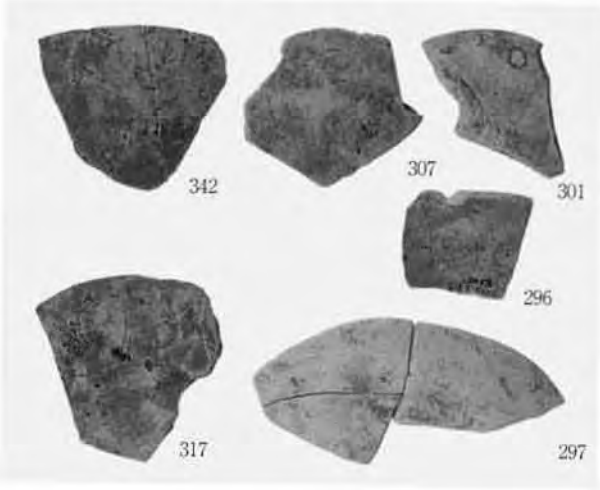
309

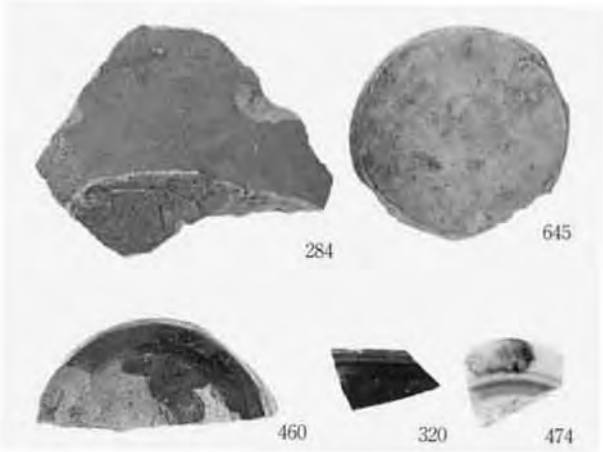
308

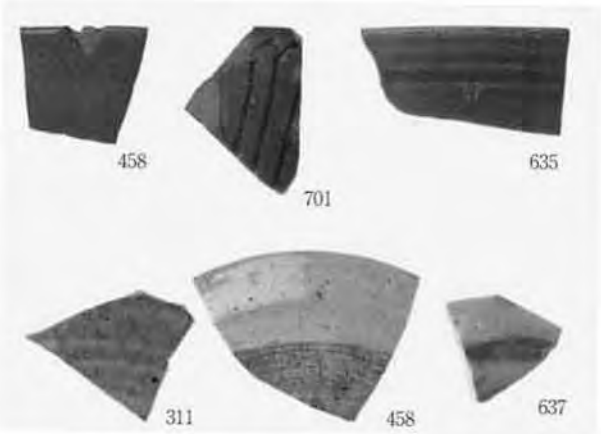
318

図版14


567
516
573
163
65
218
68
132
16
126
66
655
679
416
415
425

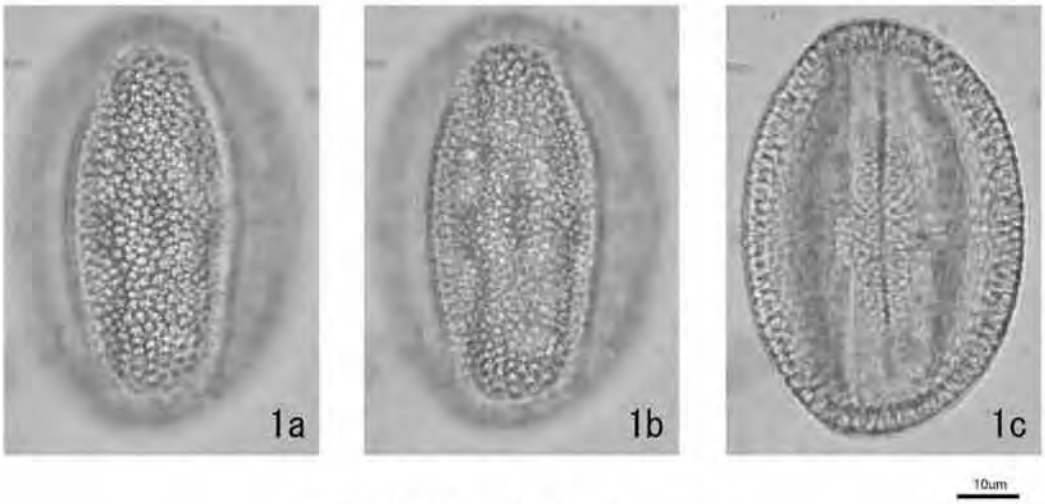

342
307
301
296
317
297


284
645
460
320
474


458
701
635
311
458
637

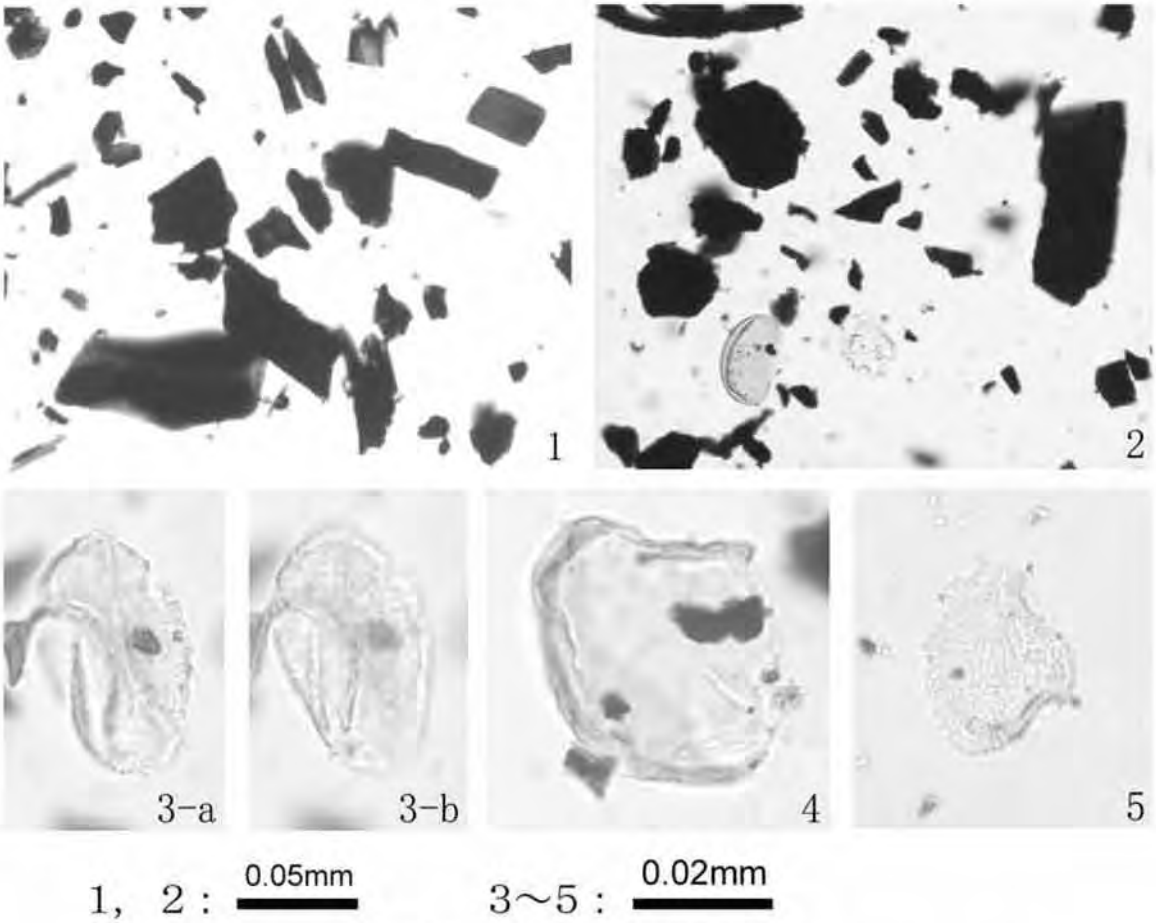
272
702
124

692
435
469



図版15-1　産出した花粉化石

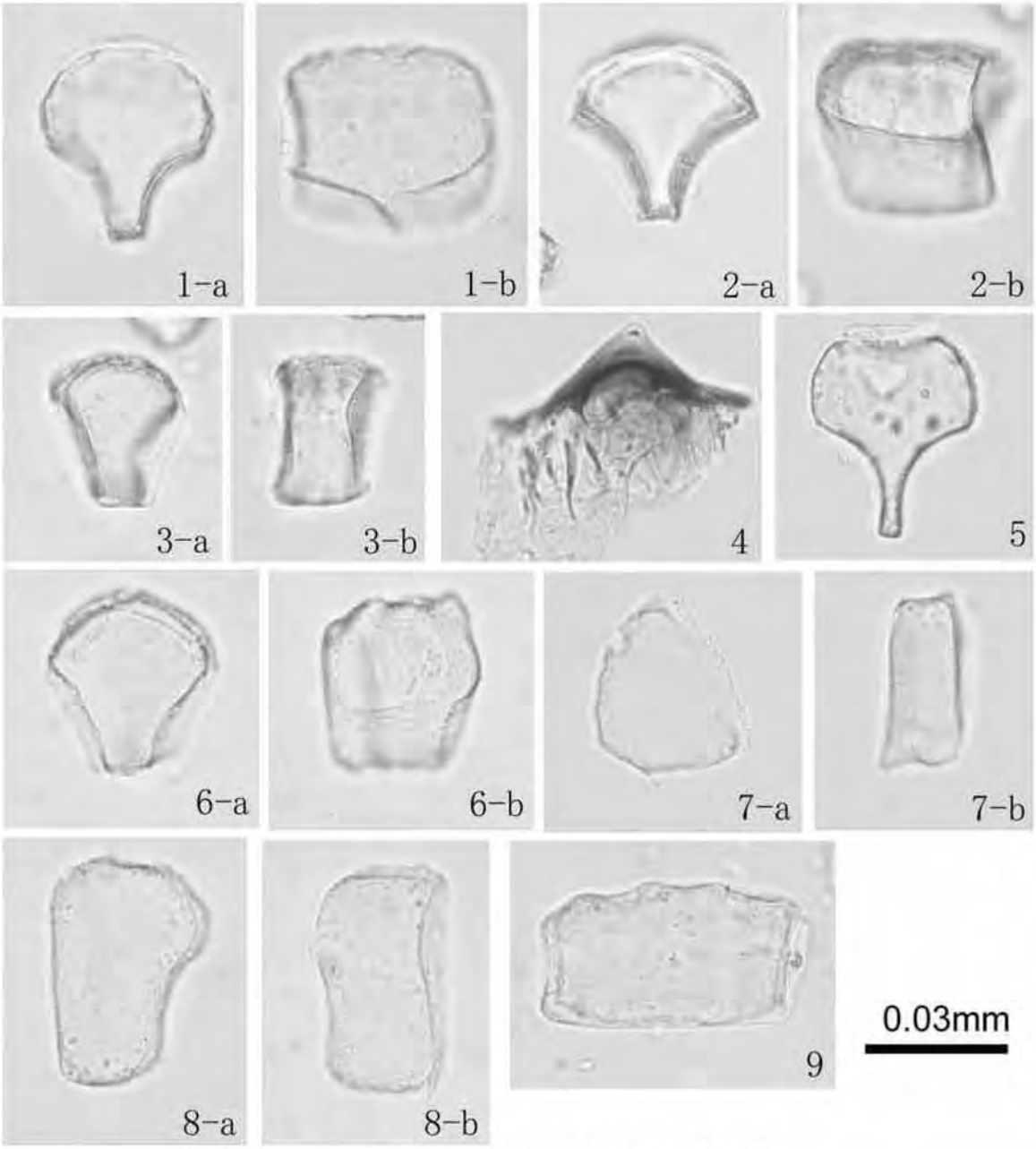
1．ソバ属、B6-2、PAL. MN 2402



図版15-2　A区P地区の花粉化石

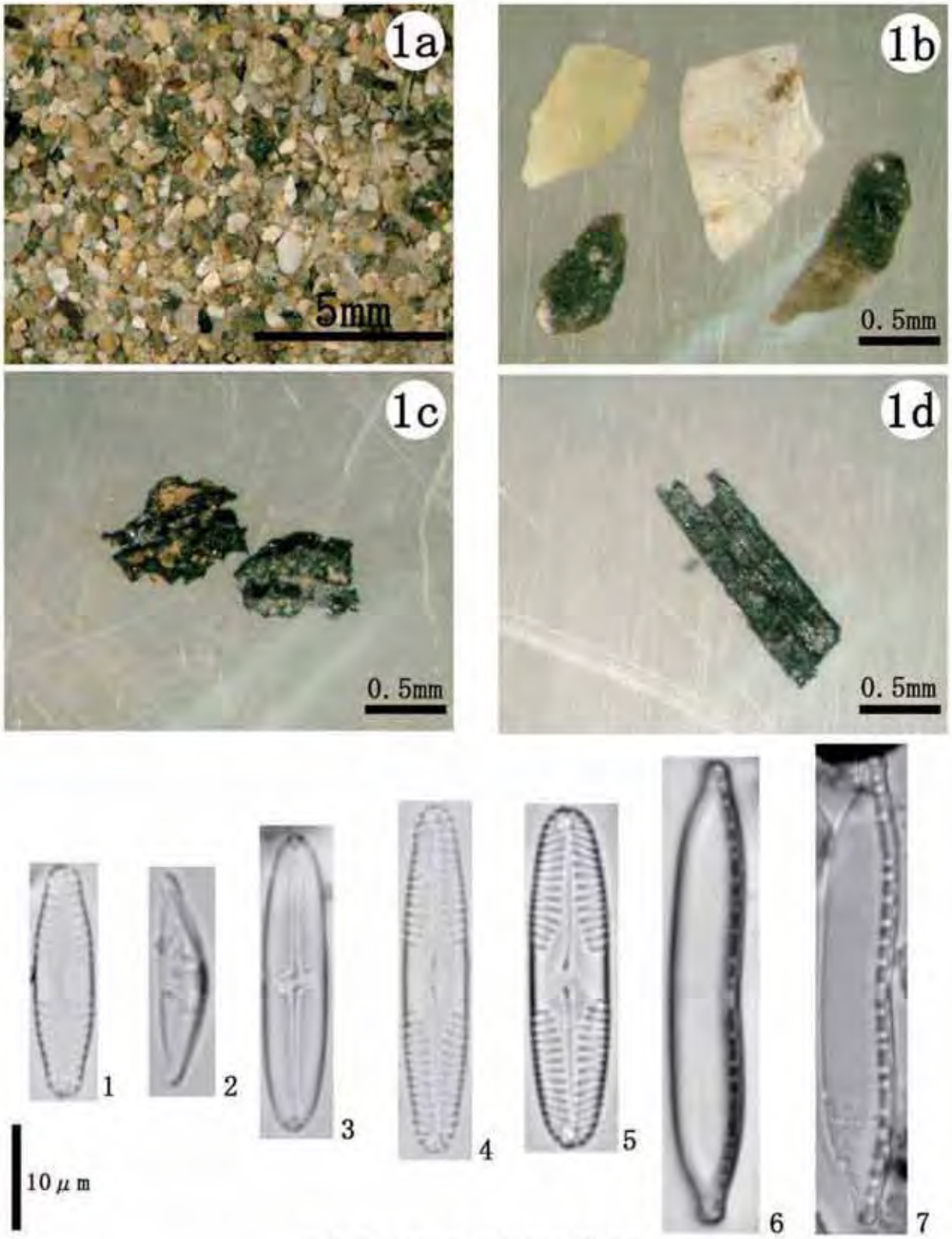
1、2：プレパラートの状況　1：S1、2：S2　　3：ニレ属-ケヤキ属破片　S1
3：コナラ属コナラ亜属　S1　　4：アブラナ科破片　S1

図版16



鷺山市場遺跡Ａ区南のプラント・オパール

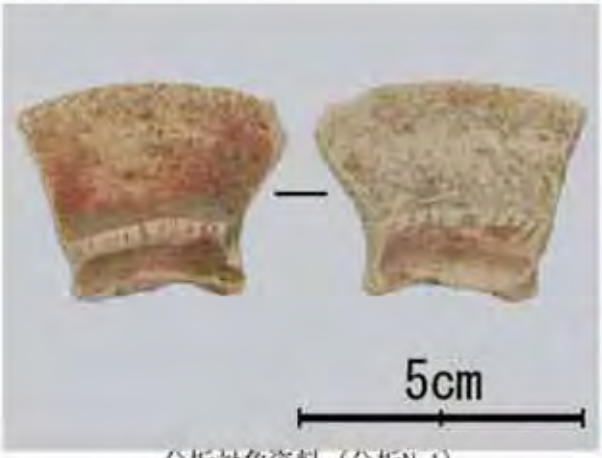
１～３：イネ（a：断面、b：側面）　１：試料１、２：試料２、３：試料３
４：イネ穎部珪酸体破片　試料１
５：シバ属（断面）　試料１
６：ネザサ節型（a：断面、b：側面）　試料２
７：クマザサ属型（a：断面、b：側面）　試料１
８：ウシクサ族（a：断面、b：側面）　試料２
９：キビ族（側面）　試料１



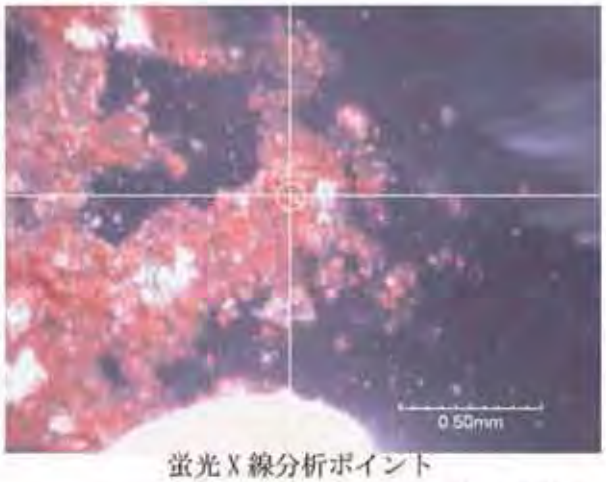
水洗篩分けによる残渣と珪藻化石

1a. 水洗篩分け残渣（2φ篩）　1b. 破片状の粒子　1c. コークス状炭化物　1d. 炭化材
［珪藻化石］
1・4・5. *Pinnularia subcapitata*　2. *Amphora montana*　3. *Neidium alpinum*
6・7. *Hantzschia amphioxys*

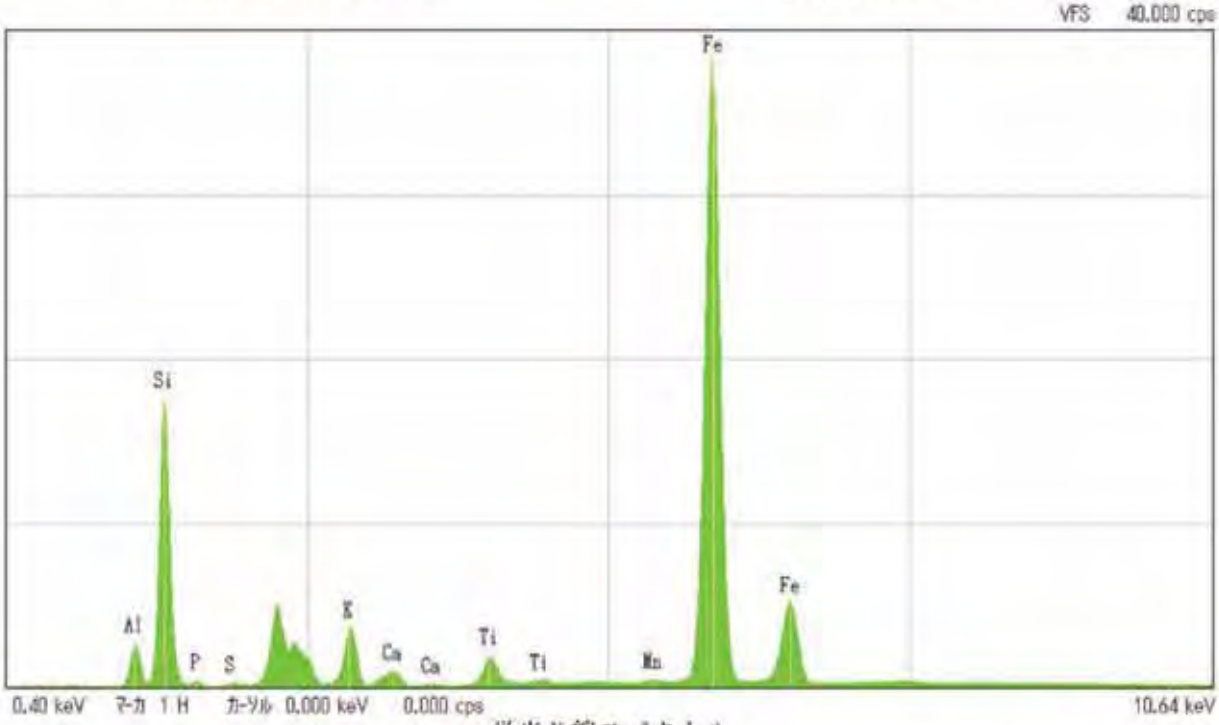
図版18



分析対象資料（分析No.1）



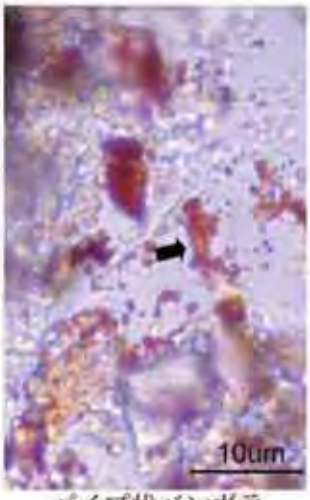
蛍光X線分析ポイント



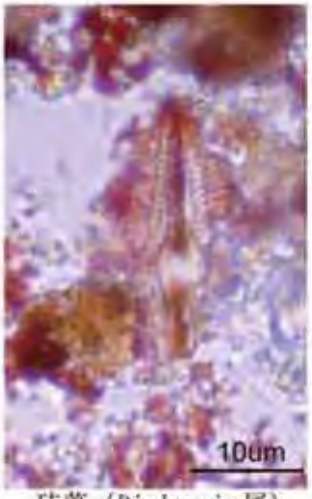
蛍光X線スペクトル

測定時間 :500s　パルス処理時間 :P4
XGT径　:100μm X線管電圧　:50kV
電流　:1.00mA
定量補正法:スタンダードレス

元素		ライン	質量濃度 [%]	2σ [%]	強度 [cps/mA]
13	Al	K	15.21	0.57	26.39
14	Si	K	62.78	0.54	189.71
15	P	K	1.11	0.16	3.62
16	S	K	0.27	0.06	2.05
19	K	K	5.55	0.16	46.14
20	Ca	K	0.99	0.07	11.11
22	Ti	K	1.18	0.06	22.88
25	Mn	K	0.04	0.02	1.57
26	Fe	K	12.87	0.16	590.29



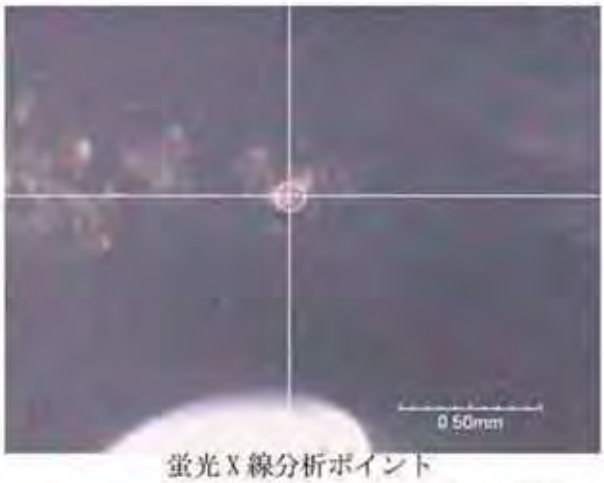
パイプ状ベンガラ



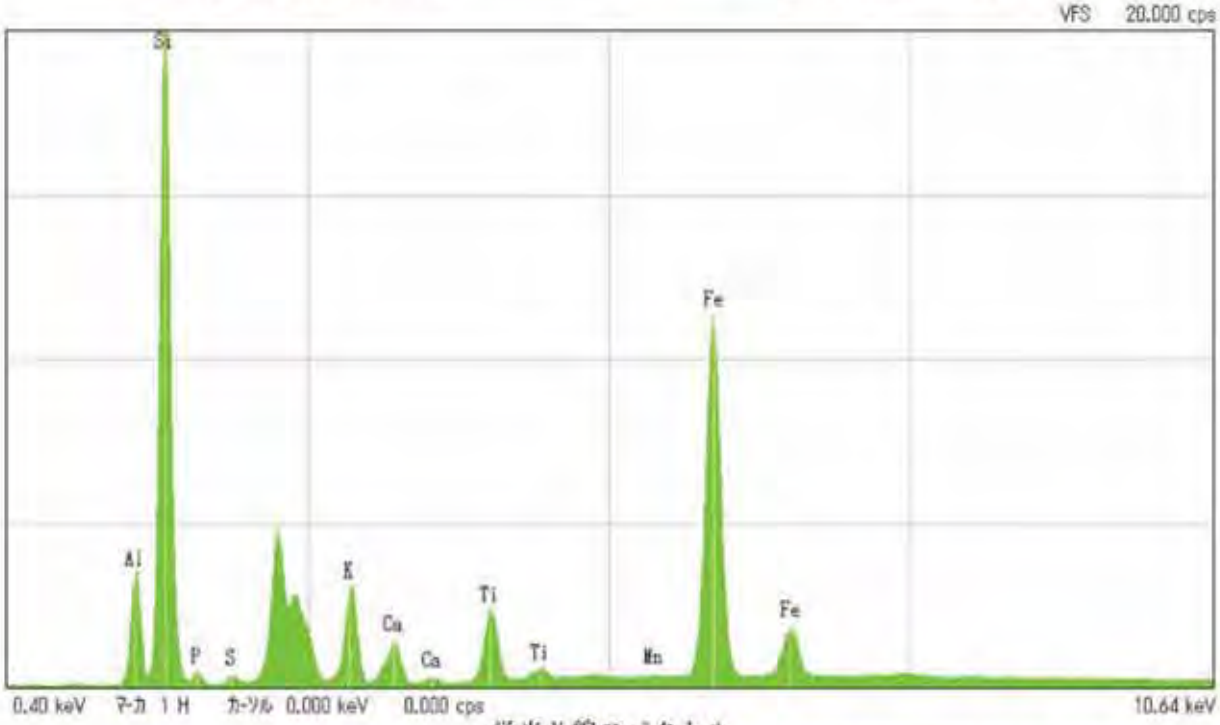
珪藻（*Diploneis* 属）

土器付着顔料分析 No. 1

分析対象資料（分析No.2）



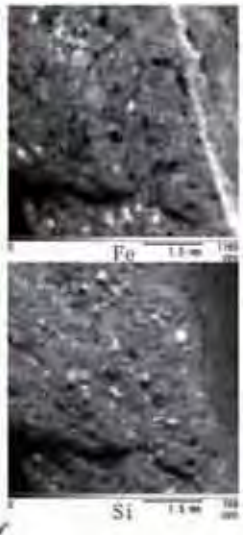
蛍光X線分析ポイント



蛍光X線スペクトル

測定時間 :500s　パルス処理時間 :P4
XGT径　:100μm X線管電圧　:50kV
電流　:1.00mA
定量補正法:スタンダードレス

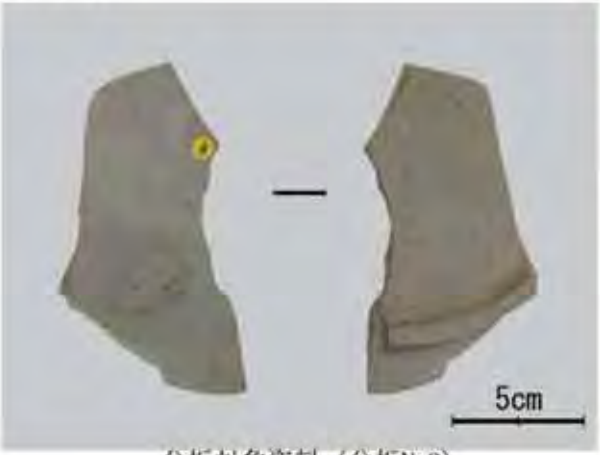
元素		ライン	質量濃度 [%]	2σ [%]	強度 [cps/mA]
13	Al	K	17.53	0.50	38.45
14	Si	K	69.66	0.51	229.48
15	P	K	1.14	0.16	3.67
16	S	K	0.39	0.06	2.94
19	K	K	4.77	0.15	38.97
20	Ca	K	1.43	0.08	16.02
22	Ti	K	1.58	0.07	30.11
25	Mn	K	0.01	0.02	0.55
26	Fe	K	3.49	0.06	171.84



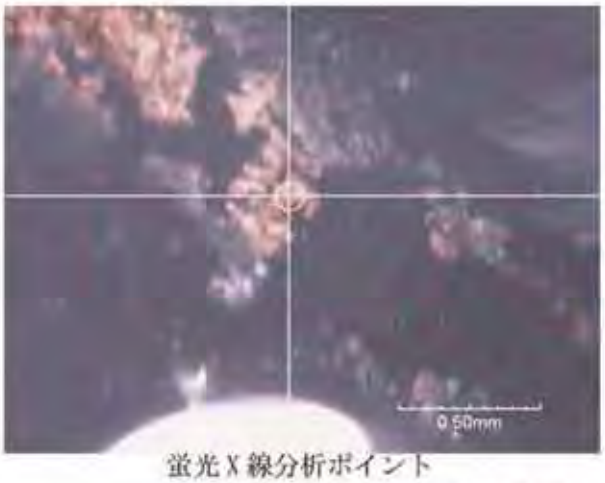
元素マッピング

土器付着顔料分析 No.2

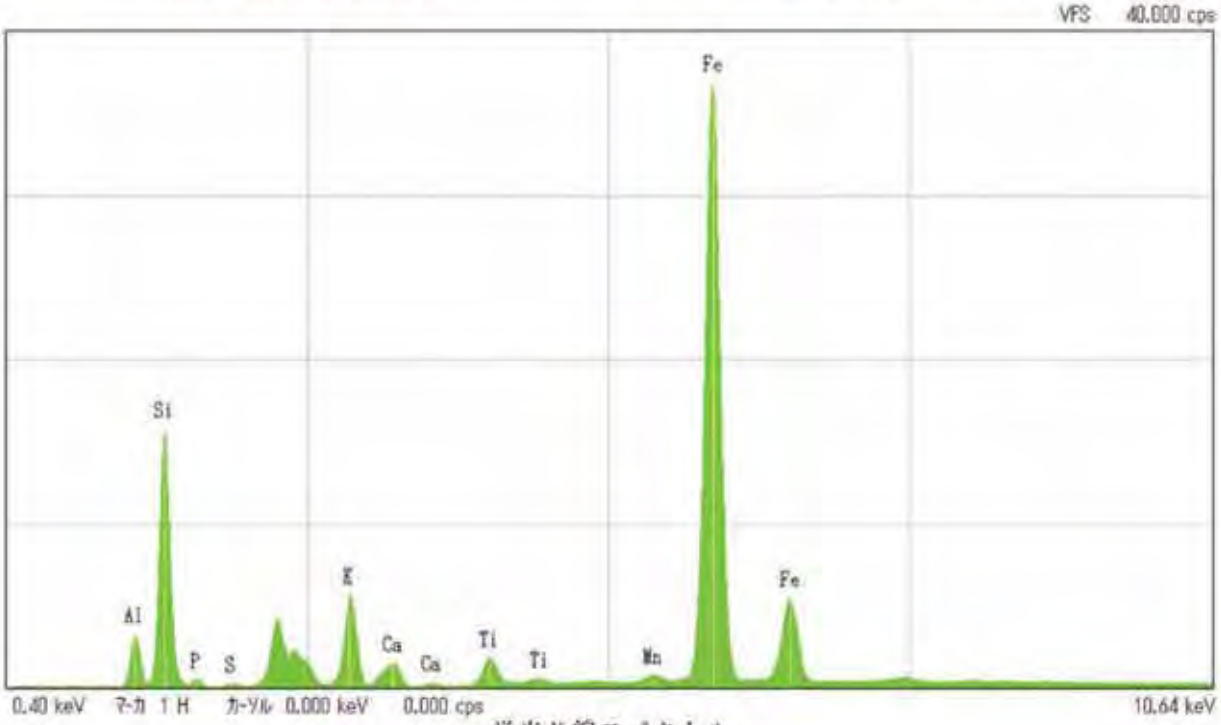
図版20



分析対象資料（分析No.3）



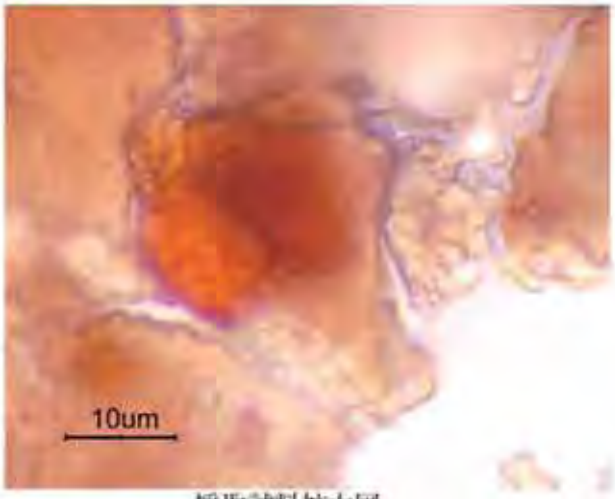
蛍光X線分析ポイント



蛍光X線スペクトル

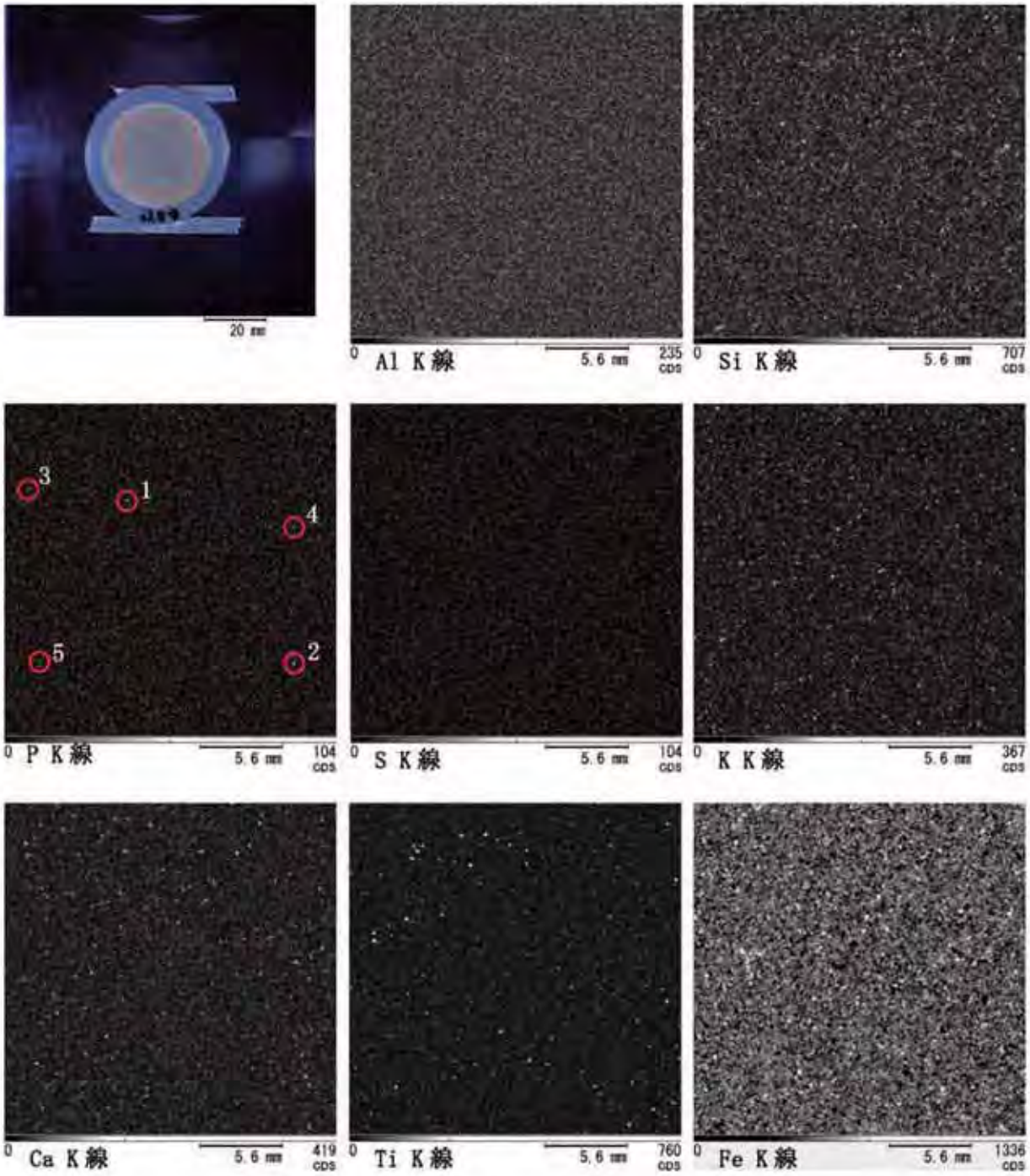
測定時間 :500s　パルス処理時間 :P4
XGT径　:100μm X線管電圧　:50kV
電流　:1.00mA
定量補正法:スタンダードレス

元素		ライン	質量濃度 [%]	2σ [%]	強度 [cps/mA]
13	Al	K	18.74	0.56	34.64
14	Si	K	56.69	0.53	173.07
15	P	K	1.41	0.16	5.05
16	S	K	0.26	0.05	2.20
19	K	K	8.08	0.18	72.69
20	Ca	K	1.48	0.08	17.30
22	Ti	K	1.13	0.06	22.50
25	Mn	K	0.17	0.02	6.36
26	Fe	K	12.04	0.15	573.42



採取試料拡大図

土器付着顔料分析 No.3



プレス試料の元素マッピング図

（Pマッピング図中のNo.は点分析位置を示す）

［元素記号］

Al；アルミニウム　Si；ケイ素　P；リン　S；イオウ　K；カリウム　Ca；カルシウム
Ti；チタン　Fe；鉄

報告書抄録

フリガナ	さぎやまいちばいせき
書名	鷺山市場遺跡
副書名	岐阜市鷺山･下土居土地区画整理事業における鷺山下土居線建設に伴う緊急発掘調査
巻次	
シリーズ名	（財）岐阜市教育文化振興事業団報告書
シリーズ番号	第17集
編著者名	森島一貴・恩田裕之・内堀信雄・藤根久・新山雅弘・鈴木茂・中村賢太郎・竹原弘展・(株)吉田生物研究所
編集機関	財団法人　岐阜市教育文化振興事業団　埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒501－3133　岐阜市芥見南山３-10-１
発行年月日	平成20年12月５日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号					
鷺山市場遺跡	岐阜市鷺山字市場ほか	21201	07184	35°26′50″	136°45′21″	1189㎡	20060606～20070309 20070912～20071012	岐阜市都市計画事業鷺山・下土居土地区画整理事業における都市計画道路鷺山下土居線建設に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鷺山市場遺跡	集落跡	弥生時代末～古墳時代初頭	竪穴住居 4 土坑 7 溝 3 水汲み場遺構 1	土師器	水汲み場を確認
		古墳時代後期～古代	竪穴住居 13 土坑 8 溝 57	土師器・須恵器 焼塩土器	把手が３つ付き胴部に文様をもつ提瓶が出土
	不明	平安時代～室町時代	土坑 33	灰釉陶器 山茶碗 瀬戸美濃陶器 土師器皿	木製の礎板があるピットを確認
	城下町	戦国時代	掘立柱建物 1 区画溝 1 土坑	瀬戸美濃陶器 土師器皿	掘立柱建物が焼失した痕跡を確認
	不明	近世～	道路跡 1 溝 4 水田跡 7	瀬戸美濃陶器	地籍図と一致する土地区画を確認

要約

今回の調査区より集落の中心域は東にあると考えられることから集落域と水汲み場の関係は確認できなかった。古墳時代後期～古代にかけての集落を確認し、伝世品と考えられる把手が３つ付き胴部に文様がある提瓶が出土した。他にもミニチア土器などが出土し、祭祀が行われていた可能性が考えられる。戦国期では掘立柱建物を確認し、建物を覆うように炭・焼土層が広がり、建物が焼失したものと考えられる。また、鷺山一帯に広がっている区画溝の一部を確認した。近世の遺構では明治の地籍図と一致する土地区画の様子を確認した。

鷺 山 市 場 遺 跡

—岐阜市鷺山・下土居土地区画整理事業における鷺山下土居線建設に伴う緊急発掘調査—

平成20年12月

発行　(財)岐阜市教育文化振興事業団
埋蔵文化調査事務所
岐阜市芥見南山３-10-１

別添図１　南区全体図

Y=-37.260
Y=-37.255
Y=-37.250
X=-61,230
X=-61,235
X=-61,240
Y=-37.245
X=-61,245
X=-61,250
X=-61,255
X=-61,260
X=-61,265
Y=-37.265
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
0
1
2
3
4
5
6
0
5m

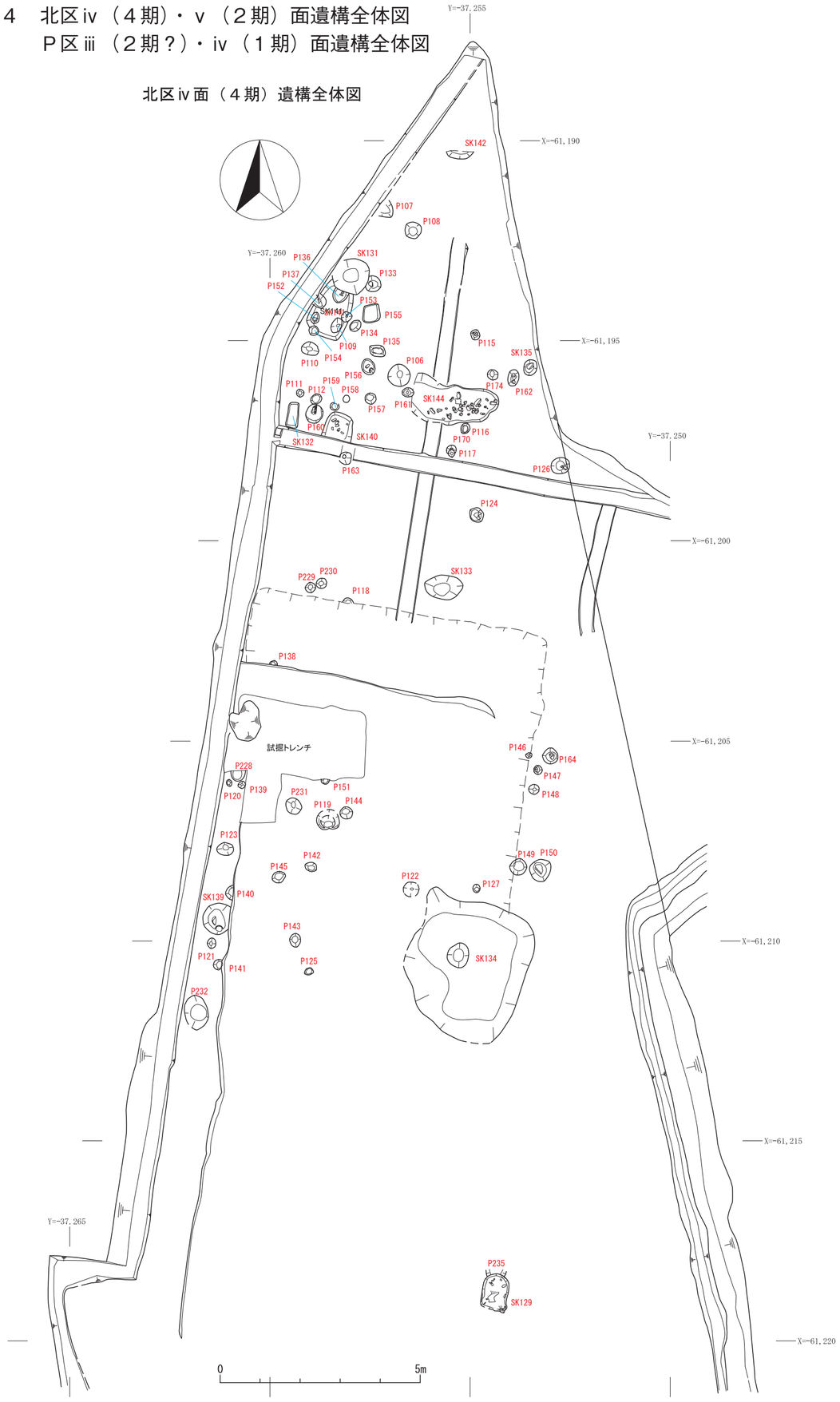
別添図２　北区全体図

Y=-37.255
Y=-37.260
Y=-37.265
Y=-37.250
X=-61,190
X=-61,195
X=-61,200
X=-61,205
X=-61,210
X=-61,215
X=-61,220
X=-61,225
X=-61,230
SK126
SK147
SB18
P113
SD8
P96
P107
P108
P95
P99
SD10
SK131
P155
P97
SB15
SD7
P136
P153
P133
SD9
P199
P137
P200
P114
P152
SK141
SA2
P154
P201
P215
P134
P204
P203
P115
P110
P109
P202
P135
SK135
P106
P174
P111
P156
P205
P160
P112
P158
P157
P161
P162
P159
SK144
SD11
P116
P102
P170
P99
SK140
P206
P207
P117
SK127
SK132
P163
P126
SK130
P101
P267
P268
P168
P124
P100
P171
P169
P230
P104
SK133
P172
SK152
P105
P118
P103
P229
P216
P173
P269
SD12
P208
P138
P270
P261
NR
P196
SK143
P195
P193
P220
P146
P164
SK162
P197
P165
P198
P228
P194
P218
P217
P139
P147
P120
P236
P151
P148
P237
P231
P238
P144
P119
P264
P165
P263
P265
P167
P219
P123
P221
P150
SX20
P262
P222
P223
P260
P145
P142
P239
P240
P122
P149
P190
P127
P224
P140
P225
P191
SK139
P241
P226
P143
P242
P243
P121
SX21
P244
P125
SK134
P141
SK161
P274
P209
P232
P210
P275
P272
P187
P273
SX22
SK145
P211
P188
P212
SK149
P213
P214
SK146
P233
P234
SK150
P235
P189
SK129
SK137
SK136
SK147
P245
P131
P130
P128
SB17
P129
P132
P246
SK138
SD6
SB16
P175
P178
P186
P176
P177
P179
P227
P184
P181
P180
P185
P182
P183
0
5m

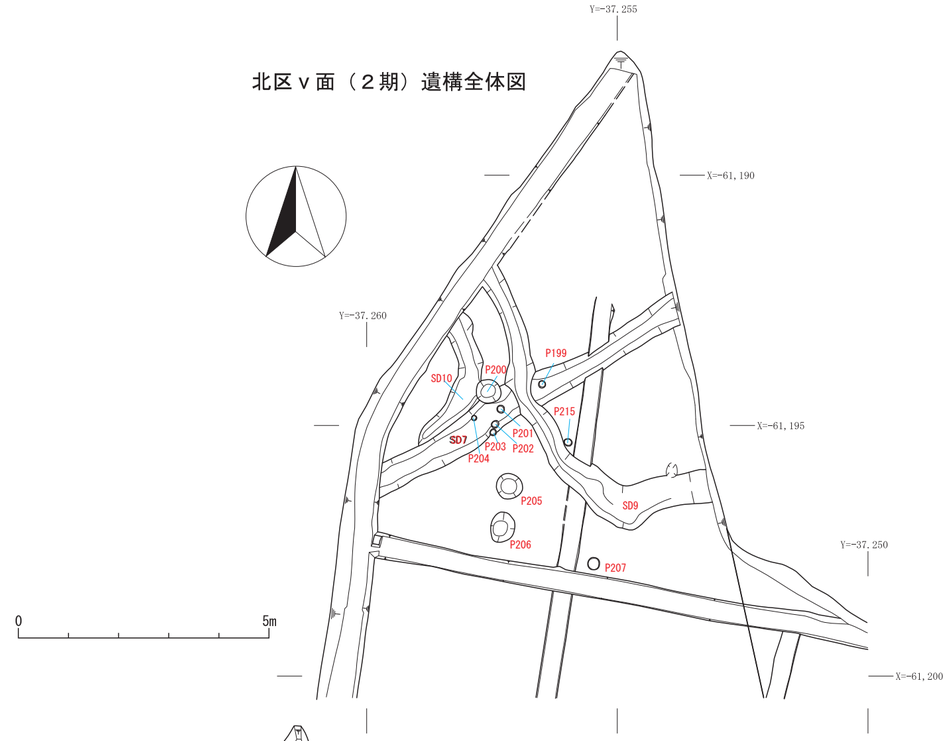
別添図３　北区ⅵ面（１期）遺構全体図

別添図４　北区ⅳ（４期）・ⅴ（２期）面遺構全体図
Ｐ区ⅲ（２期？）・ⅳ（１期）面遺構全体図

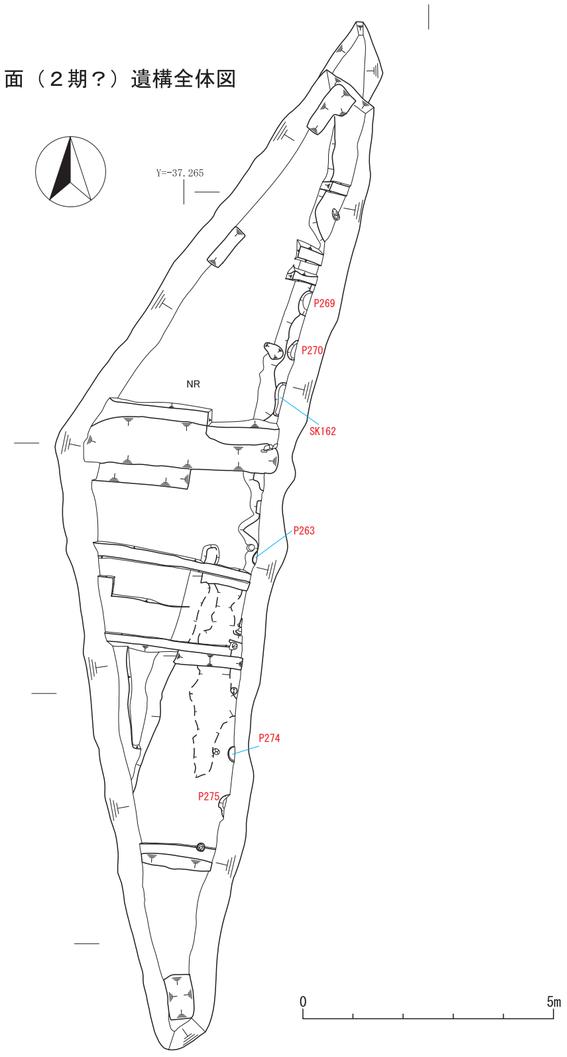
北区ⅳ面（４期）遺構全体図



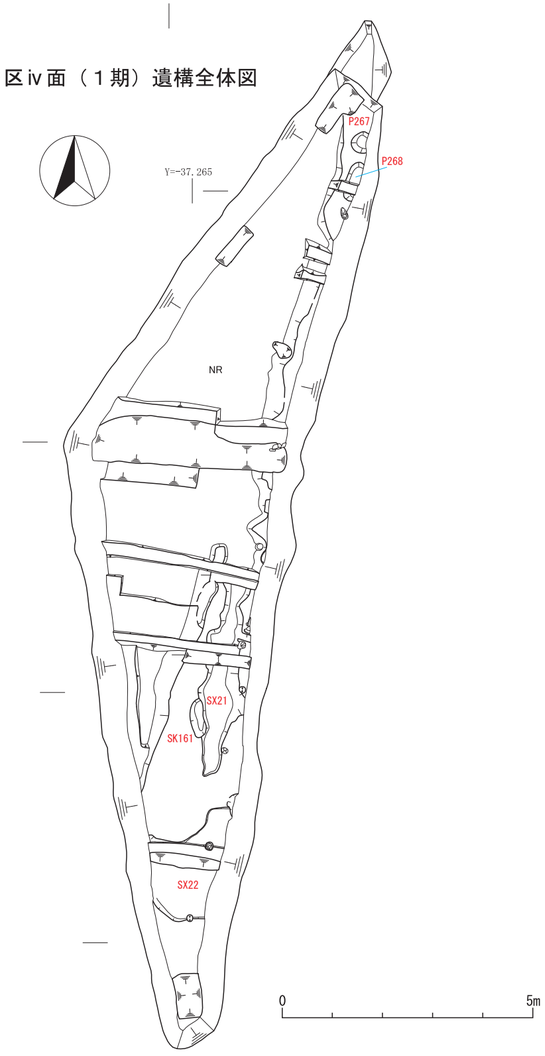
北区ⅴ面（２期）遺構全体図



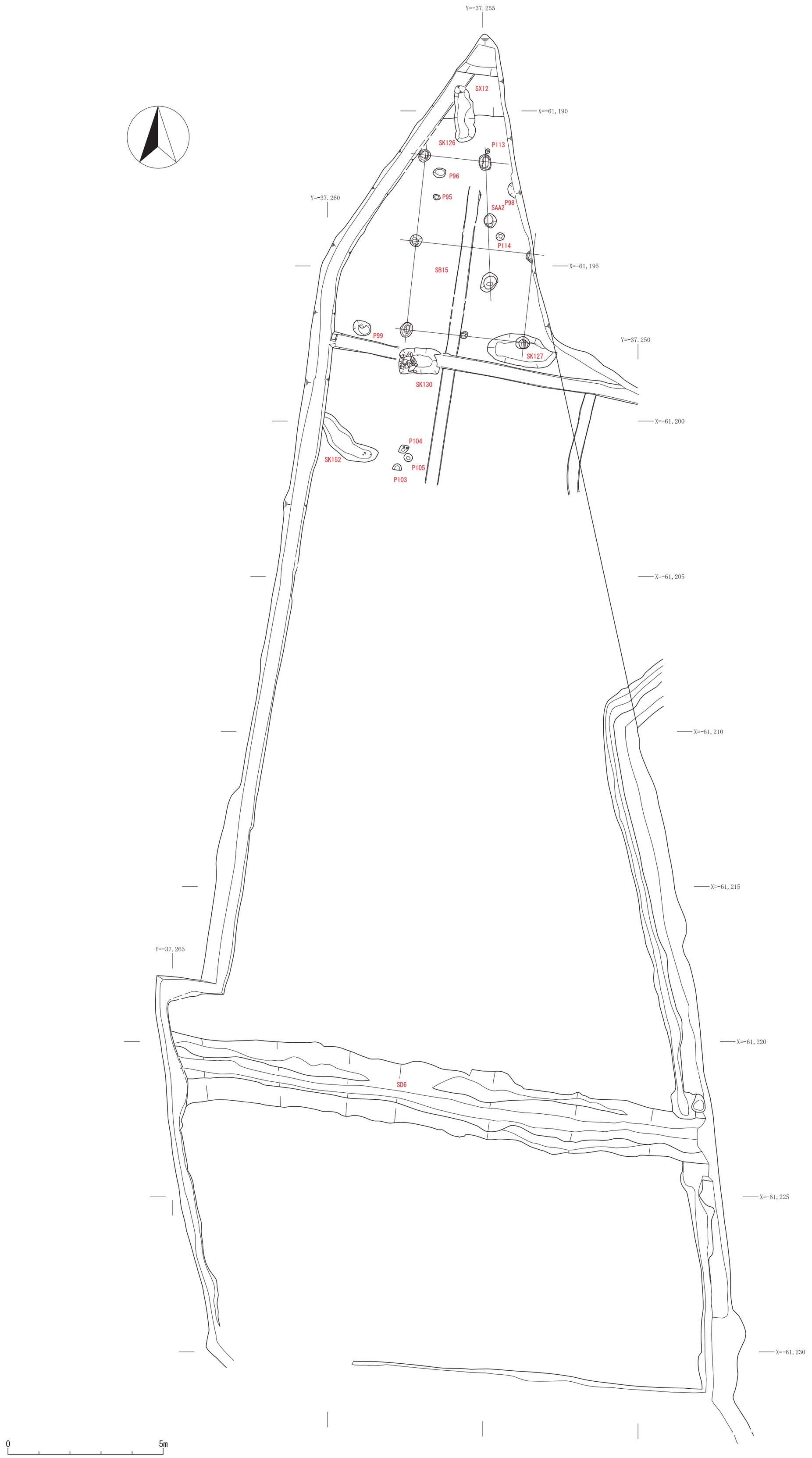
Ｐ区ⅲ面（２期？）遺構全体図



Ｐ区ⅳ面（１期）遺構全体図

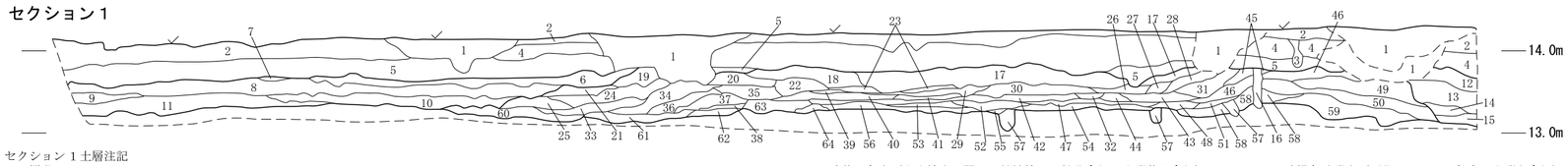


別添図５　北区ⅱ・ⅲ面（５期）遺構全体図



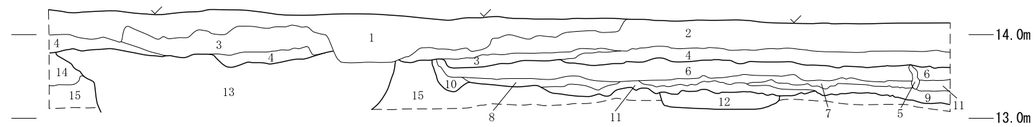
別添図６　南区土層図

セクション１



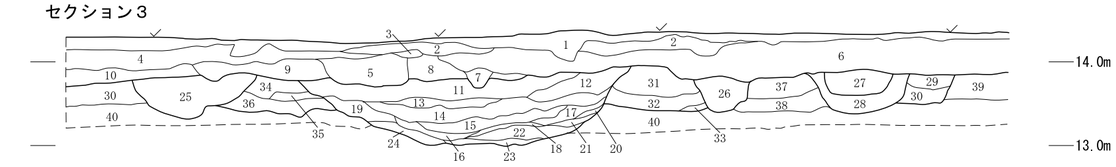
セクション１土層注記
1　撹乱
2　褐色土
3　撹乱
4　茶灰色土（締まり弱い、やや粘性あり、
マンガン粒若干含む、橙色粒微量含む）
5　茶褐色土（締まる、粘性弱い、
鉄分・マンガン粒含む、橙色粒微量含む）
6　暗茶褐色土（やや砂質、締まる、粘性弱い、
マンガン粒含む、φ２cm程度の小礫を若干含む）
7　明茶褐色土（砂質）
8　褐灰色土（締まる、粘性弱い、マンガン粒含む、炭微量含む）
9　暗灰褐色土（締まり弱い、粘性強い、マンガン粒含む）
10　灰褐色粘質土（締まり弱い、粘性強い、マンガン粒含む）
11　灰色粘質土（締まり弱い、粘性強い、下部に地山ブロック含む）
12　灰褐色土（やや締まり強い、粘性弱い、炭若干含む）
13　暗褐灰色土（締まり弱い、粘性強い、
橙褐色粒微量含む、灰色土ブロック若干含む）
14　茶灰色土（やや締まり弱い、粘性弱い、鉄分含む）
15　灰色粘質土（締まりなし、粘性強い、下部に地山が帯状に堆積）
16　灰色土
17　暗茶灰色土（やや締まり弱い、粘性強い、鉄分含む、小礫若干含む）
18　茶褐色土（締まり強い、粘性弱い、小礫若干含む、鉄分含む）
19　茶褐色土（やや砂質、締まり強い、粘性弱い）
20　灰褐色土（、締まり強い、粘性弱い、マンガン粒若干含む）
21　灰褐色土（強く締まる、粘性弱い、炭化物微量含む、橙色粒若干含む）
22　茶褐色土（強く締まる、粘性弱い、炭化物微量含む、砂礫若干含む）
23　淡灰褐色土
24　淡灰褐色土（砂質土、締まり弱い、粘性強い）
25　淡灰色粘質土（やや砂質、締まり弱い、粘性強い）
26　暗褐色砂礫土（硬化、φ3～5cm程度の小礫を含む）
27　灰色粘質土
28　黄灰褐色土（やや砂質、締まり弱い、粘性あり）
29　灰褐色砂礫土（硬化、φ2～5cm程度の小礫を含む、
炭化物微量含む）
30　灰褐色砂礫土（硬化、φ3～10cm程度の小礫を含む）
31　灰褐色土（締まり弱い、粘性強い、炭化物・橙色粒微量含む）
32　黄褐色土
33　暗茶色土（やや締まり弱い、やや粘性あり、
砂若干含む、炭化物微量含む）
34　暗灰茶色粘質土（やや締まり弱い、やや粘質あり、
小礫微量含む、褐色粒若干含む）
35　黄灰茶色土（締まる、粘性弱い、橙色粒少量含む）
36　褐灰色土（やや締まり弱い、粘質強い、炭化物微量含む）
37　暗褐灰色土（やや締まり弱い、粘質強い、
φ2～5cmの小礫若干含む）
38　淡黄灰色土（砂質、やや締まり弱い、やや粘質あり）
39　暗褐色土
40　淡灰褐色土（やや締まり弱い、やや粘性あり、
黄灰色砂ブロック含む）
41　灰褐色土（硬化、粘性なし）
42　褐色土（硬化、締まり強い、粘性弱い、砂礫含む）
43　淡灰褐色砂質土（締まり強い、粘性なし、
φ2～5cmの小礫微量含む）
44　淡黄褐色土（締まり弱い、やや粘性あり、灰色粘質土微量含む）
45　茶褐色土（締まり強い、粘性弱い）
46　灰褐色土（砂質土、やや締まる、やや粘性あり、
マンガン粒含む、白色粒微量含む）
47　灰褐色土（砂質土、締まり強い、粘性なし）
48　黄褐色土（締まり強い、粘性なし）
49　暗褐灰色土（やや締まり弱い、やや粘性強い、
マンガン粒・橙色粒・白色粒若干含む、炭化物微量含む）
50　暗灰茶色土（締まり弱い、粘性強い、小礫・白色粒若干含む）
51　灰褐色土（締まり強い、粘性なし）
52　灰茶色土（硬化、やや締まり強い、粘性なし、小砂礫微量含む）
53　茶褐色土（締まり強い、粘性なし）
54　暗褐灰色土（硬化、締まり強い、粘性なし、小砂礫微量含む）
55　暗茶色土（締まり強い、粘性なし）
56　灰茶褐色土（砂質、締まり強い、粘性なし）
57　灰色土
58　黄灰褐色土（やや締まり弱い、やや粘性あり、地山ブロック含む）
59　青灰粘質土（締まり弱い、粘性強い、
φ2～5cm程度の礫微量含む、地山ブロック若干含む）
60　淡灰褐色土（やや締まり弱い、やや粘性あり、
炭化物・地山ブロック若干含む）
61　暗青灰色粘質土（砂質、締まりなし）
62　青灰色粘質土（締まりなし、小砂礫若干含む）
63　黄褐色土（硬化、粘性なし、褐色土ブロック状に微量含む）
64　暗褐色土（締まり強い、粘性なし）
１～５：Ⅰ層　　６～11:SX1　　12～15:SD1
16～64:SA1（16層は杭穴）　　65:地山

セクション２



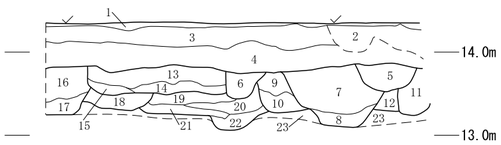
セクション２
1　撹乱
2　褐色土
3　褐色土
4　茶褐色土（締まり強い、粘性弱い、炭・橙色粒子微量含む）
5　灰茶色土
6　褐灰色土（締まり強い、粘性弱い、炭微量含む、鉄分・マンガン粒含む）
7　暗灰褐色土（締まり弱い、粘性強い、マンガン粒含む）
8　灰褐粘質土（締まりなし、粘性強い、黄灰色砂若干含む、マンガン粒含む）
9　灰色粘質土（締まり弱い、粘性強い、下部に黄灰砂を多く含む、撹拌痕？）
10　黒茶褐色土（締まり弱い、粘性強い、炭微量含む、橙色粒子若干含む）
11　灰色粘質土（締まりなし、粘性強い、下部に黄灰砂を多く含む、撹拌痕？）
12　暗褐色土
13　SD5埋土
14　茶褐色土（締まる、炭含む）
15　黄灰褐色砂質土
１～４：Ⅰ層　　５～11:SX1　　12：遺構
13:Ⅱ層　　14:地山

セクション３



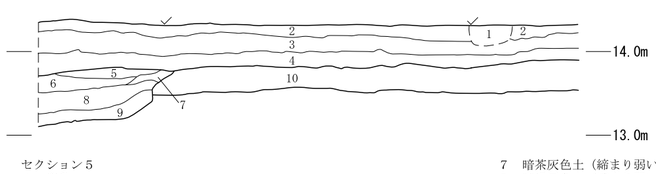
セクション３
1　客土
2　褐色土
3　茶灰色土
4　灰褐色土
5　黒灰色土
6　茶褐色土
7　淡茶灰色土
8　茶褐色土
9　暗灰褐色土
10　茶褐色土（締まる、炭若干含む）
11　褐灰色土（固く締まる、粘性弱い、炭化物・橙色粒子若干含む）
12　暗褐灰色土（締まる、粘性弱い、炭化物・橙色粒子若干含む）
13　灰褐色土（やや砂質、締まる、粘性弱い、鉄分若干含む）
14　褐灰色土（やや砂質、締まる、粘性弱い、橙色粒子若干含む、
黄褐色ブロック土を若干含む）
15　暗褐灰色土（やや砂質、やや締まり弱い、
粘性あり、炭化物若干含む）
16　灰褐色粘質土（マンガンを多く含む）
17　黄茶褐色土（締り弱い、粘性強い、橙色粒子若干含む）
18　茶褐色砂質土
19　黄灰褐色土（やや砂質、灰色粘土ブロック若干含む）
20　淡茶灰砂質土
21　黄茶灰砂質土
22　褐灰色砂質土
23　暗褐灰色砂質土（灰色粘土ブロック若干含む）
24　褐灰色砂質土（黄茶粘土ブロック若干含む）
25　灰褐色土（締まる、粘性弱い、炭化物若干含む）
26　茶褐色土（締まる、粘性弱い、炭・橙褐色粒子少量含む）
27　暗灰褐色土（締まる、粘性弱い、淡茶色ブロック土微量含む）
28　淡灰褐色土（黄灰砂ブロックを下部に多く含む、
橙褐色粒子微量含む）
29　暗灰褐色土（締まる、粘性弱い、橙褐色粒子若干含む）
30　茶灰色土（砂質、やや締まる、橙褐色粒子微量含む）
31　灰褐色土（締まる、炭化物・橙褐色粒子若干含む）
32　灰褐色土（31層に比べ砂を多く含む、橙褐色粒子若干含む）
33　黄茶灰色土
34　灰黄茶色土（締まる、粘性弱い、炭化物若干含む）
35　黄灰茶色土（固く締まる、粘性弱い）
36　暗黄灰色土（やや砂質、締まる、粘性弱い）
40　黄灰色砂質土
41　淡茶灰色砂質土
１～10：Ⅰ層
11～24:SD5
25・26:遺構
27・28:SK38
29・30:SK99
31～33:SK82
34～36:SK101
37～40:Ⅱ層
41:地山

セクション４

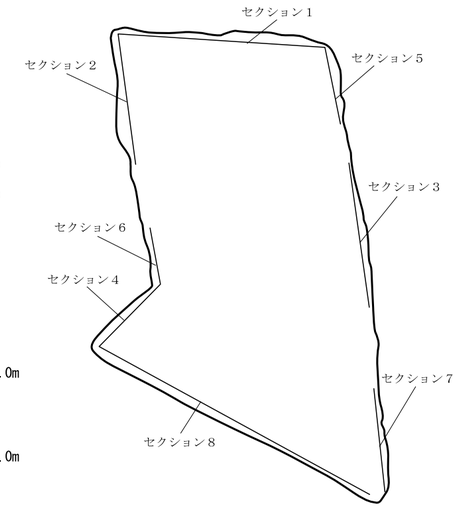


セクション４
1　砂利
2　撹乱
3　Ⅰ層
4　暗灰緑褐色土
5　茶灰色土（締まる、粘性弱い、橙色粒子若干含む）
6　暗褐灰色土（締まる、やや粘性あり、炭化物・橙色粒子若干含む）
7　暗褐灰色土（やや締まる、やや粘性あり、炭化物若干含む）
8　灰茶色砂質土（黄灰色ブロック土含む）
9　暗茶灰色土（締まる、やや粘性弱い）
10　黄茶色土（砂質）
11　暗灰褐色土（やや締まり弱い、やや締まりあり、黄茶色ブロック土若干含む）
12　灰褐色土（砂質）
13　暗灰褐色土（やや締まり弱い、粘性強い、橙色粒子若干含む）
14　茶褐色土（締まる、粘性弱い、橙色・白色粒子若干含む）
15　淡灰褐色土（やや締まり弱い、やや粘性弱い）
16　暗灰褐色土（締まる、粘性弱い、白色粒子若干含む）
17　褐灰色土（砂質、締まる、粘性弱い、橙色粒子微量含む）
18　淡褐灰色土（砂質、締まる、粘性弱い、マンガン・淡黄色ブロック土若干含む）
19　淡茶灰色土（砂質、締まる、粘性弱い、マンガン若干含む）
20　淡灰褐色土（砂質、やや締まり弱い、やや粘性弱い、マンガン・橙色粒子若干含む）
21　淡灰色土（やや締まり弱い、やや粘性弱い、小礫若干含む、下部に鉄分を帯状に含む）
22　茶灰色土（砂質、下部に淡黄色ブロック土含む）
23　黄灰褐色砂質土
１～４：Ⅰ層　　５・６:遺構　　７・８:SK43　　９～11:遺構
12:P33　　13～15:SK9　　16・17:P71　　18:遺構
19～22:SK67　　23:地山

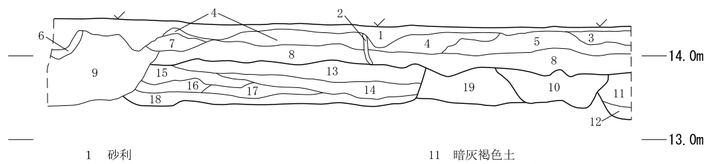
セクション５

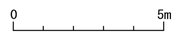


セクション５
1　撹乱
2　暗褐灰色土（締まり強い）
3　茶褐色土（締まり強い、やや粘性あり）
4　茶褐色土（締まり強い、やや粘性あり、１層に比べ粘性弱い・砂質土含む）
5　灰茶色土（締まり強い、やや粘性あり、マンガン含む）
6　灰褐色土（やや締まる、粘性弱い、炭若干含む）
7　暗茶灰色土（締まり弱い、粘性強い、マンガン粒微量含む）
8　暗褐灰色土（締まり弱い、粘性強い、橙褐色粒微量含む、
灰色土ブロック状に若干含む）
9　灰色粘質土（締まり弱い、粘性強い、下部に地山含む）
10　茶灰色土（やや締まる、粘性弱い）
１～４：Ⅰ層　　５～９:SD1　　10:地山



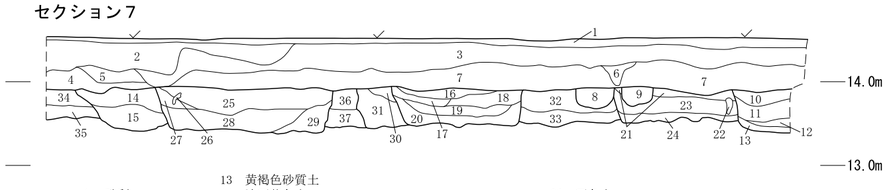
セクション６





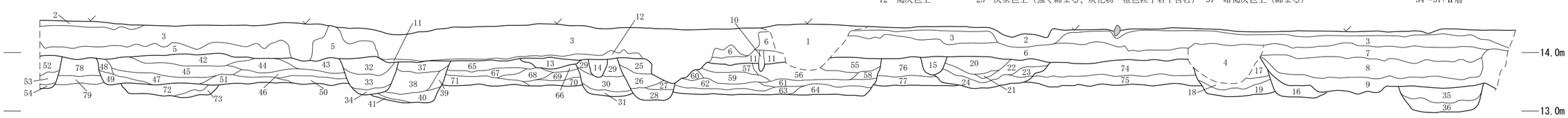
1　砂利
2　灰色土
3　客土
4　客土
5　客土
6　客土
7　客土
8　客土
9　灰色土
10　暗褐色土（締まる、炭化物・橙色粒子若干含む）
11　暗灰褐色土
12　褐灰色土（橙色粒子微量含む）
13　暗茶色土（強く締まる）
14　淡灰茶色土（締まる、小礫若干含む）
15　褐色土（締まる、炭化物若干含む）
16　暗褐色土（やや締まる、橙色・白色粒子若干含む）
17　灰茶色土（砂質）
18　黒褐灰色土（砂質）
19　褐灰色土
１～９：Ⅰ層
10：遺構
11・12：P71
13～18:SB3
19:Ⅱ層

セクション７



1　砂利
2　客土
3　客土
4　客土
5　客土
6　茶灰色土
7　客土
8　客土
9　客土
10　暗褐灰色土
11　淡褐灰色土
12　褐灰色土
13　黄褐色砂質土
14　淡灰茶色土
15　灰茶色土
16　茶灰褐色土
17　茶灰色土
18　茶褐色土
19　淡灰黄茶色土
20　暗褐色土（下部に黄褐色砂質土を若干含む）
21　暗灰茶色
22　灰色土
23　褐灰色土（締まる、炭化物・橙色粒子若干含む）
24　暗褐茶色土（下部に黄灰色砂質土を若干含む）
25　灰茶色土（強く締まる、炭化物・橙色粒子若干含む）
26　灰色土
27　淡茶黄色土
28　暗灰茶色土
29　灰褐黄色土（砂質）
30　灰褐色土
31　灰茶色土（黄褐色砂質土ブロックを若干含む）
32　灰褐色土（締まる）
33　暗茶灰色土（やや締まる）
34　茶灰色土（締まる）
35　暗褐灰色土（締まる）
36　暗茶色土（締まる）
37　暗褐灰色土（締まる）
１～７：Ⅰ層
８・９:遺構
10～13:SK8
14・15:遺構
16～20:SK12
21～24:SK13
25～29:SK17
30・31:P42
32・33:SK14
34～37:Ⅱ層

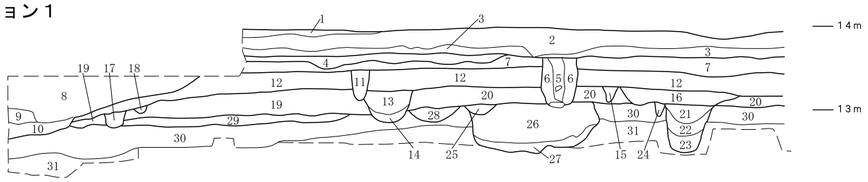
セクション８



1　撹乱
2　砂利
3　客土
4　撹乱
5　客土
6　客土
7　撹乱
8　撹乱
9　撹乱
10　灰色土
11　灰色土
12　灰色土
13　灰褐色土
14　暗褐色土（橙色粒子若干含む）
15　灰褐色土
16　暗茶灰色土（やや砂質、炭化物若干含む）
17　茶灰色土
18　暗茶褐色土（炭化物・橙色粒子若干含む）
19　暗茶灰色土（下部に黄灰色ブロック土を若干含む）
20　灰褐色土（締まる、橙色粒子若干含む）
21　黄茶色砂質土
22　茶褐色土
23　暗灰黄茶色土
24　褐灰色土（下部に黄褐色砂質土を帯状に含む、
橙色粒子若干含む）
25　茶褐色土（炭化物微量含む）
26　茶褐色土（24層よりやや明るい）
27　暗褐色土
28　暗灰褐色土（24～26層に比べ締まりが弱く、
粘性が強い、炭化物・橙色粒子若干含む）
29　茶灰色土
30　暗褐灰色土（砂質、炭化物・橙色粒子若干含む）
31　暗灰茶色土（黄灰色砂質土をブロックに含む）
32　灰褐色土（締まる、橙色粒子若干含む）
33　茶褐色土
34　暗褐色土（砂質、橙色粒子若干含む）
35　暗茶褐色土（橙色粒子若干含む）
36　暗茶灰色土（黄灰色砂質土若干含む）
37　暗灰褐色土
38　茶灰色土（炭化物・橙色粒子若干含む）
39　淡灰茶色土
40　灰茶色土（砂質）
41　黄灰褐色砂質土
42　淡灰褐色土（締まる、炭化物若干含む）
43　灰茶色土（締まる、炭化物・橙色粒子若干含む）
44　暗褐灰色土（締まる、炭化物・橙色粒子若干含む）
45　暗茶灰色土（締まる、やや粘性あり、橙色粒子微量含む）
46　茶灰色土（砂質）
47　灰黄茶色土
48　灰茶色土
49　暗茶褐色土
50　黒灰褐色土（砂質）
51　灰褐黄色土（砂質）
52　淡茶灰色土
53　褐灰色土
54　黄褐色砂質土
55　灰茶色土（締まる）
56　灰茶色土（砂質、締まる、
炭化物・橙色粒子・白色粒子若干含む）
57　淡茶灰色土（砂質、締まる）
58　暗茶色土
59　灰黄色土
60　茶褐色土
61　灰褐黄色土
62　暗茶灰色土（炭化物・橙色粒子若干含む）
63　暗褐色土（下部に黄灰色ブロック土を多く含む）
64　灰褐色土
65　灰茶色土（締まる、橙色粒子若干含む）
66　黄灰色土
67　灰茶色土（40層に比べやや暗い）
68　淡灰褐色土（砂質）
69　暗茶色土
70　暗褐色土（やや粘性あり、橙色粒子・白色粒子若干含む）
71　暗灰褐色土（下部に黄灰色ブロック土を多く含む、炭化物・橙色粒子微量含む）
72　暗茶灰色土（炭化物・橙色粒子・白色粒子若干含む）
73　黒褐色土（黄褐色砂質土をブロック状に含む）
74　暗茶色土（締まる、粘性弱い、炭化物・橙色粒子若干含む）
75　暗褐灰色土（73層に比べ砂質土を多く含む）
76　暗茶色土
77　暗褐灰色土
78　暗茶色土
79　暗褐色土
１～12：Ⅰ層　　13～15:遺構　　16:SK31　　17～19:SK33　　20～24:遺構　　25～28:SK11
29～31:SD3　　32～34:SK7　　35・36:SK7　　37～41:SK70　　42～51:SB2　　52～54:SK8
55～64:SB1　　65～71:SK70　　72・73:SK22　　74～79:Ⅱ層

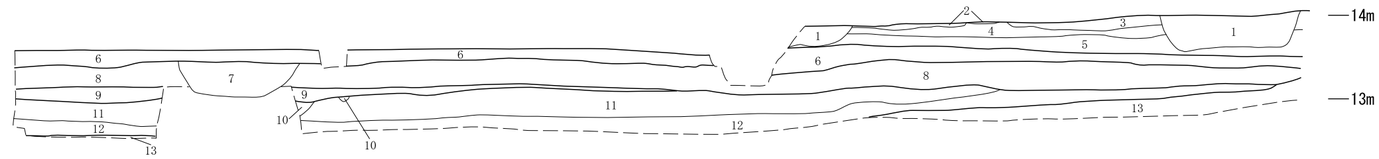
別添図７　北区土層図

セクション１



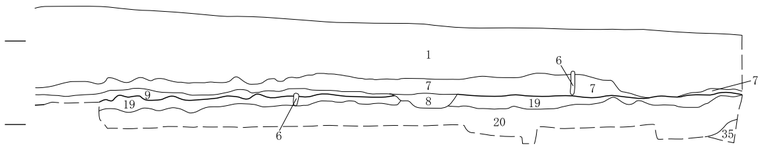
セクション１
1　暗褐色シルト
2　暗褐色極細砂（炭微量混じる）
3　にぶい黄褐色シルト（炭・焼土微量混じる）
4　暗褐色シルト（炭・焼土混じる）
5　暗褐色粘質土（炭・焼土少量混じる）
6　褐色シルト（炭・焼土微量混じる）
7　褐色シルト（締まり強い、炭・焼土微量混じる）
8　にぶい黄褐色粘質土（マグネシウム粒・炭・焼土微量混じる）
9　褐色シルト（灰黄褐色シルトブロック微量混じる）
10　暗褐色粘質土（マグネシウム粒微量混じる、灰黄褐色粘質土まだらに混じる）
11　褐色粘質土（マグネシウム粒・炭・焼土微量混じる）
12　褐色粘質土（締まる、炭・焼土微量混じる）
13　暗褐色粘質土（マグネシウム粒微量混じる、灰黄褐色シルトブロック少量混じる）
14　暗褐色粘質土（マグネシウム粒混じる、灰黄褐色シルトブロック微量混じる）
15　にぶい黄褐色シルト
16　褐色粘質土（マグネシウム粒微量混じる、灰黄褐色シルトブロック微量混じる）
17　にぶい黄褐色粘質土（炭・焼土微量混じる）
18　褐色粘質土（灰黄褐色シルトブロック微量混じる）
19　褐色シルト（マグネシウム粒・灰黄褐色シルトブロック微量混じる、褐色極細砂まだらに混じる）
20　褐色粘質土（マグネシウム粒微量混じる、灰黄褐色シルトブロック微量混じる）
21　灰黄褐色シルト（マグネシウム粒微量混じる）
22　にぶい黄褐色粘質土（マグネシウム粒少量混じる、明褐色シミ微量混じる）
23　にぶい黄褐色粘質土（マグネシウム粒少量混じる）
24　明黄褐色土
25　褐色シルト（灰黄褐色シルトブロック微量混じる）
26　暗褐色細砂（炭微量混じる、にぶい黄褐色粘質ブロック微量混じる）
27　灰黄褐色粘質土（明褐色シミ微量混じる）
28　暗褐色粘質土（マグネシウム粒微量混じる）
29　暗褐色粘質土（炭微量混じる）
30　にぶい黄褐色粘質土（灰黄褐色粘質土まだらに混じる）
31　にぶい黄褐色粘質土
１～３:北ⅰ層　４:北ⅱ層　５・６:SB15-3　７:北ⅲ層
８～10:SX12　11:遺構　12:北ⅳ層　13・14:SD7
15:遺構　16:SD9　17・18:遺構　19・20:ⅴ層
21～23:SD11　24・25:遺構　26・27:SE2　28:SD8
29:SB18　30～31:地山

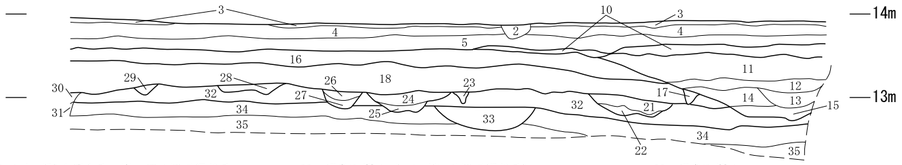
セクション６



セクション６
1　撹乱
2　オリーブ褐色極細砂
3　にぶい黄褐色極細砂
4　暗褐色シルト（炭・焼土微量混じる）
5　褐色シルト（炭微量混じる）
6　褐色シルト（締まり強い、炭・焼土微量混じる）
7　褐色シルト（炭・焼土少量混じる）
8　褐色粘質土（締まる、
炭・焼土・にぶい黄褐色粘質土ブロック微量混じる）
9　褐色粘質土
10　にぶい黄褐色粘質土（灰黄褐色粘質土まだらに混じる）
11　褐色粘質土
12　にぶい黄褐色粘質土
13　褐色細砂
１～５:北ⅰ層　６:北ⅲ層　７:SK130
８:北ⅳ層　９:北ⅴ層　10:遺構か
11～13:地山

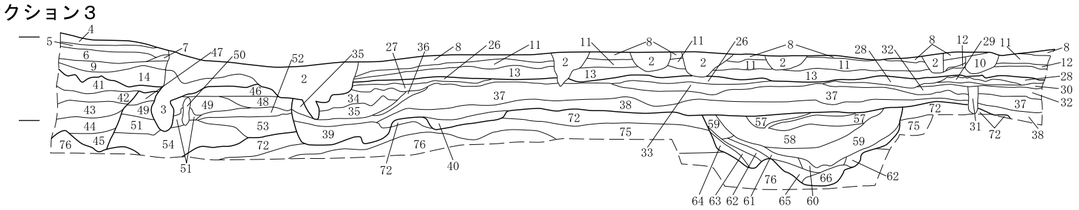
セクション２

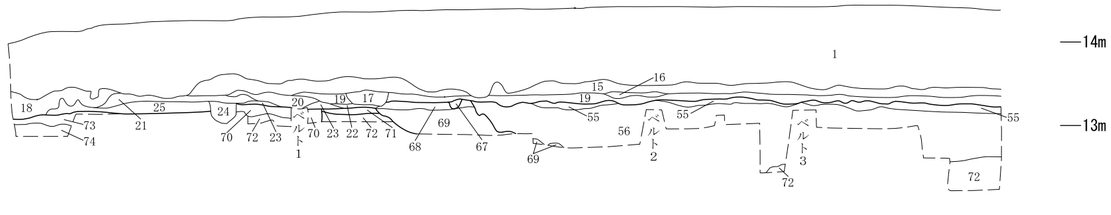




セクション２
1　撹乱
2　撹乱
3　暗褐色シルト
4　暗褐色極細砂（炭微量混じる）
5　にぶい黄褐色シルト（炭・焼土微量混じる）
6　青灰褐色粘質土
7　青灰褐色シルト（締まる、砂粒やや粗い）
8　灰褐色砂質土（締まり弱い）
9　暗灰褐色砂質土（締まり弱い、やや黄色かかる、
青灰褐色粘質土少し混じる、砂粒粗い）
10　暗褐色シルト（炭・焼土混じる、マンガン粒微量混じる）
11　にぶい黄褐色粘質土（炭・焼土混じる、マンガン粒微量混じる）
12　暗褐色粘質土（・焼土混じる、マンガン粒少量混じる）
13　褐色シルト（灰黄褐色シルトブロック微量混じる）
14　褐色粘質土（マンガン粒微量混じる、
灰黄褐色シルトブロック微量混じる、　褐色極細砂ブロック状少量混じる）
15　暗褐色粘質土（マンガン粒微量混じる、　灰黄褐色粘質土まだらに混じる）
16　褐色シルト（強く締まる、炭・焼土微量混じる、
にぶい黄褐色粘質土ブロック少量混じる）
17　暗褐色粘質土
18　褐色粘質土（強く締まる、炭・焼土微量混じる）
19　褐色砂粘質土（やや締まる）
20　青灰褐色粘土（やや締まる）
21　褐色砂粘質土
22　にぶい黄褐色粘質土（マンガン粒微量混じる、
灰黄褐色粘質ブロック微量混じる）
23　褐色粘質土（マンガン粒微量混じる）
24　褐色粘質土（マンガン粒微量混じる、
炭・にぶい黄褐色粘質ブロック微量混じる）
25　にぶい黄褐色粘質土（マンガン粒微量混じる、
にぶい黄褐色粘質ブロック微量混じる）
26　褐色粘質土（マンガン粒微量混じる）
27　灰黄褐色粘質土（マンガン粒微量混じる、
灰黄褐色粘質ブロック微量混じる）
28　暗褐色粘質土（マンガン粒微量混じる）
29　褐色粘質土
30　褐色粘質土（マンガン粒微量混じる）
31　褐色粘質土（マンガン粒微量混じる、
炭・にぶい黄褐色粘質ブロック微量混じる）
32　褐色粘質土（マンガン粒微量混じる、
灰黄褐色シルトブロック微量混じる）
33　にぶい黄褐色粘質土
34　にぶい黄褐色粘質土（灰黄褐色粘質土まだらに混じる）
35　にぶい黄褐色粘質土
１～９:北ⅰ層・Pⅰ層　10:北ⅱ層　11～15:SX12
16:北ⅲ層　17:遺構　18:北ⅳ層
19・20:NR(戦国時代以降の堆積土)　21～23:遺構
24・25:SD9　26・27:SD10　28～31:遺構
32:北ⅴ層　33:SD7　34・35:地山

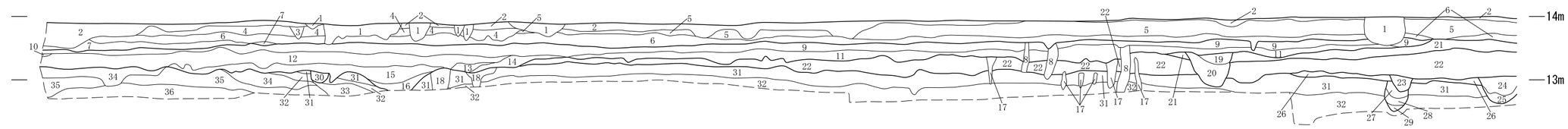
セクション３



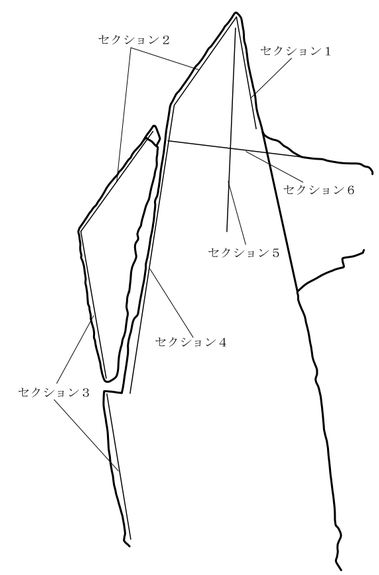


セクション３
1　撹乱
2　撹乱
3　褐灰色粘質土（暗灰色ブロック・明褐色シミ微量混じる）
4　暗褐色シルト
5　暗褐色シルト（炭微量混じる）
6　褐色シルト（炭微量混じる）
7　にぶい黄褐色粘質土（1cm程度の小礫微量混じる）
8　暗褐色シルト
9　褐色粘質土
10　にぶい黄褐色シルト（炭微量混じる）
11　暗褐色シルト（炭微量混じる）
12　暗褐色シルト（にぶい黄褐色極細砂、炭微量混じる）
13　暗褐色シルト（にぶい黄褐色粘質ブロック・炭微量混じる）
14　にぶい黄褐色シルト（褐色シミ微量混じる）
15　青灰褐色シルト（締まる、砂粒粗い）
16　灰褐色砂粘質土（やや締まり弱い、青灰褐色粘質土混じる）
17　暗褐色シルト
18　明灰褐色砂質土（砂粒やや粗い）
19　暗灰褐色砂質土（締まり弱い、やや黄色かかる、
青灰褐色粘質土少し混じる、砂粒粗い）
20　灰褐色砂（強く締まる、砂粒粗い）
21　灰褐色砂質土
22　灰褐色砂質土（締まり弱い）
23　灰褐色砂質土（やや締まる、黄褐色砂質土やや混じる）
24　灰褐色粘質土（やや締まる、粘性強い、褐色粘質土多く混じる）
25　灰褐色粘質土（粘性やや弱い、黄褐色粘質土混じる）
26　にぶい黄褐色シルト（炭・褐色シミ微量混じる）
27　にぶい黄褐色シルト（褐色シミ微量混じる）
28　褐色シルト（にぶい黄褐色粘質ブロック
・暗褐色中粒砂ブロック・炭微量混じる）
29　褐色シルト（炭のブロック・褐色シミ微量混じる）
30　灰黄色褐色シルト（褐色シミ微量混じる）
31　褐色極細砂
32　灰黄褐色シルト（明褐色シミ微量混じる）
33　にぶい黄褐色シルト（褐色シミ微量混じる）
34　褐色シルト（褐色シミ混じる）
35　にぶい黄褐色粘質土（明褐色シミ・褐色シミ微量混じる）
36　灰黄褐色極細砂（灰黄色褐色粘質土ブロック
・明褐色シミ微量混じる）
37　灰黄色褐色極細砂（明褐色シミ少量混じる）
38　灰黄色褐色極細砂（明褐色シミ微量混じる）
39　オリーブ褐色シルト（灰黄褐色シルトブロック
・明褐色シミ微量混じる）
40　褐色細砂（明褐色シミ微量混じる）
41　暗褐色シルト（にぶい黄褐色シルトブロック
・褐色シミ微量混じる）
42　褐灰色シルト（明褐色シミ微量混じる）
43　にぶい黄褐色極細砂（明褐色シミ少量混じる）
44　灰黄褐色シルト（明褐色シミ微量混じる）
45　灰黄褐色極細砂（明褐色シミ微量混じる）
46　灰黄褐色細砂（1～10cm程度の礫を多く含む）
47　灰黄褐色粘質土（明褐色シミ微量混じる、
1～3cm程度の礫を微量含む）
48　暗褐色粘質土（暗灰黄色極細砂ブロックまだらに混じる、
褐色シミ微量混じる）
49　黄灰色粘質土（明褐色シミ微量混じる）
50　杭穴
51　オリーブ褐色粘質土（明褐色シミ微量混じる）
52　暗褐色シルト（暗褐色粗砂まだらに混じる）
53　暗褐色粗砂（暗褐色シルトブロック混じる）
54　黄褐色極細砂（明褐色シミ微量混じる）
55　褐色砂質粘質土（やや締まる）
56　灰褐色粘質土（やや締まる、粘性強い、褐色粘土多く混じる）
57　扶桑褐色極細砂（灰黄褐色シルトブロック微量混じる、小礫含む）
58　オリーブ褐色細砂（灰黄褐色シルトまだらに混じる、1～5cm程度の礫含む）
59　灰黄褐色シルト（明褐色シミ微量混じる）
60　褐灰色極細砂
61　暗褐色シルト（炭・焼土微量混じる、オリーブ褐色中粒砂まだらに混じる）
62　オリーブ褐色中粒砂（ぶい黄褐色細砂ブロック少量混じる）
63　褐色粘質土（灰黄褐色極細砂ブロック少量混じる）
64　褐色粘質土（暗褐色粗砂まだらに混じる）
65　暗褐色シルト（暗褐色粗砂、まだらに混じる）
66　暗褐色粗砂（暗褐色シルトブロック少量混じる）
67　灰褐色粘質土
68　褐色粘質土（茶褐色土少し混じる）
69　灰褐色粘質土（やや締まる、粘性強い、褐色粘質土多く混じる）
70　灰褐色粘質土（粘性強い）
71　褐色粘質土
72　褐色細砂
73　褐色砂質土
74　褐色砂（締まり弱い）
75　オリーブ褐色中粒砂
76　暗褐色粗砂
１～25:北ⅰ層・Pⅰ層　26～38:近代水田耕作土
39～45:SX9　46～54:SA1
55・56:NR(戦国時代以降の埋土)
57～66:SD6　67:遺構
68・69:NR(古墳時代の埋土)
70:SX22　71:Pⅲ層
72～76:地山

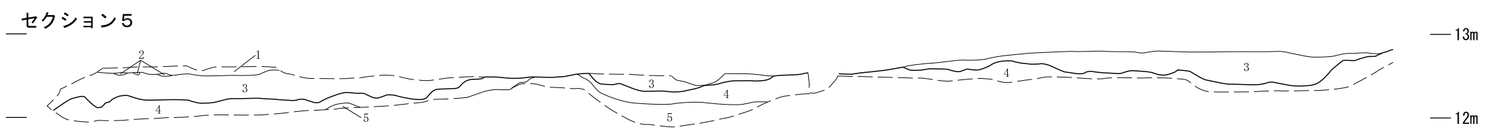
セクション４



セクション４
1　撹乱
2　暗褐色シルト
3　－
4　暗褐色シルト（炭微量混じる）
5　暗褐色シルト（炭微量混じる）
6　にぶい黄褐色極細砂（炭微量混じる）
7　暗褐色シルト（にぶい黄褐色粘質ブロック微量混じる）
8　灰黄褐色粘質土（褐色シミ微量混じる）
9　にぶい黄褐色シルト（炭・褐色シミ微量混じる）
10　灰黄褐色シルト（明褐色シミ微量混じる）
11　灰黄褐色シルト（褐色シミ微量混じる）
12　灰黄褐色極細砂（明褐色シミ少量混じる）
13　黄褐色シルト（明褐色シミ少量混じる）
14　褐色シルト（褐色シミ微量混じる）
15　黄褐色シルト（明褐色シミ少量混じる）
16　灰黄褐色粘質土（明褐色シミ微量混じる）
17　にぶい黄褐色シルト（明褐色シミ少量混じる）
18　褐色粘質土（マンガン粒微量混じる）
19　褐色粘質土（炭微量混じる）
20　褐色粘質土（褐色シミ微量混じる、にぶい黄褐色粘質土まだらに混じる）
21　褐色シルト（強く締まる、炭・焼土微量混じる、
にぶい黄褐色粘質土ブロック少量混じる）
22　褐色粘質土（締まる、炭・焼土微量混じる、
にぶい黄褐色粘質土ブロック微量混じる）
23　灰黄褐色粘質土（マンガン粒少量混じる）
24　暗褐色粘質土（マンガン粒少量混じる）
25　にぶい黄褐色粘質土（マンガン粒微量混じる）
26　褐色粘質土（マンガン粒微量混じる）
27　にぶい黄褐色粘質土（マンガン粒微量混じる）
28　灰黄褐色粘質土（マンガン粒少量混じる）
29　にぶい黄褐色粘質土（マンガン粒少量混じる）
30　褐色粘質土（マンガン粒微量混じる）
31　にぶい黄褐色粘質土（褐色シミ微量混じる、
灰黄褐色粘質土まだらに混じる）
32　にぶい黄褐色粘質土（褐色シミ微量混じる）
33　暗褐色シルト（にぶい黄褐色粘質土ブロック微量混じる）
34　褐色細砂（灰黄褐色極細砂まだらに混じる）
35　オリーブ褐色中粒砂
36　褐色粗砂（1.0～5.0cm程度の円礫多量混じる）
１～７:北ⅰ層　８:杭跡　９～11:SX8
12～16:SX11　17・18:撹乱　19・20:遺構か
21:北ⅲ層　22:北ⅳ層　23:遺構
24・25:SD7　26:北ⅴ層　27～29:SD11
30:SD12　31～36:地山



セクション５



セクション６
1　にぶい黄褐色粘質土
2　褐色粘質土
3　にぶい黄褐色粘質土（灰黄褐色シルトが粒状に混じる）
4　褐色細砂
5　オリーブ褐色細砂
１～２:北ⅳ層　３:北ⅴ層
４～５:地山